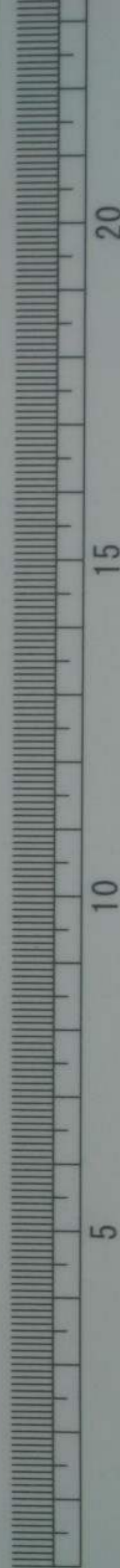


鬼淚村

牧野信一



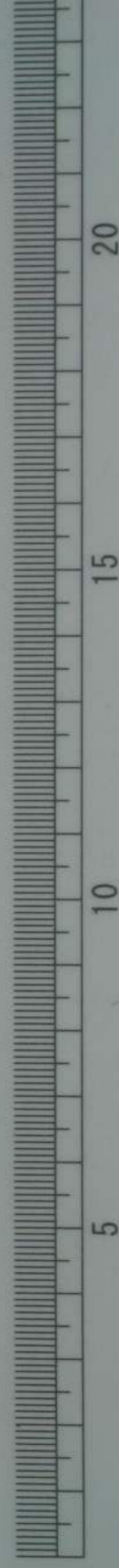
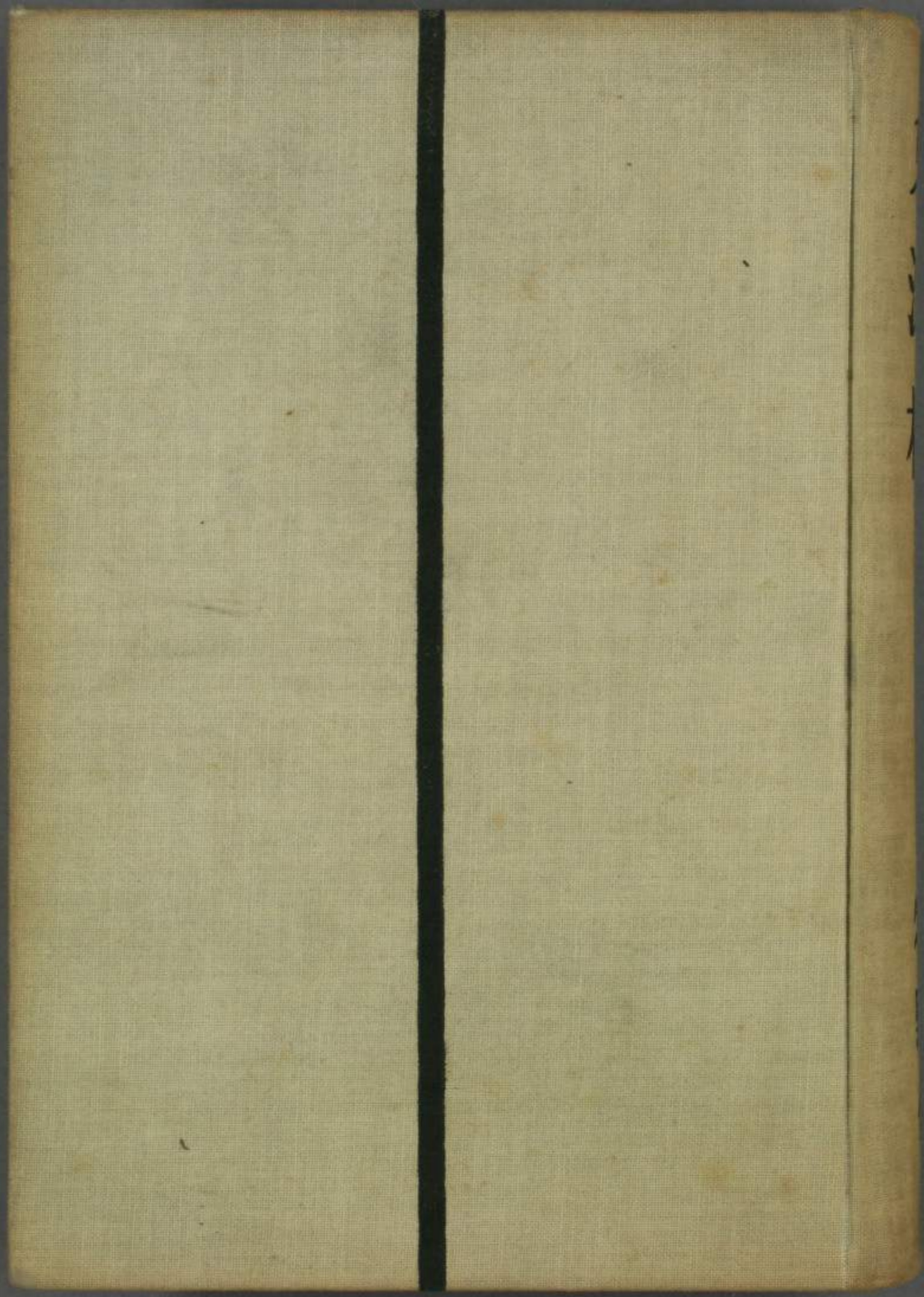
鬼
淚
村

牧
野
信
一



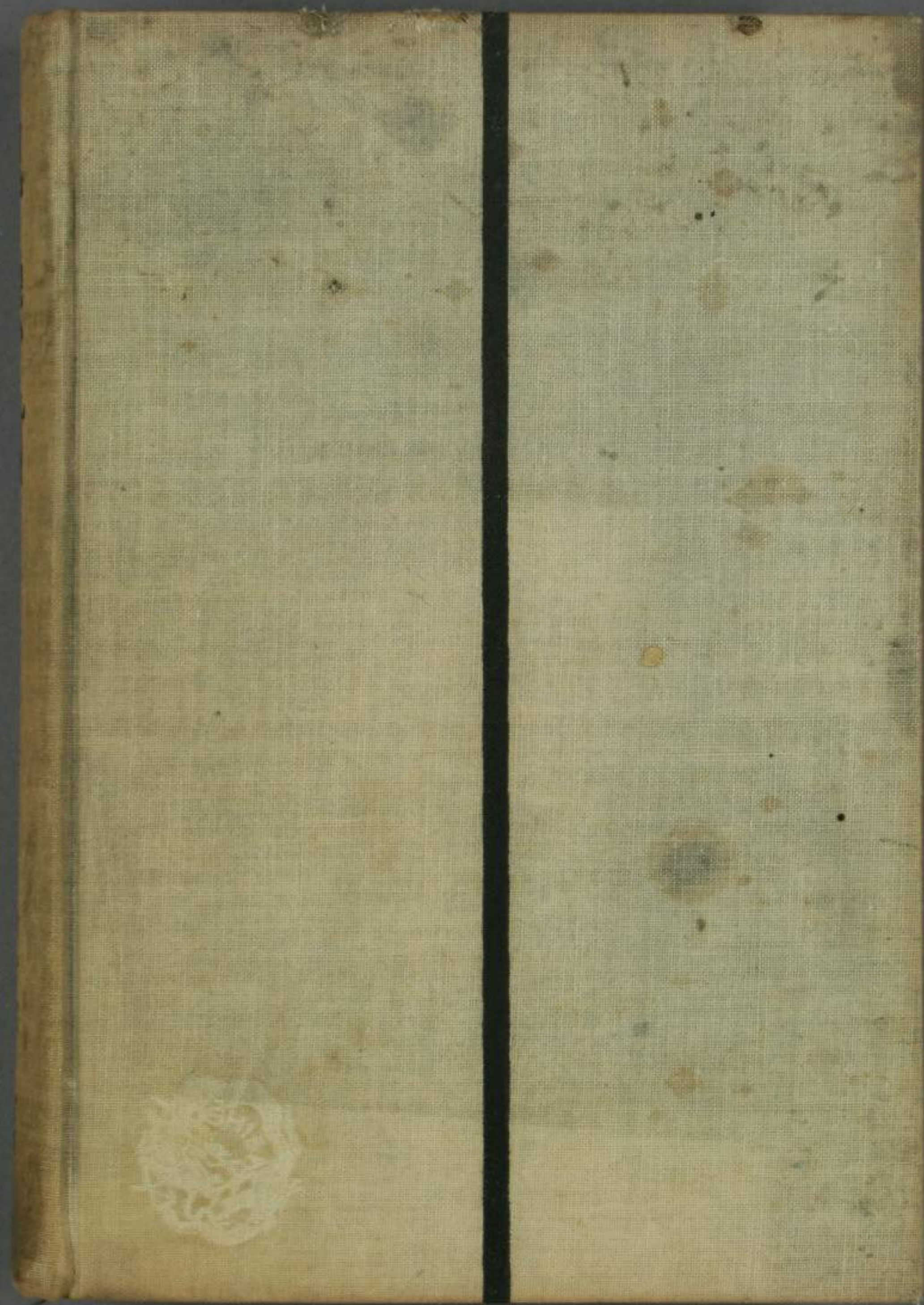
芝書店版

定價貳圓



鬼
淚
村

牧
野
信
一





鬼
淚
村

牧
野
信
一

目

次

東遊記

月あかり

次 年 作 創

雪景色……………	一九二八年八月	剝製……………	一九三五年二月
山を降る一隊……………	一九二九年十二月	城ヶ島の春……………	一九三五年三月
ゼーロン……………	一九三一年八月	月あかり……………	一九三五年五月
バラルダ物語……………	一九三一年十一月	緑の軍港……………	一九三五年七月
疑惑の城……………	一九三二年三月	文學的自叙傳……………	一九三五年七月
鬼の門……………	一九三二年五月	鬼涙村……………	一九三五年九月
木枯の吹くころ……………	一九三三年十二月	痴日……………	一九三六年一月
岬の春霞……………	一九三五年二月	裸蟲抄……………	一九三六年一月

このごろ私は、ときどき音取おんどりかくからの手紙（代筆）を貰ふので、はぢめてその音取といふ苗字を知つた次第であります。それまではその人の姓名は怒山ぬやまかく——かとばかりおもふて居りました。ところが怒山といふのは、その人の村の名稱だつたのです。左う云へば人々は、その人のことを怒山のおかくと稱んでゐたのに氣づきました。また、おかくに限らず町の人達は、それらの村の人々を區別するには苗字の代りに村の名前を用ひてゐたとうなづかれます。ともかく私は、この頃その人からの手紙を貰つて、音取かく——と見る場合妙なきこちなさを覚えるのです。それも定つて音取とあるわけではなく、音頭となつたり音田であつたり、雄鳥と變つたりするので、おかくに會つて、私が苗字を訊ねて見ると稍暫く呆然とした後に

「おんどり……だな。」

と答へるのですが、るが、りなのか、または他のものか決して聞きわけ憎いのであります。字

は訊ねても無駄なのです。怒山ぬやまといふひびきの方が、明瞭であるためか、習慣のためか、いかにもおかくの風貌風姿に適はしくて親しみが多いやうにおもつて居りましたが、やがて、おんどるなのおんどりなのか判然としないのも氣にならなくなりました。その山奥の小さな村では、苗字なんてものはほんとうに要もないものだったのです。郵便なんていふものを受けとる人は村中にひとりもないといふところなのですから——。私のゐる寄生木かきりぎも隣りの怒山も、その他五つの字名の小區域と共に龍巻村といふもの、中の小字であり、俗稱であつて、登録された名稱ではないのです。

おかくは代筆された手紙を自分で私のところへ携へて来るのですが、その内容はいつもきまつて意味が曖昧なのです。

「一體、ぶくりんの名前は何といふんだね。」

文中に、伴袖吉とあつたり、袖七となつたり、袖太であつたりするので、また私が左う訊ねても、やはりおかくの返事は烏耶無耶なのであります。

「ぶくりんが何うも悪さばかり仕でかして……」

おかくは左う云ふだけなのです。ぶくりんといふのは、おかくの伴の仇名なのですが、仇名よ

り他の名前を知る者は誰もゐないのであります。ぶくりんといふのは何ういふ意味なのか、凡そ字義からは肘度の出来ぬ、わけもない單なる語呂であるのでせうが、いつも憤かたつてゐるのか不平満々なのかわからぬ氣の青んぶくれで、憤つてゐるのかと察すると左うでもなくて、そのまゝの表情で喉の奥にわらひ聲などをたてる片目のおかくの伴の風貌は見るからにぶくりんなのです。これは何もぶくりんに限つたわけではなく、何故かこのあたりでは古來から大概の男は仇名の方が有名で、いつの間にか當人でさへも自分の本名を忘れてゐる者さへ珍らしくありません。ぶくりんで連想するのは代書業のぐでりんです。私も無論未だ彼の本名は知らぬのでありますが、彼の様子は打ち眺めたところ別段に際立つてぐで／＼してゐるといふわけでもなく、いつも淺黄色の絹はんかちを首に巻いたどちらかといふと優型の美男子ですが、何故か彼は他人と會話を交へる場合に決して相手の顔を見守りません。顔を稍斜めに曲げて眼を伏せたまゝ仲々の饒舌ですが、その間常に同程度の微笑を湛えてゐます。そして左の指先で頤の先を引つ張つてゐるのが癖ですが、さうしてゐるときはとても細長い顔に見うけられるのに、ひよいと何うかしたハズミに正面を向いたところを見ると寧ろ扁平なかたちで見違へられます。青いとも黄色ともつかぬヘチマ様の顔色で、時々薄化粧を施してゐることがあるさうです。尙彼は、口の利き振りが悠長のやうに

見へるのに他人の云ふことを終りまで聞かず、無闇に左うか／＼と黙頭くのです。非常に悟りが速いことを示したがる態です。その癖彼は約束を守つたことはいふはなしです。また彼の歩き振りは飄々たる抜きあしの態で、爪先から先へひよい／＼と脚を運びますが、上體はやはり長閑なヘチマのやうにぶらついてゐるのに斜めに頤を伸した伏目をもつて、油断なく前後左右を警戒してゐます。いちいち説明をすれば際限もありませんが、彼は何故ともなくその面前では相手の者を信用させる徳か技に似たものを持つてゐますが抽象的には斷じて信用の出來兼ねぬ銀ながしだ左うであります。つまり、それがぐでい、い、いなのでありませうか。

その他にも仇名でなければ通用せぬ人々のことは算えきれません。親兄弟であらうが、貸借りの帳面づらであらうが凡て仇名を持つて不思議とされてゐないのでありますが、たゞひとり消防小頭の諸星源十氏だけは、これらの弊風を「根底から改革すべし」と意氣捲いて居ります。源十氏は屢々これらの野卑極まりもない風習に關して、悲憤慷慨の演説を聞きますが、一朝一夕に永年の習慣が改まる筈のものでもなく、稍ともすれば氏の前でその仇名を呼ぶ者に出會つては叱咤の聲を枯らしつゞけてゐる始末です。で、諸星氏の本名よりも遙かに通用し易い仇名は、湯アガリといふのであります。諸星氏の顔色は何故か四六時中湯あがりのやうにテラテラと赤いからであ

ります。彼は謹嚴實直の郷士で、一滴の酒も嗜むことなく夙に龍卷村小字界限の風教改革運動に東奔西走して寧日もなき人であります。あたりで中學の課程を終へた者は諸星氏たゞひとりださうでした。

ところがいつの間にか、私の上にも一つの仇名がついてゐることを發見して、驚き且つ諸星氏と同様に憤慨しました。私はその仇名をやはり諸星氏と同様に自ら非常に嫌つて、決して認めたり許したりはせず、自ら想ふだに怒りの激情に堪えられんのでありますが、はなしの行き懸り上厭々ながら述べるわけであります。どうぞ、直ぐ忘れて下さい。私の仇名は水車小屋のト、ン、ガ、ラ、ンといふのです。いつも／＼、唐辛子を舐めさせられたやうな苦氣な顔ばかりしてゐるといふところから、誰が云ひ出したともなくそんな名前が流布されたといふのでした。私は、それを聞いた時は思はずカッと逆上して

「トンガラシとは何だ！」

と身震ひと一處に怒鳴りました。居酒屋の泥龜の店で、村祭りの宴の場でした。皆な白けて黙つてしまひ、私は席を蹴つて立ち去りましたが、間もなく向方にワーツといふ歡聲が舉りました。名前を呼ばれて怒る奴は湯アガリだけだとおもつてゐたら、またひとり野暮なトンガラシが出現

しておもしろいぞ——とはやしたてたのださうです。

當人が高飛車な牽制を加へれば加へるほど、それは須叟の間にそれからそれへ喧傳されて、今ではもう手の施しようなく私は大勢に巻き込まれました。

ほんの少しばかり音取かくに就いての私の回想をお聴き下さい。私は、十五ほど齡下の弟との二人兄弟で、私たちは共々に幼年のころ音取かくに育てられました。

ぶくりんを知る者ならば、不圖はぢめて出遇つても、これはあの息子の母親だたと氣づくほど倅の容貌に好く似た母です。私はおかくを先に知り、ぶくりんとは五六年前からの知り合ひですが、おかくの倅だときかないでも直ぐにそれと悟りました。

おかくは昔から減多に口を利くためしがなく、いつもぶくりん！としてゐて年齢の想像が今でもつきません。相當のお婆さんには違ひないのですが、私にはやはり昔のおかくとそんなに違つてゐないと見えます。おかくは、何んな場合にも逆ひといふものを知らぬ驚くべき氣永な性質で蓋し子供の守役には稀大の適任者だったのでせう。子供がおはなしを求めると、嘶は何も知らぬからと弱つて、粉ひき唄といふものを歌ひました。その歌の調子といふたら世にも悠長なメロデ

イで、まるで欠伸のやうに漫然たるものです。今も昔と變りなく秋の收穫れが済んで冬の仕事にとりかゝらうといふ時ともなれば、あちこちの家々の窓からごろ／＼とまはす石臼の響きに伴れて歌の聲が聞えますけれど、何んなに私が辛棒強く聽耳を凝らして見ても、あまりにその唄の調子が緩漫に過ぎて、何うしてもその歌詞を聴きわたることが適はぬうちに、ついうとうと、眠氣を催してしまふのです。何ういふ文句なのかと訊いて見ても、節と一處でなしにそれを口にすることの出来る者はひとりもありませんでした。つまり歌詞を明瞭に知る者は無かつたのです。

弟の幼時には、私は中學生でしたが、おかくと赤ン坊は冬になつて風のない日であると、裏の密柑畑に續く芝原の日向で遊んでゐました。私の机の前の窓から、その光景が額ぶちに收つた盡のやうに眺められました。粉ひき唄をきながら幼児はもうとうに眠つてゐても、おかくは抱きあげることもしないで切りと歌をつゞけてゐるのです。歌はやはり石臼をまはすと同様に上體を動かしてゐないと調子がかぬと見えて、おかくは粉ひきの物腰でいつまでも歌つてゐるのです。そして子供が再び眼を醒しても相變らず石臼をひいて歌つてゐるのです。そんなに永い間子供は眠つてゐるのだから、せめてその間は歌を休んだら好さうなものなのに、一度子供にせがまれて歌ひはぢめたとなれば、聽手が退屈して他の遊びを申し出るまでは決して自ら止めようとは致

しません。それからまた子供が芝生を逼り出して畑のふちなどへ差しかゝると、おかくはそれを引き戻さうとはしないで、子供の行手に筵を敷くのであります。子供の腕が伸びて行く方向へ、作物の上であらうが籾側の日蔭であらうが頓着なしに、それからそれへ筵を敷き伸べて逼るがまゝに逼はうとする子供の行手を決して遮らうとは致しません。逼りまはる子供の腕や脚は伸々疲勞しないものであつて、私は子供が密柑の林の下を龜の子のやうにぐるぐると逼り廻つて、畑を横切り、母家の方までも逼り込んで来るのを見て感心し、どこまで逼つても邪魔ものゝない廣場で逼はせたならば何メートル位ひの距離を逼るものか知らなく、代敷の問題を解くことも忘れて、見惚れました。おかくは子供が通つてしまつた後の筵を丸めて、更に行手に敷き伸す仕事を繰り返しながら子供の運動に伴れて何か口のうちに呟いて居ります。

弟の時も私の時も、その養育振りは全く同様だつたといふことで、そしてそれ程齡の違ふ弟と兄を稍ともすると感違ひして、呼び間違えるのです。お、それで私は今不圖氣づいたのですが、子供が私の窓の下に差しかゝつた時、おかくが

「トン、トン、トントン——」
と子供の歩き振りに伴れてうたつてゐるのでした。

「トントントントン、トンガラシ……」

それだけが何かの文句の後先にはつきりとひびきましたがおかくは窓の中の私の顔を見ると、アツ、間違えたか！といふやうに眼ばたきして

「ラツキヨウ坊主、ネギ坊主……」
と拍子を變えました。

して見るとトンガラシの仇名は、何も近頃の私にはちまつたわけではなく、赤兒の時からそんな苦氣な顔をしてゐたものか、それとも頭の格構でもが唐辛子を髣髴させるのか、ともかくおかくに與へた私の印象がトンガラシであり、それはおかくの命名に他ならなかつたのです。ぶ、く、り、んとかぐで、り、んとかいふのと同じやうに別段の意味もなく、別にこの男の何處がトンガラシに似てゐるといふわけでもなくとも、何やら左ういふ印象を人に與へるところから即興的におかくの口に登つたのだから適ひません。また弟のことをおかくは、ラツキヨウ坊主、ネギ坊主と呼びましたが、左う云はれて見るとたしかに私の弟の感じは、それに違ひありません。

その町には、昔ながらの鐘つき堂といふのがあります。一時間毎に、その時刻の数だけを報じて、更に「葉で鐘」と稱して、三つだけを餘分に打ちます。つまり、十一時には十四、十二時に

は十五の数を打つのです。これはその後大正の震後に改正されて、今では朝（六時）と午の二回に減らされ、棄て鐘なるものも廢止されたようですけれど、何百年の昔世は北條の戰國時代から打ち鳴らしつゞけられたものといふことです。

子供はこの鐘樓の下に立つて、鳴り響く鐘の響を算えるのを好みました。おかくは子供を伴れて、その下に立ち、子供といつしよに一つ二つと鐘の音を唱えました。鐘が鳴り止むと子供は「もつと〜！」と強要するのです。

朝、學校へ行く私が、子供を伴れたおかくと共に家を出かけて、午後になつて再び其處に歸りかけると、おかくは未だ鐘つき堂の石垣の下でランチ・バスケットをさげたまゝ鐘の鳴るのを待つては、まだ算えて居ります。私には、鐘つき堂の下で子供の手を引いたおかくが、ぼんやりと仰向いて鐘の鳴るのを待つてゐる時の姿が一番鮮やかな印象に残つて居るのです。

弟が中學生になつてから間もなく、おかくは初孫を得て、その養育係りのために怒山へ呼び戻されましたが、その前後から孫の父である片目のぶくりんが不意と行衛不明になつたのださうです。おかくは、ぶくりんを育てる時も、やはり筵を伸してぶくりんやぶくりんや、と調子をとりながら逼り廻らせ放題に遊ばせたといひます。

厩の前には澤山な鶏が放飼ひにされて餌を拾つてゐました。ぶくりんは鶏の群の中へ、ばくばくと逼り込みますが、鶏も驚かずに筵の上に登つたり降りたりしてゐました。おかくはそれを見守りながら唄を歌つてゐましたところ、不意と赤兒が氣たゝましい悲鳴を擧げたので、さすがに仰天して、見ると、子供の左の眼玉を鶏の喙が突いたのでした。子供の眼玉は、びよこりと地面の上に落ちましたが、あはやの間に一羽の鶏がそれをくわえると、翼を鳴して孟宗鉞へ駆け込んできたさうです。

——だら彼の左眼は義眼であります。それが右の眼との調和を缺いて、度ぎつく光るさまなども、その仇名の一因かと私は思つたら、おかくの父がもつと左ういふ仇名で、彼は祖父に好く似てゐるといふところから子供の時に既にぶくりんと稱ばれてゐたことでした。彼の右の眼は象のやうに細くて、二つの眼を並べると恰度何かをねらつてゐるものゝやうでした。左う云へばおかくの眼は、いつも眠つてゐる見たいに細くて兩方のふくらむだ頬に壓しあげられてゐるやうであります。

おかくの手紙は、私の強意見をもつてぶくりんの行狀をたしなめて呉れといふのが本意なので

すが、ぐでりんの代筆に依るその文面はいつもほんとうにぐでりん流に一向要領が得られず、私
はもうその筆者のヤケに肩さがりにそろつた達者な筆蹟を一目見るや蟲唾が走るのです。これら
の村々の人達は、未だに封建的といふのか何うか、他の土地から入り込んでゐる者の上には何と
はなしに白眼を向け勝ちで、また直接に會話を交へるのを好みません。ひとつは彼等の方言が夥
しく扁端なせむであるためなのかも知れませんが、育て親である筈のおかくにしてからが未だに、
例へば私とも自由な會話を交したがらぬのです。おかくは、口では何うしてもその頼みごとを私
に告げる術がなくて、ぐでりんに代筆を乞ふのですが、それらの事情の一端にはもともとぐでり
んも相當な主要人物として登場してゐるのですから、これは完全なる代筆文とも申されぬのです。
ぐでりんは、相手の面前では決して自分の意志を發表することを好まず、他人の名前に隠れて綾
をとるのが癖です。だから責任を問はれるやうな場合になると、いゝえあれはたと頼まれて爲し
たことで自分のあづからぬはなしだと回避してしまふのです。ぶくりんは五六年の浮浪の旅から
戻りましたが、既におかくは家督を孫に譲つて馬耳東風なので不平満々なのです。そして彼は屢
々怒山の實家に、家財横領の目的で闖入するのですが、腕力にかけてはおかくの敵ではなくひと
たまりもなくおかくに疊まれてしまふのです。彼の妻君は永年の間泥龜の店を手傳ふて居りまし

たが、鐵砲玉といふ怒山の分限者に見込まれて後妻に興入りました。おかくは鐵砲玉と縁者にな
つたことを此上もなく名譽としてゐます。

ぶくりんは、はぢめ私の水車小屋の雇員なのですが、遊びほうけてゐるばかりで滅多に寄り
付かうともしないのです。もと／＼私はこんな水車小屋にかゝり合ふてゐても埒があきませんの
で、ぶくりんの行状さへ収まるならば、おかくへの義理合ひのために直ぐにも音取家へこのまゝ
進呈して、ぶくりんを働かせ度い念なのでした。

そのことをおかくにはなすと

「ぶくりんにやつたら蕪なしぢや……」

とかぶりを振るのです。

「然しぶくりんだつて、何時までものらくらしてゐる了見でもなからうし——噂に依れば女房同
様の女もあることだといふのだし、いつそこつちから斯うと物優しく出たら、案外素直な働き手
になるだらうとおもふのだがね……」

私はそんな風にこんこんと悟すのであつたが、左う云はれて見るとやはり俾に對する愛情も涌
かぬでもないらしく、おかくは迷ひはぢめるのだが、何故か私にその煩悶を直接告げようとはし

ないで、止せば好いのにぐでりんの許へ赴くのです。

……「いつそそれでは、おかくの孫のものとするかね。ともかく私は一日も早く此處を立ち退き度いのだからな……」

私は關はず云ふのです。ぐでりんはおかくの前では孫のものにするが好からうといふし、ぶくりんをつかまへると、ともかくトンガラシが左う云ふんだからひとまづ假面をかむつてお辭儀をしておくんだな、こつちのものにさへなれば後は俺が采配をふるつて一儲けしてやるから——と、賣渡先の周旋を誓ふことを云ひ、また湯アガリなどに出會ふと、極力その水車小屋は村の公有物にしよう、その間の運動は自分が引うけた——とばかりに出しや張るのです。私の左ういふ考へが洩れると、村の一部では、それを公有物に寄付せしめて、消防器具の置場に代へようといふ議が起つてゐたのです。私は別に意見もないのですが、どちらかと云へばそれには反對で後は何うならうとも兎も角一端はおかくの眷族へ贈り度いのでした。だからおかくに會ふと、あれこれと世話を焼きたがるのでしたが、私が稍熱心になればなる程おかくはぼつとしてしまつて、あの鐘を聴いてゐるやうな顔つきを保つばかりなのです。

孫の田市は未だ十三なのだ、それともおかくは田市と二人で水車を廻しながら、ぐでりんの了見

の入れ換はるのを待つ氣なのか——一向にそこのおかくの考へも解らぬのであります。實にもうこんな場合の無智文盲の始末の悪さと來たらおはなしになりません。

「何もいち／＼、あんなアテにならぬぐでりんのところへなんて行かないで、ぶくりんを一體何うしようとおもふのか、どんなに憎くても子は子である限り、ゆくゆくはこれ位ひのものはぶくりんへもやりたいとか、それ位ひのことは口で云へさうなものだらうがね！」

私は次第に焦れつたくなつて、稍突つ離したものの云ひ方に走ると、おかくはもうぐでりんの救けでも求めたいらしく、川下のベンキ塗の役場の方へ吸ひとられるやうな視線を投げてゐるのです。手の施しようもなく私も腕を拱ねくばかりでしたが、さつきから私は、いくらその方が有名であるとは云ふものゝ親の前で、その子の名前を平氣で仇名で呼んでゐるのが厭に太々しく願みられたりしました。加けに自分は「仇名廢止論」の賛成者ではなかつたか！と氣づくのだが、いろいろな人の顔を思ひ浮べても今では唯一人の本名すら思ひ出せぬ始末でした。

「もうこれから先……え、と？」

云ひかけて私は思はず眼玉を白黒させるのです。湯アガリ氏の苗字が何うしても思ひ出せないぢやありませんか。「それ、あの、何と云つたかな……チエツ！」

私は苛々して、圍爐裡のまはりを歩きはぢめるのですが、やはり

「湯アガリさんやぐでりんを——」

と云ふより他はありません。「口利きになんて頼んで寄したつて！」

私は寧ろ自分に焦れて、ほき出しました。

「俺は知らんぞ。——あの人は左ういふ場合になると、頼まれた當のおかくなら、おかくの意見は他に……」

こんな言葉がおかくに通じる筈もないのですが——「自分の了見ばかりを喋るといふことになるんだから、俺は何も彼も解らなくなるんだよ。」

と氣色ばみました。すると、おかくは警官にでも叱責されてゐるかのやうにおどおどしてしまつて、脅棒ゆすりはじめたかとおもふと、やがて次第に不氣嫌の度が増して小屋中をあちらこちらと大股で歩き出した私のあとをふら／＼と付いてゐます。

「何も彼もわからぬものだらけだ。樂天的になどなれる筈のものではなからう——たゞ俺たちは歩いてゐるばかりだ、命のある限り歩いて／＼……」

私は、轟々と車の回つてゐる水車場の中をぐる／＼と歩き回るのでした。

消防小屋移轉の件と、ぶくりんを耕地整理の旗手に抜摘しようといふ案を提げて湯アガリが時々ぐでりんと伴れだつて私を訪ねるのですが、彼はその問題よりも「仇名廢止論」で氣焰を擧げるのでした。それならば元々私も意見が一致するので、ちよつとでも膝を乗り出すと彼は、忽ち戦國時代の勇士が決死の誓ひを立てるかの如くに亢奮して

「よしや村人の一揆と戦つても、先づ君と僕とがこの提携の上に立つて同志を糾合しようぜ——」

と、胸を叩き相手の肩先をむんずと掴むのです。それがまた夥しい腕力で、私の片腕は鉛筆のやうにしびれてしまふのです。その主意は飽くまでも賛成なのですが、この意氣投合の表現法には全く恐れをなして、私はなるべく天氣と耕作物の噂の方へ話頭を向けずには居られませんでした。

「こゝにゐる石綿枝之助君も同志として先づ紹介いたしませう。石綿君は僕等の説に徹頭徹尾賛成で、全力を擧げたいといふんだ。」

湯アガリは大變な切り口上でぐでりんを振り反ると、

「ねえ石綿君、間違ひないでせうな！」

と念をおしました。するとぐでりんは相變らず斜めにうつ向いて頤を撫でながら

「それあ、もう……」

と珍らしくはつきりと黙頭きました。

湯アガリもぐでりんもそんな用事で私を訪れたわけではないのですが、何でも形式的なことを悦ぶ湯アガリは、もうそつちのことばかり無氣になつて、ぐでりんと私とを握手させたり、自分は飲みもしないのに盃をあちらこちらへ回したりした後に、凝つと腕を組んで冥想に耽つたりするので。

ぐでりんの云ふことは私はいつも好く聞きとれないのですが、總合して見ると、彼はおかくの依頼で私を訪れるのだとのことであり、また近いうちに自分とおかくとがぶくりんを同行して来るから、今迄の彼の怠慢振りを許した上へ許すも許さぬも私はいつにもぶくりんに對して憤つてなどはゐないのだ——もう一度この小屋で働かせてやつて呉れ——といふやうな意味でもあるらしいのだが、何も彼もその云ひ回し振りが遠回しで、そしてまた難解な方言であり、その上一言云ふかとおもふと「いづれ詳しいことはまた改めて——」とか「追つてぶくりんを伴れて来た時に——」とかとぬらぬらして、こちらの意見なり返答なりを即坐に要求もしない如く、先から先へ、自分の云ふことを自分で後回しにしてゆくのです。

「働きたいんなら何時からでも戻つて来たら好さうなものぢやないか、僕が何とも思つてゐないのに詫びも意見もあつたものぢやなからうが——」

それでも私がそんなことでも云ふとぐでりんは言葉が通じないらしくに、え？ え？ え？ と幾度でも訊き返します。そしてまた彼が、にた／＼とつゞけるところから察して見ると、この水車小屋を音取家へ渡すつもりなら矢張り一應はぶくりんの名に換へた後に、村へ寄贈し度いのである、左うするとぶくりんの信用もついて耕地整理の方へ抜擢する運動も成し易いから——といふつもりらしくもあるのですが、そんなことは何うであらうと私は關ひはしない、多少なりと音取家の爲になるならばそれで結構なのですが、いつかなぐでりんの物腰態度から口の利き振りにはやりきれないので、つい横を向いて了ふのでありました。

すると、また手紙なんです。その手紙たるやまた言語同断の烏耶無耶で幾度も云ふやうでありますが一向要領を得ないのであります。

「私はおかくに育てられた赤ン坊だつたんぢやないか、味方に違ひないよ、何にも他人になんて頼む筋はありはしないだらうがな、云ひたいことや訊ねたいことは何でも遠慮なしにはなしたら好さうなものにな……」

私はなさけなさうな顔をしたり、慨嘆の胸を叩いたりして咳くのですが、おかくはいつ迄経つてもぼんやりしてゐるばかりです。

「え、ッ、こんな手紙を見たつて何うなるものかッ！」

私はぐでりんの文字に吐氣を催して思はず吠えたてました。それに、その手紙の宛名からしてが、全くの出鱈目やら當字やらで先づ私の氣分を悪くさせるのです。——牧野を横野と書いのは未だしもで、何うかすると横島になつたり巻原と變つたりするのです。——名前と來ると、信之介やら、新太郎とか眞平なんていふ風にこれもその都度まちまちなのです。それでも、おかくは信一の信の音だけは覚えてゐるのかといくらか私が感心しようとする、次の手紙では横原英太郎殿と麗々しく認められたり、英兵衛となつたりしてゐるのです。それもまあ、弟の英二郎、祖父の英清などの想違ひなのでせうが、これでは私たる者も顔まけがせずには居られないではありませんか。

「え、と？ あのトンガラシのほんとの名前は何といふんだつたかね、おつかあや？」

ぐでりんは手紙を書き終へると、おかくに斯う訊ねるのです。おかくとぐでりんの會話を聞いて見ようと私は思ひましたので、いつか私はおかくが出て行くと先回りして役場へ赴き、代書所

と障子一重の小使部屋で頁を喫してゐたのです。

おかくの返事は直ぐには聞えません。

「わつしら村の人の名前を書くのが商賣なんだが、名前を書いてゐてそれが誰のことなのか一向解りもしないし……何しろ商賣となると忙しいのでな。」

ぐでりんは左う云ふ意味のことを呟いておきました。非常に忘れッぽい男ときいたが、それは未だ湯アガリの斡旋で仇名廢止論者の同志として、私と握手してから間もない目でしたのに、もうぐでりんは私の名も忘れてしまつたのかと私は密かに驚きましたが、不圖私もぐでりんの名前は何と云つたか知らと考へて見ると、やはり思ひ出せぬのです。

ぐでりんは、眼ばたきをする間にハガキの宛名を書き終へるといふ速筆を人々から尊敬されてゐますが、彼は見物人の前であるとして一層にその妙技を揮つて、全々それに關はりのない會話を他の者と交はしながら、何本の手紙でも書いて見せます。その代り内容は千變一律で無責任の上もありません。その時だつておかくの顔を見ると、何も聞かぬ先から

「あ、あ、例の件か——わかつてゐる、わかつてゐる……」
と即座に筆をとつて

「拜啓、酷寒益々その威を逞うし、感冒の猖獗日に増して」

と必ず封紙一二枚は時候見舞と「憚りながら拙宅一同も無事消光つかまり居り候故偏へに御休心下され度候」といふ慇懃な御挨拶です。「陳者、俸音取柚太こと度々ながら貴殿の御迷惑を病し汗顔至極の至りに御座候も來る××日夕刻同伴の上參上致しその節萬々申し上げべく候故、何卒御用意の件御備え置き被下様重々御願ひに及び候」

と、他の來客と他の話をしながら書くのであります。そして後先の文句が極めて物々しいばかりで、同じ文面の手紙ばかりを受取る私は空いた口も塞がらぬのです。その日の夕刻に待つておれば、まるつきり梨のつぶてど、また幾日か經つと同じやうな手紙が舞ひ込んで來るのです。それには前回の違約を詫びて、私こと持病の喘息——にてとか、終ひに流行性感冒に犯され——など、言わけしてありますが、おかくはそんな持病はおろか、生れて以來藥を飲んだ驗しもないのです。

「なあに斯うした手紙であの男の脚さへつないで置けば好いのさ。こつちの段どりがつきもしないうちに、例の氣紛れで不意とあいつに姿を隠されでもしたら片なしだからな。おつかあは、廻りと見張番の役で……」

何のことか解らなかつたが、仕事を運びながら切りと、ぐでりんが、そんな意味のことを達者な方言で誰かと語り合つてゐるのが、隣りの私の耳に這入つたものです。

ぐでりんは研究の餘地ある二重人格者ではないでせうか。

はなしは雲の如くに盡きない。はなしは煙りであつて、あとさきもなく、口を切ると同時に虚無である。

私は、旅を考へてゐた。

小屋の裏口から川ふちへ出ると、花麗な月夜であつた。誰に聞せるといふ考へもなく、私は小屋のうちに居ると酷くへりくだつた心地でうとうと、眩きはぢめるのだ。眩きがやがて演説となり、訴へとなりかゝるのに氣づいて私は驚きに醒めるのだ。幾本もの杵が水車に廻されてごとごとと鳴つてゐるのがいち／＼私のはなしへの享け應への如く手にとるやうであつたのだ。

あたりの山々は、いつもえんえんと起伏する山でありながら、さて若し私が大男であつて不圖

疝癢を起して掴みあげようと腕を鳴しても、掴みどころに迷ふであらう特に際立つた峰も見あた
らぬ眠むたげな色合でぐるりと村を取り巻いてゐた。流れは白く日の光りを泛べてせゝらぎの音
もなくうねうねと流れて行手の景色も見あたらなかつた。もと／＼この川は森の向方の本流から
人巧的に呼び込んだ灌漑の水で本流へ逆戻りする前に大方田畑の底に吸はれて水蒸氣となる水で
とりとめもなかつた。然しこの流れにも名前を付けべきといふ議はあつたが、誰も自らそのため
に頭を曲げようとする苦勞人も現はれなかつた。人々は凡てこの水に育つて生き永らへ放浪の夢
を知らなかつた。

私は、腕を組んで川ふちをさ迷ふてゐた。私の胸は短氣で一杯だつた。振り向くと、おかくが
後ろに立つてゐた。

「歸つてお呉れな。ひとり歩き度いだから……」

私が左う云ふとおかくは、泡のやうな聲で、ぶくりんがまた行衛不明になつて寂しく、この上
お前に姿を消されたら

「おらあ、もう往生も出來ん。」

としやくりあげた。

「何？　ぶくりんはまた逃げ出したのか？　それぢや何も一層はなしはない。」

私は、ぶくりんのあとを追ひたかつた。こんな村で、私は水蒸氣に化して了ひたくはないのだ。

「わしらにも何もはなしはないのだ。あんな水車場なんて欲しいこと無いんにや。わしら、たゞ
ト、ガラ、シと一處に暮したいんぢや。うつゝ抜かすと首根つこ、ふんづかまへるぞや。」

「無茶を云ふな。こんな村にまご／＼してゐたら、こつちもぐでりんになつてしまふづらア。わ
しや鯰は嫌ひなんぢや。」

私は身軀ひを舉げて飛びのいた。

「寒鯰を喰ふたら、そんな出放題は吹かなくなるべえよ。」

——私はおかくの鯰に見込まれ、棘毛を震ふて、大股で歩き出した。川下の鍛冶屋へ行つてゐ
る水車場の馬を引き出して、今夜のうちにでも町を指さうと考へた。

「下へ降つたつてビッコ馬は、とつくにぶくりんが乗り出して、ガラ、倉は消防小屋で寄り合ひ騒
ぎづら。」

おかくは、もう私の行手を察してゐた。

「不埒だね、ガラ、倉が俺の馬をぶくりんに引き出させる権利はないぞ。」

「ニワツトリに突ツツかれぬうちへ怒山へ引ッ返せ、水車場が厭ならおらが怒山へ来てニワツトリを絞めろや。」

絞めろといふのは鶏を喰へといふのだが、もうひとつのニワツトリといふのはぐでりんの兄貴のことで聲が鶏に似てゐる田地賣買周旋業者である。おかくは何故かぐでりんとは懇意にしたがニワツトリを毛嫌ひした。俵が鶏に目玉を突かれて、放浪性に富んだ旋毛曲りとなつたといふ迷信からかも知れない。

「ひとの馬を勝手に追つ放すなんて言語同断だ。俺アこれからガラ倉をつかまへて道案内をさせてやるぞ。」

と私は力んで、消防小屋へ爪先を向けた。恰であたりの景色のやうに何方つかずの連中が、私は心底から腹が立つて來た。私は封も切らなかつたが、うつかり片手に握つてゐたぐでりんの手紙に氣づいて

「人を玩具にするにも程があるぞ、面と向つて訊いてやらう。」と怒鳴つた。

——消防小屋は人のざわめきで一杯であつた。大鍋をとり圍んで酒盛りだつた。鯨を喰つてゐ

るのに違ひなかつた。私は、決して喰へではなしに鯨の料理は見ても吐氣を催すのだ。私は、ぐでりんを外へ呼びたいと思ひ、水へ飛び込むときのやうに大きな息を吸ひ込んで悪臭を防ぎながら入口の扉をあけた。見ると連中は大鍋を突きながら、消防小屋の移轉問題に甲論乙駁の眞最中だつた。

ぐでりんは相變らずの下向き加減で、にやにやとあちらこちらへ向つて酒の酌に忙しかつた。

私は彼に聲を掛けようとした時に、不圖正面の湯アガリと顔を見合せ、ハツとして思はず口を塞ぐと乗り出した上體を後ろに退いた。奴との仇名廢止論に深く同意したにも關はらず、ぐでりんの苗字が口に出ないからである。

私は、小屋の軒先に掛つてゐる消防係りの名札を月あかりに透して、中の連中を順々に見比べるのであつたが、小頭の湯アガリを諸星源十と突き留めた他、ニワツトリ、ガラ倉、泥龜、河童の金さん、鐵砲玉、屋根音、ぐでりん等々と難なく十七八人も數えられるのに、筒先係の新倉善太が誰なのか、機械係りの又岡又平、乙波孫十郎が誰なのか、何うしても見當がつかかなかつた。するとニワツトリが私の姿を見つけて

「恰度好いところに水車のトンガラッさんが來たよ。相談があるんだよ、まあ此方へ……」

と招いた。

「何だと、ト、ン、ガ、ラ、ン、が来たつて！ 野郎を逃さないやうに引つ張り込め——ぐ、で、り、ん、や！」
左う喰つた主は、湯アガリだつた。私は、彼こそは一滴の酒も口にせぬ謹嚴な郷土と認めてゐたのに、思ひきや、大あくらの茶碗酒で湯アガリどころか茹蛸もどきの大入道で最早呂律も廻らぬ態たらくであつた。

私は、よろ／＼と後退りして田のふちへ立つてゐた。——小屋の軒先からは、鍋の湯気が酒盛り騒ぎと一處に濛々と空へ向つて、蒸氣をあげてゐた。

寒鯨の寄合ひには屹度喧嘩がはぢまるものだから、近寄らぬ方が好からう、鯨は喰はせたいが——おかくは左う云ふことを呟きながら私の爪先を眺めてゐた。冬のうちには屢々その如き名前の夜宴が開催される由は私は知らなかつた。水車小屋の移轉論などは、單なる酒のさかなで左したる眼目ではないのか——と私は氣づいた。して見ると湯アガリの仇名廢止論もそれと五十歩百歩でその場限りのものだつたのだらう。だが、あの説を持出す時の彼の熱意の籠つた姿は疑ふ餘地もなく眞剣だつたが？と考へると、私は煙に巻かれて止惑ふ度も知らなかつた。

向方から戻つて来る馬があるので、見るとぶくりんが鞍の上で眼を光らせてゐた。川狩りの最

中に泥が跳ねたのを拭はうとした時、謀らずも硝子目玉を突き壊したので、大急ぎで懸換へを買ふために町へ赴いたのだと云ふ。私は、また呆氣にとられた。おかくの言葉つきは泡を吹くやうで通じ憎かつたから、大概私は終りまで聞かずに察するのだが、確かに「逃げ出した」とは聞いたが考へて見ると彼等は一帯に「赴く」ことを「逃げる」といふのであつた。然し好く好く耳を傾けても、どうせ彼等の言葉は完全には通じなかつたが、この分では今迄にも何んな感違ひをしてゐたかも知れないのだ。

ぶくりんはおかくと二三言會話を投げ合ふと、火の見櫓に馬を縛いで小屋の中へ消えた。

私は古沼を覗く時のやうな——云ふならば弱少の身のうつゝが疑はれ、水底に映る空の雲の眼近く遠い不思議の奈落にのめり込む戦きに襲はれた。仰げば、月夜の空が隅もなく掴みどころもない四圍の山々へ天頂の暈から圓かな翼を擴げて山の彼方へ光りを滑らせた如く、此處は洞ろな挿鉢の底だつた。

「何うしておかくは、俺の行先がそんなに氣になるんだ、ぢや俺はもうどこにも行かないよ……」
「……………」

おかくは兩腕を擴げて欠呻を發した。その影が私の爪先へ薙に似てゐた。馬へ乗つて何處へ逃

げ、出すかのう——」

逃げ出す——をまた私は感違ひして、逃げるのぢやない、ぶくりんが俺の馬に秣草も與へず縛ぎ放しにしておくから、飼馬桶を捜すのだ！と叫んだ。そして更に大聲で

「馬は生きてゐるんだぞう——ぶくりん！」

と憤つた。扉を蹴破つてやれ、そして出て來た奴から誰彼の差別もなく、一騎打ちだ！と私はわけもない業腹を破つて、おかくの影から飛び出した。

「氣違ひだぞう……」

おかくが、そんなに叫んだ。(すつと後になつて知つたのだが、左ういふ病氣の疑ひで私はその村に閉ぢ込められ、またおかくはその看護人として雇はれてゐたのであつた——冗談ぢやない。) 扉に突き當ると、何かバネのやうに強いものに私は弾かれた。——ビツコ馬に飛び乗ると、おかくが、その轡をとつて動かさうともしなかつた。

私は、月を仰ぎながら火の見櫓の梯子を登つてゐた。私は寂しく、嘆かはしく、悒鬱極まりもない挿鉢の底から逃れ出すには、それより他に方便もない一心で、どんとんと梯子を登るとやがて鐘の傍らまで達してゐた。

下を見ると、おかくが口を開けて仰向き、そのまはりには幾つもの黒い影が蠢いて、切りと物やさし氣な手振りで、さしまねいてゐた。——私は、突拍子もない眞似をしてしまつたと氣づいたが、あまり突拍子もなくて、今更ぬけくと降りて行くのも氣耻しく、この寒さには弱つたぞ！と咳きながら、鐘の傍らに丸くなると、丁度ぐでりんのやうに顔を斜めに下向けて下界の模様をじろくと窺つた。

あけ放された小屋の扉から立ち昇る煙りは、可成り濛々と勢ひ強かつたが、半鐘の下までもとどかず月の光りに溶けそしてまた仰向いてゐる人達の口から立昇る呼吸が寒氣の中で線香の煙りのやうに鮮やかであつた。

ゼ
ー
ロ
ン

更に私は新しい原始生活に向ふために、一切の書籍、家具、負債その他の整理を終つたが、最後に、賣却することの能はぬ一個のブロンズ製の胸像の始末に迷つた。——諸君は、二年程前の秋の日本美術院展覧會で、同人經川楨雄作の木彫「雞」「牛」「木兎」等の作品と並んで「マキノ氏像」なるブロンズの等身胸像を觀覽なされたであらう。名品として識者の好評を博した逸作である。

いろいろと私はその始末に就いて思案したが、結局龍卷村の藤屋氏の許に運んで保存を乞ふより他は道がなかつた。兼々藤屋氏は經川の勞作「マキノ氏像」のために記念の宴を張り度い意向を持つてゐたが、私の轉々生活と共にその作品も持回はられてゐたので、そのままになつてゐたところであるから私の決心ひとつで折好き機會にもなるのであつた。

私は特別に嚴丈な大型の登山袋にそれを收めて、太い杖を突き、一振りの山刀をたばさんで出發した。新しく計畫した生活上のプロットが既に目睫に迫つてゐる折からだつたので、この行程

は最も速やかに處置して來なければならなかつた。で私は、早朝に新宿を起點とする急行電車に勢急な登山姿の身を投じ、終點の四驛程手前の柏驛で降りると息を衝く間もなく道を北方に約一里溯つた塚田村に駆け登つて、豫定の如く知合ひの水車小屋から馬車挽き馬のゼーロンを借り出さなければならなかつた。近道のみを選んでも徒歩では日没までに行き着くことが困難であるばかりでなく、途中の様々な難所は私の信賴するゼーロンの勇氣を借りなければ、餘りに大膽過ぎる行程だつたからである。

この電車の此のあたりの沿線から、或ひは熱海線の小田原驛に下車した人々が、首を回らせて眼を西北方の空に擧げるならば人々は、恰も箱根連山と足柄連山の境界線にあたる明神ヶ岳の山裾と道の森の背後に位して、むつくりと頭を持ちあげてゐる達磨の姿に似た飄然たる峰を見出すであらう。ヤグラ嶽と稱ばれて、海拔凡そ三千尺、そして海岸迄の距離が凡そ十里にあまり、山中の一角からは現在帆立貝や眞帆貝の化石が産出するといふので一部の地質學者や考古學徒から多少の興味を持つて觀察され、また末枯の季節になると麓の村々を襲つて屢々民家に危害を加へる狼や狐やまたは猪の隠れ家なりとして、近在の人民にはこよなく怖れられ、冒險好きの狩獵家には憧れの眼をもつて眺められてゐるところのブロッケンである。

私の尊敬する先輩の藤屋八郎氏は、ギリシヤ古典から歐洲中世紀騎士道文學までの、最も隠れたる研究家でその住居を自らビエル・フォンと稱んでゐる。その山峽の森蔭にある屋敷内には、幾棟かの極めて簡素な丸木小屋が点在してゐて、それ等には夫々「シャルルマーニユの體操場」「ラ・マンチアの圖書室」「P・R・Bのアトリエ」「イデアの楯」「圓卓の館」その他の名稱の下に、藝術の道に精進する最も貧しい友達のために寄宿舎として與へられることになつてゐた。私は久しい間「イデアの楯」の食客となつて藤屋氏の訓育を受けたストア派の吟遊作家であり、この胸像はその間に同じく「P・R・B」の刻彫家である經川が二年もの間私をモデルにして作つたのである。私が經川のモデルになると決つた時には、近隣の村民達は悉く貧しい經川のために瘡癩の舌打ちをして何故もつと別様の「馬」とか「牛」とか、左様なものを題材に選ばぬのだらうと、その無口な彫刻家のために同情を惜まなかつた。何故ならば經川の斯様な作品ならば、即座に莫大な價格をもつて賣約を申込み希望者が群がつてゐたからである。人物を選むならば、何故村長や地主をモデルにしなかつたのだらう。村長の像ならば村費をもつて記念像を作る議が可決されてゐるし、地主ならば彼自らが自らの人徳を後世の村民に遺すための象として、費用を惜まず己れの像を建設して置きたい望みを洩らしてゐる。またこの地に縁故の深い坂田金時や二宮金次郎の像ならば、

神社や學校で恭々しく買上げる手筈になつてゐるではないか！ それをまあ、選りにも選つて！——と私は、その時藝術家の感興を辨へぬ村人達から、最も不名譽な形容詞を浴せられたことであつた。

「あんな！」と彼等は途上で私に出遇ふと、おとなしい私に恰も憎むべき罪があるかのやうに輕蔑の後ろ指を差して

「あんな碌でなしの、馬鹿野郎の像をつくるなんて！」

左様な批難の聲が益々高くなつて、終ひには私達が仕事中のアトリエの窓に向つて石を投げつける者（それは經川の債權者達であつた）さへ現れるに至つたので私は、像の命題を單に「男の像」とか、乃至は幾分のセンセイショナルな意味で「阿呆の首」とか「或る詩人」とでも變へたならばこの難を免れ得るであらうと經川に計つたのであるが、出品の時になると彼は私にも無斷で矢張り「マキノ氏像」經川楨雄作と彫りつけたのである。そして彼は私の手を執つて、會心の作を得たことを悦び、私達のビエル・フォン生活の記念として私に贈つた。その頃私は自身の影にのみおびやかされて主に自らを嘲る歌をつくつてゐた頃であつた。再び回想したくない自分の姿であつた。この像に「詩人の像」或ひは「男の顔」とでもいふ題が附せられて、經川の作品の擁護者の手に渡つ

たならば私は幸ひだつたのだ。然し藤屋氏は、若しも私が今後の生活上で此の像の處置に迷つた場合には、經川の自信を傷けることなしに何時でも引きとることを私に約した人であつた。

藤屋氏のビエル・フォンは、道了と猿山の森を分つ、鋸型の谿谷に従つて徑を見出し、登ること三里、ヤグラ嶽の麓に蹲る針葉樹の密林に囲まれた山峽の龍巻と稱ばるゝ、五十戸から成る小部落で、幽邃な鬼涙沼のほとりに封建の夢を遺してゐる。神奈川縣足柄上郡に屬し、柏驛から九里の全程である。

私が今日の目的に就いて水車小屋の主に語つた後に、杖を棄て、ゼーロンを曳き出さうとする

と彼は、その杖を鞭にする要があるだらう——
「こいつ飛んでもない驢馬になつてしまつたんで……」と歴世的な面持を浮べた。そして、彼は私が斯様な重荷を持つて苦勞しなければならぬ今日の行程を心底から同情し、それが若し「牛」か「雞」であつたならば今此處でも即座に賣却して久し振りに愉快な盃を擧げることも出来るのだが「マキノ氏像」では何うすることも出来ない、早く片づけて來給へ、それから歸りには近頃經川が「馬」の小品をつくつたさうだから、そいつを土産に貰つて來て呉れ、質にでも預けて飲まうではないか！など、云ひながら、私に新しい寒竹の鞭を借さうとした。

「ゼーロン！」

私は、鞭など怖ろしいものゝやうに目も呉れずに愛馬の首に取紐つた。「お前に鞭が必要だなんて何うして信じられよう。お前を打つ位ならば、僕は自分が打たれた方が増だよ。」

主の言葉に依ると、ゼーロンの最も寛大な愛撫者であつた私が村住ひを棄て、都へ去つてから間もなく、この栗毛の牡馬は圖太い驢馬の性質に變り、打たなければ決して歩まぬ木馬の振りをしたり、事更に跛を引いたりするやうな愚物になつてしまつた、實に不可解な出来事である、今日謀らすも私を見出して再び以前のゼーロンに立ち返りでもしたら幸ひであるが！との事であつた。

「立ち返るともく、僕のゼーロンだもの。」

私は寧ろ得意と、計り知れない親密さを抱いて揚々と手綱を執つた。

「一日でも彼奴の姿を見ずに済むかと思へば却つて幸せだ。」

主は私の背後からゼーロンを罵つた。私は、私の比ひなきベットの耳を両手で覆はずには居られなかつた。——ゼーロンの蹄の音は私の歸來を悦んでゐるが如くに朗らかに鳴つた。私の背中では、薄ら重い荷がそれに伴れて快く踊つてゐた。ゼーロンのお蔭で私は、苦もなく龍巻村へ行

き着けるであらうと悦んだ。——これまで水車小屋の主は、經川の作品を賣却する使ひを再參自ら申出て、街へ赴くとそれを抵當にして彼方此方の茶屋や酒場で遊蕩に耽つては、經川に面目を潰すのが例だつたが、相變らず左様なことに身を持ち崩してゐると見える。今日も私が、經川の作品を持參したといふと、小踊りしながら袋の中を覗き込んだが、期待に外れて非常に落膽した。「お前の主が經川の作品を携へて街へ行く時には、お前は何時も木馬になつてやるが好い、跛を引いて振り落してやつても關はないさ。」

私は小氣味好きさを覺えながらゼーロンに向つてそんな耳打ちをした。

ところが僅か二里ばかりの堤を溯つた頃になると、ゼーロンの跛は次第に露骨の度を増して稍々ともすると危うく私に私の舌を噛ませようとしたり、轉落を怖れる私をその鬣に獅噛みつかせたりするといふやうな怖ろしい状態になつて來た。そして道端の青草を見出すと、乗手の存在も忘れて草を喰み、何んなに私が苛立つても素知らぬ風を示すに至つた。

私は、訝しく首を傾け悲しみに溢れた喉を振り搾つて

「ゼーロン！」と叫んだ。「お前は僕を忘れたのか。一年前の春……河畔の猫柳の芽がふくらみ、あの村境ひの——」

私は一羽の鴛が螺旋を描きながら舞ひあがつてゐる遙かの鎮守の森の傍らに眺められる黒い門の家を指差して、同じ方角にゼーロンの首を持ちあげて

「業慾者の屋敷では桃の花が盛りであつた頃に、お前に送られて都に登つたビエル・フォンの吟遊詩人だよ。」と顔と顔を改めて突き合せながら唸つたが、私の腕の力がゆるむと同時に直ぐ首垂れて草を喰み続けるだけであつた。黒い門は私の縁家先の屋敷で私は屢々ゼーロンを驅つて其處へ攻め寄せた事があるので、斯う云つて彼方を指差したならばさすがの驢馬も往時の花やかな夢を思ひ出して息を吹き返すであらうと考へたが無駄になつた。私は、その洞ろな耳腔に諄々と囁くことで驢馬の記憶を呼び醒さうとした。

「ゼーロン。お前は、業慾者の酒倉を襲つて酒樽を奪掠する此の泥棒詩人の、ブセハラスではなかつたか！あの時のやうにもう一度この鬘を振りあげて驅け出して呉れ。これでも思ひ出せぬと云ふならば、さうだ、ではあの頃の歌を歌はうよ。僕が、この Ballad を歌ふとお前は歌の緩急の度に合はせて、速くも緩やかに自由脚並みをそろへたではないか。」

杯に觸れなば思ひ起せよ、かつて、それは、King Hiero の宴にて、森蔭深き城砦の、いと古びたる圓卓子に、將士あまた招かれにし——私は、悲しみを詠えて爽快氣な見得を切りながら古い自作

の「新キャンタベリー」と題する Ballad を、六脚韻を踏んだアイオン調で朗吟しはじめたが一向利目がなかつた。

「五月の朝まだきに、一片の花やかなる雲を追つて、この愚かなアルキメデスの後輩にユレーカー！を叫ばしめたお前は、僕のベガウサスではなかつたか！全能の愛のために、意志の上に作用する善美のために、苦悶の陶酔の裡に眞理の花を探し求めんがために、エビクテート學校の體育場へ馳せ参するストア學生の、お前は勇敢なロシナンテではなかつたか！」

私は鞍を叩きながら、將士皆な盃と劍を擧げて王に誓ひたり、吾こそ王の冠の、失はれたる寶石を……と、歌ひ續けて拳を振り廻したが頑強な驢馬はビクともしなかつた。

私は鞍から飛び降りると、今度は満身の力を兩腕にこめて、ボルガの舟人に似た身構へで有無なく手綱を曳哉と引つ張つたが、意志に添はぬ馬の力に人間の腕力なんて及ぶべくもなかつた。單に私の脚が滑つて、厭といふほど私は額を地面に打ちつけたに過ぎなかつた。私は、ぼろ／＼と涙を流しながら再び鞍に戻ると

「あの頃のお前は村の居酒屋で生氣を失つてゐる僕を——」、と殊更にその通りの思ひ入れて、ぐつたりとして、恰も人間に物言ふが如くさめざめと親愛の情を含めて

「ちやんとこの背中に乗せて、深夜の道を手綱を執る者もなくとも、僕の住家まで送り届けて呉れた親切なゼーロンであつたぢやないかね！」と掻きくどきながら、お、酔ひたりけりな、星あかりの道に酔ひ痴れて、館へ歸る戦人の、まぼろしの憂ひを誰ぞ知る、行けルーチャの女子達……私はホメロス調の緩急韻で歌つたが、ゼーロンは飽くまでも腑抜けたやうに白々しく埒もない有様であつた。鈍重な眼蓋を物憂氣に伏せたまま、眼ばたきもせず眞實馬耳東風に素知らぬ姿を保ち続けるのみだつた。そして、翅音をたて、舞つてゐる眼の先の蛇を眺めてゐたが、不圖其奴が鼻の先に止まらうとすると、此の永遠の木馬は、矢庭に怖ろしい胴震ひを舉げて後の二脚をもつて激しく地面を蹴り、死物狂ひであるかのやうな恐怖の叫びを舉げた。私も、思はず彼の追従した悲鳴を舉げて、その首根に蛙のやうに嚙り付かずには居られなかつた。凡そ以前のゼーロンには見出すことの出来なかつた驚くべき臆病さである。

これにはじめて勢ひを得たゼーロンは、野花のさかんな河堤をまつしぐらに駆け出したのである。私は、この時とばかりに努めて、口笛と交互に緩急な Ballad を鞭にして、「これはかゝつた車」のスピードを繰つた。ゼーロンの脚さばきは跛であつたから駆ければ駆ける程亂雑な野蠻な音響を巻き起し、口腔をだらしもなく虚空に向けて齒をむき出し、二つの鼻腔から吐き出す太い

二本の煙りの棒で澄明な陽光を粉碎した。私は、斯んな物音ばかり凄まじいボロ汽關車を操縦して、行手の峻しい山徑を越えなければならぬかと思ふと、急に背中の荷物が重味を増して來て、稍ともすると壯重な華麗な聲調を要する筈の唱歌が震へて絶え入りさうになつたが、そんな氣合を悟られてまたもやゼーロンの氣勢がくぢけたら一大事だと憂へたから、血を吐く思ひの悲壯な喉を搾りあげて、魔の住む沼も茨の徑も、吾が往く駒の蹄に蹴られ……と、亂脈なヒクソスの進軍歌を喚きたてながら、吾と吾が胸を滅多打ちの銅羅と掻き鳴す亂痴氣騒ぎの風を巻き起して此處を先途と突進した。何故なら私は、或る理由で何んな村人に出遇つても具合の悪い状態であつたから、本來ならば最も速やかな風になつてこゝらあたりは駆け抜けてしまはなければならなかつたのである。それ故塚田村でもその村道を選べば斯んな河原づたひをするよりは倍も近道であつたが、餘儀なく彼方の鎮守の森を左手に畦道を傳つて大迂回をしながら凡そ一里に近い弧を描いた。そして次の猪鼻村を目指してゐるのであつた。私は彼方此方の段々畑や野良の中で立働いてゐる人々が、この騒ぎに顔を挙げようとするのを惧れて、人々の點在の有無に従つて、交互に慌しく己れの上體を米つきバツクのやうにゼーロンの蓋の蔭に翻しながら尊大な歌を續けて冷汗を搾つた。この不規則に激烈な運動に伴れて背中の荷物は思はず跳ねあがつて私の後頭部にゴツ

ンと突き當つたり、背骨一杯を息も止まれと云はんばかりにハタきつたりしたが私は、やがて到達すべきビエル・フォンの『森蔭深き城砦の』饗宴の卓を眼蓋の裏に描きながら、この猛烈な苦悶に殉じた。

漸くの思ひで塚田村を無事に通り越すと、今度は、丘といふよりは寧ろ小山と稱すべき段々の麥畑が積み重つて行く坂を登つて、猪鼻村に降りるのである。私は、蠶の中に顔を埋めてその凸凹の激しいジクザクの坂を登りながら、跛馬は平坦な道よりも寧ろ坂道の方が乗手に氣樂を感じしめるといふ一事實を見出したりなどした。丘の頂きに達すると眼下に猪鼻村の景色が一望の下に見降せるが私は、この頂きを恰度巨大な播鉢のふちをたどるように半周して、一氣に村の向ひ側へ飛び越えるつもりであつた。——さうすれば、その先は全く人家の止絶えた森や野や谷間の連続で、常人にとつては難所であるが私には寧ろ氣輕になる筈だつた。然しそれらの行手の徑を想像すると私は最早一刻の猶豫も惜まねばならなかつた。日は既に中天を遠く離れて、紫色のヤグラ獄の空を薄赤く染めてゐた。道は未だ半ばにも達してゐないのだ。私は、懸命にゼーロンを練りながら綱渡りでもしてゐるかのやうな危い心地で播鉢のふちをたどりはじめた。先々の道では何うしてもゼーロンの従順な力を借りなければならぬことを思つて私は鞍から降りて成るべく

静かな獨り歩きを試みせしめた。先に立たせて歩かせて見るとゼーロンの跛足は私に容易ならぬ不安の念を抱かせた。私は水車小屋で貰つて來た水筒の酒をゼーロンの口に注ぎ込んだり、蹄鐵を驗べたり、脚部を酒の雫で濕布したりして行手の徑のための大事をとつた。何故ならこの播鉢を乗り越えて次の谿谷に差しかゝると其處は正しく晝なほ暗い森林地帯で、この森深く逃げ込めば大概の悪人は追手の眼をくらませることが出来るといふ難所である。此處には浮浪者の姿に身を糞した盜賊團の穴居が在つて、私はその團長で、煙草を喫すのにピストルを打つてライターの要にし慣れてゐる拳銃使ひの名人と知り合ひだつたが、私が何の言葉もかけずに都へ立去つた由を聞いて彼は憤激のあまり、私を見出し次第、ボンと一發あいつ奴を煙草の代りに喫してやらすには置かないぞ！といき巻いてゐるとの事であつたから、私はその怖ろしいライターの筒先に見出されぬ間に此處を横断しなければならぬ。それにはゼーロンの渾身の俊足が必要だつたからである。それだけでなくこの森を單獨で往行した人物は古來から記録に残された僅少の名前のみである。それにはこの森を深夜に獨りで踏み超えた豪膽者として坂田金時や新羅三郎の名前が數へられて、今なほその記録を破る冒険者は出現しないと流言されてゐる。通例は森を避けて、猪鼻から、岡見、御岳、飛龍山、唐松、猿山などいふ部落づたひに龍卷村へ向ふのが順當なので

あるが、私は既に塚田村で遠回りをしたばかりでなく、驢馬事件のために思はぬ道草を喰つてしまつた後であるから是非ともこの森を踏み超えなければ途中で日暮に出遇ふ怖れがあるのだ。縦令記録に残つて彼等勇敢なる武士と肩を並べる譽があらうとも、私は夜行には絶対に自信は皆無である。思つただけで身の毛がよだつ——。私は嘗て徒黨を組んでこの森を横断した経験があるから晝間の道には自信はあるが、我むしやらに奥へ奥へと踏み込んで瀧のある崖側に突き當ると、今度は急に馬鹿しく明るい、だが起伏の夥しい芝草に覆はれた野原に出る筈だ。暗鬱な森を息を殺して此處に至つた時には思はず吻ツとして皆々手を執り合つて顔を見合せたことを覚えてゐる。で、夢見心地でこの廣々とした原つばを通り過ぎると、間もなく物凄く薄の大波が蓬々と生ひ繁つた眞に芝居の難所めいた古寺のある荒野に踏み入る筈だ。此處では野火に襲はれて無様な横死を遂げた旅人の話が何件ともなく云ひ傳へられてゐるが、全くあの荒野で野火に圍まれたならば誰しも往生するのが當然であらう。秋から冬にかけては村々は云ふまでもなく森の盜賊團でも火に關する掟が嚴重に守られてゐるのは道理だ。

さてこれらの不氣味な道を通り越しても更に吾々は休む暇もなく、今度は爪先上りの赤土のとても滑り易い陰氣な坂をよちのぼらなければならぬ。この坂は俗に貧乏坂と稱ばれて近在の人

々にこの上もなく厭み嫌はれてゐる。といふのは此の坂に差しかゝると懐中の金袋の重味でさへも荷になつて投げ棄て、しまひたくなる程の困難な病らしい急坂だからである。その上このあたりには晝間でも時とすると狐狸の類ひが出没すると云はれ、その害を被つた惨めな話が無数に流布されてゐる。怖ろしい山徑をたどつた後に此處に差しかゝる頃には誰しも山の陰氣に當てられて貧血症に襲はれるところから斯る迷信的な挿話が傳つてゐるのだらうが、實際私達にしるこの坂に達した時分になると餘程自分ではしつかりしてゐるつもりでも神経が苛々として來て、鐵蔭で小鳥が羽ばたいても思はず慄然として首を縮め今時狐などに化されて堪るものかと力みながらも、一般の風習に従つて慌て、眉毛を唾で沾さぬ者はなかつた。

此處も彼處も私は今日はゼーロンの俊足に頼つて一氣に乗り超える覺悟で、兼て決心の手綱を引き締めて出發して來たのだが、斯うそれからそれへ、とぼく／＼と挿鉢のふちをたどりながら行手の難路に想ひを及ぼすと夥しい危惧の念に打たれずには居れなかつた。折も折、夜來の雨が今朝晴れて、あたりの風景は水々しいきらびやかさに充ち溢れ、さんらんたる陽は實にも豪華な翼を空一杯に伸べ擴げてうらうらとまどろむのであるが、それに引きかへ、普段でさへ日の眼に當ることなしに不斷にじめ／＼と陰險な澁面をつくつて猜疑の眼ばかりを据えてゐるあの憎たらしい

坂道は、如何なにか滑り易い面上に、意地悪な苦笑を湛へながら手ぐすね引いて氣の毒な旅人を待ち構へてゐることだらう！——私は、この坂道と戦ふための用意に自分のとゼーロンのと、一束にした草鞋と一步一步踏み昇る場合の脚場を掘るためのスコップとを鞍の一端に結びつけて来たのであるが、今、それが私の眼の先で、ゼーロンの跛の脚どりに伴れてぶらん／＼と揺れてゐるのを眺めると胸は鉛のやうなもので一杯になつてしまつた。

私はギヤマン模様のやうに澄明な猪鼻村のバナラマを遠く脚下に横眼で見降しながら努めて呑氣さうに馬追唄を歌つて行つた。村の家々から立ち昇る煙りが、をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな——と云ひたげな古歌の風情で陽炎と見境ひもつかず柵引き渡つてゐた。夕暮までには未だ餘程の間がある。斯んなところで夕暮になつたら大事だ——だが私は、霞むともなくうらうらと晴れ渡つた長閑な村の景色を眺めると思はず陶然として、聲高らかに左様な歌を節も悠やかに朗詠した。そして更に眼を凝して眺めると村道を歩いて行く人達の、おゝあれは何處の誰だ——といふことまでがはつきりと解つた。枯草を積んで村境ひの橋を渡つて行く馬車は、經川の「木兎」を買収した牧場主の若者だ。

「彼奴に悟られては面倒だぞ！」

私は呟いで帽子の前を深くした。私は、その「木兎」を單に觀賞の理由で彼から借り受けて置いたところが、同居のRといふ文科大學生が秘かに持出して街のカフェーに遊興費の代償に差押へられてゐる。彼は私を見出し次第責任を問うて私の胸倉を執るに相違ないのだ。公孫樹のある地主の家では井戸換への模様らしく、一團の人々が庭先に集つて目眩しく立働いてゐる様が見える。この一團に氣付かれたら、矢ッ張り私は追跡されるであらう、何故なら地主の家で買収した經川の「鶏」を、私は森の拳銃使ひの手先きとなつて盗み出したことがある。「鶏」の行衛に關してはその後私は知らなかつたが、地主の一派は私に依つてその緒口をつかまうとして私の在所を隈なく諸方に索めてゐるさうだ。——また遙か左手の社の門前にある居酒屋の方へ眼を轉じると、亭主が往來の人をとらへて何か切りと激した身振りで憤激の煙りを擧げてゐるらしい。彼は實に氣短かな男で、經川と私が少しばかりの酒代の負債が出来たところが、いつかその支拂命令に山を越えてアトリエにやつて來た時丁度經川の勞作の「マキノ氏像」が完成して二人でそれを眺めてゐると、

「馬鹿にしてゐる、こんなものをつくりあがつて！」と私達を罵り、思はず疳癩の拳を振りあげてこのブロンズ像の頭を擲りつけて、突き指の災に遇ひ、久しい間吊り腕をしてゐたことがある。

今日も人をとらへて私達の無責任を吹聴してゐるのだらう。

——「おやッ井戸換への連中が此方を見上げて何か囁き合つてゐるぞ！」

私はギョツとして、慌て、顔を反對の山の方へ反^さ向^かけた。漸く、あの森が、丘の下に沼のやうに見えるあたりまで来てゐた。幽婉漂渺として底知れぬ觀である——不圖耳を澄すと、森の底から時折銃聲が聞えた。二三發続け打ちにして、稍暫く經つと、また鳴る。

私は更に不氣味に胸を打たれた。あの團長の喫煙ではないかしら？と思はれたからである。理由を知らぬ村人は獵師の鐵砲の音と思つてゐるが、私は知つてゐる——あの團長は斯様な好天氣の日には却つて身を持ち扱つて、無闇に煙草を喫す習慣である、そんな時には彼は非常に神経質な喫煙家になつて、一發で點火しないと、わけもない充奮に腕が震へて不思議な苛立ちに驅られるのであつた。彼は、一發の許に點火しない煙草は、不吉と稱して悉く踏みちぢつてしまふのである。彼は、それでその日の運命を自ら占ふのだといふ御幣^{ごひ}をかついでゐる。だから最初の一發がうまく點火すると彼は非常な好氣嫌となるが、手もとが狂ひはぢめたとすると制限がなくなる。ガミガミと途方もなく苛立つて続けざまに發砲するのだが、疝癢^{ぜんご}を起せば起すほど腕が震へて埒があかず、終ひには人畜を害ねなければ溜飲^{りゅういん}が下らなくなつてしまふといふ始末の悪い迷

信的潔癖性に富んでゐた。

未だそれと判明したわけではなかつたが、なほも切りに鳴りつゞけてゐる「ライターの音」に注意を向けると私は脚がすくみさうになつた。豫猶さへあれば此處で私は、彼の發火管が種切れになつて何時ものやうに彼がふて寝をしてしまふであらう頃合を待つて、森に踏み入るのであつたが、容易に發砲の音は絶えなかつた。この上此處らでまご／＼してゐれば村の連中に捕縛される恐れがあるばかりでなく、最も怖ろしい夕暮れに迫られる危険がある。——彼は人畜に重傷を負はせる程癡猛ではないが、奇妙な狙ひをもつて、その身近くの空氣を打つて、逃げまどふ標的の狼狽する有様を見物するのが道樂である。おそらく私を見出したならば彼は會心の微笑を洩して最も殘酷な蹴り打ちを浴せ、跳ねては轉びしながら逃げ回るであらう私達の悲惨な姿を現出させて鬱屈を晴すに違ひない。この臆病な驢馬を御し、この稀大な重荷を背つて私は、あのライターの火蓋に身を翻す光景を想像すると、もう額からは冷いあぶら汗が滲み出した。地獄の業火に焦るゝ責苦に相違なかつた。私の脚には忽ち重い鎖がつながれてしまつた。私は揺鉢^{ゆはち}のふちで、何方を向いても眞に進退此處に極まつたの感であつた。私は、然し、勇を鼓して、もう一度悠やかに、をしめども今日をかぎりの——と歌つて、馬を追ひやらうとしたが、徒らに口腔ばかりが歌

のかたちで閉閉するばかりで決してそれに音聲が伴はないではないか。

その時であつた、ゼーロンが再び頑強な驢馬に化して立ちすくんでしまつたのは——。ワーツ！と私は、絶対絶命の悲鳴を擧げて、夢中でゼーロンの尻つべたを力まかせに擲りつけた。

と彼は、面白さうにビョン／＼と跳ねて、ものゝ十間ばかり先へ行つて、再び木馬になつてゐる。恰で私を嘲弄してゐる見たいな格構で、ばんやり此方を振り返つたりしてゐるのだ。

「これだな！」

と私は唸つた。「水車小屋の主が、彼奴は打たなければ歩かね驢馬となつた！」と嘆いたのは——」

私は追ひすがると同時に、鞭を棄て、來たのを後悔しながら、右腕を棍棒に擬して力一杯のスクィングを浴せた。

「さうだ、その意氣だよ、もつと力を込めてやつて御覽！」

ゼーロンはそんな調子で、躍り出すと、行手の松の木の傍まで進んで、また振り返つてゐる。

丁度、加へられた痛痒が消え去ると同時に立ち止まるといふ風であつた。——私は、斯んな聞き分けを忘れた畜生に、以前の親愛を持つて、追憶の歌を鞭にしてゐたことなどを思ひ出すと無性に吐が立つて

「馬鹿！」

と叫びながら、再び追ひつくと、私はもう息も絶え／＼の姿であつたが、阿修羅になつて、左右の腕で處罰はす張りたほした。

ゼーロンの蹄は、浮かれたやうに石ころを蹴つて、また少しの先まで進んだ。

「地獄の驢馬奴！」

私は罵つた。もう兩腕は全然感覺を失つて、肩からぶら下つてゐる鉛筆のやうに能なくなつてゐた。私は地に逼つて、憎いゼーロンに追ひつかうとした、餘りの憤激でもう脚腰が立たなかつたから——。すると、その時、猪鼻村の方角から、にわかになつた、ましい半鐘の音が捲き起つた。

「やあ！奴等は遂々俺の姿を發見して、動員の鐘を打ちはじめたぞ！」

半鐘の音は物凄く唸りをひいて山々に反響し、播鉢の底にとぐるを巻きながら、虚空に向つて濛々と訴へてゐる。——私は、眼を閉ぢて、ふるふる掌に石をつかんだ。私は、唇を噛み

「このゴリアテの馬奴！」

と怒號すると同時に、憐れな右腕を風車のやうに回轉して、コントロールをつけると、ダビデ

がガテのゴリアテを殺した投石具もどきの勢ひで、發止と、ゼーロンを目がけて投げつけた石は、この必死の一投のねらひ違はず、ゼーロンの臀部に、目醒しいデッドボールとなつた。

ゼーロンは後脚で空氣を蹴つて飛び出した。續け打ちにして、駆け抜けてしまはなければならぬ。私は重荷に押しつぶされさうにバクバクと四ツん逼ひになつたまゝ、全速力で追ひ縋ると、もう次第に脚並みをゆるめはぢめたゼーロンの願の下にくゞり抜けていきなり、えいッ！といふ掛け聲と一處に、飛鳥の早業で跳ねあがるや、昔、大力サムソンが驢馬の腮骨を引き抜いた要領に端を發する模範的アツパー・カットの一撃を喰はした。惜しい哉、それは、ゼーロンが首を半鐘の方に振り向けた瞬間で、私の拳は空しく空を突きあげてしまつた。餘勢を喰つて私は、あざみの花の中にもんどりを打つた。然しひるます私は息も突かずに跳びあがると、昔、シヤムガルが牛を殺した直突の腕を、ゼーロンの脇腹目にかけて突きとほした。ゼーロンは、齒をむき出していなゝくと、ハードルを跳び起すみたいなきり方でビョン／＼と波型に飛び出した。私は地をすつて行く手網を拾ふと同時に、二三間の距離を曳きすられながら走つた後に綺麗に鞍の上に飛び乗つた。そして、突撃の陣太鼓のやうに亂脈にその腹を蹴り、鬣に武者振りついて、進め、進め……と連呼した。

漸くゼーロンも必死となつた如く、更に高ハードルを跳び越える通りな格構で、弓なりに播鉢のふちを駆けつけて、いよいよ降り坂の出口にさしかゝつた。――振り返つて見ると村の半鐘は出火の合圖だつたのである。地主の納屋のあたりに火の手があがつて、旗を先頭におしたてた諸方の消防隊が手おしポンプを曳いて、八方から寄り集らうとしてゐる最中だつた。ラツパが鳴る。喚き聲が聞えて来る。折悪く井戸換の最中だつたので、水が使へないので、火消隊の面々は非常に狼狽して、畦道の小川までホースを伸さうとしてゐるらしい。一隊の所有するホースでは長さが不足して、小頭らしい一員が火の見の梯子を昇つて行くと、帽子を振りながら遠方の一隊に向つて

「ホース……ホース……」と叫んでゐるのが聞えた。火の手は納屋から母屋に攻め寄せたらしく、煙りが暫し空に絶えたかと思ふと、間もなく眞白になつて軒の間からむくむくとふき出した。

「ホース……ホース……ゼーロン……」

梯子の男の聲が不圖左う私に聞えた。見るともう、ホースは畦道の小川まで伸びて、それに綱引きのやうに人がたかつてゐる。そして間もなく細い水煙りが軒先を目がけて、ほとばしつてゐた。ポンプをあほる決死の隊員の掛聲が響いて來た。

「俺に應援に來いとでも云ふのかしら？」

……「おうい、ゼーロンの乗手……此方を向いて呉れ、頼みがあるぞ！」

と聞えた。私は、蠶の中に顔を伏せながら薄眼で、そつちを覗いた。——よくよく見ると、梯子の男は、森の、あの喫煙家だつた。巧みに消防隊の一員に身を窺してゐる。そして、彼は半鐘打ちに代つて、鐘を叩いてゐるが、人々は消防に熱中してゐるので、その鐘の打ち方が、彼が輩下の者と連絡をとるための暗號法に依つてゐるのに氣づかうともしない。

鐘の合間を見ては彼は、切りと腕を振つて私を呼んでゐる。また、電報式に叩く鐘の暗號法を判断すると、それは私に、好くお前は歸つて來たな、俺は此頃大變寂しく暮してゐるから、これを機會にしてもう一邊仲間になつて呉れ、先づ今日の獲物を山分けにしようぜ——と通信してゐるのであつた。

「鐘をとり戻したぞ」と彼は告げた。それはある負債の代償に私が地主の家に預けた私の祖先の遺物である。私の老母は、私が斯様なものまで飲酒のために他人手に渡したことを知つて、私に切腹を迫つてゐる。私が若しこの寶物を取り戻して歸宅したならば、永年の勘當を許すといふ書を寄せてゐる。半鐘は更に

「空腹を抱へて詩をつくる愚を止めよ。」
と促した。

私は、あの緋緘の鎧を着て生家に凱旋する様の誘惑にも驅られたが、あの、ぎよろりと丸く視張つてはゐるものゝ凡そ何處にも見當のつかぬといふやうな間拔けな風情の眼と、唇を心持筒型にして苦さを見せた趣が、反つて觀る者の胸に滑稽感を誘ふかのやうな、大きな鹿爪らしい武惡面に逃ひない私の父の肖像畫の懸つてゐる、あの薄暗い書齋に歸つて、呪はれた坐禪を組むことを思ふと暗膽とした。父親の姿に接する時程私は陰氣な虚無感に誘はれる時はない。私は屢々その肖像畫を破棄しようと謀つて、未だに果し得ないのであるが、やがては屹度決行するつもりである。——詩は、饑餓に面した明朗な野からより他に私には生れぬ。

「お前の、その背中の重荷の賣却法を教へてやらうよ。」

と半鐘は信號した。

「それは？」

私は思はず、眼を視張つて、贅意の動いた趣きをコリント式の體操信號法に従つて反問した。

「生家に賣れ、R・マキノの像として——。寸分違はぬから疑ふ者はなからう。」

Rといふのは十年も前に亡くなつたあの肖像畫の當人である。私の放浪も十年目である。
「なるほど！」

名案だ！ と私は氣づいたが、同時に得も云はれぬ怖ろしい因果の稻妻に打たれて、私はおそらく自分のと間違へたのであらう。ゼーロンの耳を力一杯つかんだ。そして鞍から轉落した。
「走れ！」

と私は叫んだ。

私は、ゼーロンの臀部を敵に激烈な必死の拳闘を續けて、降り坂に差かゝつた。驢馬の尻尾は水車のしぶきのやうに私の顔に降りかゝつた。その隙間からチラチラと行手を眺めると、國境の大山脈は眞紫に冴えて、ヤグラ獄の頂きが僅かに茜色に光つてゐた。山裾一面の森は森閑として、もう薄暗く、突き飛ばされる毎にバツタのやうに驚いて、ハードル跳びを續けて行く奇體な跛馬と、その残酷な御者との直下の眼下から深潭のやうに廣漠とした夢魔を湛へてゐた。——背中の像が生を得て、そしてまた、あの肖像畫の主が空に抜け出て、沼を渡り、山へ飛び、翻つては私の腕を執り、ゼーロンが後脚で立ち上り——宙に舞ひ、霞みを喰ひながら、變挺な身振りで面白さうにロココ風の「四人組の踊り」を踊つてゐた。綺麗な眺めだ！ と思つて私は震へながら壯嚴

な景色に見惚れた。

半鐘が微かに聞えてゐたが、もう意味の判別はつかかなかつた。然しそれは私達のカドリールの絶えざる伴奏になつてゐた。

「こいつは——」

不圖私は吾にかへつて、背中の重荷を、子守りがするやうに急にゆすりあげながら呟いた。——
「鬼涙沼の底へ投げ込んでしまふより他に手段はないぞ。」

絶え間もない突撃をゼーロンの臀部に加へながら、沼の底に似た森にさしかゝつた。樹々の梢が水底の藻に見え、「水面」を仰ぐと塹へ歸る鳥の群が魚に見え、ゼーロンにも私にも鯉があるらしかつた。——それにしても重荷のために背中の皮膚が破れて、ビリビリと焼かるゝやうに水がしみる！ 血でも流れてゐはしないか？ と私は思つた。

（附記——經川楳雄作「マキノ氏像」は現在相州足柄上郡塚原村古屋佐太郎の所蔵に任してある。彼の從來の作品目録中の代表作の由であり、彼自身は最早ブロンズにさへなつてゐれば沼の底へ保存されるも厭はぬと云つてゐたが、友人達の發企で斯く保存することとなり、希望者の觀覽には隨時提供されてゐる。一九二九年度の日本美術院の目録を開けば寫眞も掲載されてゐる由である。經川は今年ゼーロンの像を「ゼーロン」と題して作成中のことである。私は身輕な極めて貧しい放浪生活に在る。）

城ヶ島の春

城ヶ島といふと、たゞちに北原白秋さんを連想する——といふより白秋さんから、わたしは城ヶ島を知り、恰度酒を飲みはじめた十何年前のころ、わたしたちは酔ひさへすれば、城ヶ島の雨を合唱したものである。白秋さんが、三崎から小田原へ移つて何年か経ち、恰も、千鳥の唄をつくられて間もないころではなかつたらうか。

わたしは白秋さんが、かなりながく住んでをられた小田原の天神山といふ明るい孟宗竹と芝の小山に營まれた木兎の家を、引上げられる一二年前に何か所用があつて東京からお訪ねしたのを初めに、わづかの間であつたが、どうもそれが悉く春の季節で、慾深和尚が笥を盗みに現れる影法師を、木兎の家の窓から朧月を透して見物したことや、おやまあ、こんなところにもツクシンボウの芽が出てゐるぞ、ほらまた、こゝにも——と水々しい朝あけの芝を、ゆうべの踊りをおもひ出す足どりで踏んでゐた白秋さんが、何か餘程貴重なものでも発見したやうに驚嘆の聲をもつ

て指さし、その度毎に空を仰いでわらはれてゐたのをいつも今ごろになつて、どこからともなく貝の音色を感じるやうな微風に吹かれると、突拍子もなくおもひ出すのである。

そのころ白秋さんの詩の一つに、凡そ二三歳であつた御子息が汽車遊びに耽つてゐらるゝ光景をうたはれたものゝなかに——たとへば御子息は玩具の汽車をおしながら、見渡す限りの何も彼も、ツクシンボウも木兎さんもお月さんも和尚さんも、そして父さんも母さんも……みんな、みんな、乗んの乗んの——と汽車の客となし、汽車は大層な汽笛の音も高らかに、ポッポ／＼と慕進して行く素晴らしさを、うたはれたものだつたとおもふが、たしかそのなかに、マキノさんも乗んの、乗んの——といふ一句があつたのである。四角張つてゐたかのやうな何處かの青年が、やがて海の上に月が出る時刻になると、忽ちマリオネットのやうに酔つ拂ひ、厭味な喉を振りしぼつて、ほろ／＼、ほろ／＼の唄などをうたひ出した容子が、魔揚な機關手の眼に餘程異様と映つたのであらう。

——わたしの、小田原にゐる友達彫刻家である、何處か微かに白秋さんに似てゐるやうな牧雅雄君は、今でも陶然とする度毎には、おゝ、ほろ／＼、ほろ／＼、春はほろ／＼けて草葺の——といふ唄が名人で、わたしは、その唄のうたひ振りを餘程以前から、彼に習つてゐたのであるが、牧

君がうたふと何んな然深な酔拂ひでも、根生曲りの和尚さんでも、みんな思はず、ほろ／＼——として、丁字の花の香りに氣づき、煙つた月を見あげずには居なかつたけれど、では小生が——とわたしがあとをつづけようとする、そんな人は居る筈もないのであるが例へば單に修辭句としての戀人でさへもが、疎毛をふるつて夢から醒めるのが常習なのである。

それはさうと、わたしは當今、不圖した機會から、思ひも寄らぬ三崎の町に、たつたひとりに住むことゝなり、誰の疎毛を憂ふる心配もなく、ほろ／＼——の唄をおもひ出し、春の波に溺れようとしてゐるのである。島への渡し舟は、片道二錢で、夜は十時限りである。

「あゝ、また乗り遅れたか！」

わたしは城ヶ島の居酒屋で、波のひゞきに聴き惚れ、燈台のまたたきにうつゝを抜かしてゐるうちに、不圖時刻を知つて、やけの唸り聲を發するのが屢々だつた。

雨は降ることもなく、壘々たる磯の起伏に、たゞ見る一面なるひかりがあふれて、風來の壯子

のふかす頁の煙りが、ゆらゆらとして陽炎と見えるばかりであつた。わたしは、水際の岩の日溜りに仰向けとなつて、ぶんぶんとする鳥酒の宿醉を醒したがつて、空ばかりを仰いでみると、いまにも風船のやうにふわふわと浮びあがりさうな長閑な天と湯氣のやうな陽炎を身のまはりに深々と感ずるのであつた。

ゆうべ、島の李太白が——一體、お前は何處から現れた何といふ男だ？と訊ね、わたしは單なる病氣の靜養者だと答へると大層酒を飲む、變てこな病人だ、お前がそれで病人なら俺だつて大病人だ、と疑つて、あはゝとわらつた。わたしは何んな場合にも、嘘や酒落はいへぬたちであるが、今度訊ねられたら、俺は大河今藏といふのだ——とでもしやれないやうな、どんな類ひのものであらうと島におくる夜といふものを全く知らないわたしは、何か芝居泌みたやうな、そして胸のわくわくするやうな孤獨の壯絶感を覚えるのであつた。そんな寂しさから、獨歩作「酒中日記」の主人公の名前を思ひ浮べたものらしい。

その岩の、わたしの足もとの水は二間ぐらゐの幅で磯の中に深く流れこんでゐる入江であつた。向ふ側の水際に小さな鷗が一羽やすんでゐたが、さつきからわたしはゆうべのことなどをおもひ出して、あゝッ／＼と大きな溜息を放つたり、鴉のやうなわらひ聲を擧げて、石など水の上に出して、

投げたのに鷗は一向に動ずる氣色もなく、凝つとまどろんでゐるのであつた。

どうしたのか知ら——とわたしはいぶかつて、膝までもない水を涉つて行つた。澄みとほつた水はゆたかに温むで、蹠に感じる岩肌が温泉の底のやうであつた。——腕を伸して抱きあげたが、鳥は眼を閉ぢて、驚く様子もなく、わたしのふところに移つた。大方、夕暮時の燈台のひかりに狂ひ來つて、火窓に衝突し、翼の關節を挫いたに相違ない——とわたしは憐れむで、靜かに翼の工合を驗べると、右の翼だけは扇のやうに一杯にひろげて、わたしの胸や顔をたゞいたが、一方の翼は震へるばかりで開かなかつた。水に浮べて見ると、まつすぐに浮いたが、走らうともしなかつた。

わたしは、三崎に借りてある自分の部屋に、飛べる日まで飼つて置かうとおもつた。わたしは微かな亢奮を覚えてゐた。やはり、いつもひとりの部屋といふものは、好きこのんで心がらといふものゝ、とりとめもないものであり、傷ついた鳥に宿を與へるのかとおもふと、餘程嬉しくやがて、この鳥が翼も癒えて、獨酌家の窓から飛び立つて行つた後のことまでが想像された。——油壺の水族館へ赴くと、わたしはいつも二尺四方ぐらゐの小さな水槽のなかで、わたしの小指ほどに、あんなに小さいくせに、フイゴの筒のやうに憂鬱さうに口を突らせ、くるりと尻尾を卷

いて偉さうに、海藻の間を浮いたり沈んだりしてゐる、何だかそれにしても餘り姿が小さくてお氣の毒な様な、あの奇天烈な海ノ馬ウマノシマと睨めくらべをするのが習ひであつたが、いまから既にこの鳥が飛び去つて行く後をおもふと、四角の部屋の一とりの自分の顔つきが、見る間に "sea horse" のやうに偉さうになつて來さうだつた。雛鳥の鼓動はわたしの胸にチクタクと鳴り、島の眞晝は底抜けの靜寂さに、明る過ぎるひかりばかりがさんさんたる雨であつた。

「大層なものを獲つたね。生きてゐるぢやないか……」

渡し場の船頭がなれ／＼しく言葉をかけ、どうやら前の晩の酒場の友らしいのであるが、わたしには一向に見覚えもないのであつた。浚渫船のクレインの響きが港一杯に鳴り渡り、目醒ましい水煙をあげてゐた。彼は、おそらく前の晩の容子と、あまり違つて白々し氣なわたしを妙に感じたらしく、折角はなしかけた腰を折られて、水煙の方へ眼を反らせながら、せつせつと船をおしてゐた。鷗は、わたしのふところから首を出して、空を見あげてゐた。——わたしは、三崎の宿

の、親戚に、島の夜を過ごすのが常だつた。大きな網や舟を持つてゐる漁家で、どんなにわたしが困つても、宿賃をとらうとしなかつた。そのくせわたしは、酔ふと遠慮もなくなつて、また來たぞ／＼などと、おそらくタツノオトシゴが口を利いたならば、そんな聲でもあるかのやうな、ぶつきら棒な、横柄な調子で鳴り込むのであつたが、その聲の強さうなのに似合はず、見るからにわたしの姿は相撲が弱さうであるためか、反感などを抱くけしきもなく、専ら珍客としてもてなすのであつた。

どうやらわたしは、島の春に有頂天であるかも知れぬのであつたが、白々と醒めると海原の蒼さが眼にも滲み、とう／＼半島の出づ鼻までも流れ住んで最早地上の空想の種も盡き、沖を走る舟の上にも夢を乗せるより他には灯影もまた、かぬかといふやうなおもひに憑かれて、燈台が光り出す時刻にもなるとふら／＼と渡し舟に乗つて、島へ渡る夜が度重なつてゐた。

「ところが、たうとう鳥をつかまへたといふわけさ。當分は、この鳥の介抱で、夜の眼も眠らないかも知れないんだよ。」

こんどはわたしは、船頭にはなしかけたのであつた。彼は、聞えぬ様子であつたが、やがて、「夏まで三崎に居るつもりかね？」

と訊ねたりした。

「多分、居ないだらう……」

「夏になると、着物をあたまにしばりつけて、男どもは舟がなくなると、こゝの間ぐらひは泳いで渡るんだよ。」

そんな事をはなしてゐるうちに、間もなく渡し舟は三崎の岸に着きさうになつたので、わたしは急に思ひだして、ふところをさぐつたのであつたが、ふところのものは煙草も手帳も双眼鏡も、その他のものもみんな紛失してゐて、鷗が眠つてゐるだけだつた。手帳と云つても、到底他人に見せられぬたぐひの歌のやうなものが誌してあるだけであるし、双眼鏡といふと少々物々しいが、新しいけれど値段さへ忘れてゐる程の最低價のしる物だし、何ひとつ惜しいとおもふものもなかつた。

わたしは、やをら立ちあがると、オツに齒切れの好いやうな調子で、頤をしやくつて、

「おい、君、借りとくぜ。」

と二錢の渡し賃のことをいつた。すると船頭は、通り矢ノ岬の方を眺めて、船を繰つてゐるまゝ、「好いとも——好いともヨウ！」

と叫んだ。わたしは近頃飲んだあとなどに、折々あゝいふ科白を吐くことには慣れてゐるが、斯んなに悠々たる許容の應へを得たのは珍しいと感心して、船頭と同じ方角の奇岩から、春の海原のうつらうつらと霞んでゐる遠方などを見渡した。

鬼
の
門

『ヒストリイ・オヴ・デビルズ』

『デビルズ・デイクシヨナリイ』

『クラシカル・マヂシアンズ・ボキアブラリイ・ブック』

私は、その頃右の如き表題の辭書を繙きながら

「クリステンダム物語」

「ドクトル・ファウスタスの巡遊記」

「ジークフリード遠征録」

「セント・ジョージ快學錄」

その他の、これに類する種々の物語を耽讀した。これらの辭書を繙すと、大概の物語や傳説の中

に現れる様々な怪物や魔法使ひの術語や素性が明瞭となつたので、何んなに素晴らしい化物が現はれても、そいつを語源的に験べたり、魔法使ひの歴史上に有名な言葉などを辭書の中の分類表から律して見ると、怪物と闘ふ勇者の勇敢さに單なる讀者として手に汗を握るばかりでない——別様の興味を誘はれるのであつた。

例へば、セント・ジョージが誘惑の森で、青舌の Witch の甘言に陥る場面などでも、エルムといふこの Witch の名前を「デビルズ・デイクシヨナリイ」のEの項で探して見ると、(大意を和譯して述べるが)エルムは Witch と Wizard の不義の子にして、生れながらに呪はれたる自らの命を自ら深く呪ひつゝ、善良なる旅人を己れが永遠の呪ひの犠牲にして底無しに淵に誘ひ込むことをもつて本性となす者なれど、その名稱の依つて來るところは、エルムが旅人をさし招く態は、恰も witch-elms-tree の條々たる垂れ枝が微風に吹かれて打ちなびく姿から聯想されて、海賊期のアングル族に擬人化されたものなり。またファウスタス博士の獨言

「自然の祕密を探究せんが爲には、地獄を訪れなければならない。地獄を訪れんが爲には悪魔を俟たねばならぬ。悪魔を俟たんが爲には魔術の力に依らねばならぬ。」

この有名句を「マヂシアンズ・ボキアブラリイ」で探して見ると、一五四〇年版ヨハンガスト

なる一神學者の手記に

「余がクラコウ大學に於て教鞭を執りし頃、クリンドリング生れの一不良學生に憐まされしが、彼は常々學業を疎かにして魔術にのみ現を抜かし、遂に放校の憂き目に遇ひしが、去るに望みて彼の言葉を殘したるなり。後にこの言葉を友人ファウスタスに告げると、彼は、至言なり……と膝を打ち、聖朝も待たずに放浪の旅に出發せり。」

などゝもあつた。

「メフィストフェレス——(メ)は、ラテン語の *malus* に相當するギリシヤ語にて、否定の義、(フェイス)は同じく、光の義、(フェレス)は、愛の義——即ち、光りと愛を打ち消す者——悪魔の同意語なり。メフィストフェレスなる名稱は、十六世紀後半に出版されたるヨハネス・スバイスなる傳奇作家の書中に初めて登用されたる者なり。」

その頃私は、地圖の上では世界各国足跡の至らざるところとてはない大旅行家であつたが、日々の生活と云へば、どんな類ひの地圖にも省略されてゐる底の凡そ小さな山峽の部落で、町へ赴く乗合馬車の切符すらも容易には購ふことも出来ないやうな不自由な境涯で、まことに「箱のやうな小世界」の住人であつた。

さうして私は、村のあばらやの一角で花やかな長剣を振り翳しながら天國や地獄の夢を澆々と追ひまくつてゐるうちは甲斐々々しかつたが、間もなく私の夢を鷲毛の軽さで吹き飛ばす有様の怖ろしい冬が訪れた。

三方を屏風のやうな丘に囲まれた私達の村は、秋口から初冬へかけての南風が襲ひはじめると、どつとばかりに津波の勢ひで村外れの河口から吹きあげてくる速風は周囲の丘に行手をさへぎられて、唸りを擧げて天に押し、壯烈な風巻を巻き起すのが常であつた。おそらく、この龍巻村といふ名稱は、この冬の凄まじい風巻のおもむきに起因したに相違ない。村人は冬の近くになると夫々の家の屋上に一抱えもあらう程の石ころを河原から運んで、屋根を吹き飛ばされぬ爲の用意に忙しかつた。河原から村宿へかけての一筋の街道に長蛇の列をつくつて、悲壯な歌の聲をそるへながら村人が總出の立働きの光景を、遙かに窓から見渡してゐると、ピラミッドを造營するエチプト人の有様などが髣髴された。

本来ならば私も早速この勞働に加はるべきであつたが、私はむしろその家が大きな風巻の翼に吞まれて、木の葉のやうに奈邊の空へなりと吹き飛んでしまふ目醒しさを希望してゐたから、頑として机に凭つては「デビルズ・デイクシヨナリイ」を繰り展げてゐるのであつたが――。

屋根に鳴る人の脚音で、私は眼を醒した。クリステンダム物語に没頭して、明方も忘れた私は戸閉りをしたまゝの部屋の中で、ランプの光りに照らされながら、椅子に凭つたまゝの姿で思はぬうたゝ寝に襲はれてゐたところであつた。――物語は、佳境の頂上で、勇士セント・アンドリュウが、キクロウプスの館に幽閉された美姫ヘレナを救け出す爲に翼のあるゼブラに打ちまたがつて、城内深く躍り込んだ三色版の挿繪のある頁が開かれて、私はその上に突つ伏して涎を垂らしてゐた時であつた。そして傍らの「ヒストリイ・オヴ・デビルズ」の辭書は

「キクロウプス――古代ギリシヤ、ユーリビデスの悲歌に、はじめて引用されたる怪物の名稱なるも、起原は、地中海に出没せるカレドニアの海賊の間に信仰されたるデモーネンの謂なり。この怪物は、巨大な頭の肩間に向日葵のやうな爛々たる一個の目玉を有し、良民にはその姿を識別すること能はざれども、海賊のためには、その眼珠の輝きが道知る術の役立をなすと信ぜられ、當時の海賊船の一角にはキクロウプスの偶像が恭々しく飾られたりと傳ふ。嗜好物は、(デーモン・ネクター)と稱ばるゝ酒なり。中世紀前半頃より、陸に城を構へ、往來の旅人を拉して、屋上からその生血を吸ひて餌食となせり。されど、デーモン・ネクターを發見して、旅人若しこれを飲用するならば、常に見えざる當の怪物の姿を容易に發見し得べし――とはセラピスの傳説

に残るところなり。」

といふ記述の個所が、赤鉛筆でアングア・ラインを引かれて開かれてあつた。

正しく、アンドリウはネクターの在所をヘレナから教へられて、羊角型の酒器の口からこれを飲み降すと、剣を引き抜いて樽を昇つて行つた……

あゝ私は、夜晝の差別も忘れた鬱屈のランプの影で、妄想の捕虜となりつゞけてゐた浅間しい私は、遂に、ラア・マンチアの工夫に富める紳士を嗤ふことの出来ない「勇敢なる騎士」であつた。

私は人に秘れて、これらの書物を繕く夜々、多少なりとも、あれらの荒唐無稽を在り得べき夢として身邊に感じ度い念願から、壁には長劍の十字を切つて飾りとなし、身には銀紙を貼つた手製の鎧をつけて、燭燈の光りを頼りに、想ひをいとも「花やかなる武士道」の世界に馳せつゞけてゐた破産者であつた。

屋根に人の脚音を聞いて、思はず顔を擧げた私は、震へ聲で

「現れたな！」

と唸ると、素早く壁から劍を執り降して、吃と天井を睨めた。最早私は、アンドリウの心を、

そのまゝ心として全身の血潮を逆上させてゐたから、即座にネクターを求めて、一つ目入道の正體を見とゞけてしまはずには居られなかつた。

「ヘレナ——ヘレナ——イオラスの島から、ゼブラの風に乗つて到着した御身の従順なる下僕アンドリウが……」

勿論應へる聲のあらう筈もなかつたが、あちこちの扉の隙間から洩れる陽の箭が縦横に薄闇の部屋うちを走つて、翼のある斑馬が私の傍らに侍してゐると見え、また陽の道がさへぎられて濛々と煙りが巻いてゐる見たいな廊下の行手には、燭臺を翳しておづ／＼と私をさしまねいてゐるヘレナの幻が揺影してゐるのであつた。私は、宙を踏む心地で一條の光りを頼つて、屋根裏の納屋に忍んで行くと、三本の酒徳利が卓子の上で天井裏から洩れる可細い逆光線に半面を照らされてゐるのを發見すると、思はずその下に膝を突いて胸先に嚴かな感謝の十字を切つた。

（私の妻は、都の空で私がこれらの家屋敷を賣却して獲得するであらう金袋を引つさげて訪れるのを待ち焦れてゐた。このだゞつ廣いがらん洞には私の他に同居の者はRとのZ二人の若い伯樂だつたが、彼等は近頃急に酒嫌ひになつた私に遠慮して斯様な場所で密かな酒盛を開いてゐたと見えるが、この時は私はそんな推察を回らせたわけではない。）

二本の酒壺は悉く空虚であつたが、残りの一本を怖る／＼ゆすつて見ると、重い液體の揺れる手應へがあつたので——アンドリウは兩膝を床に突くと、セラピス教義の儀禮にもとづいて兩の掌を胸の上に重ねたまゝ、ヘレナが傾ける銀のジールランドからネクタアの雫を喉に享けた……

——と物語にある、そのまゝの意氣で私は、ヘレナのそれに假想した片手を伸して、素朴な型の貧棒徳利を執りあげると、高く宙に傾けて、こん／＼とその滴りを貪つた。

「他人の手に渡るときまつたら、屋根おさへにも出ないなんて、あの先生の御了見のほども仲々どうもおそれ入つたものぢやないか。」

「云ふなよ。こちとらは、どうせ音無さんに雇はれた人足同様……」

「あつはつ……何てまあ好い天氣が続くことだらう。こんな空にも、やがてはあんな怖ろしい龍巻が起るなどは考へられもしないぢやないか。」

「去年の冬だつたな。龍巻に飛ばされた仁王門のおさへ石が、音無の牡馬を殺したのは——」

「さう／＼——馬でなくつて、一層のこと彼處の亭主の頭にも落ちたら好かつたのに！ なんて云ふ噂が立つたがな。」

「一體、あの亭主の慾の深さは底なしだといふ話ぢやないか。」

「考へて見れば下の先生も氣の毒なものさ、音無の親爺が、とうの昔に手を回して書き換へから登記までも濟ませてゐるといふのも知らないで、屋敷の賣れるのを待つてゐるなんて、阿呆にも程があるといふものだ。」

屋根から響いて來る高らかな會話が、屋根裏の納屋で鉢を構へて立ちあがらうとしてゐるセラピス信者の耳に聞えた。

「おい／＼、聲が高いぞ——噂をすれば影とやら——とは、まつたくだよ。音無の慾深が、河堤の上から此方を見あげてゐるぜ。」

「ちよつ、俺達にばかり働かせやがつて手前えは、あんな懐ろ手で……おや／＼、指折りをして何か勘定をしてゐる態だよ——土藏つき、馬つき、そして田畑つきのこの屋敷を、又賣りにしたら幾ら儲かることだらうとでもいふ魂膽か。」

「どうだい、あの山高帽子をアミダに被つて頬つべを突つぶくらせてゐる憎たらしい面つきと云つたら……」

「狎々親爺奴が！ あいつが近頃、八郎丸のお妙坊を手込めにしようとかくらんで……」
と聞きかけた時私の口腔からは、えんえんたる焰が吐き出たと思はれた。

私は、納屋の天窓の細引きを力任せにグイと引いた。——青空が、赫つと私の頭上に展けた。陽りの圓筒が颯つと私の體を覆ふた時、私は

「何だと——あの畜生奴が、お妙、お妙、お妙……俺の一番仲の善い、貧棒な漁師の八郎丸——あの善良な八郎丸の妹の……」

と叫びながら、夢中で綱をよぢ登りはじめてゐた。(私は、はじめ、たゞこの薄暗い納屋の中で、息苦しい孤獨の演技に耽りながら、あはよくば、聲だけ立て、屋上のキクロウブスを驚ろかせてやらう——位ゐのつもりだつたのに！)

無我夢中となつた私は、あられもない鎧のいでたちで、まぶしく陽りの満ち溢れてゐる屋上の白日の中に踊り出てしまつた。

鬼瓦の棟に烏のやうに腰を据ゑて、石ならべの仕事に耽つてゐた二人の男は、アツ！ と叫んだかと思ふと、その瞬間、もう姿は消えてゐた。裏側の軒下を流れる悠やかな河のあたりに、巨大な物體が轉落した音を私は聞いたが、その時私は瓦止めの作業用で運びあげられてゐた鐵瓶大の土塊の一つを握つてゐたものと見える。そして、そんな騒ぎは知らずに、大方二人の男の働き振りに怠惰の模様でも窺はれたのを責めでもするために、梯子を昇つて來た音無の山高帽子が、

ぬつと軒の上に現はれたかと見た刹那、私の手から飛んだ濡りを含んだ土塊が、彼の面上に眞正面から衝突してゐた。

そして私は、表の庭の泉水の上に巨大な怪魚がはねたかと思はれるような音を耳にしたが、即座に天窓の口から納屋に飛び降りると、綱を引いて暗闇とした。——凡そ、その活劇は一分間に足りぬ時間の中で遂行されたのであつた。——私は、早變りもどきの慌しさで、脱いだ紙製の鎧を米俵の向ふ側に丸め込むがいなや、梯子段から廊下を一足飛びに飛んで、自分の部屋へとつて返すと、扉に鍵を降して、ベッドにもぐり込んでしまつた。

……「寒いぞ、凍えてしまふわい、着物を借して呉れ、着物を……」

池の方角から悲愴な聲が響いた。

ではやつぱり夢ではなかつたのか！

私は、徐ろに首を舉げて呟いた。——ランプが燭つてゐる！ 櫓に駈け登らうと身構へたアンドリウが、屹つと天井の一方を睨んだ挿繪の頁が、鈍い燈火の光りを浴びてゐる。……不圖、眼を舉げた時私は、今のあの騒ぎは夢だつたか！ と思つたが——。

「お、寒さで言葉も凍りさうだ。誰か來て呉れ、お、怖ろしい風が吹いて來る氣合ひだ。救

けて呉れ……」

戸外の聲は絶え入りさうな悲鳴と變つて來た。それよりも私は、あれらの事ごとが夢であつたか何うかといふ疑問が、胸の底を冷たく青蒼めさせて行つた。私は、自分の行動に自信を失ひ、白日の陽を浴びることに涯しもない不安を覺えて今にも迷妄の吹雪に昏倒しさうな、そして見る／＼うちに蠟燭のやうな我身が煙りと化して行く想ひに引きずられて行つたが、救ひを求めたる凄惨な聲が益々高く低く縷々として私の耳朶に絡まりついて來る空怖ろしさに堪へられなくなつて、凡そ、もう、さつきの、勇敢な騎士とは裏はらの臆病な幽靈のやうな脚どりで、扉をおし、そして

「喧嘩でも起つたのかな？」

と、わざと眠さうに眼をこすりながら、雨戸をあけた。屋上の格闘が若しも夢でなかつたとすると、悲鳴に事寄せて私を誘ひ出して、復讐の水難炊では喰はさうといふ敵の魂膽かも知れないから、先づ、白々しく眠つてゐた素振りをして相手の様子を見究めた後に、新しい覺悟を決めなければならぬ——と留意したのである。

また私は、噂に聞く「吹雪男」の出現かしら？ と氣づくくと、にわかには體中に激しい胸震ひと

齒の根も合はない願はたきが卷き起つて來た。

——昔から、この村には怖ろしい「吹雪男」の傳説が流布されてゐた。それは恰度雪深い國の「雪女」の迷信に比ぶべき話で、風卷の季節になると、森蔭や河原のふち、或ひは池のほとりに烏天狗に似た大男が何處からともなくぬつと立現れて、人を呼び、生血を吸つて、骨はばら／＼にして風に飛ばしてしまふのである。だから、この季節が近づくと人々は、この上もなく、この吹雪の精の迷信を怖れて、晝間といへども獨り歩きをする者とはなかつた。吹雪の精は、主に孤獨の男をひつとらへるのだ。

然し、今時はもうそんな愚かな傳説を信じるやうな愚民は次第に影をひそめて、寧ろ滑稽な話として冬の夜の爐端の笑ひ草となつてゐたが、不圖私は總身に粟立ちを覺ゆる位ゐの恐怖に襲はれたのであつた。——何處の家でも、冬が近づくと、門先に鎮西八郎爲朝の家と筆太に誌した表札と、平家蟹の甲羅を荒武者の顔と擬して、眼口を描いて掲げるのが慣ひであつた。云ふまでもなく、それは「吹雪男」に對する威嚇の表象である。村うちで、その表札と假面を掲げぬ家は、私の住居一軒だけであつた。突然、そんなことも、私の頭に畏怖の稻妻を閃めかせた。

眞晝間かと思つてゐたのに、外は徐ろに搖れはじめる氣合ひの風を湛へた黄昏時であるのに、

私は驚いた。

……それにしても、さっきの騒ぎは夢であつて呉れたならば、この不安の度も減するであらうが——と私は念じながら、聲の方をすかして見ると、池のふちに眞つ黒い男が、ぬつと立つて、震へてゐた。そして、Witch-elmの枝のやうに力無げな腕を風に吹かせながら、頻りと人をさしまねいてゐるではないか。

(死ぬ覺悟だ！)

さう呟くと私は、自分ながら不自然氣に見える落つきが涌いて来て、思はず脚もとにとり落ちてあつたアメリカ土人のアツシユの投槍を拾ひあげると、

「穂先は潰れてゐるから當つても死にはしないが、打身の傷手を興へて氣絶させるには充分の力がこもつてゐるぞ！」

と悸した。

「化物ぢやない、盜賊でもない、私は音無の大盡だよ——突風に外套の翼を煽られて、池に落ちたこの家の持主だよ。」

屋根おさへの石運びを、手下の者に命じたところ、ほんの三つばかりの石を運びあげたかと思

ふと彼等はもう怠けはじめて、屋根の上で賭博をはじめてゐるではないか、三つの石でこの家根が壓へられるものか——と思ふと自分は大變心配になつたので、とるものもとりあへず駈けつけたままでは好かつたのだが、梯子を昇り、いざ奴等に罵りを浴せようとして、最初の聲を一つ放つたかと思ふと、あまりの亢奮の極自分は上向態にもんどりを打つて池の上に轉落したのである……

「憎い二人も私の姿を見るや大きに慌て、裏の川へ飛び込んだのは胸がすいたが、奴等は私の姿を見出した時、仕事をしてゐる風を装はうとして突然に夫々一つ宛の石を持ちあげて——そのまゝ、石もろともに遁走してしまつたのだ。だから、もう屋根には石は一つより残つてゐない筈だ。——あゝ、案ぜられる、風が出て來さうではないか、屋根が飛んでしまつたら私は、死ぬよりも辛いぞ！」

と音無は震へながら煩悶した。

(では、やはり、あれは夢だつたか)

未だ半信半疑だつたが、私は幾分の自信を盛り返したので

「で、お前さんが今晚は重石の代りとなつて屋根の上で夜を明さうとでも云ふ考へなかね。」

と氣味好く唸つてやつた。

すると音無は、生真面目に深く黙頭いて

「充分の日給を支拂ふから、お前さんと、RとZと三人そろつて、今晚中屋根に寝て呉れないかね。吹くか吹かぬか、はかりもされない風の爲に夜番を雇ふなどは、びつこの馬の札を買つて大穴をねらふ道樂氣だが、何としても私は十五人の夜番を屋根へ上げて置かぬ限りは、到底枕を高くして眠れさうもないのだよ。」

と苦悶を續けるので、私は、そつと南の空を窺ふと、卵色に晴れかゝつた空の裾に、鱗雲の片々が見えたから、安心して

「場合によつては引き受けても好いぜ。」

と答へた。——「同勢も此方で集めようから、給金をおいて行かないか。」

私の部屋には着換への着物もなかつたのでシャツばかりを幾つも私が雑巾のやうにほうり出すと音無は、夢中でそれを重ね着して

「未だ寒さうだから、一層あれを着て行かうか——」

と、柄にもなく赤い顔をして部屋の隅の鎧櫃を指差した。それは大昔の歩兵であつた私の祖先

が使用したものの由で、私は幼年の頃、その具足を着た祖先が何々の合戦に出陣したといふ紀念日が來ると、恭々しく人型をつくつてそれが床の間に飾られて、祖父の先達で私達はその前にひれ伏させられた寶物だつたが、其處此處に散亂してゐる奇怪な書物の數々と共に、憂鬱病患者の私にとつては生活上の糧にも等しく、一刻たりとも我身の傍らから切り離すわけにはゆかぬ代物であつた。

「駄目だ。こいつだけは貸すわけにはゆかないぞ。」

言下に拒絶すると、私は血相を變へて鎧櫃に抱きついた。

思ひ出すまでもない——それは昨夜であつたか、十日も前であつたか、また幾度び繰り返されたことか、すっかり晝夜の差別を忘れてゐる私には見當もつかぬのであるが、いつも眠らぬ眞夜中のことである。

風が吹いてゐる——點けてもくランプの灯は吹き消されて、机の上に開かれてゐる書物は、隙間から忍び込む風に翻弄されて暗闇の中でハラ／＼と鳴つてゐる。——私は闇を視詰めて頬杖を突いてゐるのだ。

止め度もない悒鬱と不安の吹雪が、私の魂を寄る邊もない地獄の底へ吹き飛す勢ひで、颯々と

吹きまくつてゐるばかりなのである。あらゆる自信と感覚といふが如きものが、全く影を潜めて、私の五體は今にも木の葉のやうにバラ／＼となつて、人知れぬ虚空に飛び散るばかりなのである。何處に何う力の容れやうもない私は、見る／＼うちに肉體が澄明となつて、幽靈に化してしまひさうな寒さに襲はれて、ぶる／＼と震へ出すのだ。例へれば音無の親爺が、風卷に吹き飛ばされる屋根の姿の、被害妄想に苛まれてこの如く激しい恐怖性神経衰弱に驅られてゐる有様に、私のそれも等しいもので、私はやがて暴風の海上に弄ばれる小舟の中の人のやうに狂ひ出して、机に、ベッドに、柱に——と手あたり次第に獅噛みついて、ゑんゑんと救けを呼んだ。

「誰か来て呉れ、吹き飛ばされる／＼！」

私は悲鳴を擧げながら虚空をつかんで床に轉倒すると、屋根おさへの石を想像しながら、あれらの重量たつぶりの辭書や物語本の數々を、胸となく腹となく顔となく——ありつたけを五體の上に積みあげて、凝つとその下で息を殺してゐるのだが、龍卷の唸りが轟々と増々激しく耳を打ちはじめると、それは悉く神経のせむであつた——未だ風卷の季節には間があるのだが、音無の親爺も云ふのであるが、耳の底に不斷に怖ろしい吹雪の音が聞えると、生きた心地を失つてしまふのだ。更に、そのまゝさうして潰れてゐるのさへ、不安になつて來るのだ。

『戀に焦れて悶ふるやうに——戀に焦れて悶ふるやうに——』

本箱の中のオルゴールが、アウエルバツハの酒場の歌を奏しはじめたりするのであるが、傾ける耳などを持ち合す筈もなく私は、全く毒を嚙んだ鼠に等しく七轉八倒、正しく戀に焦れて悶ふるやうに狂ひ回つた上句、鎧櫃の在所を手探り求めると、夢中で、重い兜を頭に載せ、鎧を身につけ、そして黒い鐵の面あての中に顔を埋めて、吐息を衝くと、はじめて我身の生きてゐたことに微かな知覺を持つのであつた。——云はゞ、風卷に煽られようとする屋根が、おさへの石で、靜つたのを見て安堵の胸を撫で下す音無の心境であらう。

そのまゝ私は息を殺して、鎧の中で夜明けを待つことが多かつたが、或る晩のこと、例の如き大暴れの後漸く鎧の中に收つて、吻つとして、眼をあいで見ると、私は、隈なき月の光りがさんさんと降りそゞいでゐる河原のふちに立つてゐる自身を發見した。あまりの激しい恐怖と苦悶との闘ひのために、私は無意識のまゝに、こんなところまで轉げ出たものと見える。

面當めんどうの大きさは私の顔の凡そ倍大であつたから、その長方形にくりぬかれた口腔から、私は外景を眺めることが出來た。すべて鎧は、その大きさを、草刷りは私の脛の半ば下まで垂れ、袖は腰を覆ふまでに深く蝠蝙蝠の翼の如きであつたから、胴の中で私は外皮の鎧を動かすことなく、自

由な身動きをすることも出来る程——それ程、その鎧兜は小男の私には不適當なものであつたら、

「これは失敗つたぞ——飛んでもないところへ出てしまつたのだ！」

と、私は氣づいて、慌て、駈け戻らうとしたが、駈けるどころか、兜の兩端を盥を被つたやうに両手でささへたり、スキーを穿いた脚のやうに毛靴の足どりを氣遣つたりしながら、辛うじてよた／＼と、がに股の醜態で歩みを運ぶより他は手もなかつた。

一體、それで、何うして、こんなところまで飛び出して來られたものか、それが、恰で夢のやうで、更に私は堪へられぬ不安を覺えた。(斯んな経験があるので私は、先刻の、屋上の騒ぎのことも未だ夢とばかりは信じられぬのである。ヒポコンデリイが嵩じて、夢遊病と進んでゐるやも知れぬ。)

こんな素晴らしい月夜だと云ふのに、風の夢に襲はれて斯んな騒ぎを演じてしまふやうでは、これから先の冬の日が思ひやられる——私は泣き出したい心地で、そのまゝよたよたと河堤の松林を縫つて、家路を目差した。

眼の先などは好くは見えないので、時々立ち止つては方角を定めながら、馬頭観音の裏手から

橋の袂に現れた時であつた。

突然、私は、私自身の方が吃驚りして、思はずバサリといふ大きな翼の音をたて、飛びあがると、前にのめつて悶絶してしまつたのであつたが——突如、私の眼の先で、ぎやあッ！といふ死者狂ひの悲鳴が起つたのである。それを聞いて此方が悶絶してしまつたのだつたから仔細は判別出来なかつたが、程經て私は息を吹き返したから、兜を脱いでそのあたりを見聞すると、祠の扉が蹴破られてゐて、堂の中には、賽ころや銀貨や酒の道具が散亂してゐるのだ。そして、勿論、人影と云へば、賽錢箱の傍らに斜めに映つてゐる鎧姿の私の影より他は、皎々たる月あかりで蟲の音も絶えてゐた。

「そんな因業なことを云はずと、一晚だけこの歸り路だけで好いんだから、是非ともそれを私に貸して呉れないか。」

鎧櫃に獅嚙みついた私の顔を覗き込むと、憐れな聲を振り擽つて音無が掻きくどくのであつた。
「厭だ、厭だよう……」

「私はもう堪へられんのだや、こんなシャツの有様でこの夜道をたどり、若しや風でも吹き出したらと思ふと、私の魂は地獄へ飛びさうだ。身に、重しを付けて置かなければ、私の體なんて何

處へ飛んでしまふか、解らない。怖ろしいぞ。私は、その上大金を持つてゐるのだ。舟を賣らせ、網を賣らせて、漸く八郎丸から取り戻した大金を……」

「……厭だよう……」

「拜むから貸して呉れ。加^{かま}げに村境ひの馬頭觀音の前に、風もないのに吹雪男が現れたといふ噂ではないか。いや、其奴は、おそらく番小屋荒しの強盜であらう、吹雪男と見せかけて、あちこちの番小屋を恠して酒を盗み、在り金をさらふ稀代の曲者だ。法度の丁半の賭錢だから訴へ出ることも出来ず……おゝ、白状してしまはう。丁半の連中は皆な私の手下ぢやわい、何を祕さう、鳴をくわへ込んで、濡手で粟の大儲けの上前とりの大親分は私なんだが、あの騒ぎ以來一味の者共は、吹雪男の亡靈にとり憑かれて青息吐息の有様なのだ。——屹度今宵あたりも出るだらう。私は、鎧の下に金袋を抱いてゐれば、突かうが、切らうが、平氣となれる。斯うしてゐても、氣が狂ひさうなんだ。一刻も早く同勢を呼び寄せて屋根の上へおしあげてしまはないうちは、何時吹き出すかも解らぬ風の神様のことだからな。おゝゝゝ、情けない、この不漁の上に、若しもこの家の屋根でも飛ばされてしまつたら……」

「おい、耳を澄して見ろ——風らしいぞ。」

「大變だあ……」

音無は、矢庭に私に飛びかゝつて鎧櫃を奪ひとらうと猛りたつた。

「吹雪だ、吹雪だ！」

と私は叫んだ。眞實私の耳には、キクロウプスの口笛を想はせられる陰々たる吹雪の音が響くのであつた。——「これを、離して堪るものか。」

すると音無は

「もう駄目だ！」

と唸つたかと思ふと、齒を喰ひしばつて仰向けに倒れた。そして泡を吹きながら

「何でも關はないから私の上に、重たいものを載せて呉れ、飛んでしまふく、私の軽い體が……」

と喚くのであつた。

俺と同じことを云やがる——さう思ふと私は、斯んな慾深男と同病であるらしいのが酷く自尊心に關はつたが、その苦悶の切なさは同感に價するので、重い書物を次から次へ取りあげて、患者を埋めた。

音無は、重石の下ですやくと眠つたらしい。——改めて耳を傾けると、吹雪の音は全く消えてゐて、戸を開けて見ると、眺めも豊かな月夜であつた。

(これは、私とその村を遁走した後に初めて知つたのであるが。——といふのは私は町で育ち、つい一兩年前に、この村に私の家のあることを悟つて、止むなく移り住んだ者であつたから、不思議な村の云ひ傳へなどについては全然無知の徒であつたわけであるが——龍巻村には、毎年秋の終りの頃になると、私や音無が罹つてゐたやうな精神病の流行は常例だつたといふことである。あの怖ろしい風巻に怯える父祖傳來の血統が、村人一帯に流れてゐる故に、一名「吹雪病」と稱ばれてゐるこの癩痢の一種に就いては村人は餘り氣にも掛けぬのであつた。然し、私の父祖はこの村の住民ではなかつたのに、何うして私に、そんな病が起つたのか、私はその因を求めぬのに苦しむ次第である。)

それはさうと、外はそんなに圓かな月夜であるといふのに、翻つて私の胸を窺ふと、不安の嵐がまたも新しく巻き起らうとしてゐるのであつた。——私は、やがて息を吹き返すであらう音無が、更に捲土重來の勢ひで、この寶物に飛びかゝるであらうことを深く心配しはじめたのである。で私は、今のうちに藏つてしまはなければならぬと決心して、手早く鎧櫃の肩紐に腕を通す

と、アツシユの槍を杖にして辛うじて立ちあがつた。喰ふものも碌々に攝らず、妄想とばかり戦つてゐる私は、今更のやうに身に力がなく、酔つ拂ひのやうに脚がフラフラするのが情けなかつた。然し私は、杖を頼りに、葛籠を負つた舌切雀の悪黨爺のやうに表情を歪めて、よた／＼と屋根裏の納屋へ向つて行つた。手探りで廊下を曲り曲つて、漸く梯子段のあたりに來ると、納屋の扉から燈火が洩れてゐるのが仰がれた。そして争ひの聲が聞えた。

「飲んで置いて、飲まないとは好くも云へた圖々しさだ。」

「俺の云ふことを盗むな。盜棒奴！」

「意地きたなしの盜み飲み野郎！」

「打つ氣か！」

「打つとも——」

RとZが徳利を間にして、鼻を突き合せ、眦を裂いてゐた。

(デーモンズ・ネクタアだ。夢ではなかつたのだ——俺は、たしかに飲んだぞ。)

私は、自分を夢遊病者と信するに至つた。眼に見えぬ悪魔の翼にはたきのめされさうだつた。

「酒の喧嘩なら止めて呉れ。音無の欲深爺から、巻きあげて來たばかりの酒手が、こんなにある

ぞ。」

私は重い財布を卓子の上に投げ出すと、二人の男は有無なくそれを攫みとるやいなや、窓を乗り越えて梯子づたひで飛び出さうとした。

「酒を買ひに行くのか？」

「仁王門の縁の下で、音無の手下と、張り合ふのだよ。」——「賭場荒しの不思議な吹雪男が俺達の後をつけねらつてゐるので、今では彼處の縁の下に穴を掘つて、金さへあれば毎晩のこと……」

「然し君達は、吹雪男の迷信を信じてゐるのか、そして一度でも、たしかに見たことがあるのかね？」

私は葛籠を背負つたまゝ卓子に腰を降して、意味深氣に訊ねた。

「御用のお手先だと思つてゐますよ。——えゝ、たしかに、見ました。大きな餓の兜を被つた眞黒な化物で、吹雪男のこしらへではありますが、あれは勿論、町から回された探偵の變装でせう。」

「音無の手下は、然し未だ餘分の賭金を持つてゐるのかね？」

「奴等のことだから何時もイカサマ術を用ひて分捕つてはゐるんだが、吹雪男が現れてからといふものは皆なその化物にさらはれてしまつて素寒貧となり、音無の親爺をはじめ一族郎黨は氣狂

ひ騒ぎでありますよ。今夜は親爺自らが愈々出張つて、乗るか反るかの大勝負を打つ手筈になつてゐるんですが、親爺は何でも資手に詰つて八郎丸を苛めに行つたさうですが……」

その云ふところを聞いて見ると、吹雪男の亡靈に苛まされて音無は癡癡に罹つてしまつたさうだが、主ばかりでなく手下の者も悉く神經衰弱となつた。今日も二人の手下が、この屋根で石ならべの仕事に従事してゐたところが、二人は突然「吹雪男」の幻に魅せられて、裏の川へ轉落したのである。憐れな患者は、そんな突差の場合でも、その身が軽く宙に飛んでしまひさうな危懼を忘れず、夫々重石を抱へたまゝ飛び込んだので、危く溺死しかゝつたところを自分達が救ひあげたのである。——

「それ、そこに寝て居ります。未だ暫くは息を吹き返さないでせう。」

さう云つて指差されたので私は、卓子の上の龕燈を執つてその方を照して見ると、二人の男が見るも淺間しい姿で、米俵にがつちりと獅噛みついたまゝ氣絶してゐた。

「ひとごとちやありません——私達だつて今にも吹雪の夢に襲はれて發狂するかも知れないのです。こんな時分から斯う續々と病人が現れるなんてことは、さすがの龍卷村でも十七年來この方のことだといふ噂ちやありませんか。」

「凶災の前兆でせう。今年の冬は何んな怖ろしい風巻しんまきが起ることか……お、不吉なことは考へまい。早く仁王門の椽の下へ走つて、大勝負を打つて、腰に金袋をつけてしまはないと、吹雪男の餌食にされて木つ葉みぢんになつてしまふであらう……」

RとZは、西瓜のやうな顔をして窓を脱け出て行つた。

二人の去つて行く後姿を窓から見送つてゐると、私の胸は再び轟々と鳴りはじめた。海の遠鳴りが、疾風と化して朧夜の空をかすめながら、稻妻を巻き起して、どつと地に墮ちたかと思ふと、見渡す野面一帯は黒煙を吐いて怒濤と狂ひ出した。森の樹々が一勢に雄叫びを擧げて、凄烈な龍巻を迎へた。——家屋が、宙に浮いて割れ鐘に似た胴震ひの悲鳴を放ちながら、目眩しい回轉をはじめた。

「飛んでしまふぞ……屋根へあがれ、米俵を家根へ運び出せ……」

音無が夢中で駆け込んで來たのであつた。彼は更に階段を駆け降り、何うして運んで來たものか、數々の私の書物を悲愴な感投詞をたゞ胸一杯に叫びながら、扉口を目がけて階段の下から箆と投げあげるのだ。

蝙蝠の群がおし寄せたやうに數々の書物は、不氣味な翼の音をたて、米俵に嚙りついてゐる

私達の上にバラ／＼と落ちた。

その騒ぎで息を吹き返した二人の男は

「やッ、親爺が來たぞ。」

「金を盗んだことが露見したぞ。」

二人は切りに飛び交ふ夜鳥の群を拂ひながら、天窓の綱を引くと、それに縋つていち早く屋上へ逃げのびた。理由は少しも判らぬが、私は米俵の蔭にもぐつて葛籠の重みに命を托す思ひでガタ／＼と震へてゐると、やがて音無は綱にぶらさがつて、屋上へ出ようとするのであつたが、あまりの亢奮の爲に大振りとなつて止め難くあちこちの壁に激しく肉體を打ちつけてゐるのみであつた。

私は、その隙に持てるだけの書物を拾ひあげると、騒ぎをそつとその部屋に残したまゝ梯子づたひで川の端へ忍び出た。そして稍々暫く葦の影で息を殺して見ると、いつの間にか龍巻は綺麗に凧いでゐた。

「ともかく、斯んな怖ろしい村には一刻も止ることは出來ない。」

私は震へる脚に鞭打つて、物蔭をつたひながら河下へ路を求めた。月の光が水のやうに流れて

みた。——私は、自身の影を見出すことが怖ろしかった。影が、「吹雪男」の姿で私の眼に映るであらうことを想ふと、氣絶しさうであつたから私は月の在所を行手の丘の上に突き止めて、河添ひに葦をわけて進んだ。白い光りを、まともに享けると私の五體は透明白膏となつて、光りも空氣も素透しに流れて行つたが、私は、杖をたよりに、背中の葛籠の重味にわづかばかりの生心地をつなぎながら

「これさへ背負つてゐれば、疾風に見舞はれても、吹き飛されずに済むだらう。」

と呟いた。そして小脇の書物を、その上の重石とたよつて、道を急ぎながら、クラコウ大學を追放された不良學生の挿畫を思ひ比べた。彼は、白銅色の鍍金を施した鞆皮製の Macpherson (偽詩人) の假面をかむつて、緑色の天鵝絨で覆ひをした文庫を背負つてゐたと記載されてゐるが、これらの怖れに戦きつづけて、正しく垢面蓬髪の私の容貌は、變裝の要もなく、このまゝ、「偽詩人」として通過するであらうと思つた。

と行手に提燈を先きに立て、(何とまあ、見事な月夜だといふのに!) 向つて来る一團の人聲が現れたので私は草の中に蹲つた。

「然の深さも結構だけれど、まさか屋根の上で勝負も出来ないからな。」

「野郎、然し、降りるだらうか?」

「背中を力一杯どやしつけて、お月様を指差せば目が醒めるよ。」

そつと私は吾家の方を振り返つて見ると、棟の上に三體の黒法師が身動きもせずには腰かけてゐた。——人達は、彼等を迎へ降して仁王門の椽の下へ繰り込む同勢と知れた。仁王門は私の行手の丘の裾で深い森に圍まれてゐる。

どうせ私は、その森を脱けて、丘を越えなければならぬ道程であつた。——家々は、屋根に重石を一杯載せて、もうすつかり寝沈まつてゐた。光りにすかして見ると、或る屋根の石は人が坐つてゐるやうに逞ましいものもあり、鳥の群が休んでゐるやうに數々の石を並べてゐるものもあつた。

提燈の人々が、音無の居る屋根へ昇つて行くのが眺められた。聲は、此方が風上だつたから一向にとどかないが、彼等の物腰で、切りに頑張らうとする音無を促してゐる模様が知れた。——腹を抱へて、大きに笑ふやうな格構をする者、月を指差して「宇宙の神祕」を演説してゐるやうな格構の者、決心の思ひ入れで拳を振つてゐる者達に取りかこまれた音無が、反抗を示してゐる見たいであつたが、やがて、天窓の口から一人宛屋根裏へ落ちて、屋根には三四人の影だけが残

つた。それから一人の男が窓口から下を覗いて何やら叫ぶと、屋根の上の男達は一勢に綱を引いて、餘程の重量の物を吊り上げにかゝつた。

彼等は米俵を屋根に運びあげてゐるのであつた。——音無の智慧で、それらを重石の代りに使ふのであるらしく、見る／＼うちに屋根の上には俵の數々が家畜のやうに竝べられた。そして一同の者が、安堵の胸を撫で、梯子を傳ひはじめた頃、私は周圍の葦がざわ／＼と鳴り出したのに氣づいた。いつか月は深い雲の底にかくれて、鈍い光りを投げてゐるだけであつた。

私は、今度こそは、夢や幻でなく、眼のあたりに河口の彼方から砂を卷いた突風が吹きあげて來るのを悟つた。脚もとの川の流れが、逆風に煽られて河下から吹き上げられた空の小舟を翻弄してゐる態が、窺はれた。砂と水煙りの雨が突然私の上に閃光を交へて覆ひかゝつて來た。——空を見あげると、木の葉にからんで指摘することも出來ない無数の片々が、村一帯を播鉢の底にして吹きあげた見るも巨大な龍卷に煽られて、空一面を狂ひ廻つてゐた。

「あれだけの米俵を載せたとなれば、千貫匁の重石だ。大丈夫／＼、あれで飛んだとなれば龍卷村の全滅の日だ。」

「大將、氣を鎮めて下さい。さすがの吹雪男も仁王門の椽の下は、嗅ぎ出せぬといふものだよ。」

——八郎丸を根こそぎ巻きあげて、いよ／＼明日はあしたお妙を……」

「お妙を伴れ出して——」

さう云ふ慰めの聲援に擔がれた音無は、

「俺の帯を離すな。」——「離すと俺は、大枚を持つたまゝ飛んでしまふぞ！」

などと叫びながら、一同にしつかりと手どり脚どりされて、駈ける馬に乗つたよりも速やかに突風を衝いて、私の眼の先をかすめ去つた。奴の手脚が、私も無數の經驗を持つ身であつたから瞥見したゞけでもそれと感知出来るのであるが、病の發作が頂點に達してゐると見えて、龜の子のそののやうに震へて切りと虚空に悶へてゐた。それよりも私は自身の發作を恐れて、夢中で葛籠を降すと、あたふたと鐵兜で頭上を載へ、紙屑のやうに吹き飛んでしまひさうな五體を、深々と鎧の袖で覆ひ鎮めた。——鎧だけにしては重過ぎると思つてゐたら、葛籠の中には酒徳利やオルゴウルや金袋等が詰つてゐた。私は、大切な書籍をその上に詰めて、再びどつしりと鎧を背中に背負ふと、いつにも覺えたことのない不思議な自信を感じて、ぬつと、葦の繁みの中から大嵐の中へ立ちあがつた。眞に、吹雪の精と化した魔力に打たれた。

私は、槍をどうと地に突き、毛靴の脚どりに豪膽な留意を注ぎ、進路を、面あての口腔から仁

痴
日

王門の森に定めて、きらびやかな突風に逆つた。——吹雪を怖れる傳統の血を持たぬのに、どうして私はあんな病氣に罹つたのか？ と兼々疑つてゐたが、この時初めて私はその原因に思ひあたつた。それは、單に私が、稀大の業愆者であつたといふことに氣づいたのである。

頭の悪いときには、むしろ極めて難解な文字ばかりが羅列された古典的な哲學書の上に眼を曝すに如くはない——隱岐はいつも左胸一杯に力んで、決して自分の部屋から外へ現れなかつた。活字の細いレクラム本に吸ひつくやうに覆ひ被さつたまゝ、終日机から離れなかつた。だが、やがて運ばれる晩飯を下宿人のやうにひとりでぼそ／＼としたゝめてから、何か吻つとしてラムプを眺める時分になると、急にあたりが寒々として來て、暖い部屋が慕はしくなつた。

「しかし……」

彼は激しく頭を振つて、餘程ちゆうちよするのであつたが、ふらふらと渡り廊下を踏んで明るい部屋の方に出向かすには居られなかつた。でも彼は、今度は成るべく活字の大ききさうな二三冊の部厚な洋書と、ウェブスタアと更に英和辭書を抱え込んでゐた。——そして彼は、襖に手をかけぬうちに

「あけるぞ？」

と唸らずには居られなかつた。一度、うつかりと黙つて襖をあけた途端に、

「きやあッ……」

といふ叫びといつしよに彌生が炬燵の中から跳ねあがつて、騒動だつた。彼女は夢中で毛布にくるまると——厭々々と笑つて喚きながら、押入の中へ飛び込んだ。彼女が裸體だつたことよりも、隠岐はその騒ぎに驚いてしまつた。かねがね彼の細君は、畫を習つてゐて、追々と人體の素描に移つて、彌生をモデルにしてゐることは薄々隠岐も知つてゐたから、裸體像にはさして驚きもしなかつたのであるが、あんまりモデルが大袈裟に仰天して狼狽するので、返つて飛んでもない痴想に攪亂されさうだつた。

「まあ、眞ッ闇で——何も解らないわ、端を少し、開けてよ、お姉さん……」

押入れの中で彌生は、切りと、くすくすとわらつてゐた。二枚つゞきの純白の毛布が、たぐりきれないで、押入れの端から長い裾を長椅子の下までのこしてゐた。隠岐の細君は、仕事の邪魔をされた佛頂面で、立ちあがつてゆくと——彌生が中から

「そんなに開けちや駄目よ、馬鹿……」

などと焦れて、三寸位ひの際に直させた。

「あゝら、何にもありやしないわ——お湯殿から、さつき寢間着ひとつで來ちやつたんだもの……」

「あゝ、こゝにあるわ——」

細君が棒摘のタオルのバチヤマを拾ひあげると、彌生は隙間から白い腕を肩まで露はして、はやく／＼とせきたてた。

「でも、何だか變だな。それと解つてゐられて、これ一つだけで出て行くのは。」

「何よ、やあ子、急に柄でもないことを云つてるわ、いつだつて平氣でそのまゝ炬燵に寝てゐるんぢやないのよ。」

その部屋だけは百燭の電燈をつけ、ストーヴも、らんらんと點け放してある上に、雪國でもあるやうな爐がきつてあるので、それにはヤグラをかけて、すつぱりともぐり込めるやうに備えてあつた。その時細君はヤグラに腰かけて、長椅子に横たはつた真正面の寢像をモデルにしたのだつた。

「穿くものだけでも持つて來て呉れよ。」

「煩いよ。開やしないぢやないか。」

取合はうともせず、細君は不機嫌さうに煙草を喫してゐた。——隠岐は黙つて、炬燵に寝てしまつたが、惰て、飛び込んだ折の、眞白にうつつた彌生の姿態が厭に何時までも印象に残つてゐて敵はなかつた。

「開けても好いのか、描いてゐるんぢやないのか？」

「あら、また來たわよ。お氣の毒見たいだわね。」

「おい、ふざけるなよ。俺は向方が寒くなつたから、あたりに來たゞけのことだよ。失敬なことを云ふなよ。」

隠岐は眞面目に眉を寄せて突返した。

「ぢや勝手に這入つて來たら好いぢやないの、西洋館ぢやあるまいし……」

——そもそもから、それで隠岐は氣嫌を損じて、ふん！ とつまらなさうに鼻を鳴らして這入つて行くと、女達も、ふん！ と顔をあげずにうつむいたまゝ、一枚のカーテン地のやうなものを二人で兩端をつまんで、せつせつと草花の模様か何かを刺繍してゐた。彌生はうしろの壁に短刈りの頭を持たせかけて、恰で寢風呂にでもつかつてゐるやうに、ヤグラの上に脚を伸し、掛つて

ゐる毛布をピラミッド型にして、胸の上で針を動かしてゐた。細君は二の腕までたくしあげたツイシャツ一枚で立膝で、もあるらしかつた。そして二人は、隠岐の氣合ひには全く素知らぬ振りで、谷間にはランプがひとつ灯つてゐた、年寄つた母親は息子のかへる日を待つてゐた——といふやうな英語のはやり唄を口吟んでゐた。

彼女等の、素知らぬ氣の、そんな風な様子にだけは、隠岐はいつも敏感で、それまで彼女等が暮し向きに關する不平をならべてゐたに相違ないのが、想像されるのであつた。はじめからの向方の敵意めいた口調は、無論それより他はなかつた。——隠岐も、もうそれには慣れてゐたから、一切此方から言葉をかけることなしに、憤つとしてあをむけになつて、本を開くだけだつた。

「ひとりで、あたるつもりになつて、あんまり脚を伸しちや厭よ。」

「ほんとうよ、この先生たら、あんな顔をしてゐて仲々油斷がならないのよ。——眠つた振りなんかして、あたしの膝に脚を載つたりするんだもの。」

彌生は、づけ／＼とそんなことを云ふのであつた。隠岐はさつきからむか／＼してゐるところだつたので、

「馬鹿ッ、自惚れてやがら……」

と、もう少しで怒鳴りさうになつたが、辛うじて胸をさすつた。

「闘はないから、しびれる程、擲つてやれば好いんだよ。」

……何のつもりであんなことを云ふのか……と彼は、女房を横目で睨んだ。細君は不氣嫌の時に限つて、口の端でものを云ひながら決して相手の顔を見なかつた。うっかり彼が、そんな時に憤つた返答がへしでもすると、この頃では、女房よりも、女房の従妹の方が先へ厭味を持ち出すといふ風であつた。

「まさか、あたし、斯んなぢやないと思つたわ……」

彌生は、従姉の謀反心を掻き立てるやうに不満を並べ出すのが屢々だつた。時には隠岐も堪えきれなくなつて、強張つた権幕を示す時もあったが、彌生は一向平気で、何さ、その顔つきは——などと切れの長い眠眈で凝つと相手の容子を睨めた。彼女は自分の左ういふ表情に餘程の自信を持つてゐるかのやうに、そして、いつも冷たくセ、ラ笑つた。隠岐は、客觀的にはたしかに彼女の美しさを認めてゐた。加げに十七・八も歳下の者に——と無氣になりさうな心を壓へた。

「いくら、兄さんの働ががないと云つたつて、故郷なんだもの、ちつとは、もう少し何とかなつてゐると思つたわ。——あゝ、あきれた、あきれた。これぢや、姉さんばかりがほんとうに可愛

相だ。」

彌生にそんなことを言はれると、細君は忽ちヒステリの發作を起して

「あたしはもう十年も辛抱してゐる——着るものもなくなつちやつた！」

と自分で自分の言葉に逆上した。

元は隠岐が、保養しなければならぬ頭の狀態に陥つて、とてもおちおちとは都會で小説などは書いて居られなくなつたので、大概の困窮には堪へられるから——と従姉妹達が先に立つて田舎行きをとり決めたのにも係らず、何か、田舎といふものに憧れる輕薄な夢が満足されぬと見える鬱憤が、次第にふくれあがつて、稍ともすれば病人であつた筈の亭主の方が、看護婦共の氣嫌をとらなければならぬ傾向だつた。

隣りの酒匂村が隠岐の郷里で、はじめほんの一二月のつもりだつたので、自分の村の知合の農家を借りてゐたが、飯を食つてゐるところが表から見えるから始末が悪いとか、芋畑のふちで雨が降れば傘をさして這入るやうな風呂に浸れるものか——などと、東京に住んだところで、何うせ長屋風の家より他に知りもしない癖に彼女達は事毎に勿體振つた風を吹かせて、隠岐を痛ませた。

秋のはじめであつた。——昔から隠岐の家と知合ひだつた國府津の塚越といふ漁家の主人が、彼を訪れた時、

「どうせ、これからは空いてゐるんだから、好かつたら使ひませんかね。」

と貸別荘なるものをすゝめた。——町端れの海岸に向つた半洋風の十間もある眞新しい別荘で、部屋部屋には一通の仲々重味ある家具まで配置されてゐた。表側は破風型の門構えで、家のまはりは四方とも充分に庭をとつて、廣々とした芝生だつた。有名な市會議員がかくし女のために建てたのだが、その男が牢に入れられることになつて持ち扱つてゐたのを塚越が買収したのだ左うだつた。

隠岐は、見るまでもなくたぢろいたが、女達は亢奮して

「玄さん、この家、家賃いくらなのよ、え？　え？　え？」

などと追求した。——漁家といふよりも今では避暑客を相手に土地などを賣買してゐる塚越は、何處か宿屋の番頭沁みた人を見る眼に肥えてゐるといふ風で、洋装婦人連の素性を逸早く見抜いたらしかつた。子供の頃隠岐は、祖父や祖母に伴はれて東京へ赴く時、電車を降りるといつも、先づ玄八郎の家に寄つて小半日も遊んだことを覚えてゐる。今の玄八郎は同名の先代の長男で、

たしか隠岐よりも二つ三つ歳上だつた。先代の時には二三艘の小舟とわづかばかりの蜜柑山を持つた半漁半農だつたが、今の玄八は二十代に鱒網で大儲けをして、傾きかけた家産を數倍に増したさうである。貸別荘なども數軒持つてゐて、近頃では下曾我通ひの乗合自動車や、小田原の驛の附近に「ヲダハラ會館」といふカフェーを經營してゐた。しかし、そのくせ少しも才子肌のところも見えず、はなしをしてゐると、稍ともすれば意味もなくテレ臭さうにわらつて、顔を赤くするやうな悠長な人柄だつた。

「さあ、いくらといはうかね？」

彼は隠岐の方に向きをかへて、にやにやしてゐた。隠岐が黙つてゐると、彼は婦人達に事更にいんぎんに

「いゝえ、もう住んで戴くだけで結構なんですよ。」

と氣轉を利かせた。しかし彼女達には玄八の好意は通ぜぬらしかつた。そんな場合に殊の他内心では見得を切りたがる隠岐は、重苦しくて返事も出来なかつたが、彼女等は易々と享け入れて、現像の暗室があるなどと悦んだりした。

だまつてゐても庭掃除の者が來たり、レコード屋が御用聞きにうかゞつたりするのであつた。

——彌生は専門學校の英文科を左傾がかつたことを云つて自分から退學したのであるが、この頃ではけろりとしてしまつて

「ねえ、このぐらひの家に住むとなれば、何うしたつて着物から先きに一通りはそろえてなくては、あたし表へ出るのも耻しいのよ。何處へ出るにも、海岸散歩の歸り見たいな恰好ぢや、いまだきいくら田舎だつて相當氣が引けるわ。」

追々とそんなことを口にしはじめた。すると細君は躍氣になつて

「あたしは、和服なら相當もつてゐるんだもの？——何も買つて呉れつて云やしないよ。……無責任な男だなあ！」

と滾した。

「矢つ張り、この生活には和服がふさはしいわね。ちやんと、お太鼓の帯をしめて、……それは左うと、姉さん、春時分に江戸づまの金紗を持つてゐたわね、あれ、あたしとても氣に入つてんのよ、あたしに恰度好いちやないの、あれ、見せてよ。」

「……………」

「大島だつてあるぢやないの。着ようよ。姉さんがそれを着て、あたしが、あの着物の袖を直し

てさ……そんな畫の方が好いな、第一、安心で——。」

「止めとくれよ、……………」

「まあ、どうして——着せて呉れないの。」

「そんなぢやないさ——チエツ！」

「あれも？」

と彌生は意味あり氣に眼を視張つた。

「あれも——もくそもありはしないわよ。トランクをあけて御覽！——野郎のふんどしばかりだ。」

細君は女だてらに太々しくそんなことをほき出した。

すると彌生は、机に凭つてゐる隠岐の離室まで突き通る金切聲で

「意久地なし——素つ裸になつて暴れてやりたいや」などと怒鳴つた。

こんな家に移れば移るで、彼女等の不満の種はジャツクの豆の木のやうに天までとゞきさうだつた。——全く彼女等も日増に鬱憤が積み重なつて、あられもない矛盾の板挟みになるのも道理だつた。樂屋では、そんなにも言語同斷な女書生が、この家に移つてからといふものは、一度び門

の外へ踏み出したとなると、如何にも立派な家に住んでゐるとばかりな濟し込んだ顔つきに變つて、奇妙に眼をかすめて、さもほのぼのと散歩するのであつた。そして停車場の前の待合茶屋にやすんで、用もないのに隠岐を電話に呼び出したりするのであつた。

「厭だよ。俺は、ゆふべ、まんじりとも出来なかつたんだから、これから眠らなけりやならないんだよ。」

「いらつしやいよ、お兄さま——二人で往くの、何だか退屈なんですつて、お姉さまつたら……」

「どこへ行くんだよ？」

「あら、何を空呆けていらつしやるの。オデオン座にボレロを見に行くんだつて、さつき申しあげたぢやありませんか。」

隠岐は、彼女等が自分を笑はせようと、わざと氣どつた聲を出すのかとさへ疑ふことさへあつたが、やはり彼女等は眞面目さうだつた。——永年の間彼は、女房にストイックな精神生活を吹き込んだつもりだつたが、他合もないことで斯んなにも空々しく逆戻りしてしまふのかしら？と寧ろ不思議さうに首を傾けずには居られなかつた。畢竟、自分の罪だとおもつた。——眞實隠

岐が、何も今更彼女等の行動を、皮肉や曲つた眼つきで眺めてゐるわけではなかつたのだ。うつかり批難めいたやうなことでも口にする（少々隠岐のそれも毒々しくなるのであつたが——）特に近頃は彌生も細君も黙つては居ずに、忽ち氣狂のやうに喰つてかゝつた。

「偉さうなことを云ひなさんなよ。あたしは何でも知つてゐるんだよ。お前は、いつか彌生子に接吻したことがあるんぢやないか。加げに何といふ無責任なはなしだ。」

細君は短氣を起して、いきなり彼の腕に喰ひついたことがあつた。——もう、それは大分前のことで東京にゐた頃であるが、隠岐は全く過然の過失から、彌生に接吻だけを犯したことがあつた。

「ごめんよ。」

とその時彼は、あやまつた。彌生は彼の膝に突伏して泣いてゐた。そして、夢中さうに首をうなづいてゐた。

それきり、その後は、手を觸れたためしもなかつた。妻君の言葉に依ると、それ以來彌生の性格が變つたといふのであつた。

「責任といふのは……」

隠岐は、さすがに蒼ざめて唇を震はしてゐた。長い間、知つて知らぬ振りを保つてゐた細君も細君だが、何時、どうして彌生はそれを口外したのか？ と彼は降伏した。

「學校のことだよ。彌生が止めてしまつたのはお前のせむぢやないか——」

隠岐は、彼女の學校の費用ぐらゐは續けてゐるつもりだつたが、はなしが大それた問題に陥ちてゐるので、二の句もつけなかつた。

うっかり四角張つたことを云ふと、今では彌生までが、それを叫び出す怖れがあつた。

二

「このカーテン何處に掛けるんだと思ふ？」

彌生は切りと圓い枠の中に針を動かしながら、妙に意地悪るさうな眼でちらりと隠岐を眺めた。隠岐はいちにも坐り續けた脚を炬燵の中に伸々とさせるのであつたが、折々爪先が彌生の膝がしに觸つた。うっかりすると、平氣で彌生は無禮なことを云ふので隠岐は決して自分からは動かなかつたのであるが、如何にも邪魔ものが這入つて來たといふやうにぶつぶつ云ひながら、彌

生が窮屈がる度にひとりでに觸れて來るのであつた。それ位のことには彌生も無意識で、慌てゝ逃るやうな動作もせず、隠岐の方も無關心を装つてゐたが、だが彼はその度毎に颯つと全身がしびれるのであつた。——彼は仰向けのまゝ、胸の上に立てかけた本を熱心に讀んでゐる容子だつたが、意味などは解りもしなかつた。

「さあ、何處にかけるのかね、俺の書齋の窓かしら？」

「ふつふ……違ふわよ。このベッドの横に幕のやうに引くんだわよ。何時、誰に這入つて來られても安心のやうに——」

と彼女は長椅子の上の鴨居を見あげた。その椅子は寢臺に變る仕掛けだつた。彼女等は、いつも二人で、そのまゝ炬燵に眠つたりした。

「この子は、ほんとうに寢像が悪いんだからな。」

と細君は自分がいつも手傳つて繕えてやる彌生の顔を凝つと眺めた。彼女は餘程彌生を自慢の種にしてゐて、殊に近頃は勿體振つて化粧のことまで兎や角と世話を焼き出し、何時でも相當につくつて置かないと、表へ出る時が如何にもケバ／＼しくなるからなどと工夫を凝して、彌生が湯から上つて來ると、どういふのが一番似合ふかしら——と、人形の顔でも繕えるやうにして、

白くして見たり、ドーランをはいて見たりするのであつた。つくつた上で、つくつてゐないやうに見えなければならぬ——などと注意して、睫毛に耽念なブラッシュをあてたり、眉を剃つて見たりするのであつた。

「あら……どつちがよ。」

彌生は、細君を睨めたりしたが、細君は、その表情の動きと、化粧の具合を驗べて、自分の晝でも眺めるやうに眼を据えてゐた。

「ねえ、ちよつと起きあがつて見て呉れない、これぢや少しあくど過ぎやしないかしら？」

彼女は隠岐を促した。彼は、顔の上に、ばつたりと本を伏せて

「俺には解らないよ。」

と云つた。

「……、あたしの、あの、ファアコートを着せてやり度いな。」

細君は泌々と呟くのであつた。——彼女は、隠岐のアメリカの友達から贈られた可成り上等らしいビーバーの外套を持つてゐたが、殆んど手をとほしたこともなく、餘程以前から手もとには無かつた。何も彼も釣り合ひはしないから——と、さすがに細君は照れて、あきらめてゐたので

あるが、この門構えの家を見た最初に、忽ち、それを着て外出する姿を浮べたのである。

「たつた四十圓で持つて來られるんだもの、何でもないぢやないの。」

と彼女は口癖にして、隠岐を病ませてゐたが、一向それほどの段取りもつかなくつたのである。

「自分はちつとも欲しくはないんだけど、やあちゃんに着せてやり度いなよ。」

「欲しいなあ……」

彌生は深い息を衝いて憧れに満ちた眼を輝かすのであつた。

そのはなしになると何時も終ひには喧嘩が起つて、聞くに堪えない罵倒を浴びながらほうほうの態で逃げ出さなければならぬので、隠岐はファアコートと聞くと慄然とした。

「コートだけあつたつて仕様がななさ。第一、こんな陽氣の好い田舎の街を歩くのに、あんなものを着て歩くのは物々しいよ。」

「それが氣に喰はないのよ。理屈をつけるのは止めて欲しいわ。あなたはね、實に——」

と細君はそろそろ昂奮した。「手前勝手な人間だわね、男らしくないよ。ひとを悦ばせて、結局自分も悦ばうといふ風な大きざぐらひは、誰だつて持つてゐるのが普通よ。實に、低級な自分勝手しかしない憐れな人間だわ。」

「左うよ〜！」

と彌生も眞面目になるのであつた。「自分で自分をごまかしてゐるのよ、狡いんだわ、そして度胸が無いんだ。」

「だから、何事につけても、やるならやるで、思ひ切りやり通すといふことも出来やしないぢやないか。——嫌ひだ。道樂をするならするで、凡てを放擲して、飽くまでも自分の思ひを通して見せるつていふ一貫したものが無い。あたしなんか、生活のことなんかには就いては、何もびくびくしてはゐないわ。何時破壊されたつて、ちやんとやつて行ける自信があるわ。あたしはね、返つて、この人が滅茶苦茶なことをやつて呉れる方が、清々とするわ。何方つかずの奴が一番嫌ひさ。」

「戀人でもつくと好いんだよ。」

「さうとも——否應なく崖のふちに追ひやらなければ、いつまで経つたつて埒は明かないといふのさ。女でもこしらへて、うんと酷い目に合されると好いんだ。」

「つまり、姉さんが、あんまり兄さんに忠實過ぎるのがいけないのね。」

「他所の人のやうに、何でも、あなた〜と云つて、亭主にばかり頼つてゐた方が好いのね。な

まじ、あたしに強い一面があることが不幸なのよ。——でも、あたし此頃泌々と他所の人が羨しいわ。夫に頼りきつてゐられたら、何んなに樂だらうと思ふわ。自分の女房ぐらゐは、落着かせて置くのが當り前のはなしぢやないかね。あたしなんか斯うやつてゐたつて年柄年中、びく〜してゐて、やりたいと思ふことは何んにも出来やしないしさ——これぢや堪らない。一層、別になつた方が好いと思ふばかりだわ。」

「妻に、そんな類ひの不安を興へるやうな男は死んだ方が増しだわね。」

「——生活！ほんとに、生活のことだけがちやんと出来ないやうな男は、何をやつたつて駄目よ。」

「ヴァイタリテイのない人間ほど醜惡なものはないね。」

二人は左ういふはなしに走ると夢中になつて、止め度もなかつた。隠岐も全く有無もなかつた。胸が震えるだけで、返す言葉などは一つも浮ばないのであつた。その上、二人の者に、あんな弱點を握られてゐることが敵はなかつた。

「あたし達が、こんなにやきもきしてゐるのが解らないのかしら。聞えないのかしら？」
「圖々しいのよ。」

「あんまり、人を馬鹿にして貰いたくないわ——此方は何時も眞剣なんだから——」
黙つてゐればゐるで、細君は更に業を煮すのであつた。

「馬鹿になんかしちやみないよ。」

と彼は怕る／＼咳くより他はなかつた。

「あゝ、焦れつたい。男の考へることまで、あたしは心配しなければならぬんだもの。」
彼女は手細工の道具を力一杯投げつけたりした。どうせ、ものになるやうな腕ではなかつたが、
晝でも描いたら少しは了見が廣くなるだらうと隠岐は思ひもしたのであるが、まるで駄目だつた。
性根が浮調子で、ひがみ強いのだから何をやつたつて中途半端なのだが、彼女は自分の才能まで
を悉く夫の犠牲と心得てゐた。

「そんな本なんて読んでゐる振りをしないで、これでも見てゐる方が好いでせうよ——だ。」

細君は、やをら立ちあがるとデスクの抽出しから二三通の封書を取り出して彼の上に落した。

「流れ御通知」といふ書付ばかりであつた。——一圓五十錢、男袴。三圓、男袴。七圓、女帯。
四圓、麻雀……」などと、とても判讀の出来ない態の達者な文字が読みきれぬ程竝んでゐた。

三

或晩細君は、落ち着いた気分で斯んなことを云つた。

「やあちやんに、あたしはまるで戀してゐる見たいだわ。自分が女であるといふことを、忘れる
んだもの。」

「同性愛といふのかね？」

と隠岐も興味を感じた。

「……堪らない言葉だけだね。」

細君はあかくなつた。彌生は、廊下を隔てた浴室にゐた。細君は、わざと廊下の燈りを消しに
行つて、誰もゐやしないから平氣よ。影を見せてね——などと彌生にさゝやき、硝子戸に映る姿
に見惚れてゐた。

「以前には随分聞いた言葉ぢやないか、この頃は別の言葉になつてゐるかも知れないが。學生時
分に経験があるかね？」

——隱岐は、それは自分が凡ゆる點で彼女に不満足ばかりを與へてゐるので、自然と變質的な傾向に走つたのであらう——と考へ、殊に田舎に移つてからの自分をいろいろと振り返つて見たりした。

「ほんとうは、あたし畫なんか描きたくはなかつたのよ。だましちやつたのさ。」

「……愉快だね。」

「いつまで見てゐても飽きないわ。それよりも、このごろぢや、嫉妬を覺えて、苦しくなつたりするわ。彼女の結婚を考へると、凝つとしてゐられなくなつたりするのさ。……だつて、まあ、あの子の、體の綺麗さ加減と云つたら、それあもう、何とも彼とも、云ひやうもない——ふるひつかずには居られないほどの……」

「ふるひついたことは、あるか？」

「あら、眼をまるくしてら……でも、あたし、いろいろ考へて、いつかのお前のことを無理もなと思つてるわ。」

「……馬鹿だつた！」

「あたしだつて、それより激しい氣持になることがあるんだもの。」

(以下の會話數行省略する。)

「顔はそれほどの美人といふほどのこともないけど、ヘツブバアン見たいな口つきで、何か不敵な魅力を持つてゐるぢやないの。それよりもね、肉體の素晴しさつたらないのよ、女のあたしがつくづく見惚れるほどなんだもの、きめがこまかくて、張りきつてゐて……」

「君とは正反對なんだな。」

隱岐は、なりが厭に大きいばかりで、ごつごつとした中性のやうな細君を想つて鳥肌になり、凡そ反對らしい疊媚に満ちた豊かな色艶の肉體を想像した。

「それあもう恰で——」

細君はわけもなく淡泊に、自尊心などは置き忘れてゐた。

「顔だつて俺は……」

隱岐は、弾みさうになる言葉つきを慌て、控えた。——「眼つきなんか不思議な落着きを持つてゐるぢやないか。そして相當教養のありさうな不良性で。」

「不良性は感じないわ。そんな感じではない、寧ろ冷たさうな、何でも突つ放してゐる見たいな

「……」

「どつちでも好いだ。」

と隠岐は、細君の手前そんな類ひの立入つたはなしを厭つてゐたが、細君はいつまでも微細な觀賞眼を批瀝して、まるでその皮膚は處女を失つた當座でもあるかのやうな沽みに富んでゐるとかなど、口を極めて、益々自分の女らしさを忘れてゐた。

冬らしくもない暖い晩がつづいてゐた。その上にストーヴなどを焚いてゐる部屋にゐると、温泉にでもつかつてゐるかのやうに蒸々として、汗が滲みさうだつた。——不圖隠岐がうしろの壁を見ると、何うして持ち出して來たものか訊きもしなかつたが、あの毛皮の外套が獲物のやうにうやうやしく懸つてゐた。彼女等の好氣嫌は、どうやらその獲物に依るらしかつた。

「やあ子つたら、バカよ——すつかり悦んぢやつて、まるつきり何にも着ないで、いきなりこれにくるまつてゐるのよ。今日などいぢんち、そのまゝごろごろしてゐるのさ。體ぢうにタルカンを振りまいて、ふわりとこれをひつけてゐると、とてもうつとりとしちやふんだつて！」

「折角、持つて來たんなら、そんな亂暴な着方をしては臺なしになつてしまふだらうに。他所行きに……」

隠岐が云ひかけると、忽ち細君は峻し氣な調子になつて、

「他所行きに使へるやうに、他のものもそろへて貰ひたいものだわ——」

とさへぎつた。「何うせ駄目なんだから、滅茶苦茶にしてしまふのさ。」

「なるほど、それも好からう。」

隠岐は危くなつたので、

「意味があるよ。」

などとわらつた。まつたく、マゾー伯爵ではないが、毛裏の外套に包まれた裸女の皮膚や動作を想像することは、仲仲の意味がある——と彼は胸のうちで呟き、癡つと眼を閉ぢた。

「まあ、厭あね、お姉さんひとりぢやなかつたの、酷いわ——」

襖の蔭で彌生が頓興な聲をあげた。そして、「外套とつてよ、はやくつたら……」

などと焦れて、激しい腳踏みの音を鳴り響かせた。

「粉が一杯ついてるわ……」

細君は外套の肩を掴んで、はたはたと振りまはしながら、彌生へ投げ渡した。タルカムの甘つたるい香りが、部屋一杯に濛々と溢つて、隠岐は身動きもならぬ心地だつた。

遙かの山々には斑らな雪が見えたが、陽氣は日毎に春のやうに暖かつた。くつきりと冴えた山肌、紫地に、残雪の痕が翼を擴げて舞ひ立つた鶴のやうに飛び散つてゐた。——隱岐の窓から見渡せる砂濱には、夏の日傘を立て、寝轉んでゐる人や、蹴球のあそびに耽つてゐる四五人の若者達が、運動シャツの姿で飛びまはつてゐた。

隱岐は、もう好い加減に本を讀むことを切りあげて、ぼつぼつ創作の仕事にとりかゝらうとして苛々しはじめてゐたが、プロバリンばかりを服み過ぎて眠るので、止め度もなく頭がぼんやりしてゐて、さつぱりと空想力が働いて來なかつた。そして五體は、恰も枯木のやうに干乾びて、風邪の引きつゞきであつた。かあつと頭が熱くなると、急に脚の先から水がおし寄せて來るやうに冷え込んで來て、のべつにくしやみは出るし、鼻水は垂れるし、あまつさへ、レウマチスの氣味でもあるのか、腰骨や膝がしらが螺線のやうにしびれてゐて、全く埒もない有様であつた。腹には懷爐などをあて、木像のやうに坐つてゐたが、歩かうともするのには杖がほしいほどだつた。

た。

酷く六ヶしい顔をして彼が、海邊の方を眺めてゐると、彌生が口笛を吹きながら廊下をまはつて來て、窓先の縁側に置いてある布椅子に寝ると、

「日光浴に出たいんだけど、人がゐるんで困つてしまつたわ。」

と呟いた。パジャマのパンツを穿いた長い脚を、恰度隱岐の眼上に組んで、桃色のスリッパをつつかけた一方の爪先を、天井を蹴るやうに動かしてゐた。

「姉さんは？」

「頭が痛くつて起きられないんだつて。——nurses なんだらう。」

「——日光浴は病人がすることぢやないか。」

「うっかり出任せなことを云つたら、婆さんたら本氣にしちやつて、お天氣が好いと屹度起しに來るのよ。——お嬢様お起き遊ばせ、お起き遊ばせ——だつて。辛いね」

彌生は聲をあげて、笑つた。留守居の老婆が耳が遠いのであつた。——「遊ばせ——と聞かされちや、さすがに照れちやふよ。」

「お嬢様は大變立派な外套をお召しになつて、見違えましたわ、此度御注文なすつたんですつて

ね、——なんて云つてゐたぞ。そんな出鱈目云つたのかい？」

「はつはつは……何うだか知らねえよ。女房が吹いたんだらう……ともかく今日は、素晴らしい日光浴日和ぢやないの。」

「それや左うに違ひない——」

隠岐は眼を霞めて、陽炎の立つてゐるかのやうな明るい砂原を見渡した。微かな風もなかつたが、海の上から溢れて来るやうな陽の肌ざわりは、それこそ深々とした毛皮か、鳥の羽毛にくるまれてゐるやうな物柔らかさだつた。

「ねえ、すつと向ふの松林の方まで行つて見ない、誰も人の居さうもない——」

「日光浴、するのか、ほんとに？」

「何時だつてしてゐるわよ、今日に限つたことぢやないわ。川のふちまで行くと恰で砂漠見たいなところがあるわよ。決して、人になんか見つかりつこないわ。停車場からサンドキツチでも買つて、お午過ぎまで遊んで來ませうよ。」

と、隠岐は左程氣がすゝみもしなかつたが、否應なく誘ひ出された。

「どうせ駄目ときまつてゐるのに、そんな顔をして机にかちりついてゐても仕方がないぢやない

の。氣分ばかり悪がつてゐたつて、それは運動不足だからぢやないの。歩いて來れば、乾度清々としてしまふわよ。」

街にまはつて、出來あがつてゐる寫眞の焼つけなどをとつてから、もう一度家に引き返すと、彌生は靴下を脱いで、素足に重たげな庭下駄を穿いた。彼女は未だ、執拗にも例の外套を着て、兩腕で胸のあたりを堅く掻き合せるやうにしながら、酷く無器用な脚どりで砂を踏んでゐた。隠岐は、模擬革のポストンバックをぶらさげて、彼女と肩を並べた。

「さつき、玄さんに遇つたら——どちらへ？　なんて云つたわね。東京ですか？　だつてさ。」

「ちよつと左う見えたんだらう。」

「なにしろ、鞆までぶらさげて、氣取つてゐるんだからね……」

彼女は、何が可笑しいのか、ひとりでクスクスと笑ひ出した。寫眞屋も、そんなことを訊いてゐるのさ。あのまゝ汽車に乗つたら何うだらう。」

「え？」

「人に會つたり、喫茶店に寄つたり、それから映畫でも見たり……」

彼女はいつまでも、ひとりで亥いで奇妙な笑ひを浮べてゐた。

「その外套、お前には餘つ程大きいね。エスキモー見たいだぞ。」

ひとりごとなど呟いで笑つてゐる彌生を、隠岐は難じてやつた。

「左うよ。だから、何うせ他所行きになんかなりつこないさ。——その代り、凡そ窮屈ぢやなくつてよ、中で泳いでゐる見たいよ。」

「さすがに、それぢや、暑過ぎるだらう。」

「ほんの少し……」

と彌生は、薄ら笑ひのまゝ、何やら思ひ切つたやうに軽く黙頭いて、立ちどまつた。そして、ぐるりとあたりを見まはした。

球蹴りをしてゐる若者達の姿が、遙かの後ろに、鳥のやうに小さく見えたゞけだつた。折々遊びに来て、彌生と文學の話などを取り交す青年もゐた。——見つかると困るから、遠くを廻らう——といふので、はじめから二人は彼等を避けて、街をまはつてすつと西寄りの濱邊に降りたのである。

彌生は稍しばらく笑ひを堪へるかのやうに、襟の中に顎を埋めながら、凝つと隠岐の顔を見据えてゐたが、やがて、

「でも、大したことはないわよ。——だつて、斯うなんだから——」

と云ふがいなや、非常な速やかさで、ぱつと、一瞬間、それを脱ぐ眞似をした。隠岐は、思はず、アッ！と云つた。たしか一糸も纏つてはゐなかつた。

「さつきから、そのまんまだつたのかえ、驚いたな。」

「え——。靴下だけで。」

彌生は何故か急に濟してゐた。「だから、東京へ行くのかなど、聞かれると、變な氣がしちやつたのよ。でも、あたし、よくよく困つたことに慣れちやつたな。」

と、そこはかとなく憂愁氣な顔色に變つてゐた。

「心の半分まではらはらしながら、このまんま、何處まででも行つて見たいやうな氣がするのよ。」

「くだらんぞ。」

と隠岐は唸つたが、あとからく、矢つきばやに胸先を襲つて來る稻妻のやうなものに射られて震えが込みあげて來るのであつた。

「あら！ あんなところから、人が來るわよ。氣をつけてよ。」

氣をつけることもないのに、彌生は耳の根まであかくして、彼の腕をとつた。極く稀に、散歩の人々に出遇つた。

「駄目だわね。——引つ返さうかしら？」

彌生は、はぢめのうちの元氣はすっかりなくなつて、弱音を吐き出した。

「ともかく川尻のちかくまで行つて見ようよ。——それとも、いつそ、思ひきつて、そこからバスに乗つて、小八幡か酒匂の方まで行つて見ようか、松濤園の下あたりまで……」

「……ドレスや下着も、靴だつて、要心に、その中に入れて来たんだから、日光浴なんて止めて、散歩に變へても好いけれど、着ることが出来ないわ。この分ちや——」

「夏だと、更衣所があるんだがね。」

「何云つてんのよ、馬鹿——。しつかり、頭を働かせてよ。」

さう云つて彌生は、突き飛すやうに隠岐の背中をたゞいた。

「この邊には、舟も見あたらんな！」

「飛んだ砂漠だつたわね。——あら、いまごろあんなところで、子供が風をあげてるわよ。こんなに、風も無いのに好くあがつたものだわね。」

「やあ、三つも、四つもあがつてやがら。ヤッコやカラス風は、風がなくなつたつて、あがるんだよ。」

隠岐は、大した六つかし氣な知識でも吹聴するかのやうな重々しい口調で、世にも愚かなことを呟きながら、水のやうな空に浮いてゐる風を見あげて、何といふこともなしに太い吐息を衝いた。

「でも、運動になるから結構ぢやないの。具合の好いところが、見つかったら、着ることにして、もつと勢ひ好く歩いて行つて見ようぢやないの。」

「運動不足はいかんね。歩かう。」

彼は、片方に彌生の腕を執り、左には、何も彼も一處くたに下穿までも丸め込んであるといふ鞆を大きく振りながら、歩調を合せて、さへぎるものもない廣々として砂原を颯々と歩きはじめた。

「こんな下駄、棄てて、靴だけ出してよ、歩き憎いわ。」

「——穿かせてやらう、肩につかまりな。」

「サンドキツチ、喰べようか。」

疑
惑
の
城

「胸が一杯だ。」
と隠岐は應へた。

——嘘をつくな、試みに君の手鏡を執りあげて見給へ、君の容色は日増に蒼ざめてゆくではないか、吾等は宇宙の眞理のために、そしてまた君が若し藝術に志すならば、藝術のために蒼ざめるべきではないか——

こんな風な調子の手紙を三枚四枚五枚と書いてゆくうちに夜は白々と明けてきた。サンタ・マリアの暦をはぐと、四月の十二日（一九三三）であつた。

暦の端には

「聖女ローザ童貞——我汝等に告ぐ、總て其の兄弟を怒る人は裁判せらるべし。」とあつた。ふるえる私の憤りは止まなかつた。

私は封筒をふところにした寢間着の襟を掻き合せ、左右の手にガマロとステッキを握つて深い朝霧の中に飛び出した。前の晩に芝居見物に上京して來た私の母親が、私の子供に與へた子供の

學資金と、差押への札を貼られてゐた私の税のために私に借したいくらかの紙幣がそのガマロの中に這入つてゐた。

ポストの前に、私は恰もポストのやうに突つ立つて稍暫く考へたが、やはりこの手紙は彼に手渡した方がおだやかだと思つた。彼は嘘ばかり吐いた「僞大學生」であつたが、少くとも私に好意を抱いて朝となく夜となく私を訪ねてゐる以上、これを郵便に托するのは残酷過ぎると思つた。私は憤りの手紙を人に贈つた経験は二十代のはじめに一度だけであつた。

白く深い朝霧だつた。街は白い眠りに閉された化石であつた。私はポストに凭り掛つて、眼に見えぬ城を空想した。そして漸く一臺の車を呼び止めることが出来た。

「善良」といふ言葉のシムボルにふさはしい彫刻の面に似た顔だ——と私は、つい此間彼と知り合ひになり、彼の言葉を凡て信ずるがままに、その容貌を心のうちで評したばかりであつた。彼ははじめ創作が志望ではないと云つてゐたので、私は珍らしく小説家同志ではない交遊といふものに別種の悠やかさを覺えてゐたのであるが。

「僕は凡ゆる人の言葉を、凡てそのまま」と私はその手紙の中で思はずそれに傍點を打つた。「在りのままに信じるのを掟としてゐるのだ。何時誰が、凡ての現象を目して疑ひを抱くほどの暇が

あるものか」と。

しかし、もうその心の乾かぬ間に、忽ち彼の顔が「嘘言者の面」たる偶像として、はつきり其處に在るのを見ぬ振りが私には能はなかつたのだ。どんな、ひよつとこな面を觀ても私は滑稽とおもつたことはないが、觀照は出来る。けれども「善良の面」と信じたものを、一朝にして「惡の面」と見直すためには相當な時間が私には必要であつた。凡て見る者の笑ひを誘ふものは「惡の表象であるとはアリストテレスの「假面喜劇論」中の言葉であつたが、私は「惡の面」にも「善の面」にも笑ひ如きは誘はれぬのだ。「滑稽」は終ひに私にとつては「笑ひ」程度の感覺ではなくて、單に絶體の存在であるばかりなのだ。

感情は收つても、あれとこれとはまた別種だと私はふところの手紙を叩きながら、未だ牛乳屋の車さへも通つてゐない薄暗い下宿屋通りへ折れて、あの學生の二階の窓を見あげて、

「交川君、交川君！」

と、奇怪な聲で十三遍十五遍と叫んだ。

それが二十遍を越えた時、交川君は夢中で一枚の雨戸から、驚き、且つ寝呆けた一個の「嘘を吐いた面」を突き出した。その像は裸體に等しく衣服の前がはだけて、朝の健康者としての完全

なる肉體の一部を露はにしてゐた。私も驚いて、思はず眼を反らせたまま

「散歩をしないか。」

と誘つた。

「どうも有りがたう。しかし私は嘘を吐いた覚えはないんです。」

彼は手紙を読み終ると、こころもち兩眼を沾ませて素直に云つた。

「……そんなら、それで好かつた。それを信するだけで、僕は吻ツとした。君が何ういふ仕事をしようとする人物なのか僕は知らないが、そんな類ひの偽者でもなく、また法螺吹き像ではなかつたことは幸せだつた。しかし僕が昨夜から今が今迄思つたことは、今や君に對してあやまらなければならぬことかしら？」

「いいえ——」

と彼は、呼吸を朝霧の中に煙として吐き出した。

「僕こそ禮を云ひたい氣持です。」

私は胡坐をかき、彼は端坐してゐた。夜を徹して營業を續けてゐる或る廓の中の殺ばつな料理屋であつた。私達のまはりに遊蕩に疲勞したらしい二三人の男が二三本の徳利がならんでゐる食

卓の傍らで大軒きをあげてゐた。また向ひがわの食卓では、ひとりの田舎風の紳士が酌女をつかまへて、彼に戀してゐるといふ女郎の話の吹聴して、いくつもいくつも力一杯酌女に背中をなぐられながら悦に入つてゐるのであつた。

交川君に私は何んなことを喋舌つたか、日記にも書いてなく、大方忘れてしまつたが、たゞ私はひとりの酌女に向つて

「俺達は決して今、遊蕩の歸りがけではないんだよ、では何故に斯んなに早朝から斯様な場所に現れたのかと云ふと——」

と、何ういふわけか非常に四角張つて、交川君とのいきさつに就いて血を吐く如き熱辯を揮つてゐたことを覚えてゐる。それでも足りなかつたのか更に私は車を驅つて、朝あけの都會を遠く反對の區へ向つて一直線に横切ると彼の友人を伴れ出し、更にまた二人を促して彼等が畏敬する彼等の先輩の門を荒々しく叩いた。憤りでもなく、悦びでもなく、また悲しみでもないただ無暗と激しい向日葵の花のやうな激情が、私に、私のステッキを、双向ふものでもない虚空に向つての水車のやうな剣と擬せしめて、嘆けるアハヴのそれに等しい劍舞を強ひるのであつた。さうだ、さうだ、やはりこれが、かくたくたの嘆きの身であるばかりだつたのだ。——そして、次第に朝

の輝かしい金色の光りの箭がキラキラと車の扉にあたりはちめる頃になると、私は、ハツとして思はず伴れの勇士の肩に顔を伏せてしまった。明るみに投げ出された化物のやうに――。

交川君は何故かそれ以來杳として姿を現さなくなり、その面貌も次第に私の記憶から薄れようとしてゐるのであるが、最早私は彼の「假面」をとつて、何のやうな説明――例へば、善良なる――とも、嘘言者の――とも、また、悲しめる者の――とも、乃至は、天狗とも武悪とも滑稽の――とも、とは云ひようもなく、しかし、ただ異状な面を有してゐた者として極めて微温的な恐怖に似たものを誘はれるかのやうではあるが、これは別段彼の面に限ることではなしに凡ての「過去」が吾に迫るところの自然現象の隈どりの一部である筈だ。神祕崇嚴なる「假面劇」の發生は、恐怖から「喜劇」へと憧れる原始民族の祈念に因するものと私は一冊の六つかし氣な本で讀んだ。

二三日前田舎の小屋から送りとどけられたランプを燭し、同様のボロ手風琴を机の代りにして、既に初夏の夜深く私はまた或る手紙のためにペンを構えてゐたが、不圖傍らの手鏡を執りあげて己れの顔を眺めると、それは「假面劇論」書中の寫眞版にある深刻部の「苦しむ鬼の面」に酷似してゐた。――屢々私は忠實な税官吏の手敷を煩はせて恐縮を繰り反してゐる境涯であつた。官

吏は屢々私の部屋を見まはして、差押へ物件の皆無に途方に暮れ

「しつかりして下さいよ。」

と忠告した。――そんな鬼のやうな息苦し氣な顔を見ると滑稽になつたので、私は歌でも歌はうとして手風琴をとりあげた。

しかし歌など歌つてゐた日には、また今度税吏が現れる時に、ランプや手風琴が物件の役に立つやうなことになるかも知れぬ。しつかりしなくてはならぬとおもひ、屹つとなつて、田舎の叔父上様へ

「前略。未だ小生の所有にかかはる土地の件に關しては度々申しあげたるが如く一切を放擲したきが年來の小生の念願なれば――」

云々といふ手紙を書き出すのであつたが、交川に書いた時のやうな情熱が伴ふことなく、たちまち眠くなつて來るのであつた。彼處にはたしかに虚偽が蟠居してゐる筈なのだが、はじめからそれと解つてゐるためか一向もう此の方の心は花々しくもならぬのである。

木枯の吹くころ

そとは光りに洗はれた月夜である。窓の下は、六尺あまりの深さと、三間の幅をもつた川だが、水車がとまると、水の音は何んなに耳を澄ましても聴えぬのだ。

「寒いのに何故、窓をあけておかなければならないのだ？」

俺は圍爐裡のふちで、赤毛布にくるまつただるまであつた。彼は返事もせぬのである。

俺たちの頭の上のラムプは、暗かつた。太吉は、むつと腕を組んで、ラムプよりも明るい月の光りが吻つと煙つてゐる窓を視詰めてゐるだけだつた。彼の膝の上には編みかけの草鞋がのつてゐる。太吉は左の眼が義眼なので、手仕事に疲れやすかつた。彼は、體裁を顧慮することなく、また氣短かで、平氣で安價の眼玉を購ふので、それは目蓋から喰み出して、右の眼と色が異つてゐた。俺は彼の眼を見ると、時々憎みを感じた。

だが光りを浴びて、彼の眼玉は高價の品に似た。左右の色も區別がなかつた。——彼は再び膝

の上に眼を落して、仕事にとりかかった。右の眼は稍々悲し氣にうつむき、餘念なく人生をあきらめてゐるかのやうであつたが、左のはざらりと飛び出して、俺の方を睨んでゐた。このために彼は、つい多くの人達の感情を害した。友達に彼にいつも高價品を購ふことをすすめるのだが、ひと月に少くとも一度ぐらゐは破壊の憂目を見るので、とても買ひ切れぬと彼はこぼした。

彼は四十歳だが、結婚の經驗を持たなかつた。

微かな厭きがするので、見ると、彼は草鞋の端をつまんだまま、うつとりと居眠りであつた。義眼の眼蓋は主人が眠つても、笑つても決してしまらなかつたから、見る者は屢々本尊の心的状態を見誤つた。——笑ふ——と云へば、彼はわらふ場合には目蓋を閉ぢるのが癖である。然し、いつにも俺は彼の笑ひ聲に接した驗しもないのである。

太吉が、その時突然慕のやうに仰向くと、突拍子もない大きなクシヤミを發した。これがはじまると、十も二十も連続するのが彼の癖だつた。

炭をついでゐた俺は

「だから、窓を閉めれば好いの……」

と慌てて、立ちあがりながら着てゐる毛布を貸さうとした。彼は、はつはつはつ……とクシヤ

ミの發作に驅られて肩をすぼめてゆくのだ。そして、それが破裂すると、飛びあがるまいとして圍爐裡のふちに獅噛みつくのだが、やはり、ぎよつと背中が無理に弾んで了ふほどの激しいクシヤミであつた。そんな弾みに逆らはうとして五體に止める力は、反つて窮屈な反動を呼んだ。

「アッ！」

と俺は思はず叫んだ。太吉の硝子眼玉が、勢ひよく飛び出して、爛々たる焰の上に落ちたのである。これを彼は懸念して、クシヤミが破裂する毎に異様な力を込めながら震へてゐたのだ。

「アッ、眼玉が落ちてしまつた、ああああ！」

俺はおろおろして火箸を取るであつたが、俺の騒ぎで初めてそれと氣づいた太吉は「火箸はいけないいけない！」

と夢中で俺の腕をおさへた。なるほど人さし指位の太さで、二尺あまりの長さであらう鐵の火箸では、この上もなく危険だ。太吉は、とるものもとりあへず先づ黒の色眼鏡をかけた。彼は、そんな不體裁な眼玉を關はずに容れてゐる癖に、一方に變なはにかみやであつて、何んな切端詰つた場合にも眼玉の脱された眼窩を決して他人には示さなかつた。——彼は窓を閉めた。跣足で土間に飛び降りると、入口の扉に門を入れた。そんな用意などは何うでも好ささうなものなのに、

そんな大事をとつた後に、膳棚から箸箱を探した。そして、杉箸の先を挿つて眼玉を拾はうとするのであるが、一向に見當が定まらぬのである。箸は、赤い火を突くばかりなのであつた。驚きの發作で、クシヤミは止つてゐた。眼玉は、火の中で眞ッ赤であつた。彼の箸は炎へはじめてゐた。勿論、俺も箸をとつて手傳つてゐるのだが、俺の箸の先が近づくと何故か太吉の箸は切りとそれを横に拂つて邪魔するのである。彼は、照れてゐるやうであつた。——間もなく、ぎんなんの實がハネたやうな音がした。

「太吉さん、居たかね？」

窓の外で久良の聲だつた。太吉の情婦であつた。久良は、いつも窓から覗いた。月の光りを受けると、義眼がほんもののやうに光るのを太吉は承知してゐたのだ。

太吉は俺の顔を見て、手を振り、掌で口をおさへた。俺は唇を噛んで、息を殺した。太吉は、そつと腕を伸ばして、ただでさへ暗過ぎたラムプの芯を極度に細めた。——消えてしまつた。

普段太吉は、久良に會ふ時にだけ容れ換へる二圓五十錢のものを手文庫に藏して棚にあげてあつたが、四五日前の晩に鼠に落された。久良は痼性の強い質で、五十錢の眼玉の太吉とは會ふことが出来なかつた。怕れに戦かされて久良は、決してその眼の太吉と向き合ふことが出来なかつ

た。その眼の太吉が、嬉しいことを呟いても、久良は共々に悦ぶことが出来なかつた。また彼が、憂世を啣つて悲しんでも、同情も寄せられぬのを久良は切ながつた。

ラムプは消えても、火氣の焰が太吉の胸から顔へかけて赤く毒々しがつた。

「もう寝んだのかね？」

久良は、男の安否をうかがふのであつた。

「ど、う、しようか？」

俺は太吉の耳に口を寄せるのであつた。

「……………」

「ふたり、ちやんとそこに居るでねえか！」

久良は節穴から覗いた。

太吉の膝頭は小刻みに震へてゐた。やがて、セツセツセツ！と蟋蟀に似た獻獻であつた。

俺は外に出て、そのわけを久良にはなした。久良は、袂で顔を覆つた。

「お前えのうちに、草鞋あるかね？」

俺は太吉の手の草鞋が三足になつたら、それを穿いて十里先の町へ金策へ赴くのだ。町の郵便局には、二圓五十銭が一個、五十銭が三個、代金引換郵便で到着してゐた。馬の背と山駕籠と草鞋の旅人だけが通る峻しい山徑だつた。

「今夜、おれが自分でこしらへて見よう。」

久良は、編み方をさぐる指の先を月夜の中に動かしながら

「太吉は宵ッ張りは出来ないが、おれ、二晩位ひは平氣よ。」

と云つた。太吉は、女の傍らでも眠らなかつた。眠つてゐても、何かをねらつてゐるかのやうに、あいてゐる片眼を見る者は、圍爐裡の傍らで坐つたまま居眠りをするところに向つてゐる俺ひとりだつた。

「夫であり、妻であらうとする者が、たつた一つの目玉のことぐらゐに、何故そんなに拘泥するのか俺は不思議でならぬ。」

と俺は首を傾げるのであつた。然し、それは、夫であり、妻であらうとする者にだけしか解ら

ぬ絶対の矛盾であつて、また二人は夫々まことに風の變つた個人主義者であるのだ——といふ意味のことを久良は長たらしい方言で説明した。

俺と久良は川のふちにたたずんだ。まはりの山々も、森も、畑も、そして流れも、腹一杯に光りを飽満して、ふくれてゐた。俺は、ぐるりと身のまはりを見廻した。自分の影も見あたらなかつた。まるい月は恰度俺達の頭上にあつた。

久良は、橋のたもとあたりまで送つて貰ひたがつたが、斯んなときには必ず扉の節穴から女の子の様子を注意してゐる太吉に、俺は遠慮して

「ここで見てゐてあげるよ。」

と断はつた。別段、太吉は妬心は無かつたのであるが、祕かに情人の姿を眺めることを好んだ。橋を渡つて、向方の稻むらの間に達しても動いてゆく久良のかたちは、どこまでもはつきりとしてゐた。久良は、戯れに稻むらの間を事更にジクザクと縫つて、このまま別れてゆくのが名残り惜しいといふ風に、いつまでも振り返つてこくりこくりと首を動かせたり、慌てて稻むらの蔭に隠れたりした。それは扉の内の戀人への會釋に相違なかつたから、俺は柿の木の幹にもたれてぼんやりと見送るだけの役目を果してゐた。

「濟まないね。」

やはり節穴から覗いてゐた太吉が、太い聲をかけた。

(3)

久良がつくつて来た二つの草鞋の一足は大き過ぎて芭蕉のやうであり、一足は指が悉く喰み出して役に立たなかつた。久良はそれらの製作に疲れて、圍爐裡のふちに伸びた。太吉は、色眼鏡の代りに、片方の眼だけを蓋する四角の布に絲をつけて耳にかけてゐた。

久良は、太吉の自然の一つの眼を惚れ惚れと見あげて

「これは優しいけれど……」

と云つた。だが、その目覆ひの直ぐ下の有様を想ふと、氣味悪くて近づけぬと神経性の癢癢を全身に波立させた。太吉は、優しい眼の方の横顔を久良の側にして、草鞋の手工に急いでゐた。

暗いラムプであつた。風模様だつた。ラムプの灯が、扉の隙間からの風で稍々ともすると消えかかつた。

「荒れるのか知ら？」

俺は、木々に鳴る風に耳を傾けた。太吉は外の模様をあらためるために立ちあがつて

「明神ヶ岳の空が明るいから、荒れる氣づかひはなからう。これで雨を飛ばしてしまはうといふんだから、あしたは晴れだよ。」

と、いつまでも扉の外へ顔を曝してゐた。

「雨だつて俺は出かけるよ。この靴に草鞋をくつつけて……」

俺は、夏のうちにヤグラ獄を越えて、丹澤山へ踏み入る目的でそろへた山登りの道具を持ち出して圍爐裡のふちに並べてゐた。登山袋も靴も杖も手袋も新しかつた。計畫を立てて支度だけは整へたものの、急に水車の支障が起つて實行し損つたのである。

久良が、あしたの俺の辨當をつくるために竈の前で吹竹を構へてゐた時、

「お久良お久良、手前はまた斯んな目ツカチのところに来てやがんのか！」

と赤鬼のやうに酔つ拂つた久良の老父が嗷鳴り込んで来た。

「餘計な世話だよ、目玉さへ這入れれば太吉は立派な男なのよ。」

久良は養父と犬猿だつた。

「ほざくな。さあ、歸れ……」

「お前えは、だけど、臺の茶屋からほんたうに金をとつたのか？」

久良の顔は蒼かった。炎をついた籠の火が煙りを吐いて、久良の姿にからまつた。父親は、白く輝き、眼眦の鋭い久良の容貌に見惚れてゐた。

「お久良、無理を云ふな——お前えが飲ませて呉れる酒なんだ。」

「おらの知ることぢやないげに！ おら、茶屋奉公づら眞平だよ。」

「ふんなら、俺らは何うなるといふんだ。約束をしてしまつて、金はそつくり畑に注いでしまひ……」

「畑に注いで、また畑から飲代をしぼり出して……か、堂々回りも好い加減にするが好いぞや、

おらは、もう太吉と夫婦約束したんぢやよ。」

「目ツカチづれの約束なんて……」

「目ツカチ目ツカチと云つて貰ふまいぞ。」

「飛びくり目玉の、でんぐり目だ。野郎達は金がいくらあるといふんだ。」

「お前えは太吉の立派な目玉を知らないんだね。世の中は進んでゐるんぢやぞよ——ほんものと

寸分違はぬ目玉は直ぐにも買へるんぢやい。太吉は立派な髻だあよ。目さへ這入れば、臺の運送屋に務める手筈になつてゐるだよ。」

「立派な目とやらを見せて貰はうけえ。飛びくり目玉は……」

「あれは普段のぢやよ……」

久良は煙りに咽んで、顔を覆うた。義眼にもいろいろな區別があることを、老父は決してうなづかなかつた。

「てんまにや乗りたくねえもんだ。太吉の目玉が平べつたく凹んで、月給とりになつたら俺あ拜んでやら……」

「悪たれ吐くと、月給とつても金、拂つてやらんぞ。」

「立派な口を利いたのを忘れんな、アマ！」

「太吉を見違へて、後悔せぬが好いよ。」

「ワッハッハ……」

老父は扉を蹴つて立去つた。

太吉は窓に突つ伏してゐた。俺は腕組の中に首垂れて、懐ろに息を吐いてゐた。不運となると、

何も彼もいちどきに行詰るものだ！と、俺はこの頃の成行きに驚かされた。間もなく臺の茶屋の亭主が、老父のよりも激しい悪たれ口を聞いて、久良を拉しに来るであらう。水車小屋の差押人が飛び込んで来るであらう。俺は、彼等に辯明の言葉を持ち合せぬのだ。太吉は、抗辯の舌に恵まれてゐるが、目玉をつけてゐないと彼は他愛もなく意氣地を失つて口が利けなかつた。彼等は太吉の弱味を知つて、事毎に、飛びくり目玉！と罵つて、無下に彼を凹ませた。

窓にもたれてゐた太吉は、またクシヤミの發作に驅られはじめた。然し彼はもう、その反動に少しも逆らふことなしに、くしやくしやくと、ハネツルべのやうに悠々と胴仲を折り曲げては、柿の葉がくるくると舞つてゐる窓の外へ上半身を乗り出してゐた。

「あんな喧嘩をしては歸るわけにもゆくまいね……」

俺が久良の上を案ずると、太吉も久良も俺が町から戻るまでは、到底二人で夜を共にすることは適はぬと萎れるだけだつた。俺が、屋根裏の寢室へ引きあげようとする、久良は辨當をつくり終るまで待つて呉れと慌てるのであつた。

俺には、寧ろ太吉と久良の感情の状態が察知し難かつた。

いつものやうに久良は俺に送られて、風の吹きまくる畦道へ出た。翌朝は、雨でも出發するこ

とを更に俺は久良に約して橋のたもとで見送つた。水の上を巻いて来る風の音に交つて、太吉のクシヤミの響きが未だ續いてゐた。小屋のラムブは消えてゐたが、窓の中で餅を搗くやうな激しいお辭儀を繰り返してゐた太吉の姿が、白けた夜氣の中にうつつてゐた。

(4)

町で用達を済すと、もう夜だつたので郵便局へは廻れなかつた。どこに泊らうかしら？と俺は、駐車場のベンチで目をつむつた。臺の宿を廻らずに、俺は山徑ばかりを一氣に駆け抜けたので半分の道程で町に着き、幸ひ天氣は置らかだつた。——海邊に旅人宿をさがした。水筒には、久良が詰めた酒がそのまま口もつけずに重かつた。

沖の潮鳴りが高かつた。濤聲が激しく雨戸を打ち、やがて雨だつた。俺の眠りは、山村も海邊も容易かつた。

郵便局から小箱を抱へて走り出ると、不圖鍋川第八に出遇つた。臺の茶屋の亭主なのだ。俺が顔を反向けようとすると

「これから山へお歸りかね。恰度好いところだから伴れにならうぢやないか。」
と、彼は珍らしく愛想が好かつた。

「酒代は幾ら溜つてゐたかね。今、半分だけ拂つて……」

太吉が、久良のいきさつで彼の店へ赴き、自暴的に飲んだ酒代が溜つて、かねがね第八は居催足だつた。

「お前さんの責任ぢやあるまいし、まあ、そんな心配は無用としておかうよ、今日のところだけは……」

「彼が拂へなかつたのは僕の責任なのさ。君も御承知の通り暫く僕は彼に給料が渡せなかつたのだからね。」

「お久良が、わしの店に来ることになつたら遊びに来て呉れるかね。」

「久良はもう太吉と結婚してゐるんぢやないか、給料の代りにあの水車小屋を俺は二人に譲り渡して、間もなく東京へ戻るんだ。」

北山驛で俺達は汽車を降りた。これから二里を赤松村までバスに運ばれて、残りの徑は怒山いかまの小屋まで徒歩だつた。深い森があつた。谷川のふちへ添つて鋸の徑を登るべきだつた。鋸山のこの時

見晴しは、遠い海原の上の島まで望まれた。俺は、あの峠の松の根元で獨り悠々と休息することを楽しんでゐたのだ。鋸山、唐松、鬼柳、音取、泥臼、狐岡、寄生木——山に登り降りにつけて、そんな滑稽とも怕ろしとも云ひ難い名前の村々を踏み越えて漸く怒山へ達するのだ。第八の館は狐岡村の「臺の宿」といふところだつた。

俺は、そこまで第八と伴れ立たねばならぬのか？ と考へると、鬱陶しかつた。

第八は、久良が太吉などと何んな間柄があらうが無からうが頓着もなく

「あの女は、うちのものだ。」

と落着いてゐた。「ともかく、あの目玉にはお久良が竦毛を震つてゐるといふんだから、ものになる氣づかひはないさ。」

「君は好い年をして、女に悪く甘いといふ噂だね。」

俺は、第八の種々な不道德を知つてゐたので非難のつもりでさう云ふと、彼は反つて嬉し氣に、
「へッへッ」とわらひ

「お久良は仲々の別嬪ぢやないか。わしとの間柄もまんざらぢやないにさ。」

などとヤニさがつた。それから彼は、また別に夫ある女の袖を引くことのおもしろさなどにつ

いて辯じたてたり、久良に戀慕してゐる旨を白状した。

鋸山にさしかかると彼の脚どりは稍々ともすると後れ勝ちで、一町も先へ立つてしまふ俺を呼び返すのだ。

「ゆうべ少々飲み過ぎたせゐか、下肚がどうも息苦しくて適はん。」

と彼は顔を擧めて、俺の水筒を傾けた。水かと思つたら、これや酒か！ と彼は悦んで、漸く峠の松に達すると、どつかりとみこしを据ゑた。彼は、狐岡村の改名運動のために町へ赴いたことやら、前夜の遊蕩の素晴しかつたことやらを自慢した。

俺は、聞くともなしに耳を傾けるのだつた。すると、どうやら俺の泊つた海邊の宿の隣り客が彼であつたらしい。うとうとすると、女の悲鳴やらで俺は時々眠りから醒されたが、そんな物音で別段に俺は安眠をさまたげられもしなかつた。第八のはなしは支離滅裂だつた。

低氣壓が沖のあたりを覆うてゐるのか、水平線のありかが見あたらす、島の姿も消えてゐた。

陸は明るい陽射で、山々にあたつた光りが前夜の雨に洗はれた白い村や野邊に滑つてゐた。

「しかし、君、お久良が云ふにはだね——太吉は滅多に他人の前では掛けぬといふ立派な目玉を所蔵してゐるといふが、それはほんたうかね？ まつたく太吉の右の眼は偉く優しい色男の眼だ。

あれが若しも二つそろつてゐたひには、お久良が惚れるのも當り前だが、嘘だらう、そんなに巧者な目玉なんて、いくら今時とは云ふもの何處へあつらへたつて出来る筈のものではないぜ。あの優しい目がそろつたら俺も兜を脱ぐが。どうもお久良は太吉の片目に瞞されてゐるとよりは思はれぬのだがね……？」

俺は、餘ほど、太吉の上等の眼玉を今ここに持つてゐるんだぞ——とおどかしてやらうかと思つたが、第八の極まりもない陰險な性格を思ひ出して、素知らぬ風を装つた。そつかりそんなものを見せでもすれば、過失を装うて石の上にも取り落す位ゐることは第八にとつては朝飯前だ。太吉が、なるべくそれを普段に使用しなかつたのは、左様な意地悪る連の悪戯を怕れたからだ。太吉は、やがて水車小屋と運送屋で資金を儲へて、一日も速かに怒山の里を見棄てる決心だつた。他國へ赴いて、あの眼を用ひてゐる限りは誰もそれを義眼と疑ふ筈もないのだ。怒山の者共は、わけても片目の人を輕蔑するのが風習だつた。

「ねえ、そんなものはありはせんだらうがな？」

第八は仲々執拗だつた。

「ツアイス製などには相當のものがあるさうだが、色を合せるのが厄介でね……」

俺は空呆けるより他はなかつた。

「何だい、それは？」

第八は、それでももう不安さうに膝を乗り出した。

「東京の醫療具店へ當人が赴いて、研究すれば、それこそ肉眼と寸分違はぬものを容れることは出来るのさ。然し、俺は太吉の右の眼の色も形も十分知つてゐるから、近いうちに取り計らつてやらうと考へてゐるのさ。」

もともと太吉のそれは俺の計らひで、何時壞れても代金さへ差支へなければ間違ひなく取り寄せられてゐたのだ。

すると第八は鼻と眼の間に深い皺を寄せて

「止せ止せ！」

と、つまらなさうにはき出した。「餘計な世話を焼くものぢやないさ。わしや、ほんたうに君の料簡が解らんのだよ。前々から云はうと思つてゐたんだがな……」

こんな山の天邊だといふのに第八は、何かに氣兼ねる風に俺の耳に、悪臭を含んだ口を寄せた。

俺は、思はず鼻をつまんだ。——「太吉を君は一體何う思つてゐるのか知らないが、奴はあれだけ君の世話になつてゐるくせに、わしのうちなどに來て酒に喰ひ酔ふと、徹頭徹尾君の雑言だよ。云はうか、あいつは——と奴が君を指してだ、あいつはお久良を俺から横どりしたがつて、厭に俺達に親切がりやあがる——と、先づ斯うだ！」

第八は一息入れて、凝つと虚空を睨んだ。彼の鼻はあかつた。俺は、太吉を信じてゐるのだから、第八の突然の鬼のやうな真面目な表情が空々しかつた。俺は、脚下の野をまつしぐらに走つて來る汽車を見てゐた。

何をいつまでも重々しく第八は力み込んでゐるのか、嘘を考へるのは六ヶしいに違ひなからう！ と俺は思つて、それにしても仲々彼が言葉をつづけぬので、ちらりと容子を振り向いた。第八の表情は、怖ろしい仁王のおもむきで唇を嚙んだままだつた。迎合したと思はれてはならぬと俺は、直ぐに視線を反らして隣寸をすつた。

やがて俺は、異様にも第八の

「うむ……、う……、こいつは何うも……」

と、聞くも不思議な仰山な煩悶のうめき聲を感じた。俺は、唾を吐いて見向かうともしなかつ

た。

「こいつは、いけないッ！ しまったことになつたわい……」

第八のうめき聲は絶頂に達して、見ると、切腹した者のやうにドウと前にのめつた。彼は下腹を我武者羅に抱へて、虎のやうに吠えはじめた。俺は、うしろに廻つて抱へ起さなければならなかつた。のめらうとする第八の重さは、俺の兩腕の満身の力に逆つて強靱なバネであつた。

癲癩なのかしら？ と俺が呟くと、第八は激しくかぶりを振つた。意識は明瞭なのである。

「何うすれば好いんだらう？」

俺は途方に暮れた。

すると第八は唐松村へ降る櫟林の方を指さして、

「氷——氷をたのむ！」

と頭をさげるのだ。多分、櫟林の下の澤田のふちへ降つたら、氷は発見されるだらうから

「大いそぎで……」

と喚いた。彼の急病は、畢丸炎の勃發だつた。病名が判然すると俺は安心したので、まさかそれほど無情の腹もなかつたが

「俺は先を急ぐから失敬したいね。」

とからかつてやつた。第八は、悲鳴をあげて芝の上を轉がつた。幸ひと澤の日蔭の水溜りに薄氷が張り詰めてゐた。帽子が防水布なので、それに氷の破片を盛つて、引き戻ると、第八の發作は少々収まつたものか、坐つたかたちで俺の袋の上に腹逼つてゐた。然し激痛に襲はれる毎に彼は、こんにやくのやうに身悶えながら袋に獅噛みつくのであつた。

帽子を更到手拭ひにくるんで、俺は彼に手渡した。彼は

氷嚢を患部に結びつけ

るのであつたが、俺はその間に唐松へ走つて山駕籠を伴れて來ようとした。

「唐松までは一里もあるぢやないか。そんなに長い間を、俺ひとり斯んなに苦しんで、斯んなところに獨りで寝ては居られない。」

「もう、そつちを向いても好いかね？」

——三四時間手當をつづけて休息したら、どうにか動きはつくやうになるであらうから、それまで看病を頼むと第八は泣くのであつた。

凡そ三十分毎に、俺は氷嚢の端をつまんで澤へ降らなければならなかつた。

「唐松まで君の肩を借りて、今夜は唐松泊りとするんだね。」

第八は辛うじて立ちあがると俺の杖と肩をたよりにして出發した。降り坂になると第八は苦痛に堪へず俺の登山袋の上にのしかかった。小包は、しかし木製の箱だから安心だ！ と俺は思った。

平坦な道になると第八は稍々苦痛から救はれて、そろそろと太吉の蔭口をききはじめた。そして、もう今宵あたりは久良は親父に引つばられて狐岡に来てゐるだらう、さうと決まればあの女だつて茶屋の華やかさに汚れて、あんな目ツカチのことなどは即座に忘れるに相違ない、一層唐松で駕籠を雇つた上、一氣に花の山を越さうか——などと好い氣なことを呟いた。

横須賀にゐる妹（彼の妻の）のところで、當分彼の息子をあづかりたいと云つて寄越したのである。子供のない慎ましい夫婦暮しで、文學の本ばかり讀んでゐる妹であつた。彼の息子は、彼が轉地療養をすることになつたが、學校の都合で東京の親戚にのこつてゐた。

「トモ子のところなら安心だわ。トモ子はだらしがないけれど、ひとのことには親切だし、それに朝雄さんが責任の強い人だし。」

と彼の妻は落着いてゐた。

彼は半年ばかりの間、その町から五六里も離れた山奥の村で病養の日をおくり、ひとまづ母親のゐる町に立ち返つたのであるが、母を交へようとする家庭の雰囲気、もう好からうとおぼろ氣に期待してゐた彼の思惑とは凡そ掛け離れて、彼の膝にとりすがつてさめざめと涙を流す叔母があつたりして、聞くだに陰惨な雲行だつた。倒れかかつたやうな、あばら家で彼の母親は手ま

はりのものなどを賣りながら、寒々と息子の歸りを待つてゐるといふことをきいたので、彼は扶養の責任を感じ、何か生活の上で新しいわづかな希望をさへ覚えて立戻つたのだが、三日も経たぬうちに、やはり彼は放浪を決心しなければならなかつた。

「停車場に降りると、電話を掛けたんだよ、自分としては別段敷居の高いこともないんだが、俺の顔を見て、若しや、慌てて逃げ出すやうな人があると、此方が堪らなくてれ臭いでね。」

彼は銀行に勤めてゐる従弟を訪ねて、そんなことを云つた。——「まるつきり別の家の人が出る始末さ。」

「知らなかつたの、とつくに賣つてあることも——？」

「來て好かつたと思つたよ、その時俺は——噂にきいた通り阿母は瘦我慢をしてゐるのだと思つたから——」

「君なんか何うせ何處に住んだつて鬨はないんだらうからな。」

「そんなこともないんだけど、斯うなつた以上は阿母と離れては居られないと——」

彼は、云はば爽々しさを感じて、順當な息子らしい忠實に浸つてゐたのだから

「——喰ひ詰めるとは戻つて來るんだつて。」

そんな意味のことを母親が洩してゐると聞くと、呆氣にとられるだけだつた。何で、彼が戻つて來たかといふぐらゐのことは、母親にだつて十分に感ぜられてゐるし、若し眞實に喰ひ詰めたものなら、凡そ吾家になど戻れる筈もない吾家の状態は、何年も前から解りきつてゐるにも係はず、事更に彼を目して不良兒らしく吹聴せずには居られない母親の、胸中の矛盾を想像すると彼は息も絶え絶えになつた。彼は憂さ晴しの酒を飲めるやうな健康ではなかつたので、生死の間をさ迷ふやうな心持で、凝つと腕組みをしたまま思索ともつかぬものに耽つてゐると、母親は急にそこそと片づけごとをはじめたり、あちこちの箆笥に錠をおろして別の家に赴いたまま幾日でも歸らなかつた。彼は、これまでの自分の不しだらや我儘だつたことは、口にも出して詫び、ひたすら安穩を祈る心のみだつたが、沼氣のやうな重苦しさは日毎に深く、到底おちおちとは讀むことも書くことも適はぬので、幾日でも首を傾けて腕組みをしたまま、坐禪を組んでゐるに過ぎないのを、母親はやはり途方もない感違ひをしてゐるのであつた。——それにしても間もなく彼は、動かうにも動きがとれなくなつて、何か自分のもので抵當になるやうなものはないからうか？と、従弟に謀らざるを得なかつた。従弟は、弱つた苦笑を浮べてゐるだけだつた。未だ、手まはりの物までを賣るほどのこともなからうのに、彼の母親はどんな小さなものまでも金に換へて、遊び

歩いてゐるやうだと従弟は赤くなつて説明した。

「柄にもない了簡を出したのが、失敗だつたのか——」
と彼は吐息をついた。

彼は妻とふたりで、網をもつて蝶を追ひかけながら裏の山を越えたり、川べりを歩いたりした。
「俺たちも一先づ横須賀へ行かう。越すとか、逃げるとか、そんな風に思はず、ぶらりと、ただこのまま行かうかぢやないか。」

いつでも彼は、はつきりとしたことを口にするのが自分に對して無性におそろしく、わざとさり気なさうに無造作な行ひを執るのであつたが、結果として酷く大膽な行爲に化すのが習慣だつた。

「考へたら駄目なんだ。今日、午^{ひる}からでも鞆ひとつ持つただけで出かけようぢやないか。」

「それあ、もう御免だわ。」

彼の妻は、彼の胸を見透してゐた。今までだつて、何かにつけては軽々しさうに呟く彼の口車に乗つて、そのまま出かけると、いつまでも、どこまでも、遠いところの町々を迷ひめぐつて、それが二年三年もつづいて慘澹たる憂目を見せられるのに彼女はもう辟易してゐると、彼女は思

はず力をこめて

「行くんなら、もう決して二度とは歸らぬつもりで出よう。そんなら賛成するわ。」

と眼眈を逆立てた。彼女は、軽い亂視眼であるせむか、稍ともすると削りたつたやうな神経の險しさが露骨で、感情的だつた。

「何もさう、あたまから決めてかかることもなからうが——。」

「それがあなたの悪い癖なんだよ。——いいえ、それでなければ行かないまでだ。長男なら長男らしく、ちやんと飽くまでも頑張つたら好いちややないの。あなたが、云ふべきことを云はないから、いつまで経つても埒が明かないんぢやないか。」

彼女は、強く云ひ張るのであつた。

「頑張るとか、埒があくとか俺にとつては、そんな類ひのものぢやないんだ。云ふことなんて、在る筈もないぢやないか。」

「在るさ、山ほど在る筈よ。自然主義のやうなことを云つてゐられちや埒らないわ。自分だけは心からかも知れないが、あたしや浩一は何うなると思ふの——」

「……………」

彼は、時日に身を委ねるより他は、何の思案も浮かばなかつた。——眠れぬ夜が幾日となく續いた。母の不在も續いてゐた。二度とは歸らぬつもり——よしや、そんなことは口先では、これまでにしる彼こそ夢中になつて喚いたこともあるのだが、所詮何處の果に落ち延びようとも、母親の夢は、彼を永遠の放浪兒には成し難かつた。母親よりも先に自分が斃れるなどといふことはそれより他に考へる餘地もない、云ふべきことを思へばそれより他に何もなくなるのであつたが、彼はそんな夢にだけは必死になつて逆らはずには居られなかつた。彼は、最早道義的の範圍では、いささかも母親の所行を難じてはゐなかつた。心底からの憎しみではなしに、方便として息子を憎まうとする母親のこんなたる妄執が、彼はひたすら憐れであるのみであつた。

「どういふわけか知らないが、わたしの顔を見ると、あの子は不機嫌になるんですよ。八つあたりをするんですよ。だから、わたしは家をあけるんですよ。」

母親は隣家の年寄にさう云つて、家を出てゆくのであつた。黙つて、腕組みをしてゐるだけで、彼は別段母親に限つて特に憂鬱さうな顔を示す筈もなかつたが

「ふん、親を邪魔にして——立派だよ。」

などとも云ひ、苛めに歸つて來たに違ひない！と涙を滾したりした。

「私にはその涙がわからない。母さんが私の心持がわからないと同じやうに——」

さう云つた時には彼の眼には涙が滲んだ。

「議論は知りませんよ。」

——その涙がわかるとは彼は云へる筈もなかつたのである。

「だから私が出て行くより他に……」

「親をはふり出して——」

「何故、私が、苛めに歸つて來たなどと仰言るんですか？」

「……………」

母は憤つとして横を向いてゐた。——彼は、云ひ過ぎたと氣づいた。苛めたことになつてゐるには違ひないと彼は氣づいたが、まさかあやまるわけにも行かなかつた。——彼は、その膝にとり縋つて悲しんだ叔母の、逞ましい酔つ拂ひである伴れ合ひと、機嫌好く酒を酌み交したり、カフェーなどを歩き廻つたりすることが能はぬのが、結局母親と自分の間を險惡にしてゐるのは承知してゐるものの、そんな類ひのことを我慢してまで不氣味な團欒をつくる要はないと思ふばかりでなしに、夜更けになどなつて、歌などうたひながら泥酔を裝つて門口を叩く音を聞くと、彼

は全く夢中で裏口から逃げ出した。——妻から云へば、それが彼の意氣地なしの所以であり、母からは、彼が母親を苛めたといふ始末に他ならなかつた。

要は、ただ、寂しく、寒々と貧しく暮してゐる母親を想像したのが、彼のはやまりだつたに過ぎぬのである。

「もとから親に逆らふ氣持なんて全くありはしない。親が路頭に迷つてゐるわけではなかつたんだから、何も心配する必要もないわけだ。——もう一遍何處へでも出かけるんだ。此處で徒らに苦しんでゐられる場合ぢやないから。」

「ぢや、もう決して歸らないといふ決心がついたのね。」

妻は飽くまでも念を押すのであつた。「繰り返しは自分のためにもならないよ。」

彼は自分のためにおもふ餘地はなかつたけれど、斯んな類ひの極まりもない厭世觀に襲はれて破滅を期待するほど妻や子に對し無責任にはなれなかつた。——彼は、首だけでがくりとうなづき、凝つと武惡面をつくつてゐた。

「好く戻つて來て呉れたと、わたしは思つてゐるんだよ。兎角の噂を立てられて、酷く參つてゐるんだ。誤解しないで呉れよ。」

あの叔母の件れ合ひであるDが、彼をつかまへて云つたことがあつた。「長男の行方が知れないなんて、世間體が悪くつてね。」

「行方をくらませるわけぢやありませんよ。居所を不明にしたことだつてないでせう。」

「わたしが骨を折るから、此方で何か勤めでもして……」

「厭——。」

と彼は首を振つた。母親や叔父を、何故自分は何時まで経つても、一個の人として自由に傍觀することが出來ぬのかと彼は自分が嘆かれるだけであつた。

「母さんだつて、もう何時、何んなことがあるかも知れない——その時、息子が間に合はなかつたなんていふことになつたなら……」

「……………」

彼は自棄的な言葉などは吐けなかつた。さればと云つて、Dの忠言に従へるものではなかつた。

——Dがべろべろに酔つて町端れのカフェーで暴れ手もつけられぬからといふ知らせを受けたのだが、怕しくて途方に暮れてゐる、彼のいふことなら諾くから——と叔母が泣き込んで來た事もあつた。Dの家庭では風波が絶えぬさうだつた。

「迎へになんて行くことはありませんよ。」

その時彼の母親は、金ぶちの眼鏡越しに、彼と叔母を白眼みながら、口の端に冷笑を浮べてゐた。

「男めかけ——とは何だ！ 俺あ、あんな婆あは大嫌ひなんだぞう！」

彼が、そのカフェーに行つて見ると、Dはもう他人の顔も見境ひのつかぬ泥のやうな有様で、夢中でそんなことばかりを喚いてゐるのであつた。

彼の妻は、昔の外国行のトランクなどを持ち出して、不必要なものまで詰め込んだ。母親は、相變らず不在だつた。彼は、決して自分の氣のままや、見たくないものを見るのを厭うて出てゆくのではない——といふ意味のことを、最も穩かな言葉で書きのこして行かうとしてゐたが、ペン先が震へて文字が記せなかつた。——何も彼も思ひきり好く片づけてしまふのは、自分たちだけでは望ましいに違ひなかつたが、これきりもう歸つて来ないといふ風な、そして如何にもあきらめ強く憤然として飛びたつて行つたといふやうな有様を、あまりに歴然とのこしてゆくのは、そこに戻つて来た折の母親の何んな表情を想像して見ても、しんしんと胸が痛み、刺されるやうな

強迫観念におびやかされるばかりだつた。

「あれさへ歸つて来なければ何も騒ぎは起りはしないですよ。自分が行き詰るとは、騒動を起しに来るやうなもので……」

母親は屢々さういふことを他人に滾したが、このごろの彼は酒を飲むではなし、別段に誰に迷惑をかけるでもなく、云はるほどの落度もなかつた。凝つと考へ込んでゐる彼の様子を見て、悪謀みでも思案してゐるのだらう？ と母親が勝手な邪推を廻らす位のもので、おそらく非難の種も盡きてゐるだらう——と彼は思つたりした。

「それぢや、この標本だけは秋ちやんとところに預つて貰ふわ。」

妻は、リヤ・カアで本を運んで来る松尾といふ彼の友達の弟に頼んでゐた。町から東京へ通つてゐる大學生だつた。昆蟲の標本が四十箱あまりも溜つてゐて、折角、壁などに飾つてあるものまでを妻は残らず片づけようとするので

「それぐらゐは、そのまゝにして置いたつて——面倒ぢやないか。」

と彼は、箱の下の白くなつてゐる壁を見て呟いたが、妻は返事もしなかつた。

ともあれ、一日二日の間で、あたりはもう雜然たる引越状態に化してしまひ、散歩とか旅行と

かごまかしても居られなくなつたので、彼は費用の工面をするために東京の本屋を招んだのである。

「愚圖々々してゐちや駄目よ。氣が變られては堪らない——」

「——荷物が厭なんだよ。何とかならないものかな。」

「大きなことを云つてゐるわ。」

妻は、わらつて、棄てるものと、運ぶものを始末してゐるのであつたが、持つて行きたいものが見る見るうちに山となつた。

「屹度、不便はさせないから、荷物はやはり止めようや。」

「ちや、賣つてしまはう。」

と漸く彼女はあきらめた。——彼は、松尾の土藏造りの二階を數年前から借りてゐて、東京にゐる頃でも折々、其處に戻つて机に向つた。彼は別段藏書癖はなかつたが、昔外國の船に乗つてゐた亡父のあつめた本を讀むのは殊の他の興味を覚え、時には想念の修飾に役立つので、何處にも持運びはせず、其處の藏に收めて置いた。主に十九世紀末の出版になる有名でない冒險物語や科學書とか、洒落本などの類ひであつた。

「もう濟んだの？」

「いいえ、未だ未だ——」

松尾は畫集などをひろげて、ひとやすみしてゐた。いつにも明るみに出したことのない本の數々が、庭先の蓆の上に曝されて古い西洋紙の青葡萄のやうな香りを漂はせてゐた。

「僕もあとおしを手傳はう——」

「さうさう、昆蟲の本だけはとつておきたいんだが。」

妻はまた未練を起して、切手帳やらエハガキ・ブックを抜き出すうちに忽ち抱へきれなくなるのであつた。

「何處に持つて行くんだい？」

「弱つたな——やつぱり預けて置くより他はないか……」

「賣りたくないね……」

彼も次第にたつぷりな未練氣であつた。賣るといふことは大概彼は麻痺してゐて、家屋敷を棄てた時にも重苦しさは覺えなかつたのに、どういふものかこのときに限つて、胸の中の海綿が力一杯搾られるやうな息苦しさにさへ迫られた。自分であつめた本は、これまでの幾度かの嵐で大

半あとかたもなかつたが、天井裏や長持の中からなど、誰のものかも知れないやうな、ヒストリアンズ・ヒストリイとか、ブリタニカとか、古典的な西洋料理全集といふやうなものまで、あらゆる搔きあつめて見ると、それでもトラツクに一臺は十分の量だつた。

餘程彼の頭は衰弱してゐたのに相違なかつた——そんなものまでも棄て去らなければならぬかとおもふと、假面皮を剝がされるやうな痛さを覚え、裸になつたら、もうまるつきり何の智能もなく、キリギリスのやうな笛を吹きながらころりと野たれ死でもしてしまひさうな光景が髣髴としたり、又、はらわたを抉られた赤蛙の骨ひとつになつて水の上を泳いでゐる凄惨な姿が、そのままわが身の上に喻へられたりするかのやうな滑稽氣なデリウジョンになど驅られるのであつた。ズボンのポケットに手首を入れて、廊下をぶらぶらと行き戻りしながら、何氣なさを装うて吹いてゐる口笛の音までが、わらつてゐるもののやうに震へたりした。

「晩御飯はどこで喰べようかしら？」

妻は勝手もとまでも片づけてしまつた。

「どうせ、出發はあしたでせう。」

「秋ちゃんこの兄さん達も招んで、にぎやかに別れたいわ。何だか、あたしすっかり清々しち

やつたから、お酒でも飲んで見度いわ、何處が好いだらう。」

松尾と二人で標本の箱を積み重ねながら、晴れやかさうな妻が

「何か、考へはない？」

などと、ぼんやり腕を組んで庭先の涌水を眺めてゐる彼に呼びかけた。兄達が待つてゐるから吾家に来て呉れるやうにと松尾がすすめるのだつたが、私は當分松尾の兄にも會ひたくなかつた。

翌日、戸閉りの手傳ひに來た隣家の老婆は、家の中がまるで空家のやうにガランと片づいてゐるのを、わけもなく痛々しさうに眺めながら

「それで、お母さんは御存じなんですかね……」

と苦笑を浮かべながら彼の顔を見詰めるのであつた。

「——大體、知つてゐる筈です。」

「でも、もう一遍考へ直して、ともかく奥さんがお歸りになつてからお出かけになつたら何うなんです？」

いつもその年寄に留守を頼むのであつたが、それでも未だ彼は今も、また當分越して行くのだ

とは云ひ難かつた。本を持つて、旅行に行くのだ——などと酷く辻褃の合はぬことを云つた。母親も道具類までも手あたり次第に手放し、いま又息子が阿呆染みた顔をしてふらふらと戻り、腕組みばかりして首を曲げてゐたかとおもふと、やがて阿母の留守をねらつて賣立騒ぎを演じた揚句に逐電した——などといふ噂が立つたら、重ね重ね母親が見得を悪くするであらうと憂へずには居られなかつた。

「普段でも、母はこんなにもよくよくと此方の家をあけてゐるんでせうか？」

彼は、あかくなつてそんなことを訊ねた。どうやら荷物だけは、あまり他人の眼に觸れぬやうに片づけ終せたが、一日遅れて本屋が来たので、また朝から騒がなければならなかつた。

「まあ、たくさんな本だこと！」

年寄は彼への應へは忘れて、垣根の外の手へ松尾たちが運んでゆく本を眺めてゐた。いくら年寄だつて、そんなに澤山な本を持つて旅行になど行く奴があるものか！と想像したに違ひないのだ。

「あたしは、もう、ほんたうに二度とはここに歸りたくはないわ。」

年寄の家の午に招かれて、彼の妻は膳ごしらへなど手傳ひながら、いつの間にか笑ひ聲といつ

しよにそんなことを繰り返してゐるほど寛いでゐた。

「まあ、そんなことを仰言るもんぢやありませんわ。わたしのところだつて、あるといふのに……」

「えい、それあ、お婆さんのところへは来るわよ、汐千のじぶんが好いかしら——」

彼女は、トゲ立つのも急だつたが、晴れるのも速かで、遠足へでも赴く支度をいそいでゐるかのやうに、もう冗談などを云つてゐるらしかつた。——彼は、妻は遊びになら来るつもりなのかしら？と思つた。六十いくつかまで、隠れた女の生涯を保つて、今はもうひとりの身寄りともなく、町役場から扶養料を享けて暮してゐる年寄に、彼等は母親で充たされぬものを感じるやうに、繁々往來しては時には年寄の三味線などを聴いて陽氣になることがあつた。

破目一重の勝手もとから、途切れに洩れて来る彼女等のはなし聲が、否應なく彼の耳にひびいた。

……「大したものだな、人間つて、そんなものかしら？——くさつちやふわね。」

妻は、年寄のはなしに受け應へしながら、空しく、堪へきれぬ吐息をついてゐた。そして、思はず眞面目くさつて

「お婆さんなんて、如何だった？」
などと訊ねた。

「——からかつちや、厭ですよ！」

年寄は、わかものやうな聲をあげて笑ひ出した。

「いいえ……ほんたうに……冗談でなしに、あたしはそれを聞いて見たいのよ？」

「……………」

彼は、年寄のわらひ聲が、總毛だつほど薄氣味悪くて、飲物も食ひ物も到底喉へはとほりさうもなかつた。

「……肥つた人は——の知らず？」

「厭ですよ、そんなむきな顔で……まさかア——」

彼は聽いて居られなくなつて、慌てて兩掌でびつたりと耳を掩つた。肥つて、丈が低く、肩のいかつい母親の姿が、拂つても拂つても眼の先から散らうともしなかつた。——ハチスの紫の花が咲いてゐる疎らな生垣の上に、車に積まれてゆく本が次第に山となつて見えた。松尾が垣の間から顔を出して、何か云つたやうだつたが、ぎよろりと眼を見張つたまま耳を掩つたりしてゐる

彼の馬鹿な様子と顔を合せて、慌てて引込んだ。

やがて年寄と妻が勝手もとを引きあげて彼の傍らに坐つたが、未だ彼は耳から掌を放してゐなかつた。——二人の表情は、長閑に和んで、わらつたり、眼を見張つたりしてゐるのであつたが、どうもさつきの会話のつづきらしく、彼の戦く胸は決して収まらうとはしないのであつた。年寄が酌をすすめると、彼は慌てて盃をあげ、慌てて傾けたが、直ぐに耳を抑へてしまつた。——考へごとにはかり耽つてゐる男なんだからといふ風に、まはりの者は別段彼のそんな動作を不思議がらうともしなかつた。——妻が、また酒をすすめると、彼はそのまま首を振つてゐるだけだつた。妻と年寄の口の動くさまで、言葉を想像すると、突棒とか刺又とか鉞とかといふやうな責道具で拷問にかかつてゐる辛さであつた。何を白状するといふいはれもなく、白状したからと云つて放免せられる望みもなく、限りなく呪はれた運命の牢獄で彼は、眼を閉ぢて蹲まつてゐるのみだつた。熱つばい五體が、やがてふはりと宙に浮びあがつてゆくかとおもふと、それは暗闇の中で振子と化して等速運動を繰返してゐた。するうちに彼の乗つたブランコは悪魔の風を喰つて吹雪に目くらみ、天の極大から地の極小へと彈道を描いて揺れ動き、あはや腕がもぎれて混沌の奈邊へでも吹き飛んだかとおもふと、虚空に圓を劃したのみで、彼の魂はもとの位置にぶらさがつ

てゐた。

その時、年寄と妻の顔が同時に、はつといふ驚きの色を現して、垣根の向方へ注がれたので、車でも出發したのかな？ と彼も不圖手を放して見ると、眞つ晝間からもう一杯機嫌であるらしいが、

「いよう——やつてるな。ゆうべは松尾のところで大分はしやいださうぢやないか。ちつとは俺ともつき合はないかね。」

と云ひながら、よろよろとあがつて來た。そして、不自然もなく悦に入つた調子で

「おいおい、モダン・ガール——むつかしい顔は禁物だよ。どれどれ、俺も一杯仲間入りをさせて貰はうか、はつはつ……、何が何でも關やしないぢやないか、笑へ、笑へ、だ！」

などと彼の妻の手を握つたりした。

「叔父さん、あたし達はけふ出かけるつもりなのよ、これから——」

「それあ、手まはしだね。お別れの盃か、まあ機嫌よく……」

Dは餘程遅ましい自惚れをもつて、女と見ると相好を崩すのであつた。——彼は、終ひまで黙劇の見物人で居たかつたのだが、むかむかとする強い不快が込みあげて來て

「冗談といふことは、僕には考へられないんだ。ただ、その場だけを、酒を飲んで、笑つて済ませるといふデカダンには不幸にして陥入ることが能はないんだ。」

と突つかかつた。

「さうだ、その意氣で、大いに飲め——」

Dはそんな風に調子を合せて來た。

「何が、その意氣だい——ふざけるないッ。」

彼は思はず叫んで、盃を投げ飛ばした。

「俺には貴様の了簡がわからんぞ。何かにつけては腹ばかり立ててゐるが、一體それあ何うしたわけなんだい。ひとつ、靜かに聞かせて呉れないかね。」

「云ふことなんか、あるものか。」

「はつはつは——云ふことがなければ太平樂ぢやないか。出かけるといふのなら、誰も邪魔はせんよ。機嫌よく別れようぢやないか。」

「……墮落した人間を身近かに……」

「叔父さんの云ふ通りで好いのよ。」

と妻がさへぎつた。「うちぢや勉強が出来ないから出かけるだけのことなんですもの、誰のせいでもありません。」

「話せるね。」

Dは、にやにや笑ひながら彼の妻の方へ向きをかへた。「出發のところに、叔父さんが折好く現れたなんぞは、もつめの幸ひぢやないか、まあ、せいぜい、歩いて来るのも好からうさ。」

本を積み終へた車が、どうも有りがたうと云つて、走り出した。Dは、それをジロリと見ながら

「おい、秋ちゃんもあがつておいでよ。」

と、手持ぶさたになつた松尾を大きな聲で呼んだ。——「うちの主人公はね、容だい振つてばかりゐて仕方がないんだよ。誰が、何ういふことを云つても決して笑はぬといふんだから不思議ぢやないかね。」

彼は、Dに向つてゐる不機嫌さうな顔を友達に見られなくなつたので、そつとその場を抜け出して母屋の方へ立ち去つた。Dにとつたら、憂鬱さうな自分の姿などは單に滑稽に過ぎぬのかも知れないが、そのやうに無感覺な鈍重さは、想像も出来ぬと彼は戦いだ。

雨戸が閉つてゐても、八方から陽が洩れてゐる至んだ家の中はがらんとして明るかつた。もう彼等のものと云つては小箱ひとつもなく、綺麗に掃き清められて、まつたくの空家に等しかつた。隣家の年寄が佛壇に供へた線香の煙りが、微かに立ちこめてゐた。彼は、母親が戻つて来て、鳥のやうに立つて行つてしまつた自分たちのあとを見て、やはり胸の痛みを感じるであらうとおびやかされたのだつたが、不圖、事新しく自分を非難するであらう話題が、このガランとした家中を見るに及んでは泉のやうに盡きぬであらう——と思つた。自分だけがいつまでも悪者になつて母親の口から吹聴されるだけで済むならば——そんな風な途方もない慰めが湧きあがつた。決して自分をごまかさうとする小さな慰撫でもなく、辯護でもなく、むしろ云ひ得べくもない敬虔の念に似通うたものであつた。

たつた一つ物置の隅に思案にあまつて取り残して置いた父親のトランクを、彼はもう一度錠を下し直した。松尾の藏に預けて置かうと思ひ直したのであつた。その中には彼の亡父の、晩年に至るまでの日記や感想の類ひが詰つてゐた。母は、その箱の鍵の在所を知らずに、何か別の價値のあるものが入つてゐると思つてゐた。

「まあ、たうとう、あのトランクまで持出してしまつた。まるで、泥棒を手に持つたも同じで、

到底いつしよになど住める氣遣ひもありはしない。少しでも値打ちのありさうなものなら、何でも彼でも賣り飛ばさうとして、あんな眼つきをしてゐたに違ひない。」

彼は、母親のさういふ言葉を想像した。稍ともすれば、それに等しいことを今迄にしろ母親は口にして、實際では何んな類ひの非行を演じた^{たふし}驗^{けん}でもない彼を、憐れむべき不良兒と見なすのが癖だった。

「叔父さんがね、すっかり酔つ拂つてしまつて、皆なでこれから何處かへ出かけようと云つて諾かないのよ。」

とてもひとりの力では持ちあがらなかつたので、彼はトランクの上に腰をかけて、頭をかかへてゐると、妻が苦笑を浮べながら現れた。

「ちや、行つて來たら？」

「厭々——汚らしいつたらありはしない。厭なことを、べらべら喋舌つたりするんで、お婆さんまでがたうとう氣色を悪くしちやつて、とても憤つてゐるのよ。」

「秋ちゃんは？」

「とつくに逃げ出しちやつた。」

「……聞かないで救かつた！」

彼は深い溜息をついて首垂れた。

「どうしても、あなたにはなしたいことがあるんだつて——それにしても何だか變なのよ。ひどくだらしがなくつて、馬鹿なことを云つてるかとおもふと、急に涙なんか滾して、とてもやりきれないわ。」

「齡^{せい}のせみかね——。でも、酔つてゐられるのは困るな、尤も眞面目なら一層何もはなすことなんかありはしないが……」

Dの二十^{はち}になる娘は、母といつしよに近頃行方をくらませたさうだつた。その居所を、おそらく彼が承知してゐるのだらうと、Dは考へてゐたが、彼も知らなかつた。

「ともかく、ひとりちや歩かせられないのよ、あぶなくつて——でも、あたしはこんな晝日中おくつて行くのは何うしても厭なの、叔父さんが、そこを通ると長屋の人なんか冷かしたりするのよ、それをまた當人は平氣で、ふさげ返したりするんだもの、とても一緒になんか出られないよ。」

「俺におくつて貰ひたいの？」

「——厭？」

と妻は、心細さうに彼の顔いろを窺ふのであつた。「おぶつてでもやらなければ車にも乗れさうもないのに、外まで歩いて出ると云つて諾かないのよ。」

「何だ、そんならさうと、とつくに云へば好いのに——。平氣だ。おくつて行かう。」

彼は、氣輕に立ちあがつた。

山を降る一隊

「メートル係り。」

それが私の仕事である。

伐木場から橋で運ばれて来る木材の切り口を物差で計るのである。私は槍のやうに長い物差を振り廻して木口の寸法を計ると

「何メートル、何々……」

と非常に大きな聲で——相當の間隔のある事務所の窓口でそれを即座に記帳する係の者に一ト聲で易々と聞きとれる程度に、だから、それは兵卒に向つて照尺の度合を命令する指揮官の號令ほどの明確さと聲高さを要するのだ——叫ばなければならないのである。橋は間斷なく到着するので、私は指揮官のやうな號令を、のべつに叫び続けなければならないのである。

麓の村から二里も入る山奥の製材所の仕事である。

「このごろでは、すっかりあなたの聲はプロフェッショナルになつて来たわよ。」

「喉が吹つきれたと見えるな。」

「ほんとうよ。今でもあたし、帳簿をつけながら、それがあなたの聲だとは思へないことよ。その小さい姿さへ見なければ——」

「さうだらう。自分でも時には、うつとりとすることさへあるもの——」

窓口の記帳係は妻のこともあつた。私達は、或る特別の好意で短い期間をその事務所に雇つて貰つたのである。「特別の好意」といふものゝうちには、私が凡そそんな仕事には不向の酷く因循な文學青年であること、町の「だらしない放蕩兒であつたこと、腕力の皆無のこと、計算的觀念に乏しいこと」——その他様々の缺點を認められての上だつたから。

私は、爽快な健康に目醒めて晴れやかだつた。私は、慣れて、歌をうたふやうな快よさをもつて仕事にいそしめた。私は、寸法を呼びあげる時に末尾の上に切りあげてしまふので、寸法の大きさに依つて賃金の高まる櫓の連中の間では絶大な好評を拍され、尊敬された。

彼等の小屋の酒盛に招かれると、何時も私は上座に引きあげられて恭々しく盃をさされるのが慣らひであつた。私は自分の叫び聲ひとつで、彼等の酒盛を豊かにさせることが出来るのかと思

ふととても愉快だつた。

或晩あまりに花やかな酒盛の揚句、これから里に降つて夜會を催さうといふことに一決して私と妻の二人だけが恰も王様と後のやうに馬に乗せられて、炬火を先頭にして繰出した。何うして私がこんな素晴らしい衆望を荷つてゐるかといふ理由を知らない妻は、それを私の人格的な原因であるかのやうに誤解して、晴れやかな微笑をおくつた。彼女は翌朝の歸り途で獲物をしてやらうといつて、ライフル銃を斜に背おつたりした。

芝になつてゐる峠の絶頂に來ると、村里の灯が沖の漁火のやうに見渡された。そして、あたりは廣大な平野で恰度月が昇つたところだったので海原を見渡すやうであつた。

行列はそこに到達すると思はず脚をとめて炬火を振りかさしながら関の聲をあげた。そして携へてゐる酒徳利を順々に手渡して、ラツパ飲みを試みた。

私はほどよく酔の廻つてゐる眼で、馬上ゆたかにこの壯麗な原野を見渡すと、凱旋將軍の天に冲するばかりな意氣に炎えて、行列の歡呼と共にあらん限りの聲を擧げた。

降り道にかゝつて馬の蹄の音が調子よく鳴つた。里には一軒の二三人の酒注女ウヰイストレスがある居酒屋があるのだつたが、行列にとつてはそこが最上の歡樂場で、皆々もう調子をとつた小走りであつた。

その、節面白い行進を續けてゐる私の背後から妻の言葉が杜絶れ〜に私に傳はつた。
「何とかメートル何々……なんて、あなたはさつき山の上で呼んでゐたわね、皆なの聲と一緒に
時に——。大聲を出すといふ場合には何でも彼でも思はずッレが出てしまふぢやないの！、でも、
ほんとうに聲がよくなつたわ。あなたの聲だけが一段と冴え渡つて響いたわよ……偉いなあ！」
さうすると、また行列が鬨の聲をあげた。——

この文章の目的は、廣大な月夜原野を、何に浮かされたのかも知れない奇妙な一隊が有頂天
で行進して行くファンタスティックな光景を叙すだけで足り、その原因や結果は全く無用なのであ
る。

雪 景 色

瀧は、あまり創作（小説）のことばかり想つてゐるのが重苦しくなつたのでスケッチ箱をさげて散歩に出かけた。——石段を降つて、又ひよろ／＼と降つて行く海邊へ近い松林の中途であつた。彼は、風景よりも人通りを氣にして小徑を出はすれると頭につかえる松の倭林の中へ腰をかゝめて姿を没した。そして、丘の切れ端に来て月見草の間に胡坐をした。遙かの距離だが、灰色に光つてゐる砂地に風にもてあそばれてゐる風呂敷のやうなものが四つも五つも切りに堂々廻りをしてゐるので、何だらうと思つて見あげると低く大輪を描いて舞つてゐる鷗達の影であつた。暑い二日目の夕方、遠見の海のスケッチ板を仕上げて、だが瀧は、たゞポーツとしてぶらぶら歸つて來ると石段の下あたりで彼の行衛を探してゞもゐたらしくうろろしてゐる細君に出遇つた。

「今來たところなの？遊びに來たの？」

「鯉をつかまへるのを見に来たのよ、だけど、どうしてもつかまらないんだつて！」

「また……止めた方が好いんだがな。第一あんな泉水へ持つて行つたつて何の見栄えがするわけぢやなし、無惨に鼻を衝くばかりだらうがな——。」

「だつて、その爲にわざ／＼掘つたんぢやないの、小さいけれど割合に深いから大丈夫なんだつて！」

「あれは何處かに土が入用で寄んどころなく掘つた穴だつて話だぜ。——金魚や駄鯉が少しばかり入つてゐるらしいが、あれで丁度好いと思ふがね。」

「だつて此處に置いたつて仕様がないちやないの、誰かゞ此處に住むんなら未だしもだけれど、すつかり取り拂ひになつてやがて此處には何處とかの倉庫が建つんだつて話ぢやないの——それともあなたに何か考へでもあるの？」

「ないね——」と瀧は噓つた。

「ないんなら黙つてゐらつしやいよ、變ね、何でもそこにあるものゝことには妙に冷たさうに——。」

「……………」

「こゝも——。」と彼女は密柑の樹がくれになつてゐるその家を見あげながら、何といふこともなしに可笑しさうに云つた。「これでいよ／＼近いうちに片づくらいけれどあなたはつまらないでせう、一文にもならないんぢや！」

「思ひ出は、あまり、無い家だからな、これは——」瀧はそんなことを云つた。

「でも、もう、これであなたはさつぱりでせう、いよ／＼お終ひね。」

「さうだらうね——。」

「鯉が残つたわけか！」と彼女は獨語らしく呟いた。「焼けないと思へば此處の家には道具はなんにもないし——それでもあなたいくらかセンチメンタルな気分がしやしないこと、例へば鯉のことなんか就いてさ。」

「どういふわけか——」と瀧は生眞面目らしく沈着な態度でうなつた。「何の感じもない、吾ながら不安を覚える程——」

「自分の仕事にだん／＼身が入つて来るからでせう、結構だわ。」

「うむ。」

「一ト頃のやうに、此頃はあなたが愚痴を滾さないの——お母さんもそれが何より安心だと云

つて悦んでゐたわよ。」

「悦んでゐる！」

「安心させるのは結構だけれど、いくらお母さんの前だつて、どうせ誰もほんたうにしゃあしないけれどさ、あんまり空々しいことを云ふのは……どうも恐縮の態だわ、あたし達！ なみの空々しさぢやない、大變なケタ外れの夢見たいな途方もないこと……」

「どんなことを云つたか知ら、忘れた！ だけど僕は何も嘘は——」

「聴手の心を神妙にさせるやうな言葉は、あなたは知らないのね。いさ他人を慰めるやうなことを云ふ段になると、飛んでもない大きなことを——でもまあ好いツてさ、愚痴やふくれ顔よりは！」
別々の家に住んでゐるので遇ふと斯んなに彼女は能辯になるのかしら？ それとも何かの皮肉かしら？ などと溜は思つた。

「そんなこと如何でも好いのよ。それより勉強は出来て？ 随分熱心らしいわね。」

「半分位ひ——」と彼は何の顧慮もなさげに云ひ放つた。——彼は、この頃全くの架空的な物語の構想に没頭してゐた。ペンを執りさへすれば半分も何もない何時からでも一氣呵勢に書き綴れると思つてゐた。いや、書くことなどは懸念もしなかつた。どうかするとあまりに放縱な想ひに

眩惑されて重苦しくなることさへあつたが、ペンを執つて散文化してしまふことが、丁度他人と言葉を交へる時と同じやうに稚拙な文章が廻りくどかつたりして折角の感興にそぐはなかつた。

「それが済んだらほんたうに旅行に行く？」

「行つても好い。」

「行つても好い——ツて！ あなたから先に云ひ出したことぢやないのよ、もう先から。」

「だから行くよ。行きたいんだよ。」

意志と反對にそんな風に言葉のうけ渡しを間違へるのも彼の癖であつた。

「あたしが考へた處で關はないのね、でなければいつもの通り行かないことになつてしまふでせう。」

「まさか、今度は——。考へてお置きよ、何處も僕は知らないんだから何處だつて珍らしくて面白いに違ひない。住むつもりでも好い。」

「住むつもりは重ッ苦しいわね。それはさうと貸家も探さなければならぬわね、そのうちに。

また東京にする？」

「東京が好いね。」

「お母さんは何時一所になつても鬨はないと云つてゐるわよ、だけど彼處にあなたが來るとなる
と書齋がないでせう。」

「書齋がないことは今迄の東京生活で慣れてしまつたけれど。」

そんなことを話し會ひながら彼等が庭へ廻つて來ると、二人の鳶職が向ふ鉢巻の裸體で縁側に
腰を降してゐた。二人は汗を拭ひ茶をのみながら如何しても鯉がつまらないことを嘆じてゐた。

赧土色の水を見降して、直ぐに斯う濁つてしまやアがるんでね——などとAが腕をこまねくと

「駄目だ、すつかりおちけがついてしまやアがつてもう此方が一ト足入れると、キヤツ等の方で
先に暴れて濁してしまふんだもの！」とBが眉をひそめた。

「これちや、またあさつてにでもならなけれア元通りにあ澄むめえよ。」

「盲滅法にやつつけて見るか、もう一ト息！」

「どうせ斯うなれあ見當も何もあつたもんぢやねえからなあ。」

「手前え（註、一人稱也）が、追ひ込みの中へ、ツツべえちやツたんだから熱アねえや、けつツ
べたあ、どうでせ厭ツてえほどひつとりむいちやツたあエ！ 水がしみやあがるだんべえなあ？」

「思えの他これあアてえ變な仕事だぜえ、間拔け臭くつて骨を折らせること酷えや、俺ア頭も何

もガーンとしちやツたあエ！」

「商賣人を呼んで來なけれア駄目らしいな、無闇にフンづかめえれア好いで殺してしまつたひに
あ片なしだからなあ！」

Aのは見事な龍が背中一杯に見得を切り物凄いの巻雲が兩腕の先きまで翼を伸してゐる素晴らしい
ほりものだが、Bのは何故か仕上げまでに至らないうちに中止したのもらしく素地の皮膚に磐若
の面の輪廓だけが八分通り型どられてゐた。瀧はいつかBに何故それだけで中止したのかといふ
理由を訊ねて見ようかと思つたが、何となく悪い氣がして控えてしまつたことなどもあつた。

二人の干高い會話が、素通りをして奥の部屋でスケツチ箱の蓋をあけてゐた瀧の耳へ鮮やかに
聞えるのであつた。つかまへる！ つかまへる！——そんな彼等の言葉に關心を持たされた彼は
何か、さうしたところで魚などをつかまへる専門の商賣人があるんだな？ などと思つた、後に
なつてそれは金魚屋の意味であつたことに氣づいたけれど——。

「それ、描いて來たの？」

「うむ。」

さうすると細君は至極素直な調子で、

「未だ仕上らないんでせう。」と云つた。

瀧は、一寸と不自然に眼蓋をしばたゝいたが、努めて獨斷的に、

「いや、これでもう完成なんだ。」

さう云つて、腕組みをした上體を反らせながら凝つと微かな眼で畫面を覗めてゐた。

「それで？」と彼女は思はず咳いたらしかつた。そして、

「何だか、雪景色みたいだね。眞夏だといふのに——」と難じた。

「……………」

瀧は、急に顔色を上氣させて、何か口のうちで咳いた。細君は、悪るかつたのかしら？ と始めて氣附いた。

瀧は他人の言葉が氣になつたのは近頃珍らしかつた。——彼は、何といふこともなしに歪んだ神經に目醒めたかのやうに、不快な寒さに襲はれてしまつた。己れの眼が、明るみにある鼻の眼である！ そんな自嘲に陥つた。茫漠たる想ひにばかり酔つてゐる己れの存在が周圍の者の内心に如何な悲しみを與へてゐることだらう——そんな弱々しく尤もらしい屈托などにまで走つた。また、これまで自分が書いて來た現實風の小説も、そして己れが實に浮々と愚かな態度でこの世

に處して來たこと——それらが悉く拙劣な間違ひだらけな「雪景色」になつて、すると忽ち怖ろしい吹雪が起り、彼は目を瞑ち胸を伏せて、一散に白愷々の曠野に逃げ出さなければ居られなかつた、何にも見えない……………」

「あ……………」と、うめき聲を發する間もなく、見る間に牡丹の花薺程の大輪の罪深い雪屑がこんこんと五體を埋めてしまふのであつた。

「どうしたの？」

「……………」

「え？」

「おこつたんぢやないよ。——どうも田舎も好いが夕暮時は寂しくつて仕様がな！ 厭に蒸暑いなア、あれでも手傳つて見ようかしら！」彼は、事更に苦笑した。

「お止しなさいよ、——變だわ。」

「ヤッ、脚にぶつかりアがつた！」

「おゝッ！ 深え〜。」

薄暮の泥水の中で二人の俱利加羅紋々が狂氣の如く打ち騒いでゐる光景が、瀧の眼に不氣味に

映じた。

二

その日も彼等は日の暮れ合ひまで池の中で騒ぎ廻つてゐたが、また失敗だつた。彼等はこもこも無念の舌を鳴らしながら留守居の老夫婦の居間へ引きあげると吾家には戻らうともしないで酒盛りを始めた。

瀧は、ガランとした座敷の真ん中に上向ふに寝轉んで天井を眺めてゐた。晝間は天氣でさへあれば海へばかり通つて游泳に餘念がなかつた。……何といふこともなしに架空に韻文的な想ひに耽つてゐるのはいつまでも飽きなかつたが、金のことなどに氣づいて、ぼつぼつ仕事に取り掛らうかなど、呟いた。

「一氣呵勢！」

それが口癖のやうになつてゐた、さう思つては彼は他易く樂天的になつて、更に餘裕をつくつて「夢」の方へ没頭して來た。

そして彼は、うと／＼としながら容易に自分の部屋へ引き取らうとはしなかつた。瀧が書齋に定めてゐる部屋には、どうしたわけか電燈が引いてなかつた。増築が出来かゝつた儘で四五年来も投げ放しになつてゐたのだが、察するところ其處は佛間にでもする思案があつたらしかつた。彼は永い間の晝夜の轉換を取り戻すために、反つてそれを幸ひにして直ぐに引き込めるであらう電燈を其處だけは點さなかつた。そして晝間だけを、慣れないので極く稀であつたが海へも行かれない曇り日などに机に向つてゐた。夜にかゝる場合があると、半ば物數奇から行燈や燭臺の光りを頼りにして讀書をしたり、それこそ眞に愚かな「雪景色」のやうな物思ひに耽つたりした。

「御飯どうする？」

「此處で好いよ、何かおとりな？」

「日が暮れてしまつたからあたしを送りながら街まで行かないこと、稀には他所で何か喰べたいわ。それにお金ならあたしが今日少し位持つてゐるわよ。」

さうきくと瀧は立所に賛同した。細君は、向ふの酒盛りが次第に陽氣になつて、この次の鯉とりの日には別の手段を用ひて水を濁さないうちに手取り早く捕獲してしまふことにしよう、氣を永くして――

「濁ったひにやあ、何んチツたつて俺たちの手にやア負へねえなあ！ アツハツハ……」
「俺アもう、ふんとに癪に觸つて堪らねえ、斯うなれあもう意地づくだあ、水の澄むのなどを氣を永くして待つちやあ居られねえや。」

そんな威勢の好い聲に瀧が、さつきから身を傾けてゐるらしいのを氣にして、出掛けることを促したのであつた。自分が居なくなれば乾度瀧が彼等の酒盛りに加はるであらうことを彼女は懸念したのであつた。彼女は、瀧が機會さへあれば如何な畑違ひの人間とでも取り組んで馬鹿くしい騒ぎを演じる……それが想つても堪らないのであつた。

時間で来るバスを待つたが容易に來なかつたので彼等は、また旅のことなどを話し合ひながら月あかりで松並木の道を歩いてゐた。

「眞夏といふ感じは七月と八月の間のほんの一寸とした短い間のやうな氣がする。」

「さう云はれて見ると、八月に入ると夜などは秋の感じの方が強いわね——でも、そんな風に考へれば、冬だつて春だつてほんたうに頂上の日つてもものは幾日もないわね、一年中が夫々季節の移り變り見たやうなもので——」

「それアさうだね……」

「これからは、どうしたつて夜よ——あの部屋灯りがあれぢやいけないでせう？」

「好いちやないか、あの方が——」

「そんな氣分なんて——」

「いや、いくら秋になつたつて今度こそは俺は夜は絶対に止めるつもりだよ。」

話が止絶れると彼女は、帯の間からハーマニカを取り出して吹奏しながら歩いた。他に彼女の得意なものと云つては何もなかつたが、奇妙なことには彼女はそれが器用であつた。そして彼女は、中學生の弟などから時に應じて流行の曲を仕入れて來ては練習に熱心であつた。近頃は「アイ・アイ・アイ」とか「ヴァレンチア」とか「ライト・キャバレ」などといふ相當の難曲(?)を吹きこなした。

「東京マーチをやつて御覽な。」

「好きね、あなたあれ、昔の運動會が。——」

「……」「巧い！——ぢや、今度はアメリカヤン・ベトロール。」

「好く知つてゐるわね！——よしッ……」

「……」「巧い！ 巧い！ 俺には、それは口笛でも出來ない。……それでは、今度は——と！

何をやつて貰はうかな。」

甚だ爽やかな氣持で瀧が、次の曲目をあれこれと思案してゐると、細君は彼の註文が煩くでもなつたらしかつた、何も彼の求めに應じて取り出したわけではなかつたのだ、自由にひとりの徒然を慰めるつもりだつたのだ——そんな心地でもしたらしい彼女は投げやりな口調で

「ナンシー・リーは御免よ。」など、云つたかと思ふと瀧の知らない「森の鍛冶屋」の練習にとりかゝつた。

「何だ妙に機先を制しやがるな。誰がナンシー・リーをやつて呉れなんて云つた！」

實際何を聴かうか？ と迷ふ時に多くの曲目を知らない瀧が直ぐに到達するのは「ナンシー・リー」に違ひなかつた。

「失敬な、何んでも俺を、あれに決めてやがる。」

彼女は瀧の呟きごとなどは耳に入れぬらしかつた。

ナンシー・リーは瀧の亡くなつた親父が、彼等に覚えさせた「口笛」であつた。それは瀧の親父が、昔アメリカの學校にゐた頃暑中休暇を利用して捕鯨船に乗り込んだ時その水夫から聞き覺えたのだと云つた。甲板で働く水夫は稍ともすればナンシー・リーを口吟むのが習ひであると

云つた。捕鯨船が病みつきで、一時は何も彼も放擲してその水夫になつて働いたことがあるといふ父親は、海の話となると得意のあまり夢中になつて「船歌」を相の手にして身振り勇ましく追懐談を繰り返すのが好きだつた。

瀧は、「ナンシー・リー」の單純な朗らかさに加へて、獨特なそこはかとない一脈の甘苦い哀音が漂うてゐる韻律に酔はされて、今もなほそれが口笛を吹く時の習慣になつて遺されてゐた。瀧には、それ以外には殆んど口笛の習ひはなかつた。

彼女は、物哀しさの甘さが厭に露骨で、懸聲に似たコーラスの個所がワザとらしいといふ理由で、そしてアメリカ水夫の歌なんて古く俗っぽいといふ反趣味とで、瀧が吾知らず口笛で吹いてゐるのをきいても鼻についたと稱して耳をふさぐのであつた。帆綱を巻きあげ、舵を執り、マスに駆け昇る——そんな事實の行動に伴うて、伴奏される歌調が、力を惜まらずロープを巻きあげる腕に合せて思はず叫ぶ「コーラス」が、安逸の素面から口吟まれれば厭に露骨でワザとらしく見えるのも當然だが——太平洋の眞つた中で立ち働く者の胸のうち……そんなものは、都で生れ都でのみ育つた不良少女あがりの細君には夢にも想像し得ないに違ひない。

汐風に吹かれながら人通りの全く止絶えた松並木の道を抜けて、橋を渡り、町にさしかゝつた

時分には瀧は、孤獨感に堪えられぬ程の思ひに變つてゐた。——細君に對しては別段に怯える程の思ひがあつたわけでもなかつたが彼は、いつの間にか不氣嫌な饒舌家に變つてゐた。

「アラ、まあだ飲むの、殆んど飲まないつもりで來たのに！」

「金はいくらあるの」

「いくらだつて好いわよ。」

「よく金なんて持つてゐたな？」

「知らないわよ。」

「呉れッ！」

「……………」

「ぢや、借して呉れ。」

「厭——」

未だそんなレストランを始めない前から知つてゐた其處の女房がカーテンの隙間から顔を出して、

「奥さん、まかれちやいけませんよ。」と囁いた。

感心なのか、臆病なのか知らないが、金のことだと、この人は、はつきりしたアテがない限りはどんな借りも拵へない、だからいくら酔つたつて大丈夫だ——そんなやうな意味のことを細君は、誰に云ふともなしに呟きながら立ち上ると、彼に

「十圓しかなかつたんだよ。」と下唇をつき出して告げるや獨りでさつさつと出て行つてしまつた。

瀧が、大歌をうたひながら歸つて來ると松並木の中で、迎へに來たといふ提燈をさげた留守居の年寄に出遇つた。

……………若し此方に寄らないとすれば直ぐに其方へ歸つて行くに違ひない、一本道だから確かだ——と決めて、細君が電話をかけて寄したので——と年寄は云つた。

「おやく、提燈持が後になつてしまふ、何てまあお速い脚だらう！」

「……………」

——（さうだ、電話がある！）

「お聲が聞えましたぜえ！ あつしが石段を降りると間もなく——。」

「……………」

——（あれはたしかに俺のものだ！ どうして俺は斯んなことに気がつかなくつたんだらう！）
「奥さんにや敵はない、歸ると云はれれば、テツキリだ！」

「……………」

——（あれを賣らう、賣つた〜、そこで一番息がつけるといふものだ。）——「お爺さん、誰か電話を買ふ人はいないかしら？」

「それは、また、どうして？ 突然な！」

「あゝいふものは即座には賣れないものかしら？ 明日にでも？」

「何だか、さつぱり譯がわからない。」

「お爺さん——俺はね、今、六ヶ敷い仕事を持つてゐるんだよ、それはね……何アに、やれ、何時からやつたつて好いわけなんだがね、今の僕としてはね、出来るだけ頭の中に持ち應えてゐたいんだ、持ち應えツ放しになつてしまつても關はないんだ、面白いんだ！ 阿母や女房には解りませんよ。」

「……………」

「旅へ行きたいてえから——俺だつて、それも望ましいさ、だから、ぢや出掛けよう……そんな

君、切端詰つたところで、仕事をするなあ厭だ。」

「そんなこともないでせう。」

「賣つて呉れ、賣つて呉れ！ 電話ア賣つて呉れエ——。」

「……尤も、この先此方には電話はいりませんね。」

「明日〜！ おゝ、何といふこともなく気分が明るくなつた。——朝、あいつで起されるのからして堪らねえや。」

「それあだつて、あんたが奥さんにお頼みになつたからぢやありませんか。」

「清々と好いだらうな、あいつが毎朝掛つて來なくなつたら……。」

「不景氣でね、さう直ぐには賣れるか如何か？——だが、あんたあれが今急になくなつたら困りますぜ——奥さんと呼ば、それツ！ 何が喰ひたい、それツ！ 花火を買つて來い、それツ！

あつしがその度に飛び出したんぢや、あんたの間には合ひますまい、どうですかな？」

「居なくなつてしまふんだよ、僕ア、居なくなつてしまふんだから世話はないだらう、賣れると一緒に——、大金をふところにして——か？」

「いやはや、どうも好い御氣嫌で——。石段々のところは氣をつけて下さい、段々のところ、石

段のところ……未だく、もう少し先き、もう少し先き、まだ段々ちやありませんよ、おつそろしい大股で！ 危い腰つきだな！ ハヤどうも、まるでどうも、大雪の中でも歩いてゐるやうな——」。

三

萬職のAが、見物に來た金魚屋から鱈の値打ちを聞いたといふことを瀧に傳へた。誰す氣があれば、此方でつかまへて渡すなら、即座にこれ／＼の價で引きとりたいが、どうだらう？ といふ話を持ち込んだ。つかまへて見た上で、また數に準じて、値段は改めて相談しても好いが、「お賣りにならないでせうね、然しまあそれ位ひの値打ちのものなんですつてさ。」とAが瀧に告げた。四百圓前後といふ思はぬ高價な金額に瀧は舌を巻いた。

「賣る。」と彼は、はつきり點頭いた。

晩、瀧は、AとBを引き伴れて自動車を驅つて町の青樓へおしあがつた。不景氣で減多に絃の音もしない海邊寄りの茶屋の二階から、花々しい太鼓の音が打ち響いた。拍手の音が起り、トキ

の聲が涌きあがつた。

その翌日から石段の上の密柑の樹に取り巻かれた陰氣な家にはわかに普請でも始まつたかのやうな活氣を呈した。

意地づくだから二人だけでやりとほして見せる、一尾も残さず生捕りにする——その時日に應じて懸賞を附せられたAとBの眼は血走つてゐた。

「澄んだぞ！」

「叱ッ！」

「一番投網をやつて見ようか？」

「馬鹿、それア濁つた後で使ふんだよ。」

「餌でだまさうか。」

「とても今ちや餌では浮かねえよ。」

泥棒の忍び聲のやうな囁きで瀧は、目を醒すと一處に床を蹴つた。細君から電話が掛つて來る時分には彼は、酒徳利の載つた朝飯の膳を縁側近くに用意して、新しく取り寄せた箱根細工の脇側などに凭りかゝりながら深刻な眼つきでA・Bの活躍を視守つた。——瀧は、「頭の中へ持ち應

えてゐる六ヶ敷い仕事！」も「愉快な韻文的空想！」も「架空の物語！」も「眼の前の細事は一切没却した廣大無邊な無阿有の空に咽んでゐた筈の忘我の詩境！」も「ナンシー・リー」も「電話！」も「怖ろしい吹雪！」も「たゞ見る一面の雪景色！」も「……一氣呵勢！」も、何も彼も鷺毛の如く散亂して、ひたすら池を瞞め、獲物を待つ尊大なブルジョアであつた。

「來ないでもよろしい！ 邪魔になる。」

「……いゝの？」

「一切月末拂ひにして俺の分も一通り仕度をしてお置き。——煩いッ！」

ガチンと受話機を掛けると彼は、多忙な事務家のやうに元の座に取つて返した。

「腹ん逼ひになつて覗いてばかりゐたつて埒あ明くめえぜ、そんなに濁るのが怕けれあ、小ツチえのを先へねらつたらどうだい——やい、間抜け！ 何をボヤボヤしてやがるんだい、此方の隅にマダラが浮いてるぢやねえかよ！」などとAの口調を真似たかのやうに殺氣立つて横柄に叫んだり

「それッ！ ハツ手の下に寄つたぞ、投げろ、網！ 網！ 網！」と指揮の腕を勇ましく打ち振つたり

「チョッ！ 鈍えや／＼、あゝ、もうあんなに濁つてしまつたぢやないか。」と齒がみをして卓を叩いたり、

「こゝんところでしつかりやれ、まアだ臙ろ氣には姿が見えるだらう、硝子箱で覗いて見ろや、波がたつてゐる！」など、勢投したり、さうかと思ふと

「さあ／＼、諸君、もうお午だぜ、休み給へ／＼、今が今つかまへてしまはなければ何處へ逃げてしまふといふ相手ぢやない、慌てることはないよ——飯にしるや、辨當はね、何んでも好きなものをお爺さんにさう云つて取り寄せて貰ひなよ。」など、いふ世話も焼いた。

「影が見えてもひつこんでしまふんですからね、どうぞ此方へ、どうぞお上りになつて——」垣根の間から覗いてゐる見物人に向つて彼は、そんな注意も忘れずに無理に上段の見物席に招じ入れたりした。

見物人が加はつたりすると瀧の威勢は、應揚な殺伐に變つて

「濁つたら濁つたで好いちやないか、どんどん踏み込んで行つて引つかき廻せ！ 何アに、二つや三つ打ち殺したつて鬨やしないよ。」

そんな愚にもつかない氣前を示した。

——「そこんところを脚で追つて見ろ！」——「逃げた？ 今、たしかに追ひ込み中へ逃げ込んだぞ、入り口をふさいで見ろ。」

AとBは瀧の傀儡であるかのやうだつた。瀧は、のべつに喋舌り續けてゐた。

「駄目か、たしかに今、その中へ入つたと思つたんだがな？ ちや、もう一邊入り口をあけて今度は二人して手をつないで丹念に隅から隅を追つて、最後に、一ト息であの中へ追ひ込んでしまへ、その上での仕事としちやどうだい。」

……瀧は、いつの間にか急を要する境遇のことなどは忘れてしまつた。徒然のあまりに地引網を引かせて高見の見物をしてゐる、そんな遊興に耽つてゐる人のやうな、獲物なんぞは如何でも好い——わけもなく豊かな呑気な気分にもなつてしまつた。

いや／＼どんな種類の目醒しい遊興よりも、これはまた不思議な興味を惹く、何とまあ楽し氣な遊びことだらう——瀧は、眼をかすめて、春風にでも酔うたかのやうにうつら／＼として來た。

ギラギラとする眞晝の陽が、生ひ繁つた青葉の面に白く光つてゐた。寂と、もう水の上は泥濁のまゝで板のやうな平靜に返つてゐる。蟬の聲が焦げつくやうにかまびすしい。

戦ひに疲れた芝居の俠客に違ひないAが、槍に見紛ふ長柄の網にもたれて、八ツ手の間から半

身をのり出して、凝つと何も見えない泥水を賸めてゐる。對岸の石燈籠の傍では向ふ鉢巻のBが投げるばかりの姿勢で投網を抱えて、生人形になつてゐる。

ぶくん！ と水の上で泡が割れる。

「それッ！」といふAの懸聲もろともに、Bの腕からは網が投げられる……

「入つたらしいぞ！」

「チエッ！」

彼等は再び水の中へ躍り込むと、

「おゝ、深え／＼！」など、云ひながら、狐に化された圖のやうな格構で脚をふまへ腕を躍らせた。

「滅茶苦茶に叩き込め！」と瀧が命令する。

AとBが、躍り上がった魚のやうにも見える。噴水のやうなしぶきが雨のやうにバラバラと汀の河骨の葉を打つた。

「暑い時の水遊びだ！」とAが、テレたやうに呟いた。

「キヤツ！ ふくらッばきをこすツて行きやあがつた、えゝッ氣味が悪い！」とBが胸をさすつた。

「總攻撃！」とAが叫んで、二人はワツとばかりに追ひ込みの口へ詰め寄つた。

「あゝ、面白え〜。」と瀧は、大口をあいて手を打つた。

夕暮になると、二人は瀧の傍に来て

「この分ぢや、どうも——」

さう云つて頭をかいた。

「何アに、ゆつくりやつて貰はうよ、明日からあまり手荒なことは控へて、何とか考へ直さうぢやないか——折角の代物を痛めてしまふのも馬鹿〜しいからね。」

「どうも、日ばかりかゝつて——」

「そんな遠慮はいらないよ。満足につかまへさへすれば、心配はないんだ、一匹残らず賣つてしまふことに肚を決めた。」

「あつし達の面目がつぶれやしないでせうかね、あちらのお宅の方へ？」

「僕ア、主だよ、こゝの、こゝの、あつちのことなんて……おいッ！」と瀧は、何となく聲を落して「あのね、綺麗なお酌がゐたらう、びん子といふ——彼女がね、僕のことを好きだ！ と云つたぜ。僕ア、今日、一ン日彼女のことを考へてしまつた。ひとりで行くのは氣まりが悪いからさ、

つき合はねえか、未だ三度や四度行つたつて、みんな賣るとすれば、それならまだ餘ッ程あまるねえ？」

そんなことを云ひながら瀧は、精細な胸算用を始めた。

四

夜になると池のまはりには蛙の聲が高くなり、蟲の音などもするやうになつた。

石段の上の密柑の樹に取り巻かれた家を、新たに、いろ〜な種類の債権者が訪れてゐた。

AとBでは、出入の別荘から手おしポンプをかりて来て、一氣呵勢に池の水を干してしまはうといふ相談が一決した。

瀧は、年寄が弾く算盤の面を眺めてゐた。

「旅」が、瀧の書齋での「一氣——な」仕事だけを待つた。

土用半ばの曇り日が續いてゐた。波が立ち始めたといふ噂が傳へられた。

池のまはりには、火事場のやうな騒ぎであつた。年寄りを初め、自動車屋の集金人、料理屋の掛

け取り、女郎屋の「馬」、レストランの亭主、酒屋の番頭、待合の「お帳場」——それ等の人々が、各々双肌脱ぎになつてAの指揮にもとづきながら懸聲そろへてポンプのハンドルをあをつてゐた。無駄口一つ叩く者がなく一同は息を切つて眼前の仕事に没頭してゐた。上げては降し、降しては上げる満身の力と共に思はずほとばしる彼等の懸聲には恰もナンシー・リーのコーラスのやうな底力が籠り、颯爽の氣に満ちてゐた。

家根に向けてBが支へてゐる筒口からほとばしる泥水は、中空に小さな虹をふき、さんさんと碎けて雨になつて軒先をかすめた。

瀧は、ランプを買ひに行つて來ると云ひ遣して東京へ出かけて留守だつた。

岬の春霞

いつまでつゞくか、假寝の宿——わたしは、そのとき横須賀に置いた家族から離れて湘南電車で二駅離れた海ふちの宿にゐた。東京からあそびに来てゐる若い友達のRと、文學と人生のはなしに耽つてゐると、飛行機の爆音が、屋根裏にとどろいて、身を聳し、はなし聲を消して、ふたりは黙劇の人物のやうに、眼を視合せたり、上眼をつかつたりするだけだった。

窓に乗り出して、さかさまに見る海のやうな宵空を、こつちも宙返りでも演じてゐる如きおもひで見あげると、三體の戦闘機の、けふもまた凄まじい演習だった。銀色の翼が陽をうけて翻ると、金色に光つて、上を下へと、さながら三羽の金翅鳥が戯れてゐるかのやうなきらびやかな長閑さに見えた。白く煙つた碧い海原には、もはや春霞がたつて、観音崎の出鼻から現れたアメリカ航路の船が、その乗員たちも一勢に空の戦ひを見あげてゐるだらう、とおもはれるやうに鈍い船あしに見えた。島の向うに、台場のやうに浮んでゐるのは、航空母艦の赤城か、鳳翔なんだが、

大概もう今では一見して、それと判別出来るほどになつてゐるのに、明る過ぎる陽炎にさへぎられて、かたがが定かに見えぬのであつた。わたしは、一兩日中にRを案内して軍港見學の許可を乞ひ、鳥海、摩耶、愛宕その他を拜観する念願だつた。——艦隊は暮から冬へかけて一勢に碇を降し、街はいつも水兵の群で賑はつてゐた。

横濱へRと活動を観に行つて、夜更けに宿へ曲る薄暗い露路にさしかゝると、水兵がひとり垣根の傍らに倒れて、うめき聲をあげてゐるのが、月あかりに透かされた。そして、苦しい／＼と唸るので、わたしは慌てゝ宿からサイダーをもらつて介抱すると、やがて泥酔の彼は、バネ仕掛のやうに飛びあがつて、不動の姿勢と同時に、殿めしい舉手の禮を保つのであつた。彼の兩眼には涙が溜つてゐたが、いつまでも姿勢をくづさずに相手の顔を視詰めてゐるので、わたしは、困

り
「しつかり、歩け！」

といひ棄てゝ立ち去つた。

「ハッ、氣をつけるでありますッ！」

彼は明確に應へたが、やがてわたしの後ろ姿が闇に消えると、歩調とれ！のやうな重い、しつ

かりした登音が、わたしの耳に聞えた。わたしは露路に立つて、その登音が聞えなくなるまで耳をそばだてゝゐたが、やがてそれは驅足に變つた。何か、わたしはもう、はつきりと春を感じるのであつた。

「上官だと、おもつたんですよ。」

Rは、わたしの口眞似をした。わたしは、決して、わざとそんな口を利くわけではなかつたのだが、しつかりせんかッ！とか、おいッ、こらッ、酒に飲まれて何うなるものか！など、眞似るRのいふことを聞くと、なるほど自分が變な奴！だと思はれ、帽子もかむつてゐなかつた五分刈あたまを撫でた。わたしは紺の海軍マントを著てゐた。

翌晚、食膳を前にするとわたしはいつものやうに飲まうか止さうか、とそれは恰も哲學的な無限大と無限小の迷妄に囚はれて、凝つと坐禪を組んでゐると大田黒吉郎といふ名刺の人に訪ねられた。軍艦△△乗組一等水兵で、ゆうべの人物ださうだつたが、わたしは顔に見覚えがなかつた。

大田黒君はシトロンを三本贈った。

「静坐法に耽つて居られるんですか？」

「いゝや、酒にやられて半年ばかり静養してゐるんですが、晩飯時が難關でな……」

とわたしは唸つた。その時わたしは、自分がいたく官僚的な口調に變つてゐるのは、ファシズムに憧れたといふよりも、飲みたい酒が飲めぬための力瘤が、飛んだ現象を呈してゐるのだとはじめて悟つた。

だが、わたしと大田黒君とは間もなく乾盃の歌をうたつてしまつた。

「これ、今、その街角で描かせたんだが記念に置いて行きたいんです。」

かれは畫學紙に描いた似顔畫を、わたしに贈りたがつた。

「ありがたう——」

といつてわたしは、あまり拙劣過ぎる似顔畫なので眺める氣もなく、机の上にほうり出して、改めて當人の顔を見ると、やゝ面長で鼻筋がとほり、映畫俳優の中野英治を髣髴させるかのやうな爽快な可憐味に富んでゐた。そしてかれは、わたしの寫眞を欲しい、ブックに貼りつけて置きたいので——などといひ出した。わたしが、持合せのないといふことをいふと

「ぢや、大瀧町まで行つて並んで寫眞を撮らう、是非たのむ——」

といつて諸かなかつた。水兵は寫眞を寫すのが好きだと聞いたが、なるほど——とわたしはおもつた。街の似顔畫屋も、いつも水兵の客で繁昌してゐた。

「寫眞屋へ行つたら、しやんとなれるでありますか——背おふでありますか？」

「貴様、戀人でもあるんぢやろ、ゆうべ、貴様の眼には涙が溜つてゐたぞ、別れが惜しまれるのか、こらッ！」

「こくな、こやつ——海ゆかば、水つくかばね——聞かさうか……」

わたしたちは、腕をとり合ひ、酔つた聲をあげながら、西にありてふビクトリイ——などと歌ひながら、街へ出た。Rは、舌打ちをして寝てしまつた。

街の酒場で、わたしは大田黒君から、上田五郎、武藤春雄といふ二人の水友に紹介された。

「大田黒は泣き上戸なのです。しかし、こやつは感心なことには酒はいくらでも飲むんだが、他

の道樂はせんといふ模範兵であります。」

上田君がわたしにこんなことを説明すると、かたはらから武藤君が

「おい、上田、止さんか——大田黒の顔を見い！」

とたしなめた。

「それッ、はじまつた〜！」

と上田君がからかふと、大田黒君は、もう卓子に突つ伏して顔もあげなかつた。

「何んにも理由なんて、ないんであります。何か、斯う、嬉しいんだか、悲しいんだか、わからないうちもやめたものが胸に一杯で——」

たうとうその晩、上田君と大田黒君とがわたしの宿に、飲み明すことになつて街を引きあげて来る途中、今度は妙にしつかりとしてゐるわたしの肩に大田黒君がつかまつて、月を見あげながら呟くのであつた。山の上にかゝつた下弦の月が、薄霧のなかに暈を描き、わたしたちは別れしなに武藤君が夫々の手につかませたフリジアの花束を持つてゐた。

「あなたは、ゆうべはじめてお目にかゝつた時、何だかわたしは、ひとのそんな氣持が、はつきりとわかるやうな人に見えて……」

「大田黒、酔つてるぞ、氣をつけい。」

上田君がそばからかれの肩をたゝいた。

「ぢや、上官だとおもつたわけぢやなかつたんだね。」

「まさか——であります。」

「大田黒水兵は——」

と上田君が、おどけた口調で、いひかけたが、ふと白けたわらひにまぎれて——「親孝行なのであります。たゞ、それだけのことであります。こゝろみに、谷の灯ともしごろ——といふ唄を歌つて御覽なさい……たちまち、かれの兩眼からは瀧の涙が流れ落ちるであります。」

などと、からかつた。——大田黒君は、いつの間にか、わたしの手を握つてゐた。そして、宿の者から聞いて、大分前からわたしのことを知つてゐた、そして、小説家としては、それよりも前から知つてゐたが、まさか、こんな若いやうな男ではなからうと想像してゐた——などといふのであつたが、それは酔つたまぎれの冗談でもあるらしかつた。

「しつかりせいッ……」

と、わたしは何といふこともなしに、ふりもぎつて、例の官僚的な聲でうなつた。そして、更に

「こらッ、しつかり歩かんか！」

などと命令した。上田君が聲を立て、わらつたが、大田黒君ははつと立ち直つたかとおもふと、歩調をとつて先へすゝんだ。そして、わたしの宿に曲る露路にさしかゝつても脇眼も觸らないので、わたしが聲をかけようとする

「そつと、しといてやらうよ。あの男は、喧嘩をするか、泣くかしないと、酔つたときは人に別れにくいといふ癖なんだよ。わざと、あんな風にしてゐるんだから……」

と上田君が、さゝやくのであつた。で、わたしはその後ろ姿を、ぼんやりと眺めてゐると、次第にその歩は速くなつて、やがて、駈け足となつて闇に消えた。手にしてゐる白い花が、かれの蹠音に伴はれて、蝶々のやうにチラチラとわたしの眼にうつつた。

それから、四五日たつて、大田黒君の肩に腕を載せてゐるわたしたちの寫真がとゞいて來たの

で、宿のものにかれの在否をたづねて貰ふと、艦隊はきのふの午、出航したといふことであつた。「——また歸つて來る時分には、僕はもう此處にゐないかも知れないし、君は折角だつたが、僕との軍艦見物を仕損つたね。」

わたしは、大田黒君の所屬艦に宛名を書きながらRにいつた。街に出ると水兵の群はまばらだつた。

あの寫真を見ても、何故ともなくわたしは、その水兵がもうまるで夢の中の人物のやうに、見えもないうやうな感じで、道などで出遇つても氣づきさうもなかつた。それよりも、たゞ、薄闇の中に飛んでゐた蝶のやうな花のことだけが、あざやかであるばかりで、寫真は立去る時、宿に忘れて來たが、取り戻しに行かうといふほどの氣もおこらなかつた。

わたしは、春霞を衝いて沖合ひを走つてゆく艦隊の出動の光景を見損つたのを残念がつてゐた。何故か、わたしは、たゞ、きさらぎの、淡い陽炎の中に煙りをあげて、遠方への巡航へ出向いて行く艦の姿を望遠したかつたのみである。艦隊の出動は、いつも市民の知らぬ間であるほど急なのが慣ひださうである。——海には海兵團のボートが木の葉のやうに浮び、空には飛行機が戦闘の演習をつゞけてゐるが、母艦は艦隊所屬であつたから、それらは艦上機ではない。岬は、とこ

剝

製

るところを露にさへぎられて、島のやうに、點々と見えた。艦隊の歸航は、青葉の頃であるとき
いた。

戦闘機の爆音は屋根裏にとどろいてゐる。

"I chatter, chatter, as I flow

To join the brimming river,

For men may come and men may go,

But I go on for ever"

.....

うたでもうたつてゐないと絶え入りさうなので、私はあたりの物音を恐れながら、聴心器のゴム管で耳をおさへ、自分で自分の鼓動に注意するのであつたが、やがては川の流れの無阿有に病らひもなく夢もなく消えてしまひさうだつた。

長い間のあらくれた放浪生活のなかで、私の夢は母を慕ふて蒼さめる夜が多かつた。母の許へ歸らねばならぬと考へた。

私は心悸亢進症の患者であつた。その回復を待つて出發のつもりなのに、それらの蒼ざめた夜の壓迫は、その症状に喰しい拍車をかけて止め度がなかつた。

私は僂僂の格構で、空々しく、鳥の標本をつくるより他に能がなかつた。

池のふちで氣たゞましい鶯鳥の悲鳴と同時に銃聲が響きわたつたので、私は慥えかけの鳥の剝製を抱えたまゝ窓から乗り出して見ると、唱（妻）が川縁の猫柳の根元を狙つてゐた。

「當らなかつたの？」

「……………」

唱は見向きもしなかつた。颯の襲來が頻繁で、彼女の飼鳥は屢々命を奪はれた。颯は鳥の血をすゝつて、亡骸ばかりを棄て、行くのであつた。私はいつもそれを拾ひあげて剝製につくつた。

私の本棚には一冊の書物もなくなつて、鶉、山鳥、カケス、鶉、雉、鴉、雀、カハセミ等の標本が翼を並べた。本棚にも並べきれなくなつた木兎や鴉や鶉、鶯鳥の類ひが床の上に群がつて、脚の踏場もなかつた。唱は、カシミ網や鶉で小鳥を獲つて、鶉小屋の隣りに雑居の小屋を建てた。

鶉は止り木に縛つて桑畑の縁に立て、トキをつくらせると仲間が降りて來て鶉にかゝつた。木兎と鶉の巢は水車番の柚太が探してきたものだが、唱は子鶉を育て、木兎はその肩にとまるほど狎

れてゐた。子鶉は水仕事をする唱のあとを鶯鳥達といつしよに追ひまはしてゐた。山鳥、鶉、雉等は柚太が打つて來るのだが、私は肉食を執ると動悸が激しくなるからと拒んで、自分のわけ前だけを標本に造つてゐた。

柚太は左が義眼であつて、狙ひをつける時にも決してそれが閉ぢられぬのを何故か非常にきまり悪るがつて、他人の傍らでは決して鐵砲を執らぬのである。颯おどしに空砲を打つて呉れと唱が頼むのだが、それさへあかい顔をして柚太は諾かなかつた。唱は柚太の舊式のライフル銃に實弾を裝填して、小鳥共の仇敵を狙つてゐたが、不意を打たれた私が病ひの部屋で仰天するであらうことをおもふと、氣遅れがしてならぬと滾した。——然し私は、鐵砲の音には驚かなくなつた。私は、返つて颯に斃される鳥の亡骸を待つてゐた。

「また、やられたな。敵は、まんまと退參か——。それはもう駄目だよ。こつちへほうつてお呉れよ。」

「爪にかけられたゞけだから治るだらう。」

唱は脚元の鶯鳥を抱きあげて、傷ついた胸へ耳をおしあてゝゐた。

「治るものか、止せ〜！」

私は切りと腕を差し伸したが、唱は憤つとして鳥を抱いたまま、圍爐裡端へ引きあげた。鐵砲の音や鳥の悲鳴が起る毎に、待ち構えてゐるかのやうに窓から首を突き出す私の姿は、恰で颯のやうに憎々しいと唱はかねがね不平さうだつた。

2

唱の見張りが利いて、颯の襲來は次第に遠ざかつてゐた。唱は爐端の天井から揺り籠をぶらさげて鷺鳥の容體を注意してゐた。

池には氷が張り詰めて、颯は鯉を狙ふことも適はなかつた。——剝製の仕事が止絶えると、私はもう全くの木偶であつて屋根裏の寢臺に仰向いたまゝ、われとわが不氣味な胸の鼓動に耳を傾けるだけだつた。生と死の境界が朦朧として、私は恰もあまりに幸福な夢に襲はれた者がそつと自分の頬を掴つて見る如くに、鴉の羽根などを拾ひあげて頤の下や腋の下を擦つて見ると、やはり堪らぬ擦感の衝動に襲はれて、命を認識した。

私は生來擦感異常であつた。腋の下や膝に自分の指先が觸れることを想像しても、忽ち全

身が息苦しく蠢動するのが癖だつた。子供の時代に聞いたお伽噺のうちで私が最も奇怪な戦きに襲はれて蒼ざめたのは、悪い狐が子供を浚つてゆくと、あの房々としてた尻で子供のからだぢうを擦つて擦つて、擦り殺すといふ物語だつた。

一本の鴉の羽根の先で、私は死の夢からげらげらと目醒めた。危うく寢臺から轉落しかゝつて、再び心悸の激動に驚きながら、凝つと石に化した。

薄暗い屋根裏だつた。窓の先には柳と糸杉が枝を張つて、麥袋をつなぎ合せたカーテンを降すと晝間でもランプが必要だつた。北向きの、その小さな窓が一つと、ピラミッド型に歪んだ天井裏に二尺四方のあかりとりが開いたが、そんな小さな窓から空を仰ぐと、わけても憐れに満ちた放浪の煙りがもやもやとして、細々と空へ立ち昇つてゆく思ひが切なく、私は細引を曳いて窓板を閉ちると戸立蜘蛛の有様で穴の底に瞑目するだけだつた。北向きの窓には蝶番ひをつけた古雨戸が横になつて、眼上に外へ向つて開かれたが、私はカーテンを降し放しでランプを燈しつゞけた。晝間のランプは、白々しく、薄暗く、米搗きの濛々たる埃りに煙つて、沼底の觀だつた。

水車が回りはぢめると小屋全體が物々しい胴震ひをはぢめて、私のまはりの標本類は小刻みの脚踏みでこと／＼と踊り出した。この前に颯に斃された鷺鳥の雄を私は迂滑にも大變前のめりに

造り過ぎたので、それは矢鱈と轉倒した。

此度の雌が、どうせ唱の手當の甲斐もなく息を引きとつたら、これと一對にして、しつかりと厚板の上に据えてやらう——などとつぶやきながら私は如何にもそんなガラクタ標本を大事がつて慌てゝ起し直したり、また鳴動が靜まるまで、しつかりと胸に抱き寄せたりした。

斯んな薄暗がりの鳥屋のやうな屋根裏で、鴉の羽音に驚いて奇聲をあげたり、腳踏みをする鳥共の中で、むつくりとしてゐる私の有様は啄木鳥とも木兎とも云ひやうもなく、てもなくあたりの標本類の一種と見違へる——と唱と袖太は薄氣味悪るがった。實際、水車が廻つてゐるときにベッドに起きあがつて驚鳥などを抱えてゐる私の坐像は、バネの上だつたからまはりの鳥共よりも稍面白氣に階調的な震動律をもつて弾んでゐた。

窓の下は緩い流れであるが、水車の翼に叩かれた水煙りが濛々と窓掛けに降りかゝつて、麗らかな陽りの中から狐雨を吹き寄せた。

この病態のために水車の作業を短縮するわけにもゆかなかつたから、それらの震動に堪えられなくなると、私はその病體を厩の眞向ひにあたる納屋の屋根裏に移すのであつた。

母のまぼろしは、私の夢の中で日々に鮮やかだつた。——私は、崖と崖と、坂と坂とが重複する遙かの村道を見あげて、深い嘆息を洩すばかりだつた。

「せめて馬に乗れる日までを待たう。」

私は厩の前に佇むと、Zの鼻面を撫でながら、

「その日が來たら、憐れな病人をそつと運び出して呉れよ。」などと厭に科白が、つた鼻聲で囁くのであつた。何うも私はその頃、人間の前だとわけもなく臆病になつて碌々口も利けなかつたせゐか、稍ともすると畜生をつかまへて、とりとめもない愚痴を滾したり、悲しさうな役者の眞似を演じたりした。

ところがZは魯鈍な眼を開くと、恰も、私が糧食をすゝめに現れた者ではなかつたか、と鬱陶しがつて、物憂氣な鼻腔から見ても物々しい荒い溜息を吐き出すだけで、眼ばたき一つでさへ私の科白には従順の見得を示しもしなかつた。私の胸は二本の棒となつて突つかゝつて來るその鼻息の厭力にも堪えられなかつた。

この老牡馬は、私が健康であつたころ稍ともすればその先天的な怠惰性と貪婪性を憎んで手荒な扱ひを執つたのを、忘れもしないかのやうに、今更のやうに極めて弱々しく憐れ氣な科白を吐く私を、まるで鼻の先きであしらつた。私としても、奴に對するさまざま過去の所業を思ひ合せると、随分と己れの今の物腰が臆面もなくわざとらしくあつたが、近寄る毎に新しく奴の享け應へのなさ加減には業を責やされた。Zは人の姿さへ見れば何邊でも糧食を欲しがるのみで、糧食を與へぬ者と見ると、如何程その者の顔に慈愛の情が充ちてゐようとも、無性に不氣嫌でいさゝかでも狎れたがらなかつた。私はそれらの駄馬の性からわづかばかりでも自分の乗用に適する方向へ今から奴の性情を矯正したがつてゐるのだが、飽くまでも因業だつた。

「何といふ賤しい駄馬だらう。」

私は奴の醜い嘶きに打たれると、折角の憐れな芝居も臺なしにされたテレ臭さで、嘔吐を覺えさうに顔を擧めた。左うなると私も亦負けぬ意地惡る氣をもつて、恰度奴が秣草を喰ひ飽きて、ふて寝の夢に陥入つたところを見はからつて、そつと鴉の羽根で泥のやうな鼻腔を挿つてやつた。奴は非常な臆病馬で、その度毎に悲鳴をあげて飛びあがるのであつた。敏感といふわけではなくて、堪え性のない仰山振りなのである。奴の種馬も、もとく此處の労働馬だつたが、虻が一匹鼻面

にとまつたのを大騒ぎして、川へ飛び込んで溺死した親である。——Zは、化物がわらふやうな聲をたて、扉口の横木を無茶苦茶に蹴り破らうとするのであつた。何うせもう狎れる氣遣ひはありはしない——私は、あきらめて、奴の嘶きに、好い氣味だ！と憎々顔をおくり、また眠らうとすると、拔足をもつて忍び寄つて、さんさんと挿つてやつた。

紫が、つた空であつた。鵬の聲が鋭かつた。歩くものゝ蹠では霜柱が崩れ、山燒きの煙りが遙かになびき渡つてゐた。——うへえッ——といふやうな、くしやみともつかぬ濁音を放つて、空へ向けるZの鼻息の煙りが軒を隔てた私の窓からも、鮮やかな白さで天へ消えてゆく象がはつきりと窺はれた。

「惡るいたづらは止めてお呉れよ。」

唱は私の窓へ向つて、拳を示した。そしてZの鼻面を靜かに撫でると、騒々しい喚きは次第に収まるのであつた。唱は小鳥や動物を狎らす腕が先天的だつた。そして屢々その要領を私に告げたが、私とZの間は日増に仇敵とさへ化しさうであつた。

私は唱とZのなれ／＼しさを窓の外にきいて、卑怯なる惡人のやうに猜疑の眼などをしばたゝきながら、手持ぶさたになつて枕元の書物を翻したりした。誰の書物ともなく、私の傍らには二

三冊の古い本が散らかつてゐるだけだつた。

一冊の書物は小さな遺傳學書だつた。それには、 $\Gamma + \Delta + \text{E} + \text{F} + \text{G} + \text{H}$ — Λ はその先代より、その個體性情の $\frac{1}{2}$ を、先々代より $\frac{1}{4}$ ……をといふ順序の偶數率をもつて遺傳さるといふゴルトンの法則や、また「優性」「劣性」の實驗説をもつて新法則を樹立してゐるメンデルの報告を詳さに記載してゐた。ゴルトン法に従つて私は私の知るかぎりの先々代を想像すると、痴愚と滑稽と猪勇と怯懦とが $\frac{1}{2}$ 及び $\frac{1}{4}$ の配率をもつて露はに算えられた。更にメンデルリズムに従つて比較すると、いかにもZや自分の如き存在は「劣性」の標本として歴起たるものであるのを知らしめられた。

“I chatter, chatter, as I flow……” 私は窓下の流れの音に耳を傾けながら、悒鬱だつた。

4

母からの手紙は、私の先代と先々代の法會の營みに關して、長男たる私の歸來を促すものであつた。——私は、母の肩を按摩してゐる夢を見てゐるところであつた。放浪兒といふものゝ、その母親を慕ふ心情が何か云ひ得ようもない神祕的な無色の山向ふで、キラキラとする雨に打たれ

てゐた。

……海の見える窓の下で私は、切りと母の肩を按んでゐるのだ。私達は何か餘程の楽しい思ひ出に就いて語り合つてゐるらしかつた。どんな話題なのか眼を醒すと同時に私は忘れたが、ぼんやりと窓の向方の海を眺めてゐると、見霞むほどの麗らかな海原なのに、思ひがけなくも見るからにさゝやかな波がしらが何處までも、もくもくと逼り出して來る津波と變じてゐて、あはや私達の窓下までもおし寄せて來るのであつた。私は、たゞもうこれは……と驚くばかりで、漸く母親を抱きあげようとする、それはいつの間にか青銅の坐像と化してゐて、斷じて私の力では持ちあがらぬのだ。それなのに母は、はつきりと口を利いて、何をお前はそんなに慌てゐるのかといふやうなことを呟きながら切りと笑つてゐるのだ。

「お母さん、お母さん……」

そんな自分の叫び聲で私は目を醒した。嵐のやうな胸のさわめきだつた。

自分に母を慕ふが如き心の動くさへ私は、異様な冷汗を絞らるゝ思ひであり、決して當り前の口を利いたこともない白々しさで、もう三四年あまりも親の姿に接する折もなく、不孝者のそしりさへ平氣で享け流してゐるにも係はらず、やはり心の一隅には絶ち難い血のつながりから、そ

んなにも尤もらしい夢などを見るものか！ と眼をこすると、私は黒い血潮でも吐き出しさうだつた。

私は既の屋根裏へ走り去らずには居られなかつた。濛々とする秣草のほこりに噎せ反つて、私は眼や鼻腔をおさへたまゝ、枯草の中へ打ち伏すのであつた。何時でも私は何うしても胸のうちが激しく鳴つて収まらぬ發作に驅られ出すと、その屋根裏へ逃げ込むのが習慣だつたが、その胸の嵐といふのが、いつも原因には何の差別もなくまことに突拍子もないもので、別に何を悲しむといふわけでもないのに、屹度その發作が起ると突然に涙が溢れて来て、終ひには嗚咽の聲を擧げずには居られなかつた。この病態はビタミンBの缺乏に起因する神経衰弱症に他ならぬ類ひで、例へば激しい笑ひの發作に驅られても同様の結果に襲はれるらしかつた。

Zは私が飛び込んだ異様の物音に仰天して、鼻先に吊られた空の飼馬桶を蹴り飛し、その反動に鼻面を打たれて、呆然たる胴震ひに凍んでゐた。

「何を、笑ひながら……」

オシキリで薬を刻んでゐた唱が、梯子段を駆け登つて行つた私の、あはや泣き出しさうな顔を見て

「大分、元氣が好くなつたやうね。もう間もなく春だもの……」
など、冷かした。

片目の袖太はオシキリの作業が危いので、歌をうたひながら枯草の束を唱の手もとへ運んでゐた。

「Zの奴、自分で蹴つた桶にハネ返されて眼を丸くしてゐるよ。」

私は辛うじて笑ひ顔を認めさせたが、「笑ひ」なんていふ感情は、凡そいつにも、何んな末精神の一端でなりと感知した驗もないのだ。私は餘り夢中で駆け込んだゝめに、階下で聞える筈のオシキリの音や歌の聲にも氣づかなかつたのを後悔したが、もう止むを得ず、言葉の止絶れるのを怕れて

「鬼柳のお落のところまで行つて貰ひたいんだがな？」

と袖太へ呼びかけた。「うちの阿母が齡のせゐで按摩が欲しいんだつて……」

別にそんなことが手紙に書いてあるわけではなかつたのだが、私はおもはぬときにお落なりと赴かせて多少でも自責の念から救はれたかつたのである。

お落は袖太の叔母で、灸と按摩と、そして骨なほしの施術者なのだが、餘程耳が遠くて手度似

でなければなしが通じなかつた。でなければ山の上の人を呼ばゝる位ひの大聲を出さねばならぬのだが、Zを罵るほどの發聲も適はぬ私にはそんな叫び聲が擧げられる筈もなかつた。元來カンの悪い婆さんで稍ともすれば飛んだ獨り合點をして相手の者をまごつかせたが、ひとり私の母は巧みな手眞似をもつて圓滑にはなし合へる程の仲だつた。そして冬ともなればお落の來訪を待遠しがつたが、大分前に私が母のゐる町のあちこちに放縱な負債をつくつた擧句に逐電したことを世間にはどかつて寒々とその日／＼を暮してゐるさうだつた。お落は私の祖母の頃から、秋の收穫れが終ると山を越えて來て、遙かの山の上の雪の消えるまで滯留してゆくのが慣はしだつた。

「ついでにお前もお落の灸を据えて貰つたら好からう？」

私の如き病態には、お落の按摩と灸が最も効果が鮮やかだらうと、兼々まはりの者がすゝめるのだが、私は思つたどけでも身の毛が悚つて聞えぬ振りを裝ふてゐた。それを思ひ出して唱も袖太も切りと、私にお落の治療をすゝめた。

「途中まで歩いて、いよ／＼駄目だつたら、當分の間お落のうちで靜養して見よう。」

と私は決心した。然し按摩や灸は御免だな。僕は揉まれるといふ經驗が一度もないんだが、あ

れこそ何んなに擦つたいことだらうと思ふと、とても堪らない。」

「いつそ、否應なくおさへつけて、灸を据えさせたら、そんなフラフラ病氣は一邊で治つてしまふんだが……」

袖太の片目はぎろりと光つてゐた。つい私はその方の義眼を先に見て、度強く怪奇な光りを湛えて開け放しになつた仁王の眼玉から威壓を享けがちだつたが、落着いて右眼に注意すると、それはいつも羊のそののやうに物優し氣に下向いて氣弱く眼ばたいてゐるのみなのだ。

「あたしも手傳つてやりたい。」

と唱も傍から加勢した。「この意久地なしが、あの灸を据えられたら、何んなに騒ぐことか——何となく好い氣味のやうだ。」

「俺のことは、問題にしないで呉れ。」

私は激しく首を振つた。

「もう、あんな顔をしてゐる、まるでお灸でも据えられてゐる見たいな……」

私は灸とか按摩の類ひは、理由も問はず絶対に嫌ひで、他人の施されてゐる光景さへも傍觀するに忍びなかつた。お落の灸といふ言葉は屢々幼年からの私のための悻し文句に用意された。幼

時はおろか、近年でさへも、ひところの私の無頼放蕩の酒に愛想を盡した母が、うつかりとお蔭の灸でも据えて貰つたら落着くかも知れぬと呟いたのを聞いた時には、有無なく私はゾツとして逐々の態で逃げ出したことがあるのだ。一體お蔭の灸なるものは特に神経系統に効目が露はであるとかで、相當の重患者でもない限りは治療を乞はなかつたが、私は幼時にたつた一度、私の先々代が荒療治を施された光景を印象強く覚えてゐるのだ。祖父は鬼柳村の村役場に奉職してゐたが（それは勿論、極度の神経衰弱症に他ならぬのであらうが、誰もそんな病名を患者の上に冠せもしなかつた。）その途すがら、屢々狐に化されて、あられない悲惨と滑稽とを演ずるといふところから、思ひあまつてお蔭の灸を決心した。

お蔭の灸はおそらくありふれた豆粒大のそれとは趣きを異にして銅貨大の艾を急所に貼り重ねて、火を點じながら團扇をもつてほいほいと煽ぎたてるといふ凄まじさだつた。

双肌脱ぎになつた祖父の胸は——さうだ、思ひ合せて見ると、あの先々代の瘦せ細つて澁團扇のやうな胸板は、その中に包まれた風鈴の如く臆病な小膽と共に、そのまゝ私に遺傳されてゐる——肋骨が數へられて、腹部はげつそりと匙型に凹んでゐた。お蔭が除ろに仕度にとりかゝる段になると、その匙型は最早恐怖におびやかされて激しく脹れ、次第に勢急な風琴のやうに伸縮し

た。彼はやをら馬のかたちで窓枠に獅嚙みつくと、まはりの者が、未だ／＼火も點けられてはゐないのに——と憐れむ聲も聞えず、すつかりともう唐獅子の面に、その表情は凝固して、凝つと天を睨み、バツタのやうに細長い脛が膝の關節でぐ／＼と震へてゐた。——私は畏敬すべき長老が、そのやうに淺猿しい姿で恐怖に戦いてゐる有様を見るに見兼ねて、慌て、其場を脱したので見事彼はその療治に堪え忍んだか何うかは見極めもしなかつたが、その時の、その祖父の表情は何十年後の現在でも私の印象には、あまりに鮮やかな唐獅子の假面のまゝ、手にとる如くのことされてゐるのだ。以來私は、灸といふ一言を耳にしても思はず、この顔面もあのやうに切ない假面に變りさうだつた。母は、その時祖父が、ホツホツホツ！ といふ聲をたて、泣き、あはや艾の火が皮膚にまで達しようとした刹那には、ドラ猫のやうな悲鳴を擧げて飛びあがり、火の玉も何もふるひ落して窓枠を飛び越えたと傳へたが、私はそれが當然だ！ と同情した。

「うちのお父さんなんかは……」
と母は實家の父親を自慢した。「あのお灸を三つもいちどきに火を點けても、平氣で苺を喫してゐたよ。」

「それあ背中の皮が……」

「馬鹿なことをお云ひでないッ！」

と母は非常に氣嫌を損じた。そして私の先々代が、餅を搗くことも得意だといふほどのお路の腕力にねぢ伏せられて、否應なく灸を据えられて、漸く病ひを治したといふことであつたが、三七、二十一日の間もそれを續けたら（最初の二三回が最も苦痛を強ひられ、回を重ねるに従つて痛痒は減する左うだが——）大概の神経などは麻痺するのが道理ではあらう。

「僕のは何も神経病といふわけではないんだから、灸など眞つ平だ。」

私は、柚太の餘外な親切でお路に早我點でもされたら一大事だ！と案じて、今更と詳さに症狀を説明したりするのであつた。

「ともかく婆さんに揉んで貰ふに越したことはなさうだな……」

「眞平だ。僕は時々氣が遠くなつて死ぬのかしら？と思ふやうな時に、鳥の羽根で觸つただけでも擦つたくて、息を吹き返すほどの始末だから、按摩なんにて掛つたらそれこそ擦り殺されるだらう。お、厭だ！」

はつきり云ひ含めておかねばならぬと私は思つて、灸とか按摩とか如何に嫌ひであるかといふことを執拗に述べ立てた。柚太は何氣なく呟いたことに私がいちいち驚いたり、身震ひをした

りするので、

「厄介な病氣だな！」

と憤つたかのやうだつた。然し、その右側の眼を見ると、それが苦笑を浮べてゐるのが解つて私は吻ツとした。柚太は、他人の厭がることを無理にでもすゝめたがるといふ風な傾向があつたので、憤らせでもしたら始末が悪いと私は懸念するのだつた。

柄にもない母の夢から、お路のことなどを持ち出して、餘外なわるびれを強ひられた私は

「遠いな……」

と唸つた。母をおもひ出す自分の心ほど、淺猿しい混濁に病はされるものはなかつた。子が親を慕ふ心が自然であればあるほど、私は二重の埒外で汚れの泥を浴びるのであつた。私は母の生活を目許することが敵はぬながらに、母に感かゝる子の感情を持ち扱ふのみだつた。法要も何もあつたものではない——と、私は偽善者流の母の言葉と、偽悪者流の自分の餘憤とを戦はせるのだが、人倫の假面の善惡を見棄て、たゞに人間としての親と子の間に介在する絶對の因果は、怕るしく、嘆かはしく、たゞ簡明であつて、道德や潔癖のまゝに何も彼も振り棄てる道はなかつた。

「お路のはなしは止めようよ。——俺は、ともかく歩いて行かなければならぬんだ。」

「それなら蓑籠を用意しようか。」

柚太は納屋の天井裏の山駕籠を指さしたりしたが、唱はかねがね私の母へ寄する感情を墮落と見て

「Zにでも振り落されるが好いさ——」

など、ほき出した。唱は私のおもひを、たゞ私が財物を目あてに貪婪の未練をもつてゐる者でもあるかのやうに誤解してゐたが、私は説明の仕様もなかつた。私は彼女が、私の母を罵る言葉がひたすらに怖ろしかった。

唱は秣草切りの腕を、口笛に合せて、私にとり合はぬ氣色であつた。私は、刻まれる藁の音を聴きのこしながら、鉈を執つて、山越えに使ふべき息杖を探すために川向ふの竹藪へ赴いた。

私達の村は寄生木村宇鬼涙と稱された。鬼涙沼の痕跡は今では水が乾いて、蓬々と葦の生えた濕氣地だつた。途中まで私を送らうといふ唱は、柚太の鐵砲を借り、野良犬から狎し込んだロク

を伴ひ、柚太はZの轡を執り、私は不安な上眼づかひで猫柳の杖を突き——一行は曉の星が輝いてゐる時刻に沼の縁を出發した。こんな早朝に鬼涙を立つても、バスの終點を見出す音無宿へ達するには健全な歩行者の歩みをもつてさへ黄昏時になるのが通例だつた。

「午までにヤグラ澤に着くには、やはり時々Zに乗つて貰はなければなるまいが……」

柚太は私の歩き振りが、出發早々から吐息の氣味ばかりが物々しいのを懸念して、口はしつかりと結び、鼻腔だけで呼吸しながら、胸を前のめりにせぬやうになど、注意した。あまり重たげな杖を切るのも鬱陶し過ぎたので、柳の枝としやれたのは好かつたが、それも相當太目ではあつたのに、ついつい私の背骨の方が柳のやうにふらついて、とても頼りない息杖だつた。

「僕はとてもZには乗る氣がしないから、唱が疲れたら借してやつて呉れよ。」

私は、ロクを先へ立て、脇道へ反れながら林をくゞつてゆく唱を案じたが、彼女は疲れも知らずに鳥を追ひかけてゐた。

唱は龍卷山の中腹で山鳥を打ち落した。

「獲物は俺が歸るまで、とつておいて呉れないか……」

「鷺鳥はすっかり治つて、歩き出してゐるのを知つてゐる？ 打ち落した鳥なら平氣で進呈する

けれど、未だ息がある鷺鳥をもう剝製にでも仕様としてゐるのにはあきれたな——兎も角、慾深だよ。」

唱は獲物をZの鞍に結びつけて、また間道を先へ立つて行つた。

「ヤグラ澤までは無理だらう。狐塚あたりで午飯だらう。」

水仕事などをしてゐる唱のあとを喉を鳴して追ひかけてゐる鷺鳥を私は思ひ出し、あの時の負傷が醫えた鳥だつたのか？ と氣づかせられた。馳にかゝつてはひとたまりもあるまいと思つたので、早速標本にしてしまはうと乗り出したのであつたが、手當次第に依つてはあんなにも樂々と回復するものか、して見ると自分の部屋に竝んでゐる鳥共の中には、未だく標本にされないでも命のつながれたであらうものが在つたに相違ない——私はそんなことを考へながら、Zのうしろになつて徑を急いでゐた。

「ひよつとするとお落婆さんは狐塚に来てゐるかも知んねえよ。この頃ちや按摩稼業が廢つて、寒餅搦きの手傳ひの方が忙しいつてことだよ。」

狐塚の茶屋には袖太の情婦がゐた。袖太はもう四十歳を越えてゐたが、眠る時にも決して閉ぢられないといふ片目を耻ぢて未だに未婚であつた。彼はそこの情婦の傍らでも眠ることを怕れ

て、眞夜中でも一飛びに山を越えて鬼涙へ引き返した。袖太にとつては狐塚までの徑は全く苦もないところを、こんな脚弱と伴れ立つて餘程退屈さうだつた。

「あの齡で餅搦きが出来るなんて！」

と私は老婆の大力を感嘆した。稍ともすると、もう私の聲は袖太へはとゞかなかつた。樺林の奥から折々銃聲が響き渡つた。澤を降つてゐるので、その反響が私達の頭上に幾つにも折り重なつて稻妻のやうに鳴り響いた。その度に私の先へ立つてゐるZの尻は軽く飛びあがり、また石ころの目立つ凹凸の勾配で、無精氣な蹄は躓きがちだつた。そして空身の鞍が音をたて、弾みあがつた。

「何うあつても、あれには乗れぬ。」

あまり後れると袖太がその鞍へ私を乗せたがるので、私はせめて言葉のとゞく位ひの間隔は保つてゐたいと努めながら、後を追つてゐるのだが、時には小走りにならないと、Zの影を見失つた。怪し氣な脚どりによた／＼とついてゆく自分の姿が、あの漸く負傷から醫えたばかりの鷺鳥に違ひない——など、私は悲しんだ。吐き出す息づかひが荒々しくなるばかりで私は沁々この行軍の早計だつたのを悔ひはちめてゐた。

今から斯んな調子では夕暮までに鬼柳へも到着出来さうもない危惧に襲はれた。龍巻山、雉子ケ淵、怒田、ヤグラ澤、狐塚、吹雪川、そして漸くにして鬼柳の森を見出す次第だが、私はもうそんな名前をかぞへるだけで地面が波にでも見えるかのやうな眩惑を覺えた。それにしてもこのあたりの宿々の名前は何うして斯んな風に奇怪な文字ばかりなのか——など、あらぬことまで想ひを走らせると、それらが恰でお伽噺の武者修業者の行手に折り重つた悪魔の住む村々であるかのやうに見えたりした。

達者な時ならば鬼柳の宿場で一息衝くと、手綱を引き絞めて一氣に颯谷へと降り、羅漢ノ森を寄切り、仁王門から川縁を傳つて音無宿までの三里の堤を口笛を吹いて飛ばしたのだが、あれとこれとを比ぶればまことに兎と龜ほどの相違ではないか。まはり道を選んでも成るべく急な坂は避け、休んでは水を飲み、胸を撫で降ろしながらの蹣跚たる中風患者の有様では、もうこれから雉子ケ淵へ降つて怒田へ登るのさへ危ぶまれて、私は幾度唱や袖太を呼び返さうと決心したかわからなかつたが、つい先の者の姿も見えなくなつたにひかされ、また孤獨の影の夢魔に悸されてせいぜいと脚を運んでゐる始末なのだつた。

道端の石塔の傍らで煙管を叩きながら私の追ひつくのを待つてゐた袖太は、その息切れの模様

を沁々と眺めて同情した。

「やはり駕籠でなければ無理かな。狐塚まで辛へて貰はう。あそこまで行けば引き返すにしても駕籠が仕立てられるから……」

これらの徑々では馬の背も借りられぬ病人のためには今だに昔ながらの山駕籠が唯一のものだつた。祖父が通ひ慣れた徑の姿とおそらくは今もそのまゝ變らぬ自然の風景のみだつた。凡そあたりには著名なる處とてもなく全く發展の餘地もない邊鄙な一劃で電燈の光りでさへも音無宿まで赴かぬと拜まれもせぬ草深さだつた。ヤグラ峠の唐松の下で私の祖父は頻りと狐に化されて幾多の滑稽や悲惨なる挿話を今も尙ほ人々の口に残してゐたが、恰度私達の行手には例の唐松が踊りあがつたやうな枝を空へ張り、飄々と風を呼んでゐる風情は、まさしく神経病患者の獨り路であるならば容易く山靈の催眠術を吹き込むにふさはしかつた。星は移つても、ものゝ象の變り模様とても知らぬ唐松の根元に立つた私とその先々代の間に抉まれた時の流れなどは、私自身にしてさへも氣づきもされぬ昔ながらの山徑だつた。

それは左うと、よしやこの日のうちに狐塚の山駕籠を借りて鬼柳までは達したとしても、母のゐる町へ降るとなれば翌日は早朝に起き出で、音無宿へ向ひ始めてバスの通ふ道を見出すのだ

が、これがまた健康者であつても危うく胸を踊らせられるので寧ろ徒歩を選ぶ者の方が多いといふ溪谷に添つた棧道であるから、勿論私は駕籠のまゝで半日あまりの遠乗りをつゞけた後に、漸く汽笛の音が聞える山北驛へ迎るより他はあるまい。鬼涙沼や狐塚の界限であればこそあんな山駕籠も不思議とされぬが、自動車や機関車が文明の煙りを擧げて往き交ふてゐる繁華な驛路へ向つて、ほい／＼！などいふ掛け聲が如何ほど颯爽たる趣きであらうとも、所詮私には風を切つて乗り込む勇氣は持てぬのだ。今時、何と耻かしさの極みではないか。

ともあれ私は幾日を費しても、山北驛まで杖をついて乗り出すより他はないのだ。

それにしても一步一步と爪先が、行手へ向つて進路をとつてゐるのを見るにつけ、それに反比例して私の心は鬼涙の薄暗い屋根裏から呼び戻す木兎やカケスの聲を聴くかのやうであつた。祖先の靈の祭りのために歸る身であるにも係はらず、現實に近づかうとする母の幻が次第に輪廓を描き出して來ると、あれこれとかたちをとつて盛りあがつてゐた映像が忽ちオシキリで裁斷される藁のやうに粉々になつて烈風の空へ吹き飛んでゆくのであつた。

唱は山鳥の他に鶉を三羽も打ち落して、土産ものにしたら好からうとすゝめながら、

「さあ、もう愚圖／＼しては居られないから、お前は乙の先へ立つて貰はう。」

と銚を肩につけて鞍の上に乗つた。

「この分ちや日のあるうちに狐塚までが、やつとだらう。」

あまり私の歩き振りが鈍間なので、こつちは歩きながら居眠りを覺えた！と袖太は云ひかけたが、直ぐに、居眠りをする場合の義眼の有様を想像されることを怕れて、細い方の眼を激しく眼ばたきながら辨當の仕度にとりかゝつた。

乙は馬の癖にたつたこれだけの行程で、まるで私のやうに沮喪の氣色を露はにしてゐたが（大體彼のそれは横着な誇張癖なのだ！）唱に手綱を執られると凡そ私の場合には示しもしない好意に溢れて頭をあげた。私は憎惡に炎えた横目をもつて奴の目玉をジロリと睨みながら立ち上らうとすると、乙は恰も

「さつさつと歩きやがれ、煩いぞッ！」と蛇でも追ひ拂ふやうに鼻面を振つて私の肩先を小突きさうにしたので、私は屹驚りして先へ飛び出た。身を翻して奴の顔の下をすり抜ける瞬間に、餘つ程頬げたのあたりへ素早い平手打でも喰はせてやりたかつたが、奴の口のまはりには涎の泡がべとべととしてゐるので薄汚くて手も出せなかつたのだ。

怒田からヤグラ峠へ向ふ日蔭の山徑は、わけても峻しく、帯のやうに細い黄土の坂徑が深い枯

草の中に埋れてゐた。

「御覽な、斯うして歩けば仲々達者ぢやないの、大事を執り過ぎるのが返つていけないだよ。」
唱は私の背後から嘲りを含めて聲援した。

「この分なら三日がかりにでもしたら山北までも歩けるかも知れないな。」

「歩けるともさ。三日でも四日でも好いから一層そのまゝ小田原まで……」

小田原といふのが目的の地だった。

徑は次第に極まつて、既に遠方の山脈は夕映えに色彩られてゐた。私はもう完全な沈黙を保つて登攀に専念したが、吐き出す息のみが目醒しくて刻々と蝸牛のはかどりに陥入つてゐた。稲妻型の山徑の隅々に達する毎に深い息を容れて、水筒を傾けた。だがためらふ間もなく腥臊の風に富んだZの生暖い鼻息が濛つと首筋に突つかゝつて来るのに仰天して、私は蛙のやうに逼り出さずには居られなかつた。畜生も最早可成りに困憊の泡を吹いてゐると見えて、突つかゝつて来る鼻息は、狐の尻尻にも似た物體的の觸感で、その度毎に私の全身は鳥膚に化した。私は總身を震はせて、傷ついた蟻螂のやうに首ばかりを前へ前へと伸すのだが、稍ともすれば草鞋は霜柱に埋つて吸ひつき、他合もなく腰がふらつくのみだった。まご／＼してゐると忽ちZの鼻面は、私の

肩の先へ乗り出して、二つの鼻腔から壯烈な蒸汽を迸らせるかと思ふ間もなく、それは爪先あがりの凍てついた地面に衝突して、壁にあつたポンプの水のやうに私の面上へハネ返つた。私は慘澹たる目潰しを喰つて、窒息しかゝるのだ。

「そらそら、Zの腹に押し潰されるよ。もつと速く歩かないと——」

唱は私やZの惨状を見ぬ振りで、切りと伸びあがつて、もう袖太は唐松の下に到着して枯枝を焚きながら酒を暖めてゐる！ などと先ばかりを急がせるのであつた。

これさへ登つてしまへば今日の難關も最後だ！ と私は齒ぎしりして、辛うじてZの顎の下から逼り出して蒸汽の目潰しから逃れたかとおもふと、やがて奴の鼻息は三尺も五尺も伸びて私の首筋に襲ひかゝつた。私は思はず總の子のやうに首を縮めて、何うかして不氣味な鼻息の埒外まで脚を伸さうと悶搔くのだが、脚はやがて鐵の棒で容易には持ちあがらうともしないのであつた。

もう引き返さう／＼と投げ出しながらも、わずかに畜生の追撃によつてこゝまで達したのであるが、もう絶對絶命でうか／＼すればZの脚の先で蹴り飛ばされるより他はない急坂なのだから、私はもう夢中になつて枯草の莖に獅嚙みつき、此處を先途と吐息のピストンを奏まじく必死のピッチに没頭するのであつた。

登るに随つて、益々徑はせばまり、兩脇の崖から覆ひ被さつた枯薄の穂がZの横腹を左右から撫でた。Zは私がいたづらに鳥の羽根で鼻腔を突いてやつた時と同様のワラヒ聲に似た嘯きを擧げて、連続的に尻を放つた。私は、思はず、ウツ！と息詰ると同時に兩掌を重ねて鼻と口を力一杯に壓えた。

「シツ、シツシツ！」

さすがに唱も此上もなくうろたへて、一気にZの腹を蹴つた。

時に近づくに伴れて陽あたりが現れ、あの蒸気が私の脇下の地面にあたると、霜柱の中には恰度私の草鞋が陥入る程の穴があいた。Zの苦悶も凄惨を極めて、交互に空と地へ向けて吐き出す息の音が、機關車の煙突のやうに騒々しかった。

地肌は肉色のアカ土で、穴にかゝつた私の草鞋は霜の地面に實にも筆力雄揮な溜の畫を描いた。私は、アツ！といふ間にZの鼻の下に四肢を伸して了つたのである。

後から唱に聞くとおりに依ると、先の物體に蹴躓づくまいとあせつて、その動作を見守りながら苛々としてゐた馬の姿の方がはるかに哀れであつたさうだが、その時の奴の意氣沮喪の吐息は、私の首根に垂れた鼻腔口腔から止め度もなく生腥い風をもつて、板のやうに私を壓えつけてゐる

うちに、終ひには涎の飴がだらだと私の首筋へ流れ落ちて來たではないか。私は體ぢうを狐の尻尾よりも氣味悪いムカデの觸手をもつて擦られるおもひであつた。生腥いツララは除ろに私の背中から腋の下を撫で抜け、胸へと回り、下腹を目がけて觸手を伸すのであつた。この拷問こそ私にとつては眞に致命的だつた。

眞實私は、あの時の不氣味さと息苦しさを回想するなれば、如何程誇大無稽な形容詞をおもひうかべても未だく足りぬ煉獄の責苦であつた。あの汚らしい馬の涎がちりちりと身内に流れ込んで來た時のことを思ひ出すと、百萬遍でも私は疎つとして、忽ちのうちに轆轤首にでも化けて仕舞ひさうなのである。

蛙のやうにへたばつた私は、それでも再び起きあがらうとして、霜の上に夥しい勢ひの溜の畫を交互の草鞋をもつて二條三條と描くうちに、とうとうZの蹄は私の大腿骨を力任せに踏み潰してしまつた。

二時間あまりの絶命の後に私は、深い夕靄の中に怪火の如く炎えてゐた焚火の傍らで蘇生した。昔、私の祖父が山靈の妖氣に魂を奪はれて、屢々その根元で哀れな遊樂の妄想にうつゝを抜かしたと云はるゝ大唐松が獨り禿山の頂きに逞ましい腕を張つて巨人の踊りを、髣髴させてゐた。

大樹の幹は、東方の平野から吹きあがる千年の風に靡いて、恰も大空の星の壯麗に仰天のあまり、これはくるとばかりに胸をのけ反らせ腕を擡げて呆氣にでもとられてゐる姿であつた。私は、蘇生した瞬間、これは未だ見ぬ死の世界の一隅ではないか、何とまあ素晴らしい巨人が俺の傍らに立つて、何を驚いてゐるのか？ といふやうな心地で同じ彼方の空をうつとりと見あげてゐた。東の空には魚座の星が微かに光つてゐた。行手の町は遙か東の方の未だ見えぬ海のほとりだつた。

柚太は私を背中につけて、峠を降つた。

「痛いよう／＼！」

私はあらん限りの悲鳴を擧げて「お路の骨なほしは御免だよう……」と叫んだ。

「お路婆さんでなければ手に負へんわい。否應なく體ぢうを揉ませて、灸を据えたら文句はないんだ。」

柚太は一散に駆け降るのであつた。

「狐塚が近づいたら泣き聲だけは辛棒しておくれ。」

唱はZの鞍の上から嘯くと、颯つと私達を追ひ越して夕靄を衝いて行つた。

「厭だ／＼！ 按摩は御免だ！」

私は尙も夢中でさからつたが、柚太の脚どりは切りと宙を飛んで、馬にも負けなかつた。涙に星の光りが碎け、薄あかりの中を駈けてゆくZの後姿が嬉々として踊つてゐるかのやうに私の眼に映つた。自分は一體、成人なのか、赤兒なのか、それとも、もう人間ではなくなつてゐるのかといふやうな全く得體の知れぬ狂ほしさと悲しさで、精一杯に泣き叫び、私は柚太の横腹を蹴つた。

x

あのまゝ死にもしないで息づいてゐる私については、こゝで小説らしく擱筆するまでもなく一言の附記を要するだらう。私は未だに鬼涙の水車小屋で剝製の鳥の中に坐つてゐるだけだつた。それにしてもあの長い冬から、今はもうあたりは夏の景色となつて螢が飛んでゐるといふのに、たゞ思ひ浮べるのはあれらの峻しい山徑が今も越え難い雪解の深さに遙かである思ひだけで、人間らしい悩みさへも忘却したかのやうである。時々暮しに就いての不平を洩しに現れる柚太の片目が、ぎろりと光つて、私の胸も冷えようとするのだがそれも義眼と氣づくとも物性もなく、薄

暗がりである故に気づかれもしまいと落ちついて、晝寝の夢に耽る彼の面を——ぴかりと視開かれた眼の光りを、つくりかけの鳥を見るやうに眺めるだけだつた。唱は螢をあつめて東京の友達へ贈らうとしてゐたが、その間にも鼬を射止めるべく銃を抱へて、まことに殺伐な螢狩りともつかぬ異様ないでたちだつた。未だ動物は手がけたことはないが、鼬が首尾よく斃されたら、それを手はぢめに動物標本にすまうかなど、私は期待して窓下の流れの“chatter, chatter”に耳を傾けるだけだつた。片脚は未だに不自由で、稍遠路をとる場合には松葉杖が必要である。もう一羽がそろへば一對になる筈で、あのまゝ居据りを直してない片われの雄の鶯鳥は、相變らず水車が回り出すと直ぐに轉げた。そして生き返つてゐる雌鳥は卵を生みはぢめてゐた。

一
鴉の聲が鋭く氣たゞましい。萬豊の栗林からだが、まるで直ぐの窓上の空でゞもあるかのやうにちかぢかと澄んで耳を突く。けふは晴れるかとおぶやきながら、私は窓をあけて見た。窓の下は未ば朝霧が立ちこめてゐたが、芋畑の向方側にあたる栗林の上にはもう水々しい光が射して、栗拾に駆けてゆく子供たちの影があさやかだつた。そして、見る見るうちに光の翼は廣い畑を越えて窓下に達しさうだつた。芋の收穫はもう餘程前に済んで畑は一面に灰色の沼の觀で光りが流れるに従つて白い煙が搖れた。萬豊は其處で小屋掛の芝居を打ちたいはらだが、青年團からの申込みで來るべき音頭小唄大會の會場にと希望されて不性無精にふくれてゐるさうだつた。

私と同居の御面師は、とつくに天氣を見定めて下彫の面型を鷄小屋の屋根にならべてゐた。私は銚肩を膠で練つてゐたのだ。萬豊の桐畑から仕入れた材料は、ズイドウ虫や瘤穴の痕が夥しくて、下彫の穴埋に餘程の手間がかゝつた。御面師は山向ふの村へ仕入れに行くと、つい不覺の酒

に参つて日歸りもかなはなかつたから、寄所なく萬豊の桐で辛棒しようとするのだが、斯う穴やふし窟だらけでは無駄骨が折れるばかりで手間が三倍だと滾しぬいた。此後はもう決して酒には見向かずにと彼は私に指切したが、急に仕事の方が忙しくて材料の吟味に山を越える閑もなかつた。萬豊は下駄材の半端物を譲つた。値段を訊くとその都度は、まあ／＼と應揚さうにわらつてゐながら、仕事の集金を自ら引受け、日當とも材料代ともつけずに収入の半分をとつてしまふと御面師は愚痴を滾した。萬豊は凡てにハッキリしたことを口にするのが嫌ひで、ひとり歩いてゐる時も何が可笑しいのか何時もわらつてゐるやうな表情だつた。では元々さういふ温顔なのかと思ふと大違ひで、邸の垣根を越える子供等を追つて飛出して來る時の姿は全くの狼で、普段はレウマチスだと稱して道普請や橋の掛換工事を缺席してゐるにも係はらず、垣も溝も三段構へで宙を飛んだ。

そのうちにも、さつきの子供たちがばら／＼と垣根をくゞり出て芋畑を八方に逃げ出して來たかを見ると、おいてゆけ／＼野郎共、たしかに顔は知れてるぞなどと叫びながら、何方を追つて好いのやらと途惑ふた萬豊が八方に向つて夢中で虚空を掴みながら暴れ出た。萬豊の栗拾にゆくには面をもつて行くに限ると子供たちが相談してゐたが、なるほど逃げてゆく彼等は忽ち面をか

むつてあちこちから萬豊を冷笑した。鬼、ひよつとこ、狐、天狗、將軍達が、面をかむつてゐなくても鬼の面と化した大鬼を、遠巻にして、一方を追へば一方から石を投げして、やがて芋畑は世にも奇妙な戦場と化した。

「やあ、面白いぞ〜。」

私は重い眼蓋をあげて思はず手を叩いた。私の胸はいつも異様な酒の酔で陶然としてゐる見ただつたから、そんな光景が一層不思議な夢のやうに映つた。私たちの仕事部屋は酒倉の二階だつたので、それに私は當時胃下垂の症状で事實は一滴の酒も口にしなかつたにも關はず、晝となく、夜となく一步も外へは出ようとはせず、面作りの手傳ひに没頭してゐるうちには、いつか間斷もない酒の香りだけで泥酔するのが屢々だつた。かなふ仕儀なら喉を鳴して飛びつきたい WET 派のカラス天狗が、食慾不振のカラ腹を抱へて、十日二十日と沼のやうな大樽に揺れる勿體振つた泡立の音を聴き、ふつふつたる香りにばかり煽られてゐると酔つたとも酔はぬとも名状もなし難い、前世にでもいたゞいた唐天竺のおみきの酔が、いまごろになつて効いて來たかのやうな、まことに有り難いやうな、なさないやうな、實にもとりとめのない自意識の喪失に襲はれた。眠いやうな頭から、酒に酔つた魂だけが面白さうに抜け出してふわりふわりとあちこちを

飛びまはつてゐるのを眺めてゐるやうな心持だつた。そのうちには新酒の蓋あけのころともなつて秋の深さは刻々に胸底へ滲んだ。倉一杯に溢れる醇々たる酒の霏は、享ければあはや清々として滴らんばかりの味覺に充ち澱んでゐた。——鶏小屋の傍らでは御面師が切りと兩腕を擴げて腹一杯の深呼吸を繰返してゐた。彼も「酒の酔」を醒さうとして體操に餘念がないのだ。——萬豊が地團太を踏みながら引返してゆく後姿が栗林の中で斑らな光を浴びてゐた。線路の堤に、青鬼、赤鬼、天狗、狐、ひよつとこ、將軍などの矮人連が竝んで勝鬨を擧げてゐた。——もともとそれらは私達がつくつた成人用の御面なので、五體にくらべて顔ばかりが大變に不釣合なのが奇抜に映つた。音頭大會の日取は未だ決らないが、出場者の多くは面をかむらうといふことになつて、日々に註文が絶えなかつた。たとへこれが今や全國的の流行で踊りとなれば老若の別もないとは云ふものゝ、まさか素面では——とたぢろいて二のあしを踏む者も多かつたが、假面をかむつて、——といふ智慧がつくと、われもわれもと勇み立つた。名譽職も分限者も教職員も自ら乘氣になつて出演の決心をつけた。どんな歌詞かは知らぬが鬼涙音頭なる小唄も出來て「東京音頭」の節で歌はれるといふことであつた。

「面をかむつてゐれば、擔がれるといふ騒ぎもなくなるだらう——やがては、あの永年の弊風が根を絶つことにでもなれば一舉兩得ともなるではないか。」

一方では斯ういふ噂が高かつた。由來、このあたりでは村人の反感を買つた人物は屢々この「擔がれる」なる名稱の下に、世にも慘澹たるランチに處せられた。

……「おい、ッル君、はやくあがつて來ないか。」

私は、いつまでも外氣に顔を曝してゐることに「或る危惧」を覺えたので、未だ酔ひを醒してもゐなかつたのだが、御面師に聲をかけた。それに干場の面型をかぞへて見ると辛うじて十二三の數で、あれがきのふまでの三日がかりの仕事では今夜あたりは徹宵でもしなければ追ひつくまいと心配した。私は、うしろの棚から鬼の赤、青、狐の胡粉、天狗の紅の壺などを取りおろし、塗刷毛で窓を叩きながらもう一遍呼ぶのだが、彼は振向きもしなかつた。

「聞えないのか——」

私は怒鳴つてから、さうだ口にしない約束だつた彼の名前を思はず呼んでしまつたと氣づいた。彼は自分の姓名を非常に嫌ふといふ奇癖の持主で、うっかりその名を呼ばれると時と場所の差別もなく眞赤になつて、あはや泣き出しさうに萎れるのであつた。

「厭だ、堪らない……」と彼は身震ひして兩耳を掩つた。それ故彼は、滅多な事には人

に自分の姓名を明したがらず

「えい、もう私なんぞの名前なんてどうでもよろしいやうなもので……」と言葉巧みにごまかしたが、それは徒らな謙遜といふわけでもなく、實はそれが神經的に、そして更に迷信的に適はぬといふのであつた。それで私も久しい間彼の名前を知らなかつたし、また不圖した機會から彼と知合になり、どうして生活までを共にするまでに至つたかの筋みちを短篇小説に描いたこともあり、實際の經驗をとりあげる場合には何時も私は人物の名前をも在りのまゝを用ひるのが習慣なのだ、その時も終始彼の代名詞は單に「御面師」とのみ記入してゐた。私はそのころ「御面師」なる名稱の存在を彼に依つてはじめて知り、稍奇異な感もあつて、實名の頓着もなかつたまでなのだつたが、後に遇然の事から彼の名前は水流舟二郎と稱ぶのだと知らされた。私はミヅナガレと讀んだが、それはツルと訓むのださうだつた。

「この苗字は私の村（奈良縣下）では軒竝なんですが——」と彼はその時も、ふところの中に顔を埋めるやうにして呟いだ。「苗字と名前とが恰で拵へものゝ戯談のやうに際どく釣合つてゐるのが、私は無性に耻しいんです。それに何うもそれは私にとつてはいろいろと縁起でもない、これまでのことが……」

彼はわけもなく恐縮して是非とも忘れて欲しいなどと手を合せたりする始末だつたのである。そんな想ひなどは想像もつかなかつたが、私は難なく忘れて口にした驗もなかつたのに、ツマラ又連想から不意とその時、人の名前といふほどの意味もなく、その文字面を思ひ浮べたらしかつたのである。

それはさうと、その頃私の身には飛んだ災難が降りかゝらうとしてゐるらしいあたりの雲行であつた。

「今度、踊りの晩に、擔がれる奴は、おそらく彼の酒倉の居候だらう。」

「畢竟するに、野郎の順番だな。」

私を目指して、この怖るべき風評が屢々明らさまの聲と化して私の耳を打つに至つてゐた。あの戦慄すべきリンチは、季が熟したとなれば祭りの晩を待たずとも、闇に乗じて寢首を搔れる騒ぎも珍らしくはない。私たちが此處に來た春以來からさへも、三度も決行されてゐる。

現に私も目撃した。花見の折からで「サクラ音頭」なる囃子が隆盛を極めてゐた。夜毎夜毎、鎮守の森からは、陽氣な歌や素晴らしい囃子の響が鳴り渡つて、村人は夜の更るのも忘れた。あまり面白さうなので私も折々遅ればせに出かけては石燈籠の臺に登つたりして、七重八重の見物人

の上から凝つと圓舞者連の姿を視守つてゐた。圓陣の中央には櫓がしつらはれ、はじめて運び込まれたといふ、擴張機からはレコードの音頭歌が鳴りも止まずに繰返されて梢から梢へこぼされた。それといつしよに櫓の上に陣取つてゐるお囃子連の笛、太鼓、播鐘、拍子木が節面白く調子を合せると、それツとばかりに雲のやうな見物の群が合の手を合唱する大亂痴氣に浮されて、吾も吾もと踊手の数を増すばかりで、終ひには圓陣までもが身動きもならぬ程に立込み、大半の者は足踏のままに浮れ呆け、踊り痴けてゐた。——そのうちに向方の社殿のあたりから、妙に不調和な笑ひ聲とも鬨の聲ともつかぬどよめきが起つて、突然二十人ちかい一團がわつと風を巻いて森を突き走り出た。でも、踊の方は全くそつちの事件には素知らぬ氣色で相變らず浮れつゞけ見物の者も亦、誰ひとり眼も呉れようともせず、知つて空呆けてゐる風だつた。彌次馬の追ふ隙もなさうな、全く疾風迅雷の早業で、誰しも事の次第を見届けた者もあるまいが、それにしても群集の氣合ひが餘りにも馬耳東風なのが寧ろ私は奇體だつた。

「一體、今のあれは何の騒動なんだらう。喧嘩にしては何うもをかしいが……」と私は首を傾げた。すると誰やらが小聲で、

「萬豊が擔がれたんだよ。」といとも不思議なさ氣にさゝやいた。

朧月夜であつた。あの一團が向方の街道を巨大な猪のやうな物凄さでまつしぐらに駈出してゆくのが窺はれた。誰ひとりそつちを振向いてゐる者さへなかつたが、私の好奇心は一層深まつたので、兎も角正體を見定めて來ようと決心して何氣なさ氣に其場を脱けてから、麥畑へ飛び降りるやいなや狐のやうに前へのめると、矢庭に徑も選ばず一直線に畑を突き抜いて、彼等の行手を目指した。街道は白く弓なりに迂廻してゐるので忽ち私は彼等の遙か行手の馬頭觀音の祠の傍に達し、凝つと息を殺して蹲つたまゝ物音の近づくのを待伏せした。突撃の軍馬が壓寄せるかのやうな地響をたて、間もなく祕密結社の一團は、砂を巻いて私の眼界に大寫となつた。非常な速さで、誰も掛聲ひとつ發するものともなく、唯不氣味な息づかひの荒々しさが一塊となつて、丁度機關車の煙突の音と間違ふばかりの壯烈なる促音調を響かせながら、一陣の突風と共に私の眼の先をかすめた。見ると連中は擧つて鬼や天狗、武者、狐、しほふき等の御面をかむつて全く何處の誰とも見境ひもつかぬ巧妙無造作な變裝振りだつた。たゞひとり彼等の頭上にさゞげ上げられて鯉のやうに横たはつたまゝ、悲嘆の苦しみに悶掻き返り、滅茶苦茶に虚空を掴んでゐる人物だけが素面で、確とは見定めもつかなかつたが、やはり正銘な萬豊の面影だつた。その衣服はおそらく途中の嵐で吹飛んでしまつたのであらうか、彼は見るも淺猿しい裸形のなりで、命かぎり

の悲鳴を擧げてゐた。たしかに何かの言葉を吐いてゐるのだが、支那かアフリカの野蠻人のやうなおもむきで、まるきり意味は通じなかつた。たゞ動物的な斷末魔の喚きで氣狂ひとなり、救ひを呼ぶのか、憐れみを乞ふのか判斷もつかぬが、折々ひとときわ鋭く五位鷲のやうな喉を振り絞つて餘韻もななく叫びあげる聲が朧夜の霞を破つて凄慘この上もなかつた。と、その度毎に擔ぎ手の腕が一勢に高く上へ伸びきると、逞ましい萬豐の體軀は思ひ切り空高く抛りあげられて、その都度空中に様々なるポーズを描出した。徹底的な逆上で硬直した彼の肢體は、一度は鯨シヤチホクのやうな勇ましさを空を蹴つて跳ねあがつたかとおもふと、次にはかつぼれの活人形のやうな飄逸な姿で踊りあがり、また三度目には蝦のやうに腰を曲げて、やをら見事な宙返りを打つた。そして再び腕の臺に轉落すると、またもや激流にのつた小舟の威勢で見る影もなく、拉し去られた。——私は堪らぬ義憤に驅られて、夢中で後を追ひはじめたが忽ち兩脚は氷柱ツツの感で竦みあがり、空しくこの残酷なる所刑の有様を見逃さねばならなかつた。空中に飛びあがる憐れな人物の姿が鳥のやうに小さく遠ざかつてゆくまで、私は唇を噛み、果は涙を流して見送るより他は術もなかつた。——それにしても私は、斯んな奇怪な光景を眼のあたりに見れば見るほど、見知らぬ蠻地の夢のやうでならなかつた。

後に聞くとところに依ると、あの激しい胴上を十何邊繰返しても氣絶もせぬと、村境ひの川まで運んで、流れの上へ眞つさかさまに投げ込むのださうである。結社の連中は必ず覆面をして黙々と刑を遂行するから、被害者は誰を告訴するといふ方法もなく、人々は一切知らぬ顔を装ふのが風習であり、何としても泣寝入より他はなかつた。

あの時の萬豐の最後は、あれなり私は見届け損つたが、狙はれたとなれば祭りや闇の晩に限つたといふのでもなく、螢の出はじめたころの或る夕暮時に、村會議員の丁氏が役場歸りの途中を待伏せられて、擔がれたところを、私は鮒釣の歸りに目撃した。彼は達者な泳ぎ手で、難なく向岸へ拔手を切つて泳ぎついたが、とぼ／＼と手ぶらで引あげて行つた折の姿は、思ひ出すも無慘な光景で私は目を掩はずには居られなかつた。

鵬の聲などを耳にして、あの時のことを思ひ出すと、私にはありありと萬豐の叫びや議員のことが連想された。やがては次第に私も迷信的にでも陥入つたせぬか、水流舟二郎などいふ文字を考へたゞけでも、臆病氣な豫感に悸やかされた。あの胴上もさることながら、この寒さに向つての水雑炊と來ては思ふだに身の毛の悚つ地獄の淵だ。私は、水だの、流れだのといふ川に縁のある文字を感じても、不吉な空想に震へた。定めとてもない漂泊の旅に轉々として憂世をかこち

勝ちな御面師が、次第に自分の名前にまでも呪詛を覺えたといふのが、漠然ながら私も同感されて見ると、私は彼との悪縁が今更の如く嗟嘆されたりした。

澄み渡つた青空に、鵬の聲が鋭かつた。往來の人々が、何か迂散臭い眼つきで此方を眺める氣がして私は、いつまでも窓から顔を出してゐることも出来なかつた。

「そんな色に塗られては……」

戻つて來た御面師が、慌て、私の腕をおさへた。なるほど私はうかうかと青の泥繪具を、紅を塗るべき天狗の面になぞつてゐるのに氣がついた。

二

萬豊や丁氏が何んな理由で擔がれたものか、私は知らなかつたが、人々が私への反感の最初の動機は、丁氏の災難の時に、私が見ぬ振りを裝つて其場を立去らなかつたばかりか、彼に肩を借して共に引上げて行つたといふのが起りであつた。尤もそれが村の不文律を裏切つた行爲であるといふのを知らなかつた者である故、あたり前なら一先づ見逃さるべき筈だつたが、日頃から

私の態度を目して「横風で生意氣だ。」と睨んでゐた折からだつたので、これが條件として執りあげられ、やがてリンチの候補者に指摘されるに至つたらしいのであるが、私として見るとそれ位ひのことで狙はれる理由にもならぬと思はれた。

「いゝえ、そりや、たゞのおどかしだといふことですぜ。今度から、そんな場合を見たら素知らぬ顔で脇さへ見てゐれば好いのだ、氣をつけろといふ遠廻しの忠告ですつてさ、仕るとなれば前觸れなんてする筈もないぢやありませんか。」

御面師はそれとなく附近の模様を探つて來て、私に傳へた。——「此度の秋の踊りまでには出演者は皆な假面を、そろへようといふことになつてゐるんだから、私たちが居なくなつたら臺なしでせうがな。それに近頃また日増に註文が増えるといふのは、何も連中は體裁をつくる仕儀ばかりぢやなくつて、腰に傷持つ方が意外の數だといふんです。假面さへかむつてゐれば擔がれる心配がないといふところから……」

「でも、いつかの丁さんの場合などがあると見ると、何も踊りの晩ばかりが——」

「いゝえ、あれは、たゞの喧嘩だつたんですつてさ。擔ぐのは、踊りの晩に限られた爲來りなんぞ。」

「それなら何も僕はあの時のことを非難されるには當らなかつたらうに。」

さうも考へられたが、村政上のこととて村人の仇敵になつてゐる丁氏だつたので思はぬ飛ちりが私にも降りかゝつたのであらう、と思はれるだけだつた。

さつきから御面師は、切りと私を外へ誘ひたがるのだが、私はどうも闇が怖くてたぢろいてゐたところ、そんな風にはなされて見ると、たとへ自分がブラック・リストの人物とされてゐようとも、當分は大丈夫だといふ自信も湧いた。それに踊りの頃になつたにしろ、そんなに大勢の候補者があると思へば、何も自分が必ずつかまるといふわけでもなからうし、そんな懸念は寧ろ棄てるべきだ、加げに多くの候補者のうちではおそらく自分などは罪の軽い部ではなからうか——など、都合の好ささうな自惚を持つたりした。

出歩きを怕がつて、萬豊などに使を頼むのは無駄だから、これから二人がゝりて夫々の註文主へ收め、暫く振りで倉の外で晩飯を攝らうではないかと御面師が促すのであつた。

「ひと思ひに、景氣好く酒でも飲んだら案外元氣がつくでせうが。」

「……僕もそんな氣がするよ。」と私は決心した。仕上げの濟んだ面を、彼がそれぞれ紙につゝんで、私に渡すに従つて、私は筆を執つて宛名を誌した。

「えい、赤鬼、青鬼——これは橋場の柳下杉十郎と松二郎。お次は狐が一つ、鳥居前の堀田忠吉。——いゝですか、お次は天狗が大小、養漁場の宇佐見金藏……」

御面師は節をつけて夫々の宛名を私に告げるのであつた。私は宛名を誌しながら、次々の註文主の顔を思ひ浮べ、あの四五人が先づ最近の血祭りにあげられるといふ専らの噂だと思つた。

何十日も倉の中に籠つたきりで、たまたま外氣にあたつて見ると雲を踏んでゐるやうな思ひもしたが、さすがに胸の底には生返つた泉を覺えた。——随分とみごとに面の數々がそちこちの家毎に行渡つたもので、家々の前に差かゝる度に振返つて見ると、夕餉の食卓を圍んだ燈の下で、面を弄んでゐる光景が續けさまに親はれた。何處の家も長閑な團樂の晩景で、晚酌に坐つた親父が將軍の面をかむつて見て家族の者を笑はせたり、一つの面を皆なで順々に手にとりあげて出来栄を批評したり、子供が天狗の面をかむつて威張つたりしてゐる場面が見えた。そろひの着物なども出来あがり、壁には花笠や山車の花がかゝつて、祭りの近づいてゐるけしきは何の家を眺めても露はであつた。

「皆な面をもつて喜んでゐるね。萬豊の栗拾ひたちが、好くもあんなにそろつて面を持出したとおもつたが——飛んだ役に立てたものだな。」

「なにしろ玩具なんでものを普段持扱はないので、子供の騒ぎは大變ださうですよ。」
うっかりと夜道を戻つて来た酔拂ひなどが突然狐や赤鬼に怪されて膽を潰したり娘達がひよつとこに追ひかけられたりする騒ぎが頻繁に起つたりするので、當分の間は子供の夜遊びは嚴禁しよう各戸で申合せたさうだつた。

三

「水流さんや、お前も餘つ程要心しねえと危ねえぞ。丸十の繁から俺は聽いたんだが、お前えは飛んだ依怙最負の仕事をしてゐるつてはなしぢやないか、家によつて仕事の仕振りが違ふつてことだよ。」

杉十郎は自分に渡された面をとつて、裏側の節穴を氣にした。

「俺ア別段何うとも思やしないんだが、人の口は煩いからな。」

彼は一度村長を務めたこともあるさうだが、日常の何んな場合にでも自分の意見を直接相手につたへるといふのではなくて、誰がお前のことを何う云つてゐたぞといふ風にはばかり吹聴して他

人と他人との感情を害させた。そして、その間で自分だけが何か親切な人物であるといふ態度を示したがつた。彼も例の黒衣の一名だが、おそらくその原因は、その「親切ごかし」なる仇名に依つたものに違ひなかつた。伴の松二郎が亦性質も容貌も父に生寫で「障子の穴」といふ仇名であつた。

眼のかたちが障子の穴のやうに妙に小さく無造作で、爪の先で引掻いたやうだからといふ説と障子の穴から覗くやうに他人の噂を拾ひ集めて吹聴するからだといふ説があつたが、彼等に對する人々の反感は積年のもので、一度はどちらかど擔がれるだらう、親と子と間違へさうだが、間違つたところで五分五分だと云はれた。

「繁ひとり云つてゐるんぢやないよ、阿父さん——」と松は何やらにやり笑ひを浮べながら父親へ耳打した。

「ふん、酒倉の伊八や傳までも——だつて俺たちは別にこの人達をかばふわけでもないんだが、そんなに訊いて見ると……な、つい氣の毒になつて……」

「止めないか。僕等は何も人の噂を聞きに來たわけぢやないぞ。若し、この人の仕事に就いて君達自身が不満を覺えるといふなら、そのまゝの意見は一應聽かうぜ。」

私は二人の顔を等分に視詰めた。抗辯をしようとして御面師は一膝乗り出したのだが、自分もやはり擔がれる部の補缺になつてゐるのかと氣づく、舌が吊つて言葉が出せぬらしかつた。今更此處で抗辯したところで役にも立たぬと彼はあきらめようとするのだが唇が震へて、思はず首垂れてゐた。

「わしらには何も別段云ふことはないよ。だが、だね……」

「云ふことがないのなら、だが、も、然し、もあるまい。」

「折角、面が出来あがつたといふ晩に今更口論もないものさ。橋場の叔父御の口も多いが、酒倉の先生の理窟は世間には通りませんや、だが、も、然しもないで濟めば浮世は太平樂だらうぢやないか。あははは。」

堀田忠吉は獸醫の「法螺忠」といふ仇名だつた。私達としては何もこれらの人々の註文を特に遅らせたといふわけでもなく、ただ方面が一塊りだつたから、努めて取りまとめて届けに來たまでのことである。恰度、養魚場の金藏なども柳下の家に集つて酒を飲みながら何かひそ／＼と額をあつめて謀りごとに耽つてゐるところだつた。——まあ一杯、まあ一杯と無理矢理に二人をとらへて仲間に入れたが、彼等の云ふことがいちいち私達の癩にさわつた。「そんなのなら、え、

もう、好うござんす、品物は持つて歸りませう。難癖をつけられる覚えはないんですもの。」

御面師は包みを直して幾度も立上つたが、忠吉と金藏が巧みになだめた。

「田舎の人は、ほんとうに人が悪い。うつかり云ふことなどを信じられやしない。」

私もそんなことを云つた。

「そ、それが、お前さんの災難のもつだよ。折角人の云ふことに角を立て、六ヶしい理窟を喰つつけたがる。もともと、お前さんが狙はれ、水流つさんにまで鋒先が向いて來たといふのは、お前さんのその短氣な横風が祟つたといふことを考へて貰はなければならぬのだが、今が今どう性根を入れ換へて呉れといふ話ぢやない。人の云ふことを好く聞いて貰ひたいといふものだ——俺達は今、村の者でもないお前さん達が擔がれては氣の毒だと思つて、對策を講じてゐるところなんぢやないか。」

杉十郎がこんこんと論しはじめるので私達も腰を据ゑたが、彼等の云ふことは何うもつかうかとは信ぜられぬのであつた。その話を聴くと、私達ばかりが、矢面の犠牲者と見えたが、柳下父子を始めとして、法螺忠や金藏の悪評は、櫻の時分に此處に私達が現はれると直ぐにも聞いたはなしで、彼等が夜歩きや踊り見物に現れるのを見出す者は無かつた。

「僕達としたつて、若しも此處の青年だつたら、やはり彼等を狙ふだらうな。」

「それあ、もう誰にしる當然で、私なら先づ最初に法螺忠を——」

「彼等は自分達が狙はれてゐるのを秘さうとして、俺などを巻添へにするやうだよ。どう考へても俺は自分が彼等より先に擔がれようなど、は思はれないよ。」

「無論その通りですとも。奴等の云ふことなんて氣にすることはありませんさ。」

私と御面師は、そんなことを話合ひ、寧ろ萬豊や丁氏が先に難を蒙つたのを不思議としたこともあつた。

私は、圍爐裡のまはりに、遇然にも容疑者ばかりが集つたのを、改めて見廻した。そして、人の反感や憎念をあがなふ人物といふものは、その行爲や人格を別にして、外形を一瞥したのみで、直ちに堪らぬ厭味を覺えさせられるのだとおもつた。人の通有性など、いふものは平凡で、そして適確だ。私にしる、若しも凡ての村人を一列にならべて、その中から全く理由もなく「憎むべき人物」を指摘せよと命ぜられたならば、やはりこれらの者共と、そして萬豊と丁を選んだであらうと思はれた。

杉十郎と松は父子の辭に、まるで仲間同志の口をきき合ひ、折りに觸れては互ひにひそくと

耳打ちを交して黙頭いたり冷笑を浮べて何うかすると互ひの肩を打つ眞似をした。親密の具合が猿のやうだ。父と子であるからには餘程の年齢が相違するだらうにも係はらず、二人とも四十位ひに見え、言語は聞直さないと如何にも判別も適はぬ不明瞭さで、絶間もなくぐくと喋り續けるに伴れて口の端に白い泡が溢れた。そして、手の甲で唇と舌とを横撫でして、加けにその手の甲を何で拭はうとするでもなく、そのまゝ頭を掻いたり看をつまんだりした。指の先は始終こせこせとして皿や小鉢を他人のものも自分のものもちよつくと位置を動かしたり、いろいろ食ひものをほんの豆の端ほど嚙んで膳の縁に置き並べたり、その合間には小揚枝の先を盃に浸して膳の上に文字を書いた。癖までが全く同じやうで、松が時々差挟む「阿父さん」といふ聲に氣づかなければ、双兒のやうだつた。

法螺忠は何か一言云ふと、あははと馬のやうに大きな黄色の齒をむき出して笑ひ、それに伴れてゲーツ、ゲーツと腹の底から込みあげる蒸氣のやうなゲップを遠慮會釋もなく放出して「どうも胃酸過多のやうだ。」と咳きながら奥齒のあたりを親指の腹でぐいぐいと撫た。鼻は所謂ざくろ鼻といふやつだが、たゞ赤いばかりでなく脂光にぬらつて吹出物が目立ち、口をあく毎に双つの小鼻が拳骨のやうに怒り鼻腔が正面を向いた。そして笑つたかとおもふと、その瞬間に笑ひの

表情は消え失せて、相手の顔色を上眼づかひに憎々し氣に偷見してゐるのだ。

「よろしい、俺が引受けたぞ。」

彼は折々突然に開き直つて、いとも鹿爪らしく唸出すと大業な見得を切つて斜めの虚空を睨め盡したが、おそらくその様子は誰の眼にも空々しく「法螺忠」と映るに違ひないのだ。

「忠さんが引受けたとなれば、それはもう俺たちは安心だけど、だが——」と松は神妙に眼を伏せて揚枝の先を弄しながら、誰々を抱き込んで一先づ背水の陣を敷き、など首をひねつてゐた。法螺忠のそんな大業な見得に接しても至極自然な合槌を打てる松共も、亦自然さうであればあるだけ心底は不眞面目と察せられるのだ。彼等は、何か選挙運動に關する思惑でもあるらしかつた。柳下杉十郎が再度村會へ乗出さうといふ計畫で、法螺忠やスツボンが運動員を申出たものらしかつた。自分たちが當今村人たちから、あらぬ反感を買つてゐるのは反對黨の尻おしに依るものである故、當面の雲行を「或る方法で」乗切りさへすれば、驕然として一時に信用は奪返せる筈だといふ如き自負に易んじてゐる傾きであるが、彼等へ寄せる村人等の反感は寧ろ彼等への宿命的な憎念に發するものに違ひなかつた。スツボンといふのは養魚場の宇佐見金藏の仇名で、彼は自ら空呆けることの巧みさと喰ひついたら容易に離さないといふ執拗振りを誇つてゐた。彼は松の

云ふことを、え？え？え？と仔細らしく聞直して、相手の鼻先へ横顔を伸し、たしかに聞き入れたといふハズミに急に首を縮めて、

「一體それは、ほんとうのことかね。」と仰山にあきれるのだ。——「だが、しかし萬豊の芋畑を踊舞臺に納得させるのは歴起とした公共事業だ。堀田君と僕は、先づこの點で敵の虚を衝き……」と彼は不圖私達に聽かれては困るといふらしく口を切つて、法螺忠や障子の穴へ順々と何事かを囁いたりした。そして、うつらうつらと首を振つてゐた。彼の眼玉は凹んだ眼窩の奥で常々は小さく丸く光つてゐるが、人が何かいふのを聞く度に、いちいち非常に驚いたといふ風に仰天すると、たしかにそれはぬつと前へ飛出して義眼のやうに光つた。その様子だけは如何にも膽に命じて驚いたといふ恰好だが、本心は何んなことにも驚いてはゐない如く、眼先はあらぬ方をきよんと眺めてゐるのだ。多分彼は、眞實の驚きといふ感情は経験したためしは無いのではなからうか。——願骨がぎつくりと肘のやうに突き出て、色艶は塗物のやうな滑らかな艶に富み、濃褐色であつた。額が木魚のやうなふくらみをもつて張出し、耳は正面からでも指摘も能はぬほどピツタリと後頭部へ吸ひつき、首の太さに比較して顔全體が小さく四角張つて、何處でもがコンコンと堅い音を立てさうだつた。また首の具合が如何にも龜の如くに、伸したり縮めたりする動作に

適して長くぬらくらとして、喉の中央には深い横皺が幾筋も彫まれてゐた。え？え？え？と横顔を伸して来る時に、不圖聞ぢかに見ると眉毛も睫毛も生えてゐないやうだつた。

無論彼等が村人に狙はれるのは、さまざまな所業の不誠實さからだつたが、私は他の凡ゆる人々の姿を思ひ浮べても、彼等程その身振風態までが、擔がれるのに適當なものを見出せなかつた。彼等の所行の善悪は二の次にして、たゞ漫然と彼等に接したゞだけで、最早充分な反感と憎しみを覚えさせられるのは、何も私ひとりに限つたはなしではないのだ、など、領かれた。いつかの萬豊のやうに、スツボンや法螺忠が擔ぎ出されて、死者狂ひで喚き立てる光景を眺めたら、何んなにおもしろいことだらう、親切ごかしや障子の穴の猿共がぼんぼんと手玉にとられて宙に跳上るところを見たら、さぞかし胸のすくおもひがするだらう——私は、彼等の話題などには耳もかさず、ひたすらそんな馬鹿／＼しい空想に耽つてゐるのみだつた。

「……俺アもうちやんとこの眼で、この耳で、繁や倉が俺たちの悪い噂を振りまいてゐるところを見聞してゐるんだ。」

「ほ、う、それあまたほんとうのことかね。」

「奴等の尻おしが籤塚の小貫林八だつてことの種まであがつてゐるんだぜ。」

「林八を擔がせる手に出れば有無はないんだがな。」

彼等は口を突出し、驚いたり、齒噛みしたりして畫策に夢中だつた。——稀に飲まされた酒なので、好い加減に酔つて來さうだと思はれるのに一向私は白々としてゐるのみで、頭の中にはあの壯烈な騒ぎの記憶が次々と花々しく蘇つてゐるばかりだつた。

「何うでせうね。代金のことは切り出すわけにはゆかないもんでせうかな。まさか振舞酒で差引かうつて肚ぢやないでせうね。」

御面師がそつと私に囁いた。

「そんなことかも知れないよ。」と私は上の空で答へた。それより私は、好くも斯う憎態な連中だけが寄集つて自惚事を喋舌り合つてゐるものだ、斯んなところにあの一團が踏み込んだらそれこそ一網打盡の素晴しさで後くされがなくなるだらうに——など、思つて、彼等の様子ばかりを視守ることに飽きなかつた。その時スツボンが私達の囁きを氣にして、え？え？え？と首を伸し、御面師の顔色で何かを察すると「まあ／＼お前方もゆつくり飲んでおいでよ。うつかり夜歩きは危ねえから、引上る時には俺達と同道で面でもかむつて……」

「あははは。ためしにそのまゝ歸つて見るのも好からうぜ。」と法螺忠は笑ひ、私と御面師の顔を

等分に凝つと睨めてゐた。私は何氣なくその視線を脱して、スツボンの後ろに掛つてゐる柱鏡を見てゐると、間もなく背後から水を浴びるやうな冷たさを覺えて、そのままそこに凝固してしまひさうだつた。鏡の中に映つてゐる自分の姿は、折角人がはなしかけても憤つとして、自分ひとり正義的なことでも考へてゐるとでもいふ風なカラス天狗泌みた獨り好がり氣な顔で、ぼつと前を視詰めてゐた。顔の輪廓が下つぽみに小さい割に、眼とか鼻とか口とかが厭に度強く不釣合で、決して首は動かぬのに、眼玉だけが如何にも人を疑るとでもいふ風に左右に動き、折々一方の眼だけが痙攣的に細くさがつて、それに伴つて口の端が釣上つた。小徳利のやうに下ぶくれの鼻からは鼻毛がツシツンと突出て土堤のやうに盛上つた上唇を衝き、そして下唇は上唇に覆はれて縮みあがつてゐるのを無理矢理に武張らうとして絶間なくゴムのやうに伸したがつてゐた。法螺忠がさつきから折に觸れては此方の顔を憎々しさうに偷み見るのは、別段それは彼の癖ではなく、人を小馬鹿にする見たいな私の面つきに堪えられぬ反感を強ひられてゐたものと見えた。そして私のものの云ひ方は、人の云ふことには耳も借さぬといふやうな突つ放した態で、太いやうな細いやうなカンの違つたウラ聲だつた。——私は次々と自分の容子を今更鏡に寫して見るにつけ、人の反感や憎念を誘ふとなれば、スツボンや法螺忠に比ぶべくもなく、私自身としても、先づ、こ

やつ、を狙ふべきが順當だつたと合點された。こやつが擔がれて慘憺たる悲鳴を擧げる態を想像すると、其處に居並ぶ誰を空想した時よりも好い氣味な、腹の底からの爽々しさに煽られた。それにつけて私はまた鏡の中で隣りの御面師を見ると、狐のやうな不平顔で、はやく金をとりたいたいのだが自分が云ひ出すのは厭で、私をせき立てようといらいらして激しい貧乏ゆすりを立てたり、キヨロ〜と私の横顔を窺つたりしてゐるのが悪感を持つて眺められた。彼はこの卑怯因循な態度で終ひに人々から狙はれるに至つたのかと私は氣づいたが、普段のやうに敢て代辯の役を買つて出ようとはしなかつた。そして私はわざとはつきりと

「水流舟二郎君、僕はもう暫く此處で遊んでゆくから、若し落着かないなら先へ歸り給へな。」と云つた。

「ミヅナガレ舟二郎か——こいつはどうも打つてつけの名前だな。あはは。」と法螺忠が笑ふと、スツボンが忽ち聴耳を立て、え？え？え？と首を伸した。すると法螺忠は、後架へでも走るらしく、やをら立上ると、

「あいつは一體生意氣だよ。碌々人の云ふことも聞かないで偉さうな面ばかりしてやがら、餘つ程人を馬鹿にしてやがるんだらう。何だい、獨りでオツに済して、何を伸びたり縮んだりしてや

緑
の
軍
港

がるんだい。自惚れ鏡が見たかつたら、さつさと手前えの家へ歸るが好いぞ。畜生、まご／＼してやがると、俺らがひとり引つ擔いで音をあげさせてやるぞ。」など、呟き、大層癩の高ぶつた脚どりであつた。

いつの間にかわたしの部屋の壁には、いろいろな軍艦の寫眞が額になつて、あちこちに並び、本棚の上には「比叡」と「那智」の模型が飾られ、水雷型の筆立には巡洋艦「鈴谷」進水式記念の軍艦旗とZ旗があつた。「比叡」と「那智」の模型は、それぞれわたしが拜乗の機會に浴した思ひ出の爲に材料を買ひ集めて組み立てたものである。近日中にエンヂンを取り付けて競技會へ出場させて見ようと考へてゐる。わたしは去年の秋、軍港街に移ると間もなく「鈴谷」進水式拜觀の光榮に浴し、續いて驅逐艦「しぐれ」特務艦「劍崎」の進水式に參列の榮を得て、ひたすら胸を躍らせ、行狀の謹慎を保つた。わたしの壁の寫眞の中には閃く海神鋒に翻へる久壽玉から五彩のテープが舞ひ亂れ、翼の音も軽やかな數羽の鳩が放たれた瞬間に堂々たる巨體を、あはや麗かな海上へ乗り入らうとする處女艦の英姿があつた。

わたしはさういふ自分の小さな部屋で、造船作業の爲に夜を更かすことが多かつた。五分刈頭

のわたしは、夜になると、街の被服商で購つて来た海兵用の白の作業服を着て、一服喫すといふ場合には、徐ろに胸のポケットから、先頃「しくれ」進水式の折に拜領した銀製のシガレット・ケースを取り出し、高射砲型のライターからバチンと火をつけた。

この横丁は街中で最も繁華な大通に側して崖際の露路であつた。全く同じ造りの二階家が數軒並んで、隣の二階にもわたしと同じやうな姿の若い士官がゐて夜更まで燈りの下で勉強して居り、そのまた隣も海兵の合宿所で時々、今日ハ手ヲ取り語レドモ 明日ハ雲井ノヨソノ空 行クモ留ルモ國ノタメ 勇ミ進ミテ行ケヨ君——と合唱する聞くだに健やかな血の湧き立つ軍歌が響いた。わたしは何も彼も忘れるといふやうな恍惚の想ひに打たれるなど、いふ機会に、凡そこれまで出遇つた驗もなく、終ひにはふらく病になつてゐた折から、はじめてこの街に移り艦を眺め戦闘機を見あげ、軍樂隊の大行進に力一杯のテープを投げ……いつかわたしは何の不安も疑惑も知らぬ偉大なる感激家に化してゐた。自分のことなどには何の未練も後悔もなく、時に、遺書なりと認める必要に出會ふ折もあれば、勇敢なる杉野兵曹長のそれと同様に簡單明瞭なる一札で充分であると思はれるばかりであつた。

それはさうと、このわたしの窓の下はそんな繁華な大通りの側面でありながら、急に暗くなつ

て、夜更けまで主に脚どり嚴めしい兵隊靴の音が絶えなかつたが、その脚どりの中に毎晩爽やかな横笛の練習をしながら戻つて来る者があり、餘程の熱心を籠めて吹奏するらしいその節廻しがいつもわたしの夢をほろ／＼と誘ふおもしろさなので、一體何んな人なのか知らと懂れて、そつと見降ろすのであつたが、一向姿は定かではなかつた。深い泉水の底に眺める鯉のやうに淡く、吹奏者の姿は忽ち闇の彼方に吸はれて行つた。

最初にわたしがその吹奏の歌を聞きはじめたのは、未だあたりは冬の霧が深く、海の上から放たれる探照燈の翼が崖の側面にあたると、凍てついた冰山に對する稻妻のやうに見えた頃であつた。

ピッコロと云つても専門的なものではなくて、それは何うも昔わたし達が幼い折に弄んだ銀笛の類ひであるらしい響きであつた。御存知ない方は合奏用のピッコロの音を御想像下されば充分である。兎も角あの笛の音が、夜陰の露路を單獨で、ピツ、ピツ、ピツ！と鳴つて、軍歌を節

付け、唱歌を習つて来る音を耳にして、凡そその吹奏者を憎む人は皆無であらう。

二三軒先の合宿から折々聞えるところの、前記の「海兵わかれの歌」ばかりを、銀笛の吹奏者は、氷つた月のころから習ひはぢめてゐたが、彼はどちらとか云へば武骨過ぎる指先かと思へて、その一節さへもが容易になだらかに運ばなかつた。支へては出直し、間違へては歩調を直して、飽かずに續けてゐたのであるが、まったくそれは柳に飛びつく蛙のやうな熱心ぶりで、窓の中のわたしの方がいつの間にか速かに聞き覺えて、そつと細い口笛で合奏しようとしても、一向辻妻さへ合はなかつた。それでも漸く岬の彼方に春霞みが立つて、間もなく聯合艦隊が出動すると噂がたつ頃には、あはれな銀笛の音も辛うじてわたしの口笛に合ふ程度になつた。そしてわたしはその頃今本棚の上に飾つてある軍艦「那智」の進水を目前に控へて營々と夜毎の作業に没頭してゐたが、例のライターで一喫しながら、もうあの笛の音が聞える時分だかと腕時計を見たりしてゐたものゝ、その晩に限つて何時迄待つても現れず、つい連日の疲労のあまりわたしは作業臺に突伏しようとうとしてしまつたのであつた——と、突然、大分呂律の回らぬ怪し氣な大聲で

「おーい、たゞ今あ……」

と怒鳴ると同時に門口の格子が荒々しく開いて、時を移さず、あの別れの歌を叫びながら、見

も知らぬ一人の水兵がわたしの部屋へ轉げ込んだのであつた。彼の眼は大醉に据つて、碌々わたしの姿も見ず

「お、大塚、貴様感心に何時でも机に向つて勉強しとるな。邪魔したら濟まんが、俺は今晚こそは大分酔つてしまつたぞ。ウーツ、失敬、直ぐに寝るから御免よ。」

と云ひも終らず、さすがに服だけは脱ぐと、いきなり卓子の下に伸べてあるわたしの寢床に潜り込み、やをら頭からすつぽりと毛布を引き被つたかを見ると、忽ちごうツといふ大騒だつた。

わたしの被着は、これも錨の印のあさやかな純白の海軍毛布だつた。

云ふまでもなく、門口の具合と云ひ、梯子段の在所と云ひ、並んだ家のかたちは寸分違はぬので、更にまた坊主頭のわたしが作業服を着てゐる有様から、水兵は有無なく自分の合宿と間違へたのである。——わたしは寄んどころなく、その隣にもう一つ同じようなベッドをつくつて、靜かに燈りを消した。

「おや、大塚、貴様も寝たか。」

やがて、水兵は闇の中でわたしに呼びかけるのであつた。

「うむ、寝た。貴様、大層酔つたな。水は枕元にあるぞ。」

とわたしは云つたが、もう彼はまた非常な厭であつた。わたしは妙に胸がさわめて眠れなくなつたので、苜をとつて、そつとライターを点けた時、不圖仁王のやうな腕だけがぬつと傍らに突き出てゐるのに、ハツと思ふと、その拳にはしつかりと一本の銀笛が握られてゐた。そして厭は毛布の奥底だつた。

明方わたしが目を醒まして隣りを注意すると、いつの間にか寢床は綺麗に整理されて、その上に「失禮、失禮」と誌した一枚の紙片が載せてあつた。その翌晩からは、びつたりと銀笛の音は消えて、ひそかなるわたしの楽しみもなく、わたしは専念作業に没頭するばかりだつた。

旗艦「山城」が、二等巡洋艦「鳥海」「高雄」「摩耶」「愛宕」航空母艦「赤城」以下、第十驅逐隊「狹霧」「漣」「曉」を随へ、仄かなる春の霞みが岬の彼方に煙り初めたとは云へ、未だ如月の夢深い曙の波を蹴立て、威風堂々、〇〇方面を指して遠洋航海の碇を卷いたのは、あの翌朝のことであつた。——何もわたくしは、あの水兵が聯合艦隊の所屬であつたかと想像する由もな

つたが、それ以來杳として銀笛の音は聞えなかつた。

艦隊は何處の國の港で春を迎へ何處の大洋の沖合で春をおくり——と市民達の噂も長く、やがて軍港の山々は緑に映え、卯の花の蕾がほころびて散り、海も山もえる炎夏を迎えた。季節をたとへて金樽緑酒とも云へるものならば、おそらく街々の角なみに「艦隊入港」の歓迎旗を翻す眞夏の微風に、天地も陶然として凱歌を擧げるひとときに止めを刺すと申すべきであらう。——軍樂隊の響きが遠方の空から巻き寄せると、街は一勢に閑の聲を擧げて花やかな津浪と化した。街が、そのまま天地を象つて、巨大なる一體の美人であつた。緑の山々は、髻に挿む玉鴛鴦と云ふべく、碧洋に浮ぶ滿艦飾の鏤みは、裙に綴る金蛺蝶と見紛ふて理の當然であつたらう。

わたしは、ふところ一杯に五色のテープを充滿して高樓の屋上から、聲を限りに呼びながら双つの腕を箒のやうになげうつた。

わたしの窓の露路までもが、夜更まで眠つてゐた。わたしは歓迎にしびれた五體を籐椅子に横たへながら、どこからか聞えるシヤムパンの音を聞いてゐた。

わたしの本棚の「比叡」「那智」も滿艦飾を装ひ、見物人が現れた。——そして最早街のどよめきも靜まつたのでわたしもその飾りを降し、恰度水の季節も盛りとなつた折から、エンヂンの備

へ付け工作にとりかゝつて夜を更してゐると、不圖窓の下に笛の音を聞いた。いつの間にか銀笛のことなど忘れてゐたがそれは今度は銀笛ではなくてその度毎に曲り角の生垣でも摘みとららしい青葉の笛の音であつたが、どうもいつかの笛の節と同様の歌を吹奏してゐるので——思はず窓をあけて「やあ」と言葉をかけてしまつた。すると、青葉の笛の吹奏者は脚を止めて、ちよつとわたしと視線を合せたが、不思議もなく取り済して行き過ぎた。全くわたしは人違ひをしたらしいのだが、自分としてはあの銀笛の人の顔を知りもしないので術もないわけなのである。青葉の笛はこの頃一人や二人ではなく、露路にさしかゝると水兵達は皆巧みに吹き鳴らして通り過ぎた。あの拙い銀笛よりも何れも聴き好かつたが、何故かわたしはあの顔も知らない水兵の笛が待遠しかつた。風流氣ヒシヤンキといふわけではなく、わづかなる消夏の懨れである。

文學的自叙傳

父親からの迎へが來次第、アメリカへ渡るといふ覺悟を持たせられてゐて、私は小學校へ入る前後からカトリック教會のケラアといふ先生に日常會話を習ひはじめてゐた。先生は日本語が殆んど不可能で、はじめは随分困つたが、オルガンなどを教はつてゐるうちに私の英語と先生の日本語は略同程度にすんだ。私は祖父から教會にあるやうな立派な燭臺やストツプのついたオルガンを買つて貰ひ、母親の琴と、六段や春雨を合奏した。電燈が點いて間もない頃だつたが祖父は電氣を怕がつて、行燈の傍らで獨酌しながら私達の合奏を聴き、酔が回つて來る時分になると、屹度、ほッほッほッとわらふやうな聲で泣いた。父親を知らぬ孫の巧みなオルガンの彈奏振りに感激するのであつた。ケラア先生は折々バイオリンを携へて私達を訪れた。祖父は鎖國思想の反キリスト教論者であつたが、そんな晩にはアメリカの息子が贈つて寄越したオイル・ラムプのシ

ヤンデリアを燭して、最も簡単な意見を交換した。大體私が通譯官であつた。——私の父親は中學の課程からボストンに生活し、學生時代を終るとどういふわけで、また何んな程度の位置か知らなかつたが、電信技手となつて D. S. N. Struckton なる水雷艇に乗つてゐた。造船所にも務めた。父の先輩や友人が乗つてゐる軍艦や汽船が横濱に着くといふ通知を受けると、山高帽子で紋付の羽織を着た祖父と私は人力車で國府津に出て汽車に乗つた。その度毎に私は父からの届物であるといふ洋服や時計や望遠鏡や物語本などを貰つた。私はいつの間にか、少年雑誌のセント・ニコラスや、ニューヨーク・タイムスのハッピーリガン漫畫などを笑ひながら讀めるやうになつてゐた。然し渡航する機會もなく、祖父が歿くなつて、私が中學に入つた年に、父親は第一回の歸國をした。ところが私は、はじめて見る父親を何故か無性にバツを悪がつて一向口も利かうとしなかつた。とても今更空々しくつて、お父さん——などと呼びかけるのは想つても水を浴びるやうであつた、彼は、つまらぬつまらぬと滾して國府津の海岸寄りの方へ別居した。(述べ遅れたが、私の生地は神奈川縣小田原町である。) 國府津町はその頃村で、東海道線に乗るためには電車で國府津へ向はなければならなかつた。自轉車に乗つて父のところへ遊びに行くと、いつもアメリカ人の友達が滞在してゐた。で私もそれらの家族伴れなどの人達に交つて、ピクニック

に加はつたり、風をあげて見せたりするうちに、彼等と一緒になつて彼等の習慣の中であると、自然に父親とも親しめるやうになり、父と子は相對する場合でない限り、英語で口を利いた。私は、小學でも中學でも凡ゆる學科のうちで綴り方と作文が何よりも不得意で、幾度も〇點をとり、旅先などから母親にでも手紙が書き憎くかつたのであるが(母は私のハガキでも、私が戻るとそれを目の前に突きつけて、凡ゆる誤字文法を指摘した。第一文章が恰で成つて居らず、加げに無禮な調子であると訂正されるうちに、作文でも手紙でも私は、眞に考へたことや感じたことは、そのまま書くべきものではなく、左ういふことは餘程六ヶ敷い言葉を用ひて書くべきだ、左ういふ窮屈を忍んで、決りきつたやうな眞面目さうな、嚴しさうな、そして思ひも寄らぬ大袈裟な美しさうな言葉を連ねなければならぬのかと考へると、文字が亦、これはまた言語同斷といふ程拙劣であつて私は途方に暮れた。親戚などに父の代理として時候見舞などを書かされる場合に、母が傍で視張つてゐるのであるが、私には何うしても、末筆ながら御一同様へも何卒宜しく御鳳聲の程を——などは書けぬのであつた。)——父との左ういふ習慣がすゝむと、私は決してそんな冷汗を覚えることもなく、自由となり、未だ父を見なかつた頃からケラア先生に教つてゐたので書き慣れてもゐたのであるが、ちよつとした旅先からなどでも氣輕に、親愛ナル父上へとも、

汝ノ從順ナル息子ヨリとも書けたし、お早ウ、父サン——などと、彼の友達が居る場合なら呼びかけることも出来た。私は父親の書架に旅行記の類ひばかりが充ちてゐるのを見て、そんなものばかりを耽讀するので家に落着かぬのかと思つた。そして私に、はじめてすすめた本はガリバ旅行記であつたが、私はほんの少し讀んだだけで何故か憂鬱になつて止めた。その書架にどんな本が並んでゐたか殆ど記憶にないが、ローレンス・スタインの風流紀行といふのが酷く手垢に汚れてゐたのを、わづかに思ひ出すことが出来る。——中學を終る頃になると、そこに來る同年輩のアメリカ人の娘と私は盛んなる手紙のやりとりをするやうになつて、時には、君コソハ僕ノ永遠ノ女王デアリ、僕ハ君ノ最モ忠實ナル下僕デアル——などと、全くその通りの氣持で書き、また、斯ンナ月ノ美シイ晚ニ君ト腕ヲ組ンデ、斯ンナ靜カナ海邊ヲ歩イテキルト、僕ノ魂ハ恍惚ノ彼方ニ飛ビ去リ、嬉シキ涙ガ滾レサウニナル、コレハ僕ニトツテ生涯ノ最モ美シキ思出トナルデアロウ——と、それも全くその通りの感銘を持つて喋舌つた。

ところが私は（記述は前後するが）その後結婚の以前に三度もの戀愛を経験したが、手紙は恰で駄目で、どんな類ひの手紙を貰つても容易にそれに匹敵するやうなことが書けず、それでも夢中になつて書くには書いたが讀み返すといつても全身が砥石にかかつたやうな堪らぬ冷汗にすり減

つた。會つてもつい黙り勝ちで、思はず欠伸をするやうなことになつたり、眞面目なことを云はなければならぬ場合に、つい空呆けて横を向いたりするやうな始末で、皆な失戀に終つた。どんなに熱烈に思つてゐても、四角張つた特に拙い漢字で、戀しき君よ……などは書けず、また徹底的に眞面目さうな表情で、屹度結婚しようネ——などとささやいて、手などは握れなかつた。私は、あのアメリカの娘に示した態度や言葉の十分の一でも、この敬ふべき郷土の言葉をもつて驅使成し得るならば、と悲嘆に暮れた。思へば思ふほど、われわれの言葉や文字は、尊嚴に過ぎ、到底犯し得ぬ貴重なものに變つた。

中學の四年頃（記述は前に戻るが）パジェットといふ若い英語の先生と懇意になり、つい話しかけられると問はるるままに答へてゐた。英語の科目は凡て、終始満點であつたが、それは當然のはなしで寧ろ濟まなく考へてゐた。何の先生とも個人的な口を利くことは絶対に嫌ひなものであつたが、パジェットさんの場合は全く止むを得なかつたにも關はらず、いつか、毛唐など得意さうに話して、あいつは生意氣だといふ評判が立つてしまつた。凡そ私は得意でなどはなかつたのであるが、家に戻ると娘を案内して（その時分はあんな手紙を書きもせず、特に恥しいといふことも知らぬ程度で）自轉車を並べながらあちこちの風物などを説明しまはるのであるが、娘

が呉れるネクタイを結ばなければ悪いやうな気がして、制服を着換へてゐたのを、學生監に見つかつて停學處分を享けた。生意氣と見られれば途方もなく生意氣に相違なかつたらうが、終ひには墮落呼ばりをされるに至つては私も餘程憂鬱にならずには居られなかつた。そして、學期末になると、體操の點が戊といふ最下等であつた。開校以來の出來事だ左うであつた。作文の丁は黙頭けるのだが、さすがに體操の落第點といふのは、努力の仕様もなく、途方に暮れるうちに、私は益々それが馬鹿々々しくなつて、號令をかけるのさへ嫌ひになつた。體操の教師は二人ゐたがTさんといふ錐のやうな眼の休職曹長が非常に私を憎んだ。どういふ意味か知らないがT先生はジャツコラといふ綽名で、箱のやうな感じで、步調の試験だなどといふと、私ばかりを大勢の前に引き出して、やれ踵が二秒早く降り過ぎたの、脛がもう何ミリ前へ伸びぬからとかと飽くまでも難癖をつけて、他の者の十倍も長く歩かせるのだが、そんなにされれば益々氣持が上つてしまつて、思はずフラフラすると先生は堪らぬ罵聲を擧げて鞭を鳴らした。そして、これを見よと叫んで、自分の步調の模範を示すのであるが、私には決してその差別が見わけ難かつた。私は、これほど人に憎まれた經驗を未だに比ぶべきものを知らない。——私は終ひにこれは何うも自然に任せるより他はないと觀念して、徒手體操の時になつても、決して力が入らぬやうな動作になつ

てしまつた。前腕ヲ平ラニ動かセ、オイツ！ とか、首ヲ前後左右ニ曲ゲ——など割れるやうな號令の許に、あはや顎のかけがねが脱れんばかりな仁王のやうな大きな口をあげて、オイチ、二ツ、などと絶叫しながら、腕を力一杯に折つたり曲げたり、首などは石ころのやうに亂暴にあつちへ向けたりこつちへ曲げ倒したりして、その勢ひの最も瘳猛なやつが甲上だなどといふT先生の訓練法に、私は自づと逆はずには居られなくなつた。先生は私の體操振りを目して、クラゲのやうだとか酔拂の態だとかと憤つて、腕が抜ける程引つ張つたり、首根つこを掴んで振り回したりしたが、責められれば責められる程否應なく私の動作は手應へもなく亡靈と化した。今にして思へば、私のあれらの體操振りは寧ろ現代的なる方法を髣髴する概があつたと思はれるのだ。今では何處の學校や海兵團の體操を見たつて、あんな馬鹿臭いのはありはしない。あんな體操などは凡そ肉體に不自然なる激動を與へるのみで終ひには精神作用までも最も偏頗なる小局に乾干びさせてしまふ位のものである。個性と自然との純一を貴んでこそはちめて心身のトレーニングに役立つべきで、今や朝あさの霞を衝いて津々浦々までも鳴り渡るあの明朗至極なるラヂオ體操を見ても明らかあきらか如く、正にあのやうなる悠かな窈窕味をもつて大氣に飽和し、自づと潤達なる人生の大呼吸を體得すべきが當然の所以は、かの偉大なるルツソオも既に「エミール」の中で縷々と述べ

て居り、更に世紀文明の太初に遡つては夙に大ソクラテス並びに大プレートンが全生命を傾注したる諸詭法を選んで永遠に若々しく呼號してゐる通りである。不幸なる私は、あの中學の體操に依つて犯罪妄想の如き心悸亢進の胚種を植ゑつけられた。兎角、肩肘張らしたる度偉い掛聲は人生を暗澹とさせるより他に効果はない。そこで私は或日思ひあまつて、あの體操に關する疑惑をバジエツト先生に訴へると、眞の日本流はあんな筈ではないであらう、またスバルタ流と雖もその趣きを異にするものだと私に同意せられ、君は明日にも、眞の自由と、誠なる個性を尊重する校風の、都の學園を求めて轉校すべきが當然だ——とすすめたが、私が轉校もしないうちに先生は京都の大學へ移られた。先生はエール大學のドクトル・オヴ・フィロソフイで、文藝にも餘程の理解を持つて居られたらしかつた。後にも私との手紙の往復は續いて、私が又作文丁をとつたことなどを知らせると、君は未だ作文に於ける Herald system を知らないまでだ、自分に呉れる手紙を見ると、いつも大層奇抜なるロマンティック・スピリットに富んでゐて詩人の素質が十分だ、いつそ手紙を書く通りに自由に書き、それを和譯する方法をとつて見たら如何か、と注意されたので早速私は、よしッ！ と胸を叩いて、その方法にとりかかつて見たが、和譯した文章を眺めると、拷問にかけられても他人の前には提出も敵はぬ幼稚沁みたものに見え、私は腕をこまねい

てとつおいつなる長太息を洩らさずには居られなかつた。

斯くの如く體操と作文の爲に最も救ひなき憂鬱を味はされた中學を終へると、私は一高の理科へ入學するつもりで、本郷に居た醫學士の叔父のところへ來た。あの二科目さへ除けば別に好悪もなく、何んな入學試験問題集を見ても六ヶしいと思はれるほどのこともなく何の不安もなかつたので、麹町の二松學舎へ通つて作文問題の用意のために改めて漢文と國文に身を入れようとした。ところが試験場へ行き、あまり大勢の學生が青ざめてゐるのを目撃すると、一人でも餘分に入學させてやりたいと云はんばかりの凡そ意味もない霸氣見たいなものに驅られて、そのまま方角も知らなかつた早稻田へ人力車を走らせた。バジエツト先生にはあんなことを云はれたが文學的野心は抱いた験しもなく、讀んだものと云へば押川春浪の「武俠世界」だけだつたので、思はず瞬間的にそんな大それた感情に驅られたのだつたかも知れない。英文科を選んだといふのは、單に自分の英語の習慣に媚を呈したに過ぎなかつた。手續(無試験)を済ませて、鶴巻町通りの高島屋支店といふ洋服屋に寄ると、頭髮を綺麗にかけた神經質さうな鋭い眼で、温厚さうな小柄の主人が、何科だと訊ねるので、しだと答ると、早速ノートを持出して來て自作の詩を朗讀し、感想を聞せて呉れと云つた。その詩は記憶にないが、妙に私はこの時の印象がはつきりしてゐるので

記述しておくのだが、おそらく文科生としての文學談を聞いた第一歩だつたからであらう。——
彼は私が黙つてゐると、珍らしい謙遜家だネと好意を示し、君は何を書く？ と云ふのであつた。
事實の通り皆無と答へると彼は信ぜず「あてて見ませうか、ドラマでせう。」と云つた。そして彼
が自由劇場の話などを持出したところ、私は二年位前からアメリカ娘を案内して大分芝居を觀
てゐたので多少の受應へが出来ること、いつの間にか彼は獨りで黙頭いて、これから先輩を紹介し
ようと云つて早速案内した。私も何故ともなしに悦んだのである。文科の三年生で本郷素行とい
ふ方だつたのを私は覚えてゐる。本郷氏は書物に満ちた下宿の一室で腕まくりで論文作成に没頭
してゐた。五分刈頭の學者肌の人柄で、高島屋が、牧野さんはドラマティストだと紹介すると、
本郷氏は凝つと私の顔を見て鷹揚にうなづいた。私は、いいえとか、未だそんな……とかと口の
うちで呟いてゐたが、主人と先輩は頻りともうイブセンに就いて語り合つてゐた。私は無論黙つ
て坐つてゐるのだが、凡そそれまでに感じたこともないバジェット先生の所謂眞の自由と誠なる
個性の尊重ともいふべき雰圍氣を事實に觀る想ひがして、何といふことなしに文科生たるの歡び
を感じたのを未だに忘れられない。何故なら私はそれまで、個性とか思想とかに就いて語り合つ
てゐる人の姿を見た驗もなく、個性を考へるといふことは丁とか戌とかに匹敵する惡業のやう

に押らされてゐたので「君の意見はそれはそれとして一廉であり……」とか「意志の自由に於い
て……」とか「誰が誰を掣肘出来るものか……」などといふ言葉が悉く絶大なる美しい響きを持
つて感ぜられた。要するに、青葉の窓下で純粹な夢を語り合つてゐる二人の人物が物珍らしくブ
ラトニックに映じたのであらう。私は歸りがけにWのネクタイピンを買つた。

ところが私は何とも迂闊なことには、二三日経つてはじめて學校へ行き、はじめて時間割を見
て、思はずアツと驚いた。こゝにも例の體操と作文の科目があつて、出席して見ると、やはり黒
板に「故郷に入学を報ずる文」といふやうな題が出て私は一行も書く氣になれず、また體操に出
て見ると、氣を付ケ！ 番號！ などといふ嚴めしい號令がかかつた。そして、その掛聲から恐
るべきTさんの錐の目が光つた。Tさんの聯想さへなければそんなに驚かなかつたのであるが、
あの歩調の亡靈は飽くまでも私に絡みついて、私の脚はすくんだ。學年末の通知表を見ると作文
と體操が、○點と○點で落第だつた。學校に入つて初めて口を利いたのは故柏村次郎であり、次
にクラス會が大久保の方で開かれた時淺原六朗と知り、間もなく岡田三郎、吉田甲子太郎、下村
千秋などに出會つた。英語では中學でこりてゐるので益々臆病になり、何も今はもうそんな必要
もないのに、事更に知らぬ振りをして、輪講などといふものの順番があたると、息を殺して決し

て立ち上らなかつた。「出席を呼んだ時にはたしかに返事があつたのに？」日高先生は屢々首を傾げられた。ところが私たちの中學とは違つて、ミセス・ケイトの會話の時間などには自ら進んで立ちあがり勇敢にまくし立てる學生もあり、中學生のやうに誰も彼を目して生意氣だなどといふ者もないのは私を安心させたが、酷い目に遇つた習慣といふものは因果なもので、私は單なる朗讀の番でも口を開くのが厭だつた。然し強情にそれを固守して、五年も六年も経つうちに、ほんたうに出来なくなつてしまひ、やがては必要上からも斯る手段を講ぜずには居られなかつた。ただ、たつた一遍豫科の二度目の一年の時、ケイト先生の自由英作文といふので満點を貰ひお前は外國の中學を出たのか？と訊ねられて以來折々廊下でつかまつたが、二年目には先生は商科へ移られて御挨拶の折もなく、その頃は吾家へ歸つても親父はまたヨーロッパへの長い旅へ出て不在であり、碧眼の娘は歸國してミセスになつて居り、私は母や祖母へ金の追加を乞ふ書簡文を書くことがぼつぼつと巧みになつて、市村座の芝居などに現を抜かし、六代目やハリマ屋の聲色をつかつた。本郷にゐた叔父が人形町に開業したので一緒に移り、叔母の従妹にあたる娘と芝居を見廻つてゐたが彼女が嫁いでからは妙に寂しくなつて早稻田の下宿に移ると、益々母への書簡は巧妙となつた。そして、私はその娘に夥しく輕蔑されて失戀するといふやうなことがばかりを空

想した短篇などを書きはじめた。柏村、岡田、淺原、吉田、下村などと一廉の文科生振つた口を利くやうになつたが、自分の文學的教養を考へると内心大變に不安であつた。非常なるトルストイアンで特待生である吉田は芝居のプログラムばかりが散亂して英語の本など讀みもしないやうな私の机のまはりを苦々しく見廻して、お前は好くそんな態度で生きて居られるな！とほき出し、小六ヶしい英單語を會話の中へ加へて、どうだ解るまいと悸かすのだが、その發音と素振ソウブネが餘り物々しく技巧的過ぎて解らず、私は英語は嫌ひで出来ないのだから文句の中にそれを挿入せず喋舌つて呉れとをがんだ。嗤はれても當然のことと思つてゐるので反感も覺えなかつたが、兎も角自分も随分と遅れてゐる文學的教養を付けなければならぬと考へても、何から讀んで好いのか、また何んなのが好きやら嫌ひやらも解らず、と云つて今更そんなことを友人に訊くのも間が悪いので、思案の揚句、凡ゆる意味で世界の初めから出發しなければならぬと思ひ立ち、眞夜中に坐り直して「太初に言葉あり」と讀みはじめた。これが文學に關心を持ち出してからの太初の讀書で、混沌哲學からソクラテス、プレトーン、アリストテレス、エビクテータス、セネカ、パスカル——そしてシヨベンハウエルとすすんで、稍々夢中の度を増したが、一向文學的世界へ手懸りを見出す餘裕もなく、讀書に關する話題などは誰の前にも持出せなかつた。そ

んな間に、それでもぼつぼつと書いてゐた短篇をゲーテ研究の柏村に讀ませて添削して貰つてゐたが、或日彼が、何うも俺よりお前の方が文章が巧い（と聞いた時には私は實に驚いた）やうだから俺の譯した「ヘルマン・ドロテア」を讀んで見て呉れと云ふのであつた。何ういふわけか知らないが俺はお前のものを讀むと可笑しくなつて仕様がなないと彼は腹を抱へて、私が見せたがらないノートのものなども讀み、反つて下書の方が面白いと云つた。笑はれると私は困つて赧くなつた。「ヘルマン・ドロテア」を讀んでから英譯のゲーテ全集を買つた。ブレトーン以降の思想が歴然と影響されてゐるのを見て私の胸は異様に震へた。その頃、小學中學からの仲間であつた鈴木十郎が受験生だつたのを私が無理に早稲田の文科へすすめた。そして二人は毎日朝から夜中までゆききして喧嘩をしたり、二人雑誌をつくらうなどと興奮しながら、鈴木が私の五倍もの好劇生だつたので、一時休息してゐた芝居が亦私の上にも復活して、やがて二人は入質といふ術まで覚えて切りと遊びまはつたが、鈴木は稍ともすれば私の芝居の觀方その他が野暮だといふことにはじまつて稍ともすると、彼は疊を叩いて非常に憤激して終ひには涙を滾した。私もそれに伴つて震へて悲しんだ。そして夜遅く別れて下宿に歸ると、鈴木に見せる爲の小説を書くのであつた。朝目が醒めると彼は既に私の枕元に坐つて原稿を讀み、「おお」「おお」と挨拶するのであつたが、

その瞬間の彼の表情で私は、前夜自分の書いたものの及落を素早く感ずるやうになり、私がおお……と云つても彼が憤つとしてゐる氣色であると、階下に顔を洗ひに降りる時脚がカッ氣のやうに重かつた。彼は評論家を念とし、いつの間にか私は、小説の仕事こそ何よりも自分には甲斐があるかと考へるやうになつたのである。憤つてばかりゐたが、私にはつきりと左ういふ夢を與へて最も苛責なき鞭鞭を加へたのは彼が最初であつた。彼は現在、歌舞伎座の支配人になつて居るが、相變らず折々の會見や手紙で、私の脚をカッ氣にさせたり、Scout's Pace に走らせたりしてゐる。御存知には違ひなからうがスカウツ・ベースといふのは一哩を十分強で驅るハイキングの術語である。因みに彼との二人雑誌は後に詩と短歌を主にして「金と銀」と題し、半年あまりも續けたが他方面には寄贈しなかつた。いにしへのものはなしにありときく、黒髪ばかりあやしきはなし——といふのはあの頃の彼の快詠であり、何かの雑誌（？）に吉井勇の選で一等をとり、ゆき暮れて神樂の太鼓早びよう子——といふのは、後にも先にもたつた一つの私の詠草であつたが、それは金と銀にも載せなかつた。

その後柏村は、吉田や長谷川浩三と共に「基調」、岡田は「地平線」、私は卒業の後に淺原と下村にさそはれて「十三人」、鈴木は同級の者達と「象徴」、等の同人雑誌に分れたが、私は一年遅く入

つた鈴木との交遊の爲に前後三級に渡つての幾人かの人達と文學を語り興奮を覺えたものの、文學とはじめのきつかけがああいふ始末であるのが内心氣拙く、時には生意氣さうなことも口にしたが、いつまで経つても他の者の方が悉く先輩に見えて、努めても議論などは出来なかつた。稍ともすれば己れの弱小のみを持つて回すといふ風な野暮つたさが、表現の上に度強くなり勝ちなのは何うやら飽くまでもその出發點の雲行に起因したに相違なかつた。で私は又、日本橋へ戻つて叔父の知合ひの毛織物輸入商のオフィスに寄宿して餘念もなくタイプライターなどを叩いてゐるうちに「十三人」の第二號に、學生時代に書いたものの中から鈴木に選ばれた「爪」といふ小篇が載つたのを偶然にも未知の島崎藤村先生に御手紙で讃められ「新小説」の新進作家號に紹介された。更にその小説を機會に中戸川吉二を知り、雑誌「人間」へ紹介され、また一、二年置いて「文藝春秋」や「新潮」に掲載される機會を得、それは二十六七歳の頃であつた。「新潮」の「熱海へ」といふのが評判が悪く、もう駄目かと思つてゐたところ、二十九の頃になつて中村武羅夫氏に會ふと、あれを讃めて下さり、非常に意外な氣がしたと同時に、漸く將來に對して迷妄が深かつた折から、グツとする態の感激を覺えた。そして中村氏をはじめ久保田万太郎氏や故葛西善藏氏に多くの鞭鞭を與へられながら、兀々と書くうちに善藏氏の紹介で知遇を得た「中央公

論」の故瀧田哲太郎氏に認められ激勵の手紙を頂いたり、幾度か御馳走にあづかつたりした。瀧田氏は、ほんのり酔はれると高島屋や吉右衛門の聲を聴かせて下され、私にも何か演つてと所望されるのであつたが、私は十年前に本郷素行氏の宿を訪れた時のやうに堅くなつて白黒してゐるばかりだつた。

私の文學的自叙傳は、このあたりから書きはじめるべきと思ひ、前述の項は出来得る限り壓縮しようと思つたのであるが、自發的に目醒めなかつた私の如き場合では、どんな少年時代の一片をとりあげても、自然と文學へ赴くより他に結局道もなかつたかのシルエツトが感ぜられて特に文學的と區切るべき處置に迷ふばかりであつた。あれこれと思ひ惑ふうちには、文章が不得意なる「作文時代」に戻つたかのやうに生氣を失ひ、先輩や友達や肉親から享けた素養と環境に就いて、何處を何う抜擢したならば、この機、ヘラルド・システムに最も適當すべきか、それには畢竟三十八年幾月かの生涯を最も端的に語るべきと考へるのであるが、その力量を試し損つたのは遺憾である。——ひたすら、刀ヲキ抽テ水を斷レバ水更ニ流レ、杯ヲ擧ゲテ愁ヲ銷サントスレバ愁更ニ愁フともいふべき焦燥にさへ驅られながら、思ひ出の走馬燈は限りもない勢ひで回轉するもの私は途すがら落花に遇つて長く歎息する面持で絶望と陶醉の島を遍歴して來たに過ぎない。

皆な忘れて裸島へ泳ぎつき、私は日に日に漂流者の營みをもつて、あちこちに移り住んだが、わづかな風にさへ私の小屋は忽ち吹き飛んで未だに家も成さない。どうやら私の Indian Slide は運命的でもありさうだが、私は昨日の己れが絶対の姿であるとは考へたくないのである。

落花踏ミ盡シテ何處ヘカ行ク——

つい焦れつたくなると漢語調の歌をうたふのは、代紋かゝいもんと稱して提燈や傘などにつける紋章もんしょうに梯子はしの印いんを付け、自烈亭居士と號して狂歌などを詠んだ祖父、そしてインディアン・システムは父からの影響であるが、今日を限りとして私はそんな文章癖は棄却しなければならぬ。私はいつも自分の文章を読み返すと、凡ての過去そのものの如く自烈じれつつたくなるのが常である。

俺は見た

痛手いたでを負へる一頭の野鹿が

オリオンの槍に追はれて

薄明うすあかりの山頂みねを走れるを

——あゝ されど

古いにしへ人の嘆なげきのまゝに

影の獵人なり

影の野獸なり

日照りつきで小川の水嵩が——その夕暮時に、この二三日來の水車みづぐるまの空回りを愛へたあまり

蠟燭のやうにめつきりと聳碌してしまつた私と此の水車小屋の主人であるところの雪太郎と、ふるる腕を堪えて水底深く水深計を立て、見ると、朝に比べて更に五寸強の減水であつた。——私は、風穴に吸ひ込まれるやうな心細い悪感を覚えながら、水面に首垂れて深い吐息を衝くと、不圖自分の顔が、青空を浮べた水鏡の中にはつきりと映つてゐた。いつもいつも上手の年古りた柳の影で、不斷に轟々然たる物凄まじい響きを擧げて回り續けてゐる水車であつたから、このあたりの流れは白く泡立ち煮えくり返つてゐるすがたで、ものゝ影が映るなど、は思ひも寄らぬのに——嗚呼、そこには私と雪太郎の上半身が微風の氣合ひも知らずに、あざやかに生息してゐる。きよんとして、水面を見あげてゐる。まさしく二體のニツケルマン（河童）に違ひなかつた。で、私は、もの珍らし氣に、ものゝ怪の顔つきを見定めてやらうと思つて、呑めるまで程近く水面に顔をおしつけて凝つと閻魔の眼を視張つた途端に、キラキラキラと突然水鏡が碎け散つた。柳の影を振り返つて見ると、水面と殆んどすれ／＼になつてゐる水車が、乾いた喉に泉の雫を享けたやうに、物狂ほしく廻轉を貪りはじめてゐた。

私と雪太郎は、汀の葦の中にどつかりと胡坐をして、思はずそつた動作で鐵の棒を持ちあげるほどの重々しい思ひで徐ろに腕組をすると、黙々として胸を張つた。

柳の木の間から眞向きにあたる川上の、恰度流れが悠やかに曲らうとしてゐるところに水門が構へてゐる。——見ると、水門の兩端に二人の男が馬乗りになつて、此方に向いて腕を擧げながら切りと何か喚いてゐたが、水車の音にさへぎられて一向に聲はとどかなかつた。その腕の振り動かし具合は、見へざる敵の劍に、今や見事な巻き落しを喰はして馬上ゆたかに快哉の叫びを擧げてゐる颯爽たる騎士の姿に私の眼に映つたりした。二人の人物は雪太郎の父上である雪五郎と弟の雪二郎である。二人は、終日、水門の兩端に相向ひ合つて、水を溜めては堰を切り、流してはまた門を閉ちて水を溜める仕事に没頭してゐるのである。雪五郎は八十歳に近い年輩であつたが、樂々と斯る労働に堪へ得る程の健康の持主である。私も一度、試みに水門番にたづさはつて見たこともあるが、いざ堰を切る段になつて門を引き、把手を肩にして満身の力を持つて開門しようとしても、曳哉／＼と叫ぶ掛聲ばかりが水車の騒ぎよりも壯烈に鳴り渡るばかりで、打たうが叩かうが、それは私にとつては永遠に開かずの扉であつた。加げに私は空力があまつて肩を滑らし、あはやと云ふ間もなく眞つさかさまに水中目がけて不慮のダイビングを試み、危く溺死しかゝつたところを雪五郎に救助された。毎晩／＼雪五郎父子と共に圍爐裡のまはりに集つて私も盃を執りあげるのであるが、さまざまの債權者がおし寄せて來て彼等はまだ私達の平身叩頭の詫

びも聞き倦きて、明日にもこの古呆けた水車小屋を乗つとらうとする勢ひであつた。

「雨が降りさへすれば、忽ち車は回り出すんでございます。どうぞ、それまでお待ち下さい。今、その俵を持つて行かれては、今夜にでも恵みの雨が降り出して、いさ車が回りはぢめたとしても、それこそ私どもの白は空つぼのまゝで、杵に打たれて割れてしまふより他に道はございません。」

雪太郎が、疊に頭をすりつけて涙ながらに詫言を述べると、私たちのまはりに車がりの陣立でぐるりと勢ぞろひをしてゐるむくむくとむくれあがつた雷共の中から、中でも瘳猛な地主のアービスが腕まくりをしながらすゝみ出たかとおもふと、いきなり物をも云はず拳骨玉を振りあげて雪太郎の頭をぼかりとなぐつた。そして、役者のしぐさよりも役者らしく眞に迫つた怖ろしい憎みの見得を切つて

「えい、この空つぼの白頭奴が——」

とほき出した。——「こばから皆な杵に打たれて死んでしまやがれッ。」

それに續いてアービスの従者のアヌビスが、自慢のねちくれ腕を、ぬつと、今度は、父親の雪五郎の鼻の先に突きつけて

「金が返せないといふんなら、うちの若旦那の御所望通りに、うぬの娘をお妾奉公に出すが好い

や。何も奉公に出したからと云つて、とつて喰はうと云ふんぢやない。斯んなぶつつぶれ小屋で、喰ふや喰はずの暮しをしてゐる貧乏娘が、俺らのうちの若旦那のお情けを蒙るなんて、夢にもない大した出世ぢやねえか、そんな妙佳も知らずに、一體娘は何處にかくしてしまやがつたんだい。やい、やい、やい、さあ、ぬかせ、娘の在所を云やあがれえ。俺達一同は、手前達のべこべこお辭儀の體操を見物に來たんぢやないぞや——やい、この米搗きばつたの老ぼれ野郎奴——」

と、まことに(立板に水を流すやうに)べらべらとまきし立てるのであつた。私は、立板に水を流すやう——といふ形容詞に不圖出遇ふと、何とまあ見る間に、小川の流れがさんさんと水嵩を増して節も長閑に水車が回りはじめた光景が、ありありと眼の先へ浮びあがつて、胸が一杯になつた。思はず私は、眼を閉ぢて有り難い光景にふらくと迷ひ込まうとした途端に

「そつちの隅の大先生！」

と呼び醒された。見ると、それは米俵に大股をひろげてふんぞり反つてゐる鼻曲りのガラドウである。奴は泥棒である。晝間は、地味なネクタイなどを結び、胸にはさんらんたる金鎖を輝やかせて町の銀行で接待係などいふ紳士的な業務にたづさはつてゐる癖に、夜になると、云はゞ晝間のつけ鬚はかなぐり棄て、狐の性に反つて不思議な活躍に躍り出すのだ。現に私の或る彼の

性と似通つた叔父貴と共謀して、私の死んだ父親が、愚かであればあるほどいとしい私の行末の生活を案じた上に數百町歩に渡るものゝ見事な蜜柑山を遺しておいたのを、私の老母をたぶらかして「私」の印形を手込めにして「負債證書」を捏造したとかといふ話だ。私は、斷じて、そんな「山」などいふものゝ所有權に關心は持たぬのであるが、秋日から冬にかけてこの龍卷村の三方をとり圍む蜜柑山の壯麗な色彩りを見渡して野遊びの快を食する日などに、番小屋の窓から叔父やガラドウが大きな眼を視張つて、蜜柑泥棒の監視をしてゐる姿を見ると、慌て、踵を回さずには居られなくなるのであつた。私は彼等の物慾を卑しむわけではなかつたが、その一味に肉親の者が加はつてゐるのを知つてしまつた事に鬱陶しさを覺ゆるのであつた。——ところで、このガラドウは、そんな類ひの所業が寧ろ仕事であつて、今では、山を越えた隣り町に住む私の叔父の屋敷つゞきの桃林の中にバンガロウ式の館を建て、美しい妾を圍つてゐる。それは餘談であるから説明を元に返すが、ガラドウといふのは私が與へた仇名であつて、つまり狐頭の化物の意味である。本來の和名は——此處に述べる要もないが桐渡鎌之助を、自ら最近、鎌通と改めてゐる。理由は解らぬのだが、私も考へたこともないが、姓名判斷に従つた由である。それと同じく、地主のアービスは牛頭、従者のアマビスは犬頭——共に私の命じた名前である。

「ねえ、先生。」

桐渡ガラドウは、さう繰り反しながら、自分の眼の方が米俵に腰掛けてゐるのだから、雪五郎の隣りに坐つてゐる私のよりは、はつきりと上段に据つてゐるのに、その視線をぐねりと波型にしやくりあげて、逆に、下から上へ私の顔をおしあげるやうに見あげるのであつた。私が彼に、鼻曲りといふ形容詞を冠したのは、彼の野蠻な皮肉味を抽象的に指したのであつて、實物の彼の鼻は、いつも私に昔嘶の中にある業慾者の鼻にぶらさがつたといふソーセイジを想像させる態の、赤味の滲んだ肉付き豊かな、何とも憎たらしいごろん棒であつて、決して曲つてゐるといふわけ合ひではない。大先生とか、先生とか、何うかすると博士さん——など、彼は私を呼ぶので、もうせんには私は、眞實彼が私を尊敬して斯く稱ぶのかと思ひ、うつら／＼として一處に茶屋酒を飲んだり、色紙を書いて贈呈したり、また、印判を證書見たいなものに捺したり、したこともあつたが、それは未だ私が彼にガラドウなどいふ仇名を付けぬ時分で、彼が屢々口にする通りに私の親友だと思つてゐたのだが、或時彼が

「この判さへ捺させてしまへば此方のものだ。——薄のろ野郎奴が、好い氣になつて斯んなものを書きやあがつて……」

さう嘲笑して、私の蔭で折角不得意の筆を執つて私が揮毫したところの、愛唱歌であるから何時でも私は空で覚えてゐるのだが、ちぎれちぎれに雲まよふ、夕べの空に星一つ、光りはいまだ淺けれど、想ひ深しや空の海、あゝカルデヤの牧人が、汝を見しより四千年、光りは永久に若くして、世はかくまでに老ひしかな……云々以下三聯から成るゲルマン族の牧歌を、奴は、滅茶苦茶にひつちやぶいて、マメイドといふ私が好意を寄せてゐる居酒屋の娘の頭に雪と散らした。その由を私はマメイドから聞いて、非常に自尊心を傷けられた。また彼は、マメイドに向つて、彼が私を目して、三通りの尊稱を使ふのは、

「大馬鹿先生」——「自惚博士さん」——「貧棒の大先生」といふ意味なのだ——

「それを知らないで、好い氣になつて小鼻をふくらませてゐる格構と云つたら……」

そんなことを云つて、ひとりで腹を抱へてゲラゲラと笑ひころげた——

「先生、あたしは、ふんにと口惜しかつたわ。先生とあたしと仲が好いことを、あいつと來たら飛んでもない風に思ひ違へて、あんな博士とは喧嘩をしてしまへ、そして、俺と好い仲にならうではないか——だつて！」

河原で摘んだ花束を携へて私を訪れたマメイドが、悲しみに首垂れながらそのやうなことを傳

へたことがある。それに違ひない、好意を持つてゐると云つても私がマメイドに寄せてゐるそれは戀情沙汰ではない。この家の雪太郎は私と同年輩の三十餘歳であるが、親想ひ、兄弟想ひの律義者で、營々としてこの水車小屋の經營に没頭し通して、未だに妻も持たなかつた。私は、もう少し、この水車が順調となつたならば、是非とも彼とマメイドとを夫婦にさせてやりたいものだ——と希ふてゐる、二人とも行末長く私の友達として苦樂を共にするに適はしい人物である——

左う云ふ意味の好意なのだ。また、雪太郎父子は、見るかげもなく落ぶれ果てた私が妻を引き伴れて、もう長い間この家の二階に籠居してゐるのだが、恰も私を代官のやうに尊敬して、下にも置かぬもてなしである。いわれと云へば、昔、私の先々代の田畑がこのあたりにあり、その米を雪五郎がこの水車で搗いたといふだけの話で、寧ろ私方が憎まるべき不勞所得の搾取階級に違ひなかつたのだらうが、そんなものゝ子孫を未だに有りがたがつて、私が町のあばら屋で寒さに震へてゐるといふことを聞かないや、米運びの馬車に赤毛布の座席をつくつて、鞭をならしてはるばると駆けつけたのである。以來私は、夫婦仲睦じく、この家に起居をつゞけてゐたのであるが、雪五郎の娘のお雪を襲ふアヌビス共の鋒先が日増に猛々しい火花を散らして亂入して來るといふまことに容易ならぬ状態に陥つたので、私達、男四人が一夜爐端に額をあつめて、よりより

會議をこらした揚句、ひとまづ難を、こゝから流れに添ふて五里の山徑をさかのぼつた唐松といふ部落へ避けしめたのである。唐松村は四方を峻しい山にとり圍まれた明るい盆地の村で、氣候溫暖、産物に恵まれ、五十戸からなる大よその民家は酒造りの業を本業として、且また村人はこぞつて神樂用の假面つくりの腕に長け、春秋二季の祭りの季節となれば、自ら達が俳優となり、いとも原始的な假面野外劇の團隊をつくつて村から村を打つてまはるといふ習性を持つてゐた。彼等の演劇に寄せる近郷近在の人氣は、遠く西方の國のオルベルアムメルゴウ村の聖劇にあつまる世界各國の讚美の聲の有様を眼のあたりに見るが如き概があつた。唐松村は、世にも稀なる平和の里であつた。國はぢまつて何千年、かつて、あらゆる戦亂のいさゝかの翼もこの村の空には夢ほどの影を落した驗しもなかつた。それ故、さすがのアヌビス共であらうとも、唐松村とまいたならば二のあしを踏んで往生するであらう——と私達は一決したのであつた。その上、唐松村は雪五郎の故郷であつて、今なほその本家の後裔が昔ながらのさゝやかな酒造り業を續けてゐる。

吹雪川——この水車をくるくると回して、私達の露命をこゝまでつないできたところの吹雪川の流れを、森をくゞり、谷を渡り、野を越へて、あるときは流れのさまの岩に碎ける水煙りを浴

び、またあるときは蔓橋のゆら／＼とするおもむきに恰も空中飛行の面白さに酔つて、はるか脚下に咽ぶが如き水音の樂を聴き、迂餘曲折、數々の瀾の眺めに吾を忘れながら、ゑんゑんと上へ上へと溯ると、いつしか「吹雪」は千鳥川と稱び代へられて、うら／＼かな酒造りの村に到達するのである。

あの日、私の妻は、アメリカン・ビュウテイのスキー・ジャケットに身を固め、頭には雪のやうに眞白なターバン帽子をいたゞき、ほのぼのとして「春風」に打ち乗つた。お雪は、新しい紺がすりの袴着に赤い帯をしめて、脚絆草鞋にそよそよと、いでたちをととのへ、「白雲」に打ち乗つた。「春風」も「白雲」も共に私達の水車小屋の労働馬であるが、その日は特に七福神の舞姿を染め出した眞新しい腹掛けを吊つて、朝霧のなかにしやんしやんと鈴を鳴した。そして「春風」の響は雪太郎が、「白雲」のそれは雪二郎が共々に逞ましい腕により、をかけて執りあげてゐた。

お、私は、あの日の妻の姿が、ありありとあら、目に浮んでゐる——
「車が回りはぢめさへすれば、明日にでも迎へに行くんだからそれを楽しみに待つてゐてお呉れよ。」

私が妻の手を執つて、ねんごろな勵ましの言葉をおくと妻は、しつかりと私の手を握つて

「私のことは決して心配なさらずに、あなたは勉強をつゞけて下さいね。」

と朗らかな微笑を浮べて出發した。私は凝ッと妻の顔を見あげて、深く黙頭きながら胸板をどんと強く叩いた。

「なあよ、お雪坊や、唐松へ行けば、また珍しい草つばもあることだらうから奥さんのお手傳ひをしなよ。」

雪五郎は、私の妻の鞆にぶらさがつてゐる植物採集の胴亂を見て、そんなことを娘に告げた後に、更に道中のこまごまの注意を繰り返した。私の、さつぱりと捗らない創作の仕事にやがて引用される筈の、このあたりの野生植物の蒐集に關して妻は久しい前から標本をつくつてゐた。私は先程マメイドが河原で摘んだ花束を携へてきたことを誌したが、それも同じく常々からの標本作成のための手助けなのである。

さて、桐渡ガラドウが、今更そんな風に私の方を向いて、先生——など、呼びかけても、もう私は金輪際、返事などをするものか。ツンとして私は、野郎の鼻を睨めてゐた。馬耳東風とは正しくこの態であらう。

「ねえ、先生、實は大變耳よりな儲けばなしを持つてやつて來たんですがね、といふのもあなた

とあつしとの長年のお友達の誼みで、先生が大變お困りと訊いたので、何とかお力添えをしたいと存じましてな……」

ガラドウの云ふところによると、私がつい此頃食ふに事缺いて、いよいよ最後の持物となつてゐた祖先の鎧櫃を町の酒屋へ持ち込んでわづかばかりの抵當としたといふことだが、いつかその噂がそれからそれへ傳つて實に私たる者が嘲笑的になつてゐたところ、幸ひにも「さ、一人の義侠的人物が出現して」ひとまづ、それをとり戻し、私の返金の出来る日まで——と云ひかけて彼は

「孫子の代までも待ちませう——」

と見得を切つて、ふくとわらつた。で、私に望み次第の金子を融通仕様といふのである。

「甘い話ちやありませんか、持ちぐされのポロ實が生き返つたとは、何と目出度いことぢやありませんか。——そこで、だッ！」

と彼は、にわかには生眞面目な顔に戻ると、胸を引いて、音も見事にボンと手を鳴した。「先生のお望みの金額を、まあ、ものは驗しに仰言つて見ては下さいますか。」

別人の提言ならば私は有無なく賛成したに違ひなかつたが、一度瞞されたが最後、奴の申出な

ど、何で諾くものか。加げに、奴はアヌビス共を煽動して、この水車小屋の差押へを驅り立てゝゝ
ゐる張本人の由である。敵だ！

「ねえ、先生、まあ、とつくりと考へて御覽なさいよ。」

「……………」

木像に向つて演説をしてゐる——と私は思つた。それにしても、若しもこれが別人からの提言であるならば！ と私は思はずには居られなかつた。若し左様ならば、先づ水車の負債を片づけ、明日にも妻やお雪を迎へに行くことが出来るではないか、一體、自分の望みの金は何程か、千か、萬か——と、ガラドウは、バツと片手の平を私の眼の先に擴げて

「こうと出ますか？」

と叫んだ。

「……………」

私には一向意味が解らなかつた。すると彼は深い決心に似た思ひ入れと共に

「では斯うとゆくか？」

と今度は、擴げた手の平に、別の指を二本載せて、凝つと私の顔を視守つた。

「……………」

私の想ひは、はるか遠く雲となつて唐松の空に漂ひ、ひたすら妻女の上を揺曳してゐた。千鳥川の岸邊でお雪と共に珍らしい草花を發見した彼女が、この私を、びつくりさせてやらうなど、打ち興じてゐる光景が腦裡のスクリンに鮮やかに浮んでゐた。思へば妻に、春の終りの頃に別れたまゝ、世は既に晩秋の蜜柑のさかり時とは化してゐるではないか！ おゝ、戀しや、妻よ——と私は泌々として、思はず胸のうちで、鹿の鳴く聲きけば吾妹子の夢忍ばるゝ——云々といふ唄のメロディを切々と傳ふてゐた。

「これでも、未だ——と仰言るんですか、一體御所望のほどはどれくらひ？ びつくりさせちや厭ですぜ。」

ガラドウは、わざとらしく怖るゝと、私の胸の底を見透すが如き甘氣なにやりわらひを浮べて、にゆうつと願を伸した。

私は、その時、胸の中で吟じてゐる秋の歌の條々たる韻律に自ら惚れ惚れと、夢見るやうに眼眈をかすめて微かに首を揺りうごかせながら、あはや妙境にさ迷ひ込まうとしてゐた已れに、吾ながら氣づかなかつたのであるが、その私の様子を眺めたガラドウは、こいつはてつきり私が、

思はぬ儲けばなしに有頂天となり、今やふら／＼と金算段にうつゝを抜かせてゐるに違ひない、こつちの思ふ壺に入つたぞ——と感違ひをして

「うふふふ、どうです、先生、お心持は悪くはござんすまい。ですが、あつしは近頃、とんと気が小さくなりました、恐怖性神経衰弱とでも申しませうか、ちよつとしたことに出遇つても直ぐに斯う、ドキツとして氣絶してしまふんですよ。その邊のところを、どうぞお察し下さいましてな、あんまりあつしを屹驚りさせない格構のところ、ねえ、先生、お望みのところを仰言つて見ては下さいませんか……」

などと、厭にいんぎんなことを唸りながら、おもむろに私の傍らに、にぢり寄つて來たかと思ふと、

「メイちゃんが、よろしくですつてさ。こゝで一番たんまりと儲け込んで、鬼のぬない留守に、あの娘とゆるゆる……」

と続けながら、やをらその手を私の肩に載せようとした途端——私は、ゾツとして夢から醒めた。……間一髪、私は、五臓六腑がものゝ見事に吹き飛んだ轟きに打たれて、全くの無意識状態の絶頂に飛びあがつた瞬間、物凄まじい勢ひで、突如

「ワーツ…………！」

といふ叫び聲を擧げた。同時に、また、

「ワーツ！」

といふ氣たゞましい叫喚の渦が、小屋全體をはね飛ばすやうに巻き起つたかと、見ると、當の桐渡ガラドゥをはじめ、今迄私達の周りに太々しい面構えを曝して、動かばこそその姿勢を示してゐた地主アービスも従者のアマビスも、執達吏のドライアス、代言人のクセホス、周旋業の何某、伯樂の手代等といふ黒雲の面々が、一勢に弾にはぢかれた蛙のやうに屹驚り仰天して、

「ギヤツ！」

と叫ぶと同時に、夫々その瞬間まで保つてゐた大業な姿制のまゝで、びよんと飛びあがつた。それと一處に一瞬の時も移さず宙を飛んで奴等はバツと飛び散つた、かと思ふと、てんでんに吾先きにと、或者は障子を突き抜き、或者は上りがまぢからもんどり打つて轉げ落ち、扉を蹴破り一陣の突風を巻き起しながら風を喰つて一目散に逃走した。

氣づくとは私は、炎々と圍爐裡に炎えさかつてゐた三尺あまりの瘤々逞しい赤松の薪太棒を振りかぶつて、まんまるな月の光りを浴びつゝ、芋畑のふちで鬼と化してゐた。云ふまでもなく私は

黒雲共を追つ拂つて、夢中で此處まで飛び出したものと見へる。そのまゝ私は、逃げてゆく彼等の後影をぼんやりと視詰めてゐた。隈なき月の光りで青海原のやうに曇々とした畑の中を奴等はスイスイと、恰で氷滑りでもしてゐる見たいに速やかに走つてゐた。あらゆる物音は澄明な月の光りに吸ひとられてしまつたやうに絶へ入つて、見渡す限りはるばるとした平原の彼方に三つ四つ點々と瞬いてゐる村里の燈火の中に、やがて彼等の羽ばたきは消へ込んでしまつた。そして、あたりは再び動くものゝ影だに見へぬ渺々とした青海原であつた。——水車小屋は村里を遠く離れた鎮守の森の山裾に蟠まる草葎屋根の一軒家である。

それからといふものは彼等の復讐戦を期待して、不斷の身構へを忘れなかつたが「いゝえ、さうなればさうなるで、寧ろ此方は平氣でありますわ。」

と雪五郎達は云つた。雪五郎は齡こそとつてはゐるが、その腕力は近郷の音に聞えた豪のものであるから、いざとなれば、ガラドウやアヌビス位ひ八人であらうが十人であらうが、ぼんぼんと手玉にとつて水雑炊を喰はせてやる——

「此處に斯うして坐つたまゝで、ぼうんと窓から河の中へ飛び込ませてやりますよ、ほんの朝飯前に——」

と事もなげに呟いた。凡そ雪五郎は謙虚な心の持主で、かつて自慢氣なことを口にした驗しはなかつたが、この時ばかりは稍荒々しい息づかひで、太い腕を私に示した。奴等があつたやうに慌てふために遁走したのは私の背後に立ちあがつた低氣壓をはらんだ三人の阿修羅を見てのことであつたのだらう。あの重い水門を、あのやうに難なく上げ降しすることの出来る人物は雪五郎父子を置いて何處の村にも續く者はない由である。第一流の水門番として鳴り響いてゐる。永年間のあの水門の把手を擔ぎ慣れてゐる彼等の肩には、恰度握り拳大の力瘤がむつくりと盛りあがつてゐるではないか！あの事件では彼等も餘程亢奮したと見へ、また更に私に落着きを與へようとして、まあ試しにこれをつかんで御覽なされ、力一杯握り潰すつもりで——

「これは切られても痛くはないんです。」

さう云ひながら三人が交々片肌抜きになつて、覺悟を決めて、奴等の幻を追ふやうに力んだので——先づ私は、雪二郎の力瘤をつかんでみると、それは恰も皮下に一個の林檎を藏してゐるが如くグリグリと蠢く態は、魔力の潜みと思はれた。

「抓りあげて御覽なさい。」

雪二郎にすゝめられた私は、齒ざしりをして拗らうとかゝつたが、忽ち指先が痺れてポロリと

してしまつた。

次に雪太郎の番になると、これはまた何と驚いたことには正銘の堅ボールで、抓らうにも指も立たぬので、私は兩掌で鷲掴みにして、躍氣となつて、えいえいと腕ぎとらうと努めたが、見る間に私の腕はあべこべの逆拗りを喰つて二の腕の關節が脱臼しさうになつてしまつた。いつか、これに熊蜂がとまつたから、これはと思つてそつと見物してゐたところ蜂の槍が折れてしまつて、蜂は遂々の態で飛び去つたことがある——といふ挿話を雪太郎は付け加へたりした。

それから最後に私は、大きな身構えを執り先づ自分の腕を、いざ仕事にとりかゝらうとする力技者のやうに鳴らした後に、やをらと振りかぶつて雪五郎の力瘤に飛びかゝつて見ると、實にもこれは眞實の石であつたから、慌てゝ腕を引つ込ませてしまつた。

「そんなら、いつそ私のに喰ひついて御覽なされ……」

たぢろいだまゝ木兎の眼つきをしてぎよろりとしてゐる私を見て、物足りなさの不興に驅られてゐるのかと察した雪二郎が、もう一遍左様云つて林檎の肩先を突き出したが、それはさすがに薄氣味悪かつたので私は、もう解つた！と平に辭退して、肩をいれさせた。

これらの稀有なる腕力、強肩に比例して彼等三人は見るも壯んな均整の麗はしいスバルタ型の

體格を備えた見あぐるばかりの大男ぞろひであつた。云ふならば雪五郎は五尺九寸、雪太郎と雪二郎は共にそろひもそろつた五尺八寸の身の丈の持主であつた。そこで年々歳々村祭りの日もなれば、雪五郎は神輿の先に立つて、神様のお通りの道を展くがための惡氣の露拂ひたる天狗の役に、あちこちの村から引つ張り風であつた。彼は、この役目を既にもう六十年來この方務めつゞけてゐるせいも、普段の場合でもその脚の運び方は一種獨特の、云はゞ人間離れをした悠々として迫らざる風情で、地を踏めども雲の上を往くが如く、眼は爛々として廣袤千里の雲煙を衝きながら一路永遠の眞理を眼指して止まざるものゝやうな摩訶なる輝きに充ちて、祭りの時の天狗としての歩き振りそのまゝなのである。どうせ、あの眞赤な大天狗の面をつけるのであるから、中の顔は何うでも關はぬわけ合ひだが、矢張り斯の如き風貌の持主であればこそ、心ともなる天狗の趣きを發揮することが出来るのであらう——と常々私は感心してゐるのであつた。さう云へば、その音聲までも、太く澄み渡つてゐて言葉少なく、吐けば朗々として恰も混沌の無阿有から山を越えて鳴り響く不死なるものゝ風韻が籠つてゐるかのやうであつた。それに伴れて心もまこととに恬淡、種別の何たるを問ふことなく何んな足勞も心勞も厭ふことのないいつも釋然たる心の持主であつた。——この頃では、そんな持物もすつかり種切れになつて眞に私は、寢ても起きて

も着たきりのインヂアン・ジャケットの着通しであつたが、先の頃私は夕暮時になると酒を欲して止み難く、飲代を得るために何かと身まはりのものなどを携へて町の質店へ赴かうとするのを發見すると、雪五郎は慌て、私の荷物を奪ひとつて自らその使ひ番を所望するのであつた。その雪五郎が、やうやく黄昏の霧が垂れこめて未だ村里には灯も瞬かぬ野中の一本道の、天も地も濛々として見定め難い薄霞みの棚引きのなかを、軽々と片手に風呂敷包みをぶらさげて脚どり豊かに出かけて行く後ろ姿を眺めると、私は彼の姿が霞みの彼方にしづしづと消えてしまふまで、窓に凭りかゝつて思はずいつも次のやうな歌を餘韻も長くうたふのであつた。——（その一節……）

……塞としてひとり立ちて西また東す

あゝ遇ふべくして従ふべからず

たちまち飄然として長く往き

冷々たる輕風にのる——

——と、などと。

ゆらゆらとする微風に目も絞なる金襴の素袍(?)の袖を翻へし、うらうらとする陽を突いて燦々と輝く大長刀を、杖に構へてがらんがらんと曳きながら一本齒の大高下駄を履き込んで、一歩

は高く雲の峰を踏み越え、一歩は深く地なる悪魔を踏みにぢる概をもつて、のつしのつしと歩み
を運ぶ大天狗が、神輿の行列の先頭に立つて、練り出すといふのが龍巻村の祭禮の風習である。
續いて、根を拂つた榊の立木を白木格子の箱のやうなものゝ中に突つ立て、横に二本の太棒を
通し四人の使丁が擔いで來るのである。次に、面の差し渡し凡そ五尺にも程近い大太鼓を、最
も太い孟宗竹の棒に吊して、これを二人の壯丁が前後して擔ぐのである。この太鼓は非常な重量
を持ち、嵩がまた斯の如く龐大なものであつたから餘程優れた強肩と稀なる身丈を有してそろつ
た若者でない限り、稀ともすれば太鼓の胴が地にすれたりする上に忽ち肩を害ねてしまふ程の難
物なので、この大役を易々と仕終せる者といふては近頃雪太郎と雪二郎の兄弟より他は並ぶ者と
てはなかつた。更に、この太鼓の側らに侍して、巨大な撥棒を構へた一人の鎧武者が現れて、天
狗の一步一步の脚竝みの呼吸を見はからつて、満身の力をこめて、いざ天狗の高下駄が地を離れ
て雲を蹴らんする瞬間に、どうん！と、一つ山々に反響させて力一杯太鼓を打ち、續いて、天狗
の脚が彈道を描いて地に降りやうとする刹那に、再び、どうん！と、神々しく打ち鳴すのである。
と、武者の反對の側に控へてゐる、これは白面の一人の使丁が、携へてゐる一本の撥を擬して、
二つ目の太鼓の音が消えると同時に、太鼓の胴を、つまり木材の部分を受、受、受と拍子をと

つて三邊打ち叩くのである。この合奏は天狗の歩みが續く限り、「附け」となつて、いとも嚴かに鳴り渡るのである。

「どうん、どうん——カッ、カッ、カッ……どうん、どうん……」

目醒しい物音は、森を飛び、丘を越えて、八方に、神輿の渡御を知らしむると、待ち構へてゐる村人達は

「それ、天狗様のお通りぢや〜！」

と口々に叫びながら行列を直指しておし寄せるのである。そして、この太鼓隊の踵をついて、四人の者に擔がれた凡そ一坪位ひの容量の巨大な賽銭箱が控えてゐるのを目がけて、有りがたい〜と伏し拜みながら、四方八方から賽銭のつぶてを雨と降らすのである。この一隊が通り過ぎてしまつてから、凡そ半時も経たないと神輿は現はれなかつた。何故なら、御本體は彼方此方の家々の前に御輿を据えて、神酒（カミヰ）の雨を浴びるのであつたから、次第に千鳥脚となつて凄まじいお練り」の道中をたどるのであつたから。そつちには、そつちで、また改めて、しめ繩を巻かれた神々しい賽銭箱が控へてゐた。人々は、その箱を目がけて投げた賽銭が、宙を飛んで見事に箱の底に到達すると、吉運の占ひなり——と見て、打ち喜び、若しねらひが外れて地に飛んでも、そ

こには矢張り嚴めしいでたちの拾ひ手が侍してゐて、一度落ちた運は忽ちもともどつて、汝の運勢は目出度く展ける——といふやうな祈りごとを興へて、それは彼自身の所得となることであつて——結局、賽銭を投げさへすれば、悉くが神の御恵みに浴して來る日の幸ひをかち得ることが可能であつたから、村人達は吾も吾もと腕をふるつて、己が將來の祝福を乞ひ希ふために躍氣となつた。所得と云へば、太鼓隊の賽銭箱は、天狗と鎧武者とがその大半を恭々しく頂戴して、残りのものを擔ぎ手やら、胴腹の叩き手が分配されるといふ風習であつた。その分け前は一度に五十金乃至は百金にも達する程であつたから、祭りの日が來るならば私達の水車小屋は忽ち裕福となつて、あの黒雲共に面目も立つわけなのであるが、今やもう私達は日々の米鹽に事缺く仕儀に立ち至つてゐたのである。他人の米を掲いで、その勞銀によつて私達は更に自分の米を買ふのであつたが、春の雪解以來、これはまた三度の大雨で、あんまり激しく水車が廻轉して、三度度が三度ながらぶつつりとベルトが絶れたり、車の翼が砕けたりして、終ひには馬を質に入れ、更にまた鎧櫃までも抵當にして漸くその修繕を終り、これなら私は妻を、雪五郎は可愛い、娘を呼び寄せることも目睫に迫つたと思つて、一家總手の大働きにとりかゝらうと勢ひ立つたところへ、この早魃騒ぎに見舞はれた。

私は、密かに祭りの到来を指折り數へて待ち構へてゐた。祭りともなれば、迎へに行かずとも妻やお雪は唐松村の野外劇團の幌馬車隊に加はつて戻つて来るであらう。私達は賽錢袋を首にぶらさげて、手に手をとつて太鼓の音のする方へ駆け出すであらう。

「あれあれ、お父さんの冠りの先きが……」

六尺もある大男が一尺齒の高下駄を穿いてゐるのだから、天狗の顔は稻むらの上にひとり浮び上つて、遠方からでも直ぐと解るのである。お雪は、聲を張りあげて

「お父さん、お父さん——」

など、呼ばると、天狗が高い鼻を此方に向けて、嬉しさうな黙頭きを示すではないか。兄弟に荷はれた大太鼓が、鎧武者の撥に打たれながら、嚴かな餘韻の煙りを曳いて進んで行く光景を想ふと、私は全身の血潮を涌きたてさせられる止め度もない情熱の龍卷きにまわされてられるのだ。黒い面當をつけ、緋鍔の具足に鍔型兜のいでたちりしい鎧武者は、譽れに充ちた腕を振りあげて必死の力で太鼓を打ち続けるのである。この大役は、季節に順番となつてゐて多くは村の主だった名士の者が拜受することになつてゐたが、その榮ある颯爽としたブリ、アント・チャンピオの姿は、群衆の羨望の的であり、うら若き子女をほぢめとして、善男善女悉くが隨氣の涙を惜ま

なかつた。親は子は、妻は夫を、男とあらば是非とも太鼓打ちの荒武者として彼處に立せたく、希はぬ者とはなかつた。

春の時には、あの地主のアービスが太鼓叩きの番となつて參道に現はれたのであつたが、いざ此處に至つたとなれば誰も常々の奴の惡徳などを云々する者もなく、朗らかな歡呼の聲を擧げて、彼の打ち鳴す太鼓の音に魂を奪はれた。

「まるで、世界が昔に返つたやうだ。勇ましいことぢやありませんか、ならうことなら若武者の撥に打たれて昏倒してもみたいものよ。」

このやうなことを叫んで打騒ぐ娘達の中にまちつて、私の妻も惚々として口をあけながらその勇姿に見惚れてゐた。

凡そ、彼の勇士の振舞ひは、あらゆる人間の情熱と根氣と忍耐と覇氣の徳を兼ね備えた遠い昔、遠い國のガスコン族の再來かと思ふばかりであつた。あの、精悍無比にして、義に富み、信に深く、崇神の念に厚く、婦女を敬ひ、智謀に長けた永遠の血脈をありのままに中世紀時代の數々の騎士達の胸に傳へて、大陸の歴史を花と色彩つたところのガスコン民族やゴッス人の精氣が、凝つて一團となり此處にも生れたか——と思はずには居られない程に、この奔放無礙なる大振舞

ひに一途の精神を打ち込めた太鼓たゞきの荒武者の打ち鳴らす太鼓の音は、聴く者、視る者の魂を力強く極樂の空に拉した。

私は、酒の氣もなくて眠れぬ夜々のうそ寒さを、小屋の二階の寢臺で夜もすがら、轉々としながら、あの祭りの太鼓の音に想ひを及ぼすと、幻ともなく現ともなく太鼓の音が或ひは遠く、或ひは近く津波の勢ひで殺到して來る花々しさに巻き込まれて、思はずはねあがると次のやうな歌をうたひながら、白々と東の空が明るむ頃ほひまでも窓に凭りかゝつて、絡繹と連る行列に見惚れた。(—その一節)

……かくの如き人波の中

楊柳を折り芙蓉を採る

瑤環と瓊珮とを振ひ

鏘々として鳴つて玲瓏たり

衣は翩々として驚鴻の如く

身は矯々として游龍の如し

……と、など、いつまでも歌ひつゞけて。

この頃私は、「悲劇」「喜劇」の出生と、その岐れ道の起因に關して深く感ずるところから、劇なるもの、歴史について遠くその源を原始の假面時代の空にさ迷つてゐたところ、計らずもガスコンの原始民族が、酒神サチューロスを祭る大祭日に、恰もこの龍卷村の神輿行列にも等しい假装行列の一隊を組織して、バラルダと稱する大太鼓を先頭に曳いて、山上の酒神の宮へ繰り込むといふ有様を詳さに傳へた文獻に出遇つて、目を丸くした。パン、ユタービ、カライアービ、バツカス、エラトー、ユレーニア等々と、山羊脚を眞似、葡萄の房をかむり、狐頭や犬頭、星の伴、戀の使者、雲の精と、とりどりの紛装を擬した行列が、手に手に携へた羊角型の酒壺を喇叭と鳴し喇叭呑みの亂痴氣騒ぎに涌き立つて、バラルダの音に足並みそろへるおもむきは、恰も私達の天狗の太鼓隊につゞいて、おかめ、ひよつとこ、翁、鬚武者、狐、しほふき等々の唐松村の假面劇連が辻々の振舞酒に烏頂天となつて、早くも神樂の振りごとの身振り面白く繰り込んで來る有様をそのまゝ髣髴とさせる概であつた。——因みにバラルダの大きさは、直徑凡そ五碼とあるから、私達の水車の大きさであり、六頭の牛をもつて曳かれ、二十人の使丁に後おしされて、はね吊籠型の投石機仕掛になつた大撥で打たれるとの事であつた。それ故その音響の大は私如きの想像にあまつたが、窓下の薄鈍い流れに軋りをたて、今にも止まりさうに廻つてゐる水車の影が、

情けない痴夢に酔どれた私にはガスコンのバラルダとも見紛れた。明方の翼に稍ほのあかく染められた彼方の山の頂を眼ざして、月の白光の波のまにまに打ちつづく私の眼界に現れる大行列はガスコンと唐松の崇神者連をごつちやにして、世にも怪奇瑰麗な賑々しい騒ぎであつた。

どうん、どうん、カッ、カッ、カッ！

空一杯、胸一杯に太鼓の音が鳴り響いて、天狗が、牛頭が、象が、山彦の精が、馬が、河童が、風の神が、人形使ひが、蝶々の精が、ダイアナがおかめと手を携へて行き、閑古鳥をさげた白鳥の精が笛を鳴らし、神やオリーブの枝をさんさんと打ち振りながら續いて續いて止め度がない……。饜稜たるバラルダの廻轉と、荒武者が此處を先途と打ち鳴らす龍巻村の大大鼓の音が人波を分けて、行列を導いて行く。

私は、聲を張り舉げて歌ひつゞける……

「鏘々として鳴つて玲瓏たり……」

——「お、もうお目醒めになりましたか。雪二郎が朝餉の仕度をして居りますから、どうぞ圍爐裡にお降り下さる。」

窓下からの聲で私は、夢から醒めると、朝餉の前の一働きに水門開きに出かける雪五郎と雪太

郎であつた。

いつか、もう夜は、ほのぼのと明けて、山は藍色に、野は廣表として薄霧の中に稻むらの姿を點々と浮べてゐるのみであつた。行列は、もうあとかたもなく山上の森に吸ひ込まれて、車の軌りの音も消えてゐる。

「今朝方は、また二寸からの減水で、いよいよ車は水が呑めなくなりましたが、お心はたしかであつて下さいよ。」

雪太郎が呼びあげた。「夜露の情けは、もう、待たずとも——」

「この腕の續くかぎり——」

と雪五郎が、そろつて、朝霧の底から窓を目掛けて赤松のやうな腕を突き伸した。そして「祭りは上天氣ですぞ。」

と目醒し氣に唸りながら、川べりをのしのと柳の影へ消えた。流れは、流れのさまをたゞよはずことのない静けさで、はつきりと白く川下へ見霞む果までうねつてゐた。浮ぶもの影があるならば花の一輪であらうとも、眼にとまる澄明さであるが、私の眼をさへぎる水馬の影さへ見へぬ眺めであつた。

はつきりと、もう明け放れて陽の金色の箭が山の頂きを滑つて、模型と化してゐる水車の翼に戯れながら、川岸の草々の露を吸ひとつてゐた。私は、もう、この川岸の草花の名前は、あますところなく知り盡してしまつてゐた。おみなへし、へらしだ、われもかう、鳥萩、こやや萬年草、いちはつ、狐の行燈、烏瓜、ぶらぶら提燈花、孔雀齒菜、盜棒萩、大虱、しほん、獅子舞ひ連華、猫柳……等々と、一見見渡したゞけで忽ち百種類も數へあげることが出来るのである。それ故私は、川上から流れて来るものの中にも若しや私の知らぬ花がなからうか？と、噂に聞くだけで未だに訪れた驗もない千鳥川の流域を思つて、何かと水の上に注意の眼をとどめるのが習慣になつてゐた。妻が彼地に赴いてからは、その注意の眼に加へて戀々の想ひを含めて、若しや笹舟に載せられた花合葉でもが流れて來ぬものか——とさへ、屢々考へて、流れのさまを見守ることも、私にとつてはさして無稽でも感傷でもなかつた。何故なら、唐松村は山徑を傳へば、わづか五里あまりの道程であるが、郵便と云へば一週間に一度の配達より他は享けぬといふ幽遠境であつたから、私達は別れるときに、それは戲談めかしくわらひながらではあつたが

「いつそ、流れに托して、花の目印でもつけた塚なりと流した方が、早急の言傳は、いちはやく着くかも知れないぞ。」

「ほんとうに——若しや、あなたの知らぬ名前の草花が流れて來たら、標本のあまりをあたし達が流したものと思つてよ。手紙をつけて流すかも者れないよ。金送れ——とでも書いて——」

そんな言葉をとり交したこともあつた。驗しに雪五郎に、その時私達が、一體千鳥川で流したものが幾時間位ひ經つたら、吹雪に達するだらうか？ などいふことを質問して見ると、彼は入念に首を傾けた後に

「雨のない今日此頃の水勢ならば、丁度黄昏時に出發した花舟は、明方になつて此處に着くであらう。」

と云ひ、彼の壯年時代には、眞實この流れを唐松村の人々は郵便網として使用してゐたが、そして水門の傍らに四ツ手網型の郵便受を備へて置いたものであるが、——などいふことを附け加へた。

Spanne——三途川と振り假名するのは、稍私の意に添はぬが、今、私の眼下から白々と晴れ渡つて、壯麗な大氣の靜寂を縫つて無限の面持で流れをも忘れたかのやうな吹雪川は、降れば雲に達するかと見ゆるばかりの、もの靜かなる漢々たる明朗さに一切の疑惑と妄迷を呑み込んだ *The Lethe* (あの忘れ河)となつて、曙の雲の裾に消えてゐた。私は、あの騒ぎの幻の後に展けたこの

Stygian River の往く幽明境を、大鼓を打ち鳴らしながらとらうとするかのやうな己れを見て、あはれとも悦びともつかぬ決して云ひようのない不思議な陶酔を覺へてゐた。——と、その雪を衝いて、一散に驅けて来る娘の姿が、積亂雲の中に現れた一點の鳥と見へた。

「先生——先生——」

見ると居酒屋のマメイドである。珍らしい草花でも發見したことを告げに來たのであらう——と私は思つたから、私は一切の痴夢から醒めて、慌て、戸外に走り出ると、メイ子は私の腕の中にぐつたりとして打ち倒れた。私は雪二郎を呼んで、メイ子に水と氣つけ薬を服せしめた。

「ガラドウが来る、ガラドウが……」

「メイちゃん、もう大丈夫だ。ガラドウの奴來て見やがれ、忘れ河の中へ……」

私達の介抱に依つて息を吹き返したメイの話を見て見ると（私は、ガラドウがメイを手込めにしようと思ひかゝつたに相違ないと思つたのであつたが）ガラドウが今にも私の許へ鎧櫃を購しとする目的で、一世一代の智謀をふるつた（と彼が云つた由）狐となつてやつて来る筈だから決して化されてはならぬといふ注進であつた。

今年の春の祭の時に餘興として鎧武者の戦争劇を演じたところ、樂屋から火を發して村中にあ

る二十體の鎧兜を悉く烏有に歸せしめ、今では質屋に遺つた私のそれが唯一のものとなつてゐる。祭りの武者用には古來から此處に傳はる鎧でなければならなかつたので、結局私のそれが登用されることになつたのであるが、昨夜から徹宵の村議の結果、誰人でも眞ッ先にそれを私の所有から奪ひとつた者が、この先何年間といふもの春秋併せて太鼓叩きの榮譽を荷ふべし——といふ事に可決された。その事は最早大分以前から村人等の話頭に上つてゐた提案であつて、里を遠く離れた森蔭の水車小屋にだけは傳はらなかつたが、彼等の間では既にもう初夏の田植の頃ほひから遠くあの鎧櫃を取り巻いて、暗々裡の物々しい争奪が演ぜられてゐたといふことであつた。さう聞けば、私にもそれと思ひ合せられる筋々が枚擧に違ない。それまで私に出遇ふと何故か冷酷な輕蔑の後ろ指をさして大手を振つてゐた村會議員の何某達が、にわかには丁寧な天氣の挨拶などをして私のために道をひらくが如き有様となつたが、それは鎧櫃欲しさのお世辭わらひであつたのか、私はまた遂に彼等が私の豊かなる學識を認めて心からなる尊敬の念を寄せたはぢめのか、と大いに吾意を得て、自ら打ち進んで思想講演會の壇上に立つたり村議立候補の宣言を發表したりしたのに、嗚呼、またしても思はぬ憂目を見たものよ。あの時私への投票は雪五郎父子の僅かに一票より得られず落選となつたが、それは私が既成政黨の何派に依ることなく自ら樹立した「獨

立共和黨」なるものゝ主旨が單に彼等の意に通じなかつたとのみ思つて、晴々としてゐたのに――

この鐘櫃騒ぎが起るやいなや桐渡ガラドウは即座に年々歳々の賽錢の高を計上して

「あの薄鈍先生から五十か百の金でふんだくれば、濡手で粟だ。」

と北叟笑み、既にもう手前が鎧武者になつた氣で、アヌビスを賽錢拾ひに、また同志の惡黨を悉く使丁に抜摘した太鼓隊を組織して、毎夜毎夜メイの店で手配を回らし、前祝ひの盃を擧げてゐたが、いよいよ期の熟した今朝となつてはあらゆる辯舌を弄して私に迫つた上、若しも私が云ふことを諾かなかつたならば、一思ひに腕力沙汰をもつて捻ぢ伏せてしまはうと決心し、今や二十人からの同勢が勢ぞろひをして手ぐすねひいて繰り出すところである――斯う聞くと私は、娘の手前といふばかりでなく、しつかりと武張つて、そいつは面白いや！とか、日頃の鬱憤を晴して目にも見せず置くものか！など、唸つたものゝ、何故か總身に不思議と激しい胴震ひが巻き起つて齒の根が合はなくなつた。

水門の堰が切られたと見へて、稍暫らく水車が轟々たる響きを擧げて回り出し、小屋全體も恰も私の胴震ひのやうに目醒しく震動しはちめてゐた。

「いゝえ、そいつは……先生が……先生が……俺が撥をとつて行列の先へ立つと云へば……鬼のつくことだ……」

小屋の胴震ひの音にさまたげられて止絶れ／＼にしかうけとれなかつたが、いつの間にか迎へに走つたと見へる雪一郎を元きにして、雪五郎と雪太郎が口々に亢奮の言を叫びながら嵐となつて飛び込んで來た。それと一處にメイも何か叫んで私の胸に飛びつき二つの拳骨で、私の胸板を太鼓と鳴らした。たしかその時雪五郎がすいと腕を伸したかと思ふと私の五體は鞠になつて眞黒に煤けた屋根裏へ飛びあがり、ふわり／＼と感じたかと思ふと、決して譯の解らぬわあ／＼といふ人の車の歡聲に吹き飛ばされて、繰り返し／＼宙にもんどりを打つてゐるのである。私は、目も見えなかつた。昏倒しさうであつた。ガラドウの同勢が押し寄せて、合戦がはちまつたのかしらと思はれた。……で、不圖、落ついたので、それにしても酷く坐り具合の好いソファに居るが、いつの間にか敵軍を追ひ拂つて、大將の席についたのかな？ そんな心地がして、靜かに眼を開いて見ると私は、雪五郎の膝を椅子にしてゐた。――合戦かと早合點した今の騒ぎは、雪五郎達が歡喜のあまり私を胴上げの手玉にとつたのであつた。

水車の響きに逆つて、大聲の會話を取り換す習慣には私も慣れてゐる。私は特に落着いた振り

で

「でも僕には、到底あの太い撥を振ふなんていふ力はありはしないよ。」

と、眞に自信に缺けた思ひ入れを込めて、皆の前に露はに腕を突き出して見ると、まことにそれは鉛筆と見紛ふばかりの心細い腕だ。「撥の方が五倍も太いぢやないか。」

「さう。」

と父子三人が口をそろへて首を振つた。——「私達は知つてゐるいつか貴方が、この赤松の薪太棒を輕氣に振りあげてガラドウ共を追ひ拂つた時のことを——。太鼓の撥は、これと同じ太さであるし、また、打つ時の身構えは、あの時のまゝに演つて下されば申し分はない。私達は、あの時の貴方の姿を見て以來、此處に一人の屈強な太鼓武者が居ると祕かに期待してゐたところ、計らずも斯んな幸運に出遇つて……」

あの時のあれは全くの夢中の業で、あれと同じ動作を繰り返して行列をすゝめるなんていふことが出来るものか、あの一振りである時だつて僕の腕は抜けかゝつたではないか——といふ事を私は云つたが、聲が落ちて水車の響きに消されて誰の耳にも入らなかつた。

「おゝ、私は貴方の打つ太鼓の音に伴れて天狗の脚を運べるとは……」

雪五郎がそう云つて悦びの胸を張り出さうとすると私が危く膝からこぼれ落ちかゝつたのを、雪太郎が置物でも持ちあげるように軽く自分の膝に享けとつて

「その天秤の後ろを擔ぐ私も——」

と續けて雪二郎が更に私を膝の上に享け渡されて

「一家そろつて斯んな目出度いことがありませうか。」

と、決して下には置かぬ歡待であつた。

「おゝ、先生、あたしにはもうはつきりと太鼓の音が聞えますわ……」

メイ子は身を震はせて私にとり繼ると、さめさめと嬉し涙を流した。

お天氣續きを悦んで水車をも休め、豊年祭りが近づいた、やがてのことには雨も降るだらう、そしてたら回つて——黄金の餅を搗いてお呉れ——雪五郎達は、そんなやうな意味の「水車小屋の唄」を歌ひはぢめた。ガラドウ達の襲來などは全く意にも介してゐない素振りであつた。そして一同は傍らに積んである赤松の薪をとつて爐端を叩きながら歌の調子をとり、私も釣られてタクトを振らうとしたが、決して片手では持ちあがらなかつた。

それにしても水門の水勢がもう弱る頃ほひだから、扉を閉しに行かなければならぬ、だが、大

變車が目醒しく廻りつゞけてゐるではないか——と云つて兄弟が窓から外を眺めた途端、

「やあ、雨だ！」

と叫んだ。その表情に私は、恰も「悲劇」と「喜劇」の分岐點に踏み迷ひつゞけて、ひたすらにガスコンのバラルダに追ひつ追はれつしてゐる私自身の心象の現れを見た如き囚へどころのない雲に似たものを感じた。

「雨——あゝ、雨の音だつたのか、それが私には遠くから響く太鼓と聞えてゐたのですわ。」

メイ子も名狀し難い面持で兩掌で胸を壓えながら、祈るやうな眼をあげた。——「道理でガラドウ達がやつて來ないと思つたら……」

見霞む野面の果から、激しい雨脚の轟きの音が驟々たる雲を巻き起し風を交へやがては雷鳴を加へて疾走して來た。その雨を衝いて水門に駆けつけた雪太郎が、こんな花束が流れて來たと云つて、私に、全く私の知らぬ名前の花束を渡したが、私はそんなものを驗める氣分もなく、ぼんやりと窓に凭つて、爽烈な吹き降りの野末をひろく見渡してゐた。一頭の裸馬が、私の眼界の果を水煙りの尾を曳いて一散に横切つて行く後を、一個の黒い人物の點が起きつ轉びつしながら宙を飛んで追ひかけてゐた。

不圖私は背後に笛に似た歎歎の聲を聞いた。止絶れ／＼に何か呟いでゐる様子であるが、狂氣となつて廻轉しはじめた水車の音や雷鳴に消されて何の判斷もつかなくなつたが、どうもそれは爐傍で仁王のやうな腕を組んでゐる雪五郎の喉から洩れでものらしい——と思ふと私は、突然、（もの忘れ河）のしぶきを浴びた野鹿の化身となつて、一聲高く不思議な叫び聲を擧げるやいなや、岩ほどの雪五郎の坐像に突きあたつて、その頭部となく背中となく滅多打ちに、ぼかん／＼と打ち叩いた。

2863

名譽者著



定價貳圓

昭和十一年二月二十日印刷
昭和十一年二月二十五日發行

著者	牧野信一	鬼塚村
刊行者	芝隆一	東京市品川區上大崎二丁目五十四番地
刊行所	芝書店	東京市品川區上大崎二丁目五十四番地 振替東京四八〇一〇番 電話高輪(44)八二八七番
印刷者	川崎佐一	東京市京橋區管地二丁目五番地
印刷所	川崎活版印刷所	
製本所	中島製本所	

酒盜人

同じ著者によりて

天狗洞食客記

病狀

泉岳寺附近

好色夢

酒盜人

熱海線私語

淡雪

夜見の巻

線舟で往く家

心象風景

四六判限定特製三八〇頁
定價貳圓 送料十四錢

芝書店刊行書

河上徹太郎著	佐藤島正健彰共譯	河上徹太郎譯	阿部六郎譯	小林秀雄著	河上阿部共譯	秋田滋譯	四ノ井分擔譯	六ノ井分擔譯	七ノ井分擔譯	河上徹太郎著
思想の秋	ボオドレエル藝術論集	虚無よりの創造	物質と悲劇	續々文藝評論	悲劇の哲學	ドストエフスキー論	エチユード	續文藝評論	文藝評論	自然と純粹
送二・一四〇	送二・一四〇	送一・一五〇	送一・一八〇	送二・一四〇	送一・一五〇	送一・一八〇	送二・二八〇	送二・一〇〇	送二・一五〇	送一・一八〇

芝書店刊行書

吉田健一著	本田喜代治著	武田昌一譯	小牧川和信夫共譯	朝野倉季雄譯	河上徹太郎譯	阿部六郎譯	本田喜代治譯	秋田滋共譯	正宗白鳥著	神西清譯
覺書 (マリジナリア)	コント研究	リルケの手紙	Aエドガワユリイカ	うつつろひ (クリマ)	叡智	ゲエテ	ラモオの甥	テエヌ作家論	異境と故郷	チエーホフの手帖
送一・一三〇	送三・二〇〇	送一・一〇〇	送一・一八〇	送一・一三〇	送一・一五〇	送一・一九〇	送一・一五〇	送一・一九〇	送二・一〇〇	送二・一四〇

